

---

# DOG DAYS DUAL-BRAVER

天木武

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DOG DAYS DUAL - BRAVER

### 【Nコード】

N9292Y

### 【作者名】

天木武

### 【あらすじ】

「戦」が頻繁に行われる、地球とは異なる世界「フロニヤルド」。かつて「勇者」として召喚された地球人、シンク・イズミがフロニヤルドから帰還して数ヶ月。再びシンクを召喚したビスコッティに大敗を喫したガレットは対抗策として自国でも勇者を召喚することを決定する。しかし呼び出したのは腕は確かだが性格に一癖も二癖もある勇者だった!?

これは、2人の勇者と、耳と尻尾と勇気と希望の物語。

## ブローグ ガレットの決断

地球上には存在しない、異なる世界・フロニヤルド。ここに住む人々は獣の耳や尻尾を持つという特徴があった。そしてこの世界では頻繁に国同士の「戦」が行われており、各国の領主は「勇者」を異世界から召喚することができた。

そのフロニヤルドの国の一つ、ビスコッティ共和国。かつてビスコッティは隣国、ガレット獅子団領国の侵略戦争に敗戦を重ねていた。

だがビスコッティは最後の切り札、勇者召喚により地球人のシンク・イズミを召喚する。シンクは戦に参加して勝利をもたらし、さらに古に封印されていた魔物を討伐するというフロニヤルドの危機ともいえる事態も救った。

それからしばらくの時間が流れた。

ビスコッティとガレットは、その戦の後は互いに良好な関係を築いていた。

だが、ここに来てガレット国内に不穏な空気が渦巻き始める。

輝歴2911年玉髓の月、ガレット獅子団領ヴァンネット城。

会議室の空気は緊張で張り詰めていた。そこにいる者の目は1人

の女性に向けられている。

ガレット領主、レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ、愛称はレオ。若くしてガレットを治める姫である。が、本人は「レオ姫」と呼ばれることを嫌っていた。

「これまでは五分と五分の成績じゃった。じゃが、あの勇者が再び召喚されての大敗。レオンミシエリ閣下、もしこのようなことが続くようであれば閣下の評判にも悪い影響が出かねませんぞ」

円状の長机の向かい側から聞こえる老人の声に、レオは腕を組み机を見つめたままの瞼を一瞬動かした。

「現に大敗を受けて兵たちの士気は下がり、領民達にも不安がる者たちが現れ始めました。そうでなくても最近は野盗も増えてきたという噂も耳にします。このままでは……」

老人たちの中でも比較的若い男が、最後の方を口ごもりながらそう述べた。が、レオは何も言わず、ネコのようなその耳を立てて話を聞くだけで、沈黙を守るままである。

「まあまあ元老院の皆さん、次の戦が負けると決まったわけでは……」

「バナード將軍！もうそんな呑気なことを言ってられる状況ではありませんぞ！」

腕は確かだ、ガレットの騎士団長を務めているバナード・サブライジュ將軍だったが、この状況での発言は逆効果だったらしい。

「次の戦はなんとしても勝たなくてはならんです。閣下、どうか我らが以前から述べている提案をお受けくだされ……」

やはりレオは一言も発さずに腕を組んだまま考え込んでいるようであった。

「レオ様……」

レオの側近、ビオレ・アマレットも心配そうに主を見つめる。

「閣下、ご決断を！」

その元老院の老人からの言葉に決心したようにレオは組んでいた腕を解いた。

「わかった……」

重々しくそう呟く。

「ガレット獅子団領主、レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワの名に於いて、我々ガレット獅子団領国も『勇者』を召喚する……！」

これは、2人の勇者と、耳と尻尾と勇気と希望の物語。

## プロローグ ガレットの決断（後書き）

というわけでDOG DAYSの二次創作です。

用語や設定は大分原作を重視する予定ですが、中にはオリジナルも存在します。というか次の話で登場の主人公が既にオリ主です、若干チート気味です。

が、設定ぶつかっても関係ないぜー！な具合で好き勝手やる部分もあります。「ガイドブック発売は1月なので、発売前で知らなかったから勝手にやった」で逃げ切ります。

ちなみに冒頭の「玉髓たまごめいの月」ですが、フロニヤルドの暦は誕生石の名前から取った月のようなので（3月が珊瑚の月、その次が水晶の月）7月の誕生石から取ってます。

これについては後の話が終わった後、後書きで解説します。1月のガイドブック発売前だから実際のフロニヤルドの暦と違ってても発売前で知らなかったから好き勝手にやった。

時間軸はシンクが地球に戻った後の夏休み、早い話が「僕の考えたDOG DAYSの続き」ってことです。

書き始めたのが原作を見終えた7月、この頃は2期の話はなく、やったらいいなという思いを込めて書き始めてました。

そうしているうちに実際2期が来るといいう話を聞いて今から楽しみにしてます。

そんなわけでこれからまったり投稿して行こうと思うので、お付き合いいただければ幸いです。

## Episode 1 選ばれた少年

日本の夏は、暑い。今が7月の昼時ならなおさらだ。そのことを象徴するように蝉たちが競い合うように鳴き声を辺りに響かせていた。加えて、ここは男子更衣室、人が集まっているせいで余計に暑く感じる。

「お疲れ様でした、お先に失礼します」

その暑さを感じさせないような抑揚のない声と共にロッカーが閉まる音がして、その場にいた全員が音の方を向いた。

「おいおいソウヤ、今日はお前の優勝祝いをするつもりでいたんだぞ？大会空けで午前練だけなんだ、たまにはちよつと付き合えよ」

ソウヤと呼ばれた少年より大柄な少年が肩を組んでくる。

「暑苦しいです、先輩」

至って冷静にそう言って回してきた腕から抜けた。

彼の名はソウヤ・ハマ。日本風に言えば葉山蒼也。16歳の高校1年生ながら、つい先日行われた弓道の夏のインターハイにおいて優勝するほどの腕前である。

身長はやや小柄、髪は短く整えられ、端正な顔立ちではあるが、



その瞳は鋭く、言葉少なで斜に構えた問答をすることがあるためにどこか人を寄せ付けけない雰囲気があった。

「暑いって、そりゃ夏だからな！」

ソウヤに先輩と呼ばれた少年は、そう言って笑いながらソウヤの肩をバンバンと叩いた。他の部員が接するのをためらう中、この弓道部の主将である先輩だけは、ソウヤにも他の部員と分け隔てなく接してくれていた。

「……今日は習い事があるので」

「習い事?……ああ、あの脚で戦う格闘技か。なんだっけ、カンフーじゃなくてそれっぽい……」

「カポエイラ」

「そうそう、それだそれだ。型とかあるんだろ?今度見せてくれよ」

「見せるほどの腕前ではないので……。では先に失礼します」

主将がまだ何か言いたそうだったが、ソウヤは足早に更衣室を後にした。

「主将……あいつ誘うのはやめませんか?どうせ来やしませんよ」

ソウヤがいなくなったのを確認すると他の部員が口を開きだす。

「そうそう。あいつスポーツ万能で弓道全国1位、噂じゃ中学のときは空手と剣道でも全国大会行ったとか……。なのに他人と接しよ

うとしないし……」

「ふう、と主将がため息を一つついた。

「もっと俺たちに心を開いてくれりゃいいんだがな……」

時間帯はこれからが昼、もっとも暑くなる頃合である。

自宅に着いたソウヤは鍵を回してドアを開けると、無言で中に入って鍵を閉める。どこにでもあるようなアパートの一室、そこでソウヤは1人暮らしをしていた。暑さのこもる室内はお世辞にも豪華とは言えない殺風景な様式だった。唯一本棚だけはびっしりと本が入っていたが、それらの大半はファンタジー小説であり、それを読むことが10歳から続けてきた習い事以外では数少ないソウヤの趣味であった。

着ていた服を脱ぐと浴室に入る。シャワーをやや冷ために調節して頭から浴び、汗の不快感な感覚を一気に洗い流す。

体を拭き、ソウヤは腰にバスタオルを巻いたまま冷蔵庫を開ける。クールサーバーに入った麦茶と、あとは必要最小限の調味料しかない、部屋同様殺風景な中身。それを全く気にする様子もなく、冷蔵庫から麦茶を取ると水切りカゴに逆さに置いてあるグラスに注ぎ、一気に飲み干す。

壁にかかっている時計を見る。稽古の時間は夕方すぎ、家を出るには遙かに早い時間である。

そういえば今日は読んでいるファンタジー小説の最新刊が発売する日であることを思い出した。それを買ってどこかで読んで時間を潰し、あとは早めに道場に着いたら準備運動を入念にやっていたらいい。そう考えながら、机の上にある栄養バーの箱を開け、口に加えながら服を着ていく。着終わると同時に袋の中にあった2本目の栄養バーを食べ終え、適当に荷物に入ったバッグを背負って玄関を後にした。

道場までは最寄の駅まで15分ほど歩き、そこから電車で約30分。さらに駅から5分と、片道だけでほぼ1時間はかかる。だがソウヤはそれを苦とも思わず、4月から週に3度欠かさず通っていた。これまで格闘技は空手をやってきていたが、カポエイラほど足技に特化していないため、今までと大きく異なる格闘技を面白く感じたからである。習い始めてわずか数ヶ月ではあったが、元々空手をやっていたためにセンスはいいのか、今では道場の誰もが一目置くほどの腕前となっていた。

「ん……?」

駅までの道のりを半分ほど進んだ辺り。住宅街の間に1匹の大きなネコがたたずんでソウヤのほうを見上げている。奇妙なのは毛並みが紫であったこと、そして首輪に鮮やかな青い宝石のようなものが埋め込まれていたことだ。

無言でソウヤが屈み、ネコの頭を撫でる。ネコは鳴きはしなかったが、気持ちよさそうな顔をしたようだった。ソウヤはそのまま気にかかっていた首輪に手を伸ばす、と。

「なっ……!？」

急に宝石が短剣のようなものに変化する。そしてその剣先が地面に触れたとき。

魔方陣のような紋様が地面に浮かび上がり、辺りを眩しく照らし出した。

「うわっ……!」

そのまま光が広がっていき、光が収まった後、そこには何もいなかったかのようになり、ネコも、そしてソウヤの姿も消え去っていた。

## Episode 1 選ばれた少年（後書き）

オリ主人公・ソウヤ紹介の回です。名前の由来はシンク・イズミ  
和泉真紅の逆、和泉 葉、山 真紅 蒼 という感じです。

色々やってるといふ設定ですが、書いてる人は実は格闘技とか小さい頃に少しだけ習ってた空手と、授業でやらされてる柔道しか経験がなかったりします。以前はテレビでK1とか見てましたが最近はこちらからつきしですし。

そのためカポエイラとか本当は全然わかってません。でも動画で見たとときのアクロバティック感、そしてもともと蹴りが好きなので採用しています。本編中の理由としてはこの後一応ソウヤの口から語る予定です。

動画とWebを見ての知識しかないので、もしカポエイリスタさんがいらつしやいましたらどんどんダメ出ししてください……。

## Episode 2 勇者召喚

ソウヤが眩しい光の次に見たものは、眼下に広がる広大な景色だった。だがその両脚は宙に投げ出されている状態で、景色が段々と迫ってきている。早い話が空中に浮いている状態、そして落下している状態だ。

(なんでこんなことになったんだ……?)

もう1度記憶を整理する。部活から帰ってシャワーを浴び、カポエイラ教室に行く途中で変なネコを見つけて光に包まれて……。

(じゃあ今いるここは、この状況は何だ!?)

辺りを見渡す。山、森、湖。そういった遠くの風景の手前、何かが視界に入った。さっきのネコだ。

「ったく、何がどうなってんだよこりゃ……。いくらネコは高いところから落ちても平気だったってこの高さじゃお前も死んじまうだろ……」

ソウヤはネコ自分の懐に引き寄せようとした。と、首輪に短剣がついていたのを思い出す。だが、今は最初に見た宝石の埋まった首輪になっていた。

「何だ……? まあいいか、これなら懐に寄せられるし」

改めて短剣ではなくなっていることを確認し、ネコの首根っこをしっかりと掴む。驚いたようにネコは「にゃん!」とかわいらしい声を上げたが、気にせず抱きかかえた。

「ま、落下の衝撃で俺は多分死ぬだろうけど……クッションになってやるから、お前は強く生きろよ」

自嘲気味に笑いつつそう言い、ソウヤは地面に背を向ける。地面が近づいてくる　　が、急に落下の速度が遅くなったように感じた。

驚いて首を下に向ける。間違いなく速度はゆっくりになっており、地面に近づくに従ってさらにゆっくりになっていく。と、このまま落ちていくであろう場所に女性のようない人影と、巨大なダチョウのような鳥が2羽、目に入った。片方は黒、もう片方は黄色がかった毛並み。

ソウヤは空中で体勢を立て直し、足を下に向ける。そのままゆっくりと　　空から落ちてきたとは思えないほどゆっくりと、である　　その場に着地したのだった。

地にしっかりと足が着いたことを確認し、目の前の人物を見つめる。銀の髪に女性らしい肉感的な胸、そして　　頭にはネコの耳のようなものが、腰の辺りからは尻尾のようなものが生えていた。

(耳……? )

まるでファンタジーな、頭の上にぴょこんと生えた獣の耳を見つめる。

「よく来たな、勇者」

と、その女性が口を開いた。

「勇者……？」

ソウヤが顔をしかめた。

「ビオレもご苦労じゃった」

その言葉とほぼ同時にソウヤの腕の中にいたネコが飛び出し、目の前の女性の両手の中に入る。次の瞬間、光が広がった、と思うと同時にそのネコが人の姿に変わった。ただ、目の前の女性同様、頭にネコの耳のようなものと腰に尻尾のようなものがついている。

「な、何だ……！？」

ソウヤが思わずそう呟くが、たった今ネコから人の姿になった女性には気にしていないように話し出す。

「んもうレオ様！いくらさっきの姿でないと異世界へ行くことができないとはいえ、それだと言葉が話せないなんて聞いてないですよ！」

「な、何！？それは本当か！？……じゃあこの勇者は……」

「フロニヤ文字も読めてないでしょうから、多分何も知らずにここに来てます……」

レオと呼ばれた女性がはあ、と1つ大きなため息をついた。



「まいったの……。……まあとりあえず自己紹介をしておこうか、ソウヤ・ハヤマ」

「なぜ俺の名前を……。？」

「ワシがお前を召喚したんじゃ、まあ当然知っていることになる」

「召喚……。？」

「順を追って説明しよう。ワシの名はレオン・ミシエリ・ガレット・デ・ロワ。レオでよい。ガレット獅子団領の領主じゃ。こっちはワシの側近でビオレ・アマレット」

「ガレット……。？聞いたことの無い国だ」

「ここは『フロニヤルド』と呼ばれるあなたのいた世界とは全く別な世界なんです」

ビオレが何かをレオに手渡しながら説明する。青い宝石のはまった指輪、その宝石は先ほどまでネコ すなわちビオレ の首輪にはまっていたものと同じように見えた。レオはそれを受け取ると、大事そうに荷物入れにしまった。

「さっき勇者とか言ってましたよね？それに召喚とも。……じゃあ俺はさしずめこの世界を救うために異世界から召喚された勇者だ、とかって話ですか？」

レオが驚いたようにビオレと顔を見合わせる。

「ビオレ、説明してないと言ったな？」

「え、ええ……。何も説明できてないですが……」

ソウヤがため息をつき、口を開く。

「俺のいた世界じゃその手の話は作り話として受けがいいからよくあつて、そして俺はそういう本を読むのが好きだった、ってだけの話ですよ」

「なるほど……。お前のいた世界はワシらの世界とは大きく異なると聞いていたからもちと驚くと思っていたが、それでさほど驚かないというわけか」

「驚いてはいますよ。まさか自分がファンタジー小説の世界に入り込んでしまうなんて思ってもいなかったですからね」

「あ、あの勇者様……」

レオとソウヤが話しているところにビオレが申し訳なさそうに口を挟む。

「レオ様はガレットの領主……。一国の主に当たるわけですから、勇者様といえどももう少し口の利き方を……」

「ワシは構わん。見たところ年もそう離れてはおるまい」

「ですが……」

ふう、とソウヤが1つ息を吐いた。

「……一応気をつけてはいたんですが。ま、一国の主となれば民や他の家臣からの目つてのもあるでしょうからね。……以後はもう少ししかしこまらせて話させていただきます、レオ姫」

「姫はやめる。それなら閣下と呼べ。……じゃが先に言ったとおりレオでよい。それから言葉遣いも無理せんでいい」

「そもいかないでしょう。貴女は領主と言う立場ですから。今後も気をつけてはみます。……それで、倒すべきは悪しき魔王とかですかね？」

「いや、そういうものではない。お前を召喚した理由は戦において我が国に勝利をもたらしてほしいからじゃ」

「ほう……戦ねえ……。相手はどちらで？」

「隣国、ビスコッティ共和国」

「へえ……！」

一瞬ソウヤの表情が変わる。それは笑顔のようにも見え、レオもビオレもゾクツと何かを感じた。

「それで、侵略戦争か防衛戦争か、まあ戦争の内容や目的に興味はないですが。とにかくそこでの殺し合いに俺も参加すればいいわけですか？」

「……勇者、お前は戦について何か勘違いしているようにも思える。まあいい、戦については、この後実際に戦場を見てもらうつもりじ

やし、その上でお前にワシ達に協力してくれるかを聞くつもりじゃ」

「それですがレオ様、もう戦は始まっておりますしそろそろ向かった方が……」

「む……そうか。では続きは移動しながら話すとしよう」

レオがダチヨウのような鳥に近づき、慣れた様子でまたがる。ビオレももう1羽の方にまたがると、自分の後ろ側をポンポンと手で叩いた。

「勇者様、私の後ろに乗ってください」

「後ろって……このダチヨウに？」

「ダチヨウ……？これは『セルクル』というフロニヤルドで乗用に使われる動物ですよ。見るのは初めてですか？」

「セルクル……。まあ馬みたいなもんか」

「あの、何か……？」

「いや、なんでもありません」

ビオレの後ろにソウヤが乗ろうとセルクルの背に手を置く。だが飛び乗ろうとした後、何やらためらった。

「どうしました？」

「……女性の後ろに乗せてもらおうと言うのは格好がつかないと思っ

たんで」

「もう、そんな細かいこと気にしてないで。はい！」

ビオレに腕をつかまれソウヤがセルクルにまたがった。

「行くぞ」

レオを乗せた黒いセルクル「ドーマ」が走り出し、次いでビオレとソウヤを乗せたセルクルも走り出す。

「ビオレ、勇者に話すはずだったことをここで説明してやってくれ」

「わかりました。……えっと、勇者様に来ていただく目的はもう言うてるから……。こちらに滞在していただく最長期間は16日、帰る期日は勇者様に決めてもらうことは出来ませんが、一度元の世界に帰ると勇者様が戻って来たいと望んでも91日以上空けないとこちらに戻ってくることは出来ません」

「つまり帰ろうと思えば帰れるが、すぐにここに戻っては来れないってことか」

「そういうことになります。それからこの世界で得た物、それは物品だけでなく記憶や経験も含まれますが、それは元の世界に持って帰ることはできません。ただ、勇者様が望むなら、得た物を失わなくてすむ方法もあります。ビスコッティ側で『送還の儀』を行った後に再度『召喚の儀』に成功してますから、この点は心配ありません」

「珍しいな。大抵は勝手に召喚されて戻れない、というのがお約束

「なんだが。……いや、俺は半ば勝手に召喚されてんだけったけね」  
「それについては本当に申し訳ないと思ってます……。……あ！でも急にこちらに来ると言うことになったらご家族の方とか心配するんじゃない……」

一瞬、空白が流れた。

「……その辺は問題ないです。俺は今1人暮らしだから。学校も今は夏休みだからないし、強いて言えば部活と習い事に顔を出せないぐらい。数人に連絡入れればまあ大丈夫ですけど……」

「連絡、多分大丈夫です。『ケータイデンワ』と言うものを持ってないですか？」

「『ケータイデンワ』……？……ああ、携帯電話のこと？あるにはあるけど……」

「でしたら前に一時的に元の世界と連絡を取ったことがある、という話を聞いたことがあるので、大丈夫だと思います」

「何から何まで優遇されてる異世界だ……」

天を仰ぎ、ソウヤは1つため息をついた。

「私から大まかには以上です。勇者様から何か聞きたいことはありませんか？」

「……俺を召喚したレオ様にはあるんだが、いいですか？」

「なんじゃ？」

「なんで俺なんです？俺が読んでる小説から考えても、俺は勇者とか言われるタマじゃない。至って平凡な高校1年生だ」

「平凡？お前の世界ではその付近の年の者が集まって行われる弓の大会で、国の中でもっとも優れた成績を収めた者を平凡と呼ぶのか？」

「……インターハイのことか。よくご存知で」

「『星詠み』でお前の活躍は見させてもらった。お前のその卓越した身体能力、そして度胸。勇者としてふさわしいとワシが判断し、召喚した」

「……そりゃ光栄です」

「ビスコッティの勇者……あの『シンク』に対抗できる逸材がほしかったからな」

「じゃあ俺以外にも召喚されてる奴がいる？」

「ああ。ビスコッティは過去にその勇者、シンクを1度召喚しておる。そして昨日ビスコッティが勇者を再召喚し、その時の戦で我らは大敗した。本来ガレットはビスコッティより強大な戦力がある、と言われながらもこれまでは五分五分の成績で、しかしそれが勇者の登場によって崩れた。このまま負け続けるのを我が領民は恐れている。そこでお前を呼んだのだ」

「確かに小さな敗戦が続けば大きな負けに繋がりますからね。……」

でもそんなたった1人でバランスが崩れるようなもんなんですか？」

「丁度いい。戦場が見える場所に着いた。ビスコッティの勇者が戦っている様子がここから見えるはずだ」

レオはセルクルを止め、岩場に降りる。ビオレとソウヤもそれに倣って降りた。

そこから眼下に広がる雄大な景色。その中心に湖があった。だが、ただの湖ではない。そこはさながら巨大水上運動場とも言つべきか、雲梯や細い橋などのアスレチックが並び、そこを渡ろうとする人、そしてそれを妨害しようとする人とに分かれている。水中に落ちた人にはすかさず船が寄って救助をしていた。

「勇者はあそこじゃ。今砦の城壁から内部に侵入しようとしてる。……まずいな、ここも落とされては……。本隊も押し切れないとは、バナーの部隊は何をしとるんじゃ……」

レオの声に従い、ソウヤは砦の方へ目を移した。そこに砦の城壁にかけられた梯子を駆け上がり、右手に持った棒を駆使して周りの兵士をなぎ倒す金髪の少年が見えた。少年に殴られた兵士たちは毛玉のようなものに変化し、その場で動かなくなっている。

「……これが戦？」

しばらくその様子を無言で眺めた後、ソウヤはようやくそう呟いた。

「そつじゃが……何か？」



「見たところ死人どころか怪我人も出てないように見えますが？」

「そりゃ勿論じゃ。参加者の安全を確保するのも開催者の責任じゃからな」

「……なるほど、俺の知ってる『戦』じゃなく、つまりただのスポーツってわけか」

はあ、とソウヤは1つ大きくため息をついた。そこから落胆の意思をレオは感じ取った。

「乗り気ではないようじゃな？」

「いいえ。命のやり取りこそ出来なそうだとは言え、このファンタジー小説のような展開、ずっと俺が望んでいたものに近いものがありますからね。喜んでやらせていただきますよ」

「そうか。それはよかった。……じゃが勇者。今の言葉、貴様は殺し合いをしたいのか？」

そのレオの言葉にソウヤが彼女の瞳を見る。冷たく、何の意思も持たぬようなソウヤの瞳にレオは一瞬ゾクリと数刻前に感じた感覚をもう1度感じていた。

「いえ。ただ、どうせなら命を賭ける方が面白い、そう思ってただけですよ……」

そう言って皆の方に目を移し、再びレオのほうを見たときには、ソウヤの瞳はもう先ほどまでと同じ様子に戻っていた。

「それで、俺は早速戦線に加わって暴れてくれればいいわけですか？」

「一旦本陣のキャンプ地に戻れ。そこに騎士数名とビオレの部下が待機しておるし、一式の装備がある。戦のルールや他にも説明した方がいいことが多くあるからの。そこで準備を整えてから出発するといい。その後で、平野のほうのワシの弟、ガウルの部隊の援護に行ってほしいが……」

「レオ様はどうなされるんですか？」

少し心配そうにビオレがレオに尋ねた。

「この砦は長くもたんかもしれん。が、このまま易々と砦を落とされるのも癪じゃ。ちとワシが行って士気を上げさせ、粘ってみるでしょう。逆転できれば、勇者の戦線加入も含めてこの戦をひっくり返せるかもしれんからな。……ビオレ、これを預けておく。勇者に使わせてやってくれ」

そう言つとレオは荷物入れから先ほどしまった、鮮やかな青い色の宝石の指輪をビオレに渡した。

「そんな！レオ様は丸腰ではないですか！この『エクスマキナ』はレオ様がお持ちになつた方が……」

「砦の中にも武器はある。ワシはそれでいい。それよりも使いたい武器に形を変えてくれる以上、そのエクスマキナは勇者が持っていたほうがいい。……勇者よ、これは我が国に伝わる『神剣』じゃ。ひとまずお前に預ける。うまく使えよ」

「使えって言われても……」

「詳しいことは後でビオレに聞け。……ではワシは行く。ビオレ、頼んだぞ！」

そう言つとドーマにまたがり、そのまま急斜面をものすごい勢いで駆け下りていった。

「さて、私たちも行きましょう」

ビオレに促され、再びソウヤがビオレと共にセルクルに乗る。そしてレオが降りていった斜面と反対、ガレットの本陣があると言つ場所に向かつて2人を乗せたセルクルは走り出した。

## Episode 2 勇者召喚（後書き）

原作ではタツマキがシンクを迎えに行ってるわけですが、その大役はビオレ姉さんにお任せしました。

ずっとタツマキはパラディオンでフロニヤルドへの入り口を開いたと思っていたので、その名残でエクスマキナで入り口を開いたことにしています。なんか実際は違うような・・・エクセリードとも違う気もしますし、タツマキ何者なんでしょう。

そもそもエクスマキナは原作中で宝石の形しかしておらず、いわゆるレイジングハートが蒼くなった感じで、そこから見えない刀身があるような感じだったのですが、とりあえず基本的にパラディオンと同じで使用者の意思によって形を変えると解釈。台座に飾られるためにあのようになっていた、という風に捉えています。

ソウヤの戦場登場は次の次の予定、次の話は原作キャラが多数登場です。

### Episode 3 白熱する戦場

『さあ、プラリネ砦の攻防戦も佳境に差し掛かってきました！引き続き実況は私、ガレット国営放送のフランボワーズ・シャルレーと』

『ビスコッティ国営放送のエビータ・サレスがお送りいたします！』

『おっと、ここで新しい情報です！ガレットにとっては重要な拠点の1つであるこのプラリネ砦を防衛するため、総大将のレオンミシエリ閣下ご本人が戦場に登場との情報が入ってまいりました！』

戦の様子を伝える実況放送からレオ参戦の情報がもたらされると、押され気味だった砦のガレット兵達が雄叫びをあげた。自分たちの君主の登場とあっては、兵たちも奮起しなければならぬ。

『今回は勝利条件なしの時間一杯ポイント勝負ですから、ここを落とされてはガレット側としても非常に苦しくなりますからね』

戦の勝利条件には本陣制圧、重要物奪取など様々なものがある。今回はそういったものはなく、ポイント　つまり兵を倒した分だけポイントは加算、他に拠点奪取や隊長クラス撃破によるボーナスが与えられる　によって純粋に勝敗が決められるものだった。

「うわー……レオ様登場だって。ガレットの人たちも戦う気満々で感じだし、ちょっとこれは厳しいんじゃないの、エクレ？」

そんな戦意の高揚した兵の攻撃を避けた少年が手に持った棒で反撃の一撃を繰り出す。兵の背中に攻撃はクリーンヒットし、その兵は毛玉のような「けものだま」に変化し無力化された。

金の髪に青いハチマキ、まだ幼さも残る顔立ちにビスコッティの神剣・パラディオンを変化させた長尺棒を持つその少年こそ、ビスコッティに勇者として召喚されたシンク・イズミであった。

「話す前に手を動かさせ、勇者。……だったらレオ様が着く前に出来るだけ戦力を削っておくだけだ」

シンクに話しかけられた少女は不機嫌そうにそう言うつと両手の短剣を振るって手身近な兵士2人をけものだまに変えた。

緑の髪にやや垂れ気味の犬のような耳、短いスカートからはすりとした健康的な脚が覗き、利き腕の右手に黒のリストバンドをつけ、それぞれの手に短剣を持つ少女。

彼女の名はエクレール・マルティノツジ。15歳と言う若さながらビスコッティ騎士団親衛隊の隊長を務めていた。

「それに……こつちにレオ様が来るなら逆に好都合だ。湖側には兄上たち本隊の1番隊が、平野側にはダルキアン卿率いる2番隊を中心にした部隊が展開している。強襲部隊の私たちの方に敵の大將が来るとなれば、その分他の場所への負担が軽くなる」

「ま、つまり僕らはその分大変になるってことだとは思っけどね……」

シンクは苦笑いし、また兵の1人をけものだまに変えさせる。エ

クレールと話しながらでもシンクは全く危な気なく戦っていた。その実力を知っているからこそ、エクレールは無駄口を叩く勇者に余計に言わないし、互いに背中を預けあえているのだ。

「でも、レオ様と戦うとしたら、手合わせするのは久しぶりだな。前はエクレと二人がかりでも全然本気出してらって感じじゃなかったもんね。今度は少しは本気になってくれるぐらいには頑張りたいなあ」

「ほう、貴様ら2人程度でワシが本気を出すに値すると思っているのか？」

突然聞こえた方に、2人が、いや、他の兵たちもその声の主の方へと目を移す。

砦の上に大剣を肩に担いだ闘姫が不敵な笑みを浮かべたままそこに立っていた。

「レオ姫……」

「閣下と呼ばんか、この無礼者が！」

登場したレオの姿に兵達が沸いた。

「うおおおおーっ！」

「レオンミシエリ閣下がいらしてくださったぞー！」

ガレットの兵達が口々に叫びだす。

「ビスコッティのダメ勇者にタレ耳親衛隊長よ、ワシがいぬ間に随分と兵達をかわいがってくれたようじゃの。兵達の仇、ワシが直々に相手をしてやるう！」

レオが砦の上から飛び降りシンクとエクレールの前に着地する。

「誰も手を出すな、勇者とタレ耳はワシが相手をする！」

「閣下の決闘だ！」

「うおおおお閣下ー！」

ガレット兵の熱気はピークに達している。

エクレールが目で周りの兵達に下がるように伝え、ビスコッティ側もシンクとエクレールを残して兵達は距離を取った。

「久しぶりじゃの、勇者」

「お久しぶりです、レオ様。昨日こっちに召喚された後に伺いたかったんですが、そのまま戦と、あとレオ様の方も都合が悪かったとうかがったので挨拶しそびれてしまいました」

「そうか。まあ気にするな。ワシが忙しかったのは事実だし。…ところで、次来るときは知り合いを連れて来るとか言ってなかったか？」

「はは……。今回も半ば急に召喚されちゃったんで、僕1人なんですよ……。あ、この戦が終わったら、ガレットに正式に挨拶に行きますよ。ガウルにも会いたいですし」



「そうか。確かにガウルの奴はお前に会いたがっていたな。……じやが来るのはこの戦に勝った上での招待、というのはどうじゃ？」

ニツと笑ってレオが大剣を構えた。

「そうはいきませんよ、レオ様。前と少しは変わったってところを見せてやります！」

シンクも棒を構えて戦闘モードに入る。

「行くよ、エクレ！」

「言われなくてもわかっている」

冷静に答え、エクレールも両手の短剣を構えた。

「来い、勇者にタレ耳……。少しは強くなったところを見せてみる！」

『さあ！いよいよレオンミシエリ閣下が登場！プラリネ砦の攻防戦、ますます盛り上がってまいりましたー！』

実況がこの熱狂にさらに拍車をかけ、プラリネ砦は今日最大の盛り上がりを見せていた。

セルクルでガレット本陣のキャンプに向かうソウヤとビオレの間にはしばらく沈黙が広がっていた。レオの側近として仕えてきたビオレの話術なら何か話題は提供できそうなものだったが、ソウヤの「特に何も話したくない」という雰囲気飲み込まれ、何も切り出せずにいた。

「……ビオレさん、だっただっけ？」

「あ、はい！なんででしょう……？」

不意に話しかけられビオレの声が思わず裏返しそうになった。

「戦っているのはいつもあんな風に行われる？」

「基本的にはそうですね。ただ、以前の戦の最中に神剣に惹かれたのか、フロニヤ力が弱まった場所だったからか、封印されていた魔物が復活して戦どころではなくなったことがありました。」

「フロニヤ力……？……まあいいや。とりあえずそれがどうなったか知りたいんですが。」

「最終的にはビスコッティの勇者、シンク様と姫君のミルヒ様を始めとする方々の手によって魔物は封印されました。ある妖刀が原因になった、とも聞きましたが……。」

「そのときレオ様は？」

「ガレットのもう1つの宝剣、魔戦斧『グランヴェール』を手に魔物と戦いました。しかし魔物の力が強大で、1人で討つことは適わ

なかつたようです」

「へえ……」

「でもそんなのは本当に稀、基本的には怪我や事故がないように行われます。大陸に布かれたルールに則り、フロニヤルドの国民が健康的に運動や競争を楽しむ行事でもありますから」

「ますますスポーツだ……」

ボソリとソウヤが呟く。

「で、攻撃されても怪我をしない原理ってのがフロニヤカとかつて物のおかげ？」

「そうです。フロニヤ力はこの世界の力の源でもあります。この力のおかげで戦では怪我することなく、ダメージは防具や服の破壊という形になり、さらに大きなダメージを受けても先ほど見たような『けものだま』に変わるだけですみます。ガレットの人々はねこだまに、ビスコッティの人々はいぬだまになります」

「俺も攻撃されたらけものだまに変わる？」

「いえ。勇者様は異世界の方ですから、変われません」

「じゃあ俺が攻撃を受けすぎると怪我するってこと？」

「えっと……そういうことになりますね……」

「……つまり勇者2人がぶつかったら、本当の意味で戦ってことか

……」

ビオレの位置から表情は確認できないが、ソウヤはどこか嬉しそうにそう言ったように感じた。

「それじゃあ俺達異世界の人はフロニヤ力の恩恵は受けられないわけですか」

「そうでもありません。フロニヤ力と自らの力を混ぜ合わせることで『輝力』というエネルギーに変換でき、それを使って『紋章術』という力を使うことが出来ます」

「魔法は使える、ってことか。ますますファンタジーでいい。その力の使い方は教えてもらえる？」

「はい、本陣で準備が終わった後、私が教えられる範囲でなら可能です」

「そうか……。ただのスポーツかと思ったがこれは意外と面白そうだ……！」

「勇者様、本陣が見えてきましたのでもうすぐですよ」

ビオレの言葉通り、テントの集まったキャンプ、この戦におけるガレットの本陣が近づいてきていた。

「くっそー！いくら本隊じゃないとは言え、俺にゴドウィンにジェノワーズまで揃っててこの様かよ……！」

平野部での戦闘、シンクとさほど年の変わらなそうな少年がそう愚痴をこぼす。銀の髪とそこに生えた耳、獰猛そうな目、その他の風貌からもどこかレオの面影が見える。それもそのはず、若干14才ながらこの部隊の指揮を執っている少年こそ、レオの弟でガレット王子のガウル・ガレット・デ・ロワであった。

現在両腕に装備している輝力から作り出した爪の他にも槍、剣といった様々な武器が使用でき、姉のレオほどではないにしろその実力は折り紙つきで、ビスコッティの勇者であるシンクと互角に渡り合えるほどであった。

加えてこの場にはガウルの直属の配下でガレットの將軍でもあるゴドウィン・ドリユール將軍、さらにはガウル直属親衛隊と言う手だれ達が揃ってもなお苦戦していた。

「ぐうおああ！」

豪快なうめき声を上げ、これまた豪快にゴドウィンがガウルの脇に吹き飛ばされてくる。鉄球つきの大戦斧を武器とするゴドウィンは巨躯な体格を生かした力が自慢であったが、それでもここまであっさり吹き飛ばされてきていた。

「参りましたな、殿下……。さすが『自由騎士』と言ったところですかな……！」

珍しく弱音を吐き、ゴドウィンが体を起こす。

ガウルとゴドウィンが2人がかりでも手が出ないほどの相手、それが目の前にいるビスコツティの「オンミツ部隊」頭領であり「討魔の剣聖」とも呼ばれる女剣士、ブリオツシユ・ダルキアンであった。物腰柔らかな風格からは想像もできないほどの剣の腕前は大陸一との呼び声も高く、あのレオが本気で戦っても勝てるかわからないと認めるほどの実力者である。

「いやいや、ガウル殿下とゴドウィン將軍もなかなかでござる。拙者も久しぶりに熱くなってきたでござるよ」

「けっ！よく言うぜ……！」

苦笑しながらガウルが口を開く。

「あん！」

「……ぐっ」

「どおわー！」

そんなガウルの苦悩をさらに増やしたのが、間抜けな声と共に吹き飛ばされてきた3人だった。

ウサギ耳が特徴の弓使いであるベール・ファールブルトン、短剣とナイフの使い手で無口無表情のノワール・ヴィノカカオ、西方の訛りで喋り力自慢で斧を使うジョーヌ・クラフティ。3人ともガウル直属親衛隊「ジェノワーズ」であり、その連携は見事なものがある実力者のはずであった。

しかしその3人を1人で相手にしても全く動じることがなく、むしろ圧倒してさえいるのがオンミツ部隊筆頭のユキカゼ・パネトーネである。ブリオツシユのことを「お館様」と慕っている彼女もまた相当な使い手であり、弓、短剣、体術と様々な武器で戦う。ビスコッティでは「天狐様」と呼ぶ者もあり、その名の通り土地を守る天狐の土地神であり、狐の耳と尻尾を持っていた。

「ジエノワーズのお三方、どうしたでござるか？拙者はまだまだ戦い足りないでござるよ？」

「ぐ……おいノワ、あいつあんなこと言ってるで！ちょっと何とかして来いや！」

「無理。3人でも無理なんだから1人じゃ無理」

「そつだよー。ユツキーさん強いから……」

「だあー！もうそんなこと言つとる場合か！ウチらガウ様の直属親衛隊『ジエノワーズ』なんやで！これ以上コケにされてたまるかい！」

ジヨーヌの奮起する声ガウルのところまで聞こえてくる。だが自分も向こうもかなり分の悪い戦いをしているのは明らかだった。

（ちくしょう……姉上がうまくすれば援軍をよこすとか言ってたが……その姉上がプラリネ砦に行った以上、誰が援軍に来るってんだよ……）

湖上ではエクレールの兄でビスコッティ軍騎士団長のロラン・マルティノツジが指揮するビスコッティ軍本隊の1番隊と、同様にガ

レット軍騎士団長のバナード・サブライジユの指揮するガレット軍の本隊がぶつかり、均衡状態にある。とても援軍は見込めない。

（だとすると本陣からか？それでもいたのは確かビオレとその親衛隊、あとは最初姉上がそこで指揮を執っていたからそのため騎士が少しいたぐらいか……。いや、そもそも前線にいるのが信条の姉上がなぜあんな後方で指揮を執った？つつーか、最近の戦の状況から元老院とぶつかることもあったわけだし、戦況をよくしようとするなら最初から前線にいてもいいはずじゃ……。そうでなくても昨日の敗戦から間をおかずの連戦も疑問が残る……）

「うおおりゃああああ！！」

ガウルが考えを巡らせているとそんなことを知らずにガドウィンがブリオツシュ目掛けて突撃をかける。

（考えてても埒が明かねえ、姉上の言葉を信じてここは戦うしかないか……！）

ゴドウィンの雄叫びに続き、ガウルもブリオツシュへと襲い掛かった。

皆での戦いも激しさを増していた。

「はあッ！」



気合と共にエクレールが両手の短剣を振るう。レオはその攻撃を大剣で受け止めて弾き飛ばそうと力を込める。

「勇者ッ！」

「いけえーッ！」

エクレールが叫んだ瞬間、レオの死角からシンクが迫り脚払いを繰り出す。

「ちっ！」

舌打ちをし、エクレールへの反撃を諦めてシンクの攻撃を回避することに専念するレオ。

だが見逃してもらったエクレールは容赦なかった。シンクの攻撃と反対側に回り込み追撃を狙う。

「このッ……タレ耳が！」

レオの左手に魔方陣のような緑の紋章が浮かび上がる。

「くっ……！まずいつ！」

追撃をやめてエクレールが体の前に両腕をクロスする。そのエクレールの両腕の甲にも水色の紋章が浮かび上がった。

「吹き飛ば、タレ耳！」

突き出されたレオの左手から光を纏った衝撃波が走り、エクレールの手前で爆ぜる。

「うわあっ!」

そのまま数メートル吹き飛ばされて背中から地面に落ちる。だがダメージはさほどでもないらしく、エクレールはすぐに立ち上がる準備を整える。

「お前もだ、勇者!」

「わ、わわっ!?!」

レオが背を見せているのをチャンスと見て大上段からの一撃を狙ったシンクだったが、その攻撃は振り向き様に横に振るわれた大剣に、攻撃から防御へと変わった。攻撃はシンクの手にするパラディオンに当たり、その勢いで体ごと後ろに飛ばされながらも、シンクは空中で体勢を立て直して地面に着地した。

そのまま互いに睨み合いの状況に移行する。

「エクレ、大丈夫?」

「人のことを心配する前に貴様は自分の心配でもしたらどうだ?」

「ははっ。それだけの口が利けるなら大丈夫そうだね」

勇者と親衛隊長の軽口のやり取りに水を差そうとレオが口を開きかけたがそのまま言葉を飲み込む。

(……確かに以前とは比べ物にならんほど強くなっておる)

まだ相手が本気を出していないのはわかる。勿論レオ自身本気には程遠い、まだ全力の半分程度も出していない。

だが下手に挑発して向こうが全力で来る、と言うことになったらこちらも本気を出さないと厳しい、と感じるほどにシンクとエクレールは腕を上げ、また互いのコンビネーションもよくなっていた。

しかしこの後自軍の勇者が戦場に登場する、となれば戦局が変わる可能性は大いにある。そうなったとき、ビスコッティ側が皆から撤退、となったのに肝心要、総大将の自分が疲弊しては士気にかかわる、とレオはそこまで考えていた。

(つまり今すべきは勇者が来るまでの時間稼ぎ。この皆の兵達を消耗させず、かつ勇者登場後にここを反撃の拠点とするにはワシがあの2人を抑え切ることが重要……)

ヒュン、と横に大剣を1度薙ぎ、レオは大剣を肩に担ぐ。

「やれやれ……。さすがに2人同時はちと骨が折れるのう」

「よく言いますよ。まだまだレオ様余裕そうですね?」

「そうでもない。最近は何も詰り気味だな。領主などと言うことをしていると己を鍛える時間が少なくなって困る。ガウルの奴がもう少し大人になれば、ワシとしてはこの座を明け渡してもいいんじゃない?」

「でもガウルもそういうのは嫌いそうですね?」

「あやつもまだまだ子供じゃからのう」

「勇者、何を呑気に敵と喋ってるんだ」

エクレールにシンクとの会話に水を差され、レオは小さく舌打ちした。話好きの勇者に乗ってきそうな話題を振れば食いつくという予想は当たったが、真面目な親衛隊長はそれを止めに来た。このまま話していれば多少の時間は稼げたと思うとやや恨めしい。

(勇者の奴はまだか……?)

ギリツと奥歯を噛む。

「あはは……ゴメンエクレー、レオ様と話すの久しぶりだったから。……さてと、体もあつたまってきたし、そろそろ全力で行こうか？」

「フン……いいだろう、貴様に合わせてやる」

シンクとエクレールの鬨気が高まるのがわかる。おそらく今まで  
の力では足りない。

(仕方ない……ここは腹をくくるしかないようじゃの……!)

「ほう……。本気を出したところで、この『百獣王の騎士』レオン  
ミシエリ・ガレット・デ・ロワを倒せると思うてか……!」

決心したように己を昂ぶらせ、大剣を構えようとした。その時  
。

『おおつと！ たった今、衝撃的なニュースが飛び込んでまいりました！』

（来たか！）

実況からのその言葉が耳に入り、レオは構えを解く。

「悪いが、しばし待て」

手で目の前の2人を制し、実況に耳を傾けた。一瞬驚いたように目を見合わせたシンクとエクレールだったが、レオに倣って実況に意識を集中する。

『ガレット軍、レオンミシエリ閣下の側近、ビオレさんから実況放送宛に驚くべき内容の情報が届いています！ ガレット軍領主のレオンミシエリ閣下はこの戦の最中に極秘裏に勇者召喚の儀を行い、これに成功。……なんと、その勇者が今戦場に向かっているという情報です！』

「な……！ レオ様、それは本当ですか！？」

エクレールの質問に答える代わりにレオはマイクをよこすように要求する。すぐにレオの手元にマイクが渡された。

『あー、聞こえているか？』

『はい、こちら実況席、よく聞こえております！ この放送は戦場全体に流れております！』

『ガレット軍総大将レオンミシエリだ。今話があったとおり、先の

戦での大敗を受け、我らガレットに勝利をもたらす者として、我らも勇者を召喚することとなり、そして召喚に成功した!』

ざわざわと皆の兵達がざわつく。ガレット国内でもごく一部の者にしか知らされていない事項だけに、彼らにとっては寝耳に水の話だったであろう。

「僕と同じ……勇者が……?」

驚くのはシンクも同じであった。が、その目は自分と同じ勇者が現れたという事実を知ってか、嬉しそうに輝いても見える。

『では紹介しよう!ガレットの勇者、ソウヤ・ハママ!』

### Episode 3 白熱する戦場（後書き）

原作キャラ多数登場です。

エクレの年を15、ガウルの年を14と公式設定より1歳増やしますが、これはミスではないです。

シンクが最初に呼び出された後数ヶ月間が空いているので、その間に誕生日を迎えてるだろう、という解釈によるものです。

もっとも、公式ガイドブックが出ればこの辺ひっくり返される可能性はありますが、発売前で知らなかったから（以下略）。

なおエクレのところにある「利き腕の右手に黒のリストバンド」というのは言うまでもなくシンクにもらったリストバンドです。ここと「閣下と呼ばんか」の下りは入れないといけないな、とか思いました。

そしてベッキー、ナナミを連れてくるといっていたシンクでしたが今回もタツマキに落とし穴的に召喚されたために2人は連れて来れなかった、ということ……。この2人を出すと特にベッキーの扱いに困ったので諦めてしまいました。2人はおそらく原作2期で活躍するでしょうから、まあいいかということ……。次回こそソウヤが活躍し始めます。

## Episode 4 戦場を駆ける勇者

戦場へと向かうセルクルの上で、ソウヤはレオの放送を聞いていた。

「レオ様も気が早いな……」

「それだけ勇者様のご登場を心待ちにしていらっしやっただですよ。いくら閣下とはいえ、プラリネ砦に進攻してきた勇者と親衛隊長の2人を相手にするのは少々骨でしょうから」

現在ソウヤと共に走る騎士の1人がソウヤの独り言を聞いてそう言った。レオからソウヤと共に戦場に向かうよう指示を受けて待機していた騎士である。

さっきまでのTシャツにジーンズというラフな私服とは違い、ピオレ達が用意してくれた上下黒でまとめられた戦闘用の服にマント、そして銀の防具に身を包んでいる。両腕に手甲、両脚にはくるぶしまで隠れる脚甲を装備し、背中に矢筒を背負ってそこに弓をかけ、腰には両手でも扱えるサイズの小さめな片手半剣、両太股にもベルトで矢筒を固定している。どれも用意されていた武器の中から、ソウヤのチョイスによって選ばれたものである。

「とはいえ、こっちはまだ移動中だからどうしようもないと思うけどな……」



「そんなことないですよ。国营放送のカメラの方々が多分そろそろ私達の動向を掴む頃でしょう」

『どうやら、ガレット国营放送が移動中のガレット軍勇者を捉えたようです！現場のジャン・カゾーニさん？』

『はい！こちらジャンです！今、プラリネ砦の南西平野部をお供の騎士数名と共にセルクルにて疾走している様子を確認いたしました！どうやらこのままガウル殿下の部隊と合流する模様です！』

自分の様子が空中の映像に大きく映し出されたのを確認し、ソウヤは1つため息をついた。

「……まったく仕事熱心な連中だな」

「そうですね。彼らは我等ガレットが誇る国营放送の人たちですから」

皮肉のつもりで言ったつもりが、この騎士にはどうやらそれが通じなかったらしい。

「これじゃ奇襲も何もあつたもんじゃない」

「それは必要ありませんよ。勇者様の腕前ならきつと正攻法でも大丈夫なはずです」

「俺の戦いを見たこともないのになぜそう言い切れる？」

「閣下がこの方だと選んだのです。自分は、その他ならぬ勇者様を信じてますから」

騎士はいたってまじめな顔でソウヤを見つめつつそう言った。ソウヤは視線を逸らし、また1つため息をつく。

「俺がそこまでの信頼に足る人物だといいがな……」

隣を走る騎士に聞こえないようにそうポツリと呟いた。

「勇者様、そろそろガウル殿下の部隊が見えるかと思われませう」

「わかった。あとは兼ねての計画通りレオ様の援護に。俺もやれるだけのことはやってみる」

「承知しました。ご武運を！」

それまで並走していた騎士数名が離れ、皆の方へと向かう。その姿をソウヤは目でしばらく追い、やがて前方へと目を移した。

「さてと……。俺は『勇者』なんて器じゃないだろうが……。本を讀んで頭の中で空想するだけだった世界にせつかく来れたんだ……。好き放題暴れさせてもらおうとするか！」

左手を背に回し、矢筒にかけてある弓に手をかける。そのまま左手で弓と手綱を握り、右手で背中から矢を1本掴んで番える。ビスコッティの兵士が遙か前方に小さく見えた。

「流鏑馬……か」

過去に讀んだ小説の登場人物は難なくこなしていた。だがソウヤ自身がやったことなど勿論ない。

(バランス感覚さえ取れば……)

両手を離し、弓を射る姿勢をとる。目の前がぶれる。バランスをとるのも思ったより難しい。

だが、ソウヤはフツと一瞬笑った。

視界の先にビスコッティの兵士を捕らえる。そこに神経を集中し矢を放つ。

矢はまだ遙か前方遠い距離にいる兵に命中し、兵をけものだまへと変化させた。

「よしっ……！」

弓を左手に持ったまま手綱を握りなおしたソウヤの耳に、遠方の歓声が飛び込んできた。

『な……なんとという射撃！セルクルに乗ったままであの距離を撃ち抜きましたー！』

「す、すい……」

プラリネ砦でレオとの戦いの手を止め、空中に映し出された映像

を見ていたシンクは思わず驚嘆の声を上げた。

「別にあの程度、ユキなら何の造作もなくやる」

「それはそうだけど。でも弓の腕だけならユッキーといい勝負できるんじゃない？」

「今の一射だけではどうだという判断は出来ん」

興奮気味に映像を見るシンクと冷静に分析するエクレールの横で、レオは一見静かに、だが内心は穏やかならぬ心持ちで映像の中の、己が召喚した勇者を見つめていた。彼女のソウヤに対する評価は今のエクレールとほぼ同じであった。

だが、今の一射はソウヤの弓の技術「のみ」で命中させたことにもまた、気づいていた。

（さすがのワシも、あの距離で当てようと思ったら「紋章術」を発動させなければ厳しい……。じゃがあやつは純粹に弓の技術のみで当ておった……。おそらくセルクルに乗るのもほぼ初めてだということ）

思わず体がブルリと一瞬震える。

（もしかしたらワシは、とんでもない者呼び出してしまったのかもしれん……）

セルクルを走らせながら、ソウヤは前方に目を凝らす。ビスコッテイ兵の集団が展開している。

「もう一発……試してみるか……」

そう呟き、ソウヤは息を大きく吸い、ゆっくりと吐き出した。それと同時にソウヤの左手に弓矢が描かれたような濃紺の紋章が浮かび上がる。再び深呼吸すると、今度はその紋章が背後に現れる。

「ハアツ！」

さらに気合の声を上げると、背後に現れた紋章はより巨大に、鮮やかに現れた。そのまま右手を背の矢筒に回し、1本矢を取って番える。

「吹き飛べッ！」

放たれた矢は白く輝き、敵の集団に吸い込まれ 次の瞬間、大爆発が巻き起こる。打ち上げられた兵士達は大量のけものだまへと変化し、その中をソウヤがセルクルと共に疾走していく。

『こ、こ、これは紋章砲だー！なんと、ガレットの勇者は早くも紋章術を使いこなしている模様です！それにしてもすさまじい威力！』

『これは驚きです！ここに来てまさかの隠し玉、戦況が変わる可能性も大きくなってきました！』

興奮気味の実況と共に、前方左手側からも歓声が聞こえてきた。

「今の紋章砲か……。確かに威力はすごいが体に返ってくる反動もでかい……。大技は使いどころを考える必要があるか。せっかくだ、あとで名前でもつけるか。……。それよりさっきの歓声、レオ様の弟のガウル殿下の本隊だと思うが」

独り言のように現状を確認するソウヤだったが、視界の隅に飛来する何かを捕らえた。反射的に上体を倒れこむようにセルクルの横に寝せると、それまで座っていた位置に矢が飛来して来る。

「撃ち損じもあるか……。ますます万能じゃないな」

体を起こし、矢の飛来方向を確認。弓を持った兵は思ったより近くにおり、2射目を構えていた。

「安全な場所に隠れてろ！」

セルクルに自分の言葉が通じるかは疑問であったが、ソウヤは乗ってきたセルクルにその声をかけると飛び降りた。着地と同時に今度は太股の矢筒から1本手に取って番える。これは背中の中矢筒の矢よりもやや短めの矢が収められており、より短距離での取り回しをしやすいようにと種類を変えていたものでもあった。一瞬で狙いを定め、相手のビスコッティ兵が矢を番えるより早く放ち、けものだまへと変化させた。

ソウヤはガウルの本隊の方へと走り出す。途中、ビスコッティ兵数名に行くわすことは会ったが、接近すら許さずにソウヤは矢で撃ち抜いていった。

戦では相手の頭や背中に手で触れてけものだまに変える「タッチ

ダウン」という方法も存在する。危険は大きくなるが、その方が多くボーナズも入る、という説明をビオレから受けていた。だがソウヤはそれを一切狙おうとせず、あえて全ての兵を矢で射抜いていた。

しばらく走り、ようやくガウルの本隊へと到着する。

「ガウル殿下はどちらに？」

「あちらです！」

ソウヤの声に1人の兵が方向を指す。そこに大柄な男とそれより遙かに小さな少年が、刀を構えた女剣士と睨みあっていた。

「ガウル殿下！」

「なんだ！」

兵から取り次いだ騎士がガウルを呼ぶが、顔を動かさずに小柄な少年の方が返答した。

（こっちがガウル殿下か。てっきりでかい方かと思ったが……いや、よく見ればレオ様に似てるか）

「勇者様にご到着されました！」

ソウヤが考えを巡らせていた相手が振り返し、目を合わせる。そのままソウヤはファンタジー小説で読んだ騎士がそうしていたように、左膝を立ててもう片方の膝をついた。

「レオ様に勇者として召喚されたソウヤ・ハママです。ガウル殿下の隊の戦力となるようレオ様の命を受け参上しました」

「あ、ああ……」

ソウヤがあまりに畏まっていたからか、ガウルが一瞬狼狽する。と、向かい側から手を叩く音が聞こえ、ソウヤは顔を上げて立ち上がった。

「先ほどから勇者殿の活躍を映像で見させてもらってござるが見事であった。今のガウル殿下への挨拶も見事でござる」

「……そちらは？」

「これは失礼した。拙者はビスコッティオンミツ部隊頭領、ブリオツシユ・ダルキアンと言うものでござる」

「ビスコッティ……ということは敵か」

「ああ。今しがたまで俺とこのゴドウィンで相手をしていた。ビスコッティどころか、大陸一の剣の腕を持つとも言われる自由騎士だ。俺達2人がかりでも簡単にあしらわれちゃったけどよ」

「ご謙遜を。ガウル殿下はまだまだ本気ではないようでござったが……さて、せっかく勇者殿がご登場されてるわけであるし、ここはひとつ拙者と手合わせを願いたい、いかがでござるか？」

ブリオツシユからの提案にガウルが舌打ちして口を開く。

「……挑発に乗るな。向こうとしては状況打開のために送り込まれ



てきたお前を倒すことで再び戦局を有利に戻そうとしてるんだ」

ソウヤには聞こえる程度の声量でそう言った。

だが、ソウヤはフツと1つ笑った。

「それは逆に言えば、ここで俺が勝てば、戦局はこちら側に大いに有利になると言うわけですよね？」

「お、おい勇者……」

ガウルが制止しようとするがソウヤは続ける。

「向こうが強いのはわかりますよ。俺もある程度は戦いの真似事はしてきてるつもりですからね、雰囲気からして只者じゃないってことも。でも俺はこの戦に勝つために呼び出された。ならここで勝つて、戦局を有利にしないといけない義務がある。……それに、強い相手だからこそ戦いたい。ある程度の強敵と戦うときのピリピリした感覚を感じることは今までもあった。だけど心から強いと感じた相手と戦うことは今までないと言ってよかった。……もし今日の前にいる相手に勝ったら、そんな俺の飢え、渴きにも似た感覚を癒してくれるかもしれないと思うと、俺もここは譲れませんね」

そう言つとソウヤは一步前に入る。

「お前……」

「すみません、ガウル殿下」

ソウヤの意思が固いことを確認すると、ガウルは諦めたようにた

め息をついた。

「……わかった。お前に任せる。ただ、お前は異世界の人間だ。フロニヤ力によってけものだまになることはできない。大きなダメージを受ければ怪我に繋がることもある。それだけは忘れるなよ」

「わかっていきます。ビオレさんから聞きましたから。……ありがとうございます」

ソウヤは腰の剣を抜き、正面に構える。

「では、ひとつよろしく頼むでござるよ、勇者殿」

刀を構えながらブリオツシュが言った。

「大陸一の剣の腕前、見せてもらいますよ」

「ご期待に添えられるかどうか……。……では、参る！」

## Episode 4 戦場を駆ける勇者（後書き）

やっと主人公が戦場に登場です。そして若干チート気味に大暴れ。まあこの辺は原作のシンクもいきなりやりたい放題なのでこんなもの……だと思います。

そういえばオリジナルで名前を付けたプラリネ砦についてですが、プラリネというのはお菓子、あるいはお菓子の材料になります。ちなみにプラリネとは本来ドイツ語で、DOG DAYSで良く使われるフランス語ではプラーリヌという読み方になるそうです。しかしプラリネのほうがメジャーだったのでこっちを採用しました。今後オリジナルの地名や名称が登場することがありますが、大抵お菓子関係のフランス語になると思います。

## Episode 5 激突・勇者VS自由騎士

ブリオツシュが地を蹴る。同時にソウヤもブリオツシュの方へと数歩前進した。

横に構えた刀をブリオツシュがそのまま振りぬく。ソウヤがそれを剣で受け流す。

反撃に上段からソウヤが斬りかかるが、ブリオツシュはそれを体を捌くことで避けた。それと同時に次撃がソウヤを襲う。

再び剣で受け流し、反撃に転じようとするソウヤだったが、ブリオツシュは休まず連撃を放ち、それを剣で受け流し続けた。

ブリオツシュが距離を取る。ソウヤも無理に距離を詰めようとせず、ここは一旦間を取った。

「さすがでござるな。見事な剣捌きでござる」

「これはどうも。……しかし大陸一、と呼ばれているのも納得だ。数度剣を合わせてその実力はよくわかりましたよ」

話しながらソウヤは剣を地面に突き立て、背中 of 矢筒を固定しているベルトを外し始める。それを外して矢筒と弓を後ろに放り投げると、次いで両太股の矢筒、腰の剣の鞘も外した。

「これでよし。あなた相手に弓を使う暇はないでしょうからね」

身軽になった両脚を屈伸させて具合を確かめると、ソウヤは左手で地面に突き立てた剣を抜き、それまでのしっかりした構えとは一転して剣を持った左手を少し前めに、腰を低めにするような構えを取った。

「それがお主の本気の構えでござるか？」

ブリオツシユは刀を正面に構える。

「本気というか、俺が独自に考えたスタイル、といったところかな……ダルキアン殿、確かにあなたは強い。が、かといって俺に勝ち目がないわけでもない」

「ほう……？」

「『勇者』なんて呼ばれてる以上、その呼称に副うだけの活躍はしてみせますよ……」

ゆらつとソウヤの体が右に揺れる。と、ソウヤの足元が光ったように見え　その瞬間、ソウヤの体がその場所から消えた。

ブリオツシユが左側頭部に刀を構え、それと同時にそこから金属音が走る。一瞬のうちに距離を詰めたソウヤが左手の剣で斬りかかったのだ。

そのまま剣をブリオツシユの刀に沿わせてスライド、体を半回転させ左脚での後ろ回し蹴りを上段へと放つ。相手に上体を反らされ蹴りは空を切った。

ブリオツシユが数歩間を空ける。

「なるほど……体術でござるか。いい蹴りでござるな。あくまで左手の剣は防御を重視してその蹴りを武器にする、というわけでござるか」

「弓師というのは両手で遠隔武器を持つ以上、近接戦に弱くなる。ではその近接戦の弱点を解消するにはどうしたらいいか。……俺が見つけた答えは手に頼らず足で戦う、ということです。小説を読みながらずっとそんなことを考え、足技を鍛えていましたからね」

「それにしても弓に剣に体術……うちのユキカゼに似てるでござるな」

「ユキカゼ……？」

「ああ、紹介してなかったでござるな。そこでジェノワーズの3人を相手にしていたのがオンミツ部隊の筆頭、ユキカゼ・パネトーネでござる」

ソウヤが目を横に移す。

「……ああ、その巨乳ちゃんか」

「きょ………」

ユキカゼの顔が紅くなる。

「お館様！拙者はこんな破廉恥な奴と似てると言われたのは心外で

「ござるー！」

「ははっ。戦い方のスタイルが似てる、と言っただけでござる、気にするほどでないでござるよ」

「いくらお館様でもそれはあんまりでござる……」

ユキカゼが不満そうに口を尖らせた。

「さて……それより勇者殿、さっきの移動は足に輝力を込めての高速移動でござるな？まさか紋章術をそこまで使いこなしているとは考えてもいなかったでござる。紋章術の取得速度はうちの勇者殿に匹敵するほどで驚きでござるよ」

「そりゃあどうも。坐禅を組むこともあるんでね、そのおかげで体内的エネルギーの流れみたいなものを感じ取るのは慣れてた、ってことだと思えますよ」

「フム……『坐禅』でござるか……。どのようなものは是非勇者殿に伺いたいところでござるな」

「いいですよ。……ここでそちらの兵を退いてくれるなら、今すぐにも」

「ご冗談を。こちらにそのつもりはござらんし、もっとも、せつかく勇者殿も楽しんでおられるようなのにここで退くのは興ざめでござるっつー」

「確かにあなたと戦うのは楽しいですけどね。……でもま、今回は『負けてはいけない戦い』らしいですから。俺個人の感情より、そ

こちらを優先しますよ」

「なるほど、なかなか勇者らしいことを言っでござるな」

「あいにく、俺は勇者なんて器じゃないと思ってますよ。とはいえ、期待されてる以上は出来る限りその期待にも応えないといけないと思っではいますけどね」

そこまで言っただとところでソウヤが一つ息を吐いた。

「……俺らしくもなく喋りすぎた。続きをやるとしましょうか」

持った剣と一緒に左手首を軽く1度回し、ソウヤが先ほどと同じ構えを取る。

無言を回答した代わりに、ブリオツシユも構える。

再びゆらりと一瞬体がぶれ、ソウヤが消える。今度はブリオツシユが構えから動かない。その構えてる刀の真正面へソウヤが斬りかかる。ブリオツシユが切っ先を僅かに変え、その斬撃を受け止めた。

「正面では簡単に受け止められるでござるよ？」

挑発にも聞こえるブリオツシユの言葉を鼻で一つ嗤って流し、ソウヤは右手に拳を作り相手のわき腹を狙って叩きつける。一瞬意表をつかれた形になったが、ブリオツシユは左の肘をソウヤの拳にうまく合わせ方向をずらす。

それと同時に右後方に飛び退き距離を取ろうとするブリオツシユ。だが再びソウヤが間合いを詰め、自身の右足側から相手の中段目掛



けて剣を斬り上げる。

「くっ！」

短く呻いてブリオツシユが左側から迫る刃を刀で防御する。

が、ソウヤが体を逆に半回転させ、上段に右後ろの回し蹴りを放つ。ガツンッ！と何かがぶつかる音がし、ブリオツシユが後方に吹き飛んだ。

「お館様！」

ユキカゼが不安そうな声を上げたが、ブリオツシユは空中で体を回転させて体勢を立て直すとそのまま地面に着地した。

「今の攻撃、命中していたのでは……」

2人の戦いを言葉を発するのも忘れて見ていたゴドウィンが呟いた。

「いや……。あの自由騎士、後方に飛び退きながら柄の部分に蹴りをぶつけさせて勢いを完全に殺しやがった……」

「な、なんと……」

ガウルの説明を受け再びゴドウィンの表情に驚愕の色が浮かぶ。

（あれが本当に今日召喚されたばかりの勇者かよ……。紋章術の使い方は俺やシンクの方がまだうまいとは言え……。いきなりあれだけ使いこなしてやがるってのが信じられねえ。しかもあの元の戦闘能

力……そこだけを見たら俺といい勝負、いや、実際あのダルキアンがそれなりに本気で戦ってるんだ、それ以上と言えるかもしれないねえ……)

一旦距離を開けた2人が再度斬り結ぶ。ソウヤはこれまで同様、剣の斬撃を見せながらも体術による攻撃を繰り返している。一方のブリオツシユは防御の合間に反撃を加えてソウヤの連撃を止めているが、防御に徹しているのかほぼ防戦一方のように見えた。

(だが相手はあのダルキアンだ、勝ち目があるとは到底思えねえ。……思えねえが……)

何度かの攻防の後、2人は大きく距離を取った。

「やれやれ……これでは決着がつかんでござるな」

「よく言いますよ……。相当力をセーブして戦ってるご様子だつてのじ」

「はは、しかしそう言っている勇者殿もまだまだ余力たっぷりという具合でござろう」

フン、と1つ鼻を鳴らし、戦ってる最中の表情とは一転し、不機嫌そうにソウヤは剣を横に一度振るった。

「……このまま消耗戦を続けたら紋章術に不慣れなこっちの方が不利だ。そろそろケリをつけますか」

そう言つとソウヤの背後に紋章が浮かび上がる。

「ほう……どうやら言葉に違わず本気でござるな。では、拙者もそれに応えんとするでござるよ」

どこか嬉しそうに言ったブリオツシユの背後にも紋章が浮かび、手にしていた刀を鞘へと戻した。

「居合い抜き、か……」

「拙者がこの紋章剣を出すときの構えでござるよ」

「まあ真似、つてわけじゃないですけどね……」

ソウヤも利き腕である右手に剣を持ち替えて左脚側に回し、体勢を低く構えた。両者とも似た構えのまま、無言で動きを止める。

「……どう見ます？」

互いに睨み合う2人から目を逸らすことなく、ゴドウィンは主君に尋ねる。

「言うまでもなく普通にぶつかればダルキアンに勝てるはずがねえ。とはいえ、あのまま続けるよりは可能性があるだろう。確かにダルキアンの攻撃は姉上辺りと比べたらまだ軽いが、勇者と比べると得物の都合から言っても勇者の方が軽い。それをここまで捌ききつてだけでも勇者は賞賛に値する戦いっぷりだ。だがその分消耗は激しい、加えてあそこまで使えてるとはいえ慣れているとは言いがたい紋章術だ。あのまま続けたら勇者が先に消耗し切るのは目に見えてる。そこで全力の真っ向勝負を仕掛けた、と俺は思っがな」

「ですがそれだとしても……」

「ああ。ダルキアンの紋章剣の威力はかなりのもの……。剣の腕と相俟って、どうあがいても勇者が勝てるような相手ではないはずだ。だがあの目、あの気迫……。あいつ、勝負を諦めるどころか勝ちに行くつもりでいやがる。そこまで紋章剣に自信があるのか……」

そこまで説明してガウルは口を噤んだ。辺りの兵達、ガレット側もビスコッティ側も関係なく、2人の戦いの様子を固唾を呑んで見守っていた。

風が吹き抜ける。

動いたのは2人ともほぼ同時だった。

「紋章剣・裂空一文字ッ！」

ブリオツシュが鞘に収めていた刀を抜刀し、横一閃に振るう。

「斬り裂けッ！オーラブレード！」

ソウヤも左足元から白銀に輝く刃を逆袈裟に狙って斬り上げた。

金属同士のぶつかるような鋭い音が響き、2人の刃が交わる。

「な、なんて輝力のぶつかり合いだ……！」

ガウルが驚くほどの力の激突。地面をめくり上げるほどの衝撃が辺りに走る。力はほぼ同等らしく互いに一步も譲っていない。

「ぬっっ……！」

ブリオツシユもこれは予想外だったらしく顔からは余裕の表情は完全に消えていた。ぶつかり合う互いの力が光となり、辺りが眩く照らし出される。

だが、数秒間続いたその均衡は突如として破れた。ソウヤの体を包んでいた濃紺の光が不意に消え、体が前のめりに倒れる。

「なっ！？しまっ……！！」

呟きながらブリオツシユは状況を一瞬で判断した。

オーバーヒート　いわゆる輝力の使いすぎによる体への反動。

相手は今日召喚されたばかりの勇者、紋章術を使ってるというだけでも驚きの存在なのだ。その可能性が最も大きい。

無論それを考慮に入れていなかったわけではない、ある意味では計画通りであった。今の紋章剣も相手に命中させることなく打ち倒せるように力を加減していた。相手の輝力を消耗させ、戦闘を続行できなくなる程度にしたらその得物を払うか破壊すれば勝負は決まる。フロニヤ力によってけものだまになれない異世界の者に怪我なく勝利を収める方法として、ブリオツシユはそういう算段を持っていた。

しかしこのオーバーヒートはあまりに突然のことで予想外、ある程度力は絞っていたとはいえ、予想以上のソウヤの打ち込みに対処するだけの輝力を込めていただけに急に止めることはできない。

「勇者殿……御免ッ！」

出来る限り勢いを殺したが、それでもソウヤの体に刃が命中する。体の鎧が吹き飛び、左腕の手甲も跡形もなく崩れ、左腕から鮮血が流れ落ちる。

が、おそらく後ろに吹き飛ぶと予想していたブリオツシユの考えと裏腹に、その体はその場で踏みとどまっていた。

「な……………!?!」

「……………やっぱりな」

小さく、だがはつきりと、ブリオツシユはソウヤの声を聞いた。

「あんたはそう思う人だと思ってた。剣がそう言っていた。俺が異世界人で怪我をする可能性があるなら、その可能性をもっとも少なくして勝ちに来る。全力は出し切らない、相手に怪我をさせないギリギリの力で勝負に来る。そして俺に異変が起これば何かしら対処してくる。……………そう思ってた」

よく見ればソウヤの左腕は本来刃が当たるはずだった体の間に割り込まれていた。そしてその左手がブリオツシユの刀身を掴む。

「ま、まさか演技だったと……………!?!」

「騙し合いは俺の勝ちだったな。そして……………捕まえた。この勝負も勝たせてもらう!」

再びソウヤの背後に紋章が浮かび上がり、体が濃紺の光に包まれる。

「撃ち抜けッ！パイルバンカー！」

右足を踏み込み、同時にブリオツシユの胸元目掛けて輝く右手の剣を突き出す。刀で払おうとするがソウヤに掴まれて動かない。ブリオツシユは覚悟を決め、輝いた左手を切っ先の前へと割り込ませた。

爆発を思わせるような激しい音とともにブリオツシユの体が宙に舞う。数メートルは吹き飛ばされ、体の上着が弾ける。ソウヤの手から抜けた刀が地面に突き刺さり、その一瞬後に上半身がインナー姿になったブリオツシユの体が背中から地面に落ちた。

「お、お館様アー！」

たまらずユキカゼがブリオツシユの元へと駆け寄る。

「あ、あの野郎……やりやがった……！」

ガウルが呟く。それを皮切りにしたかのようにガレットの兵が沸いた。

だがソウヤは「クソッ！」と悔しげに短く叫ぶと右手の剣を地面に突き立て、そこに寄りかかりながら両膝をついていた。

「ユキカゼ……心配はいらないでござるよ……」

ユキカゼが着くより早く、ブリオツシユは上体を少し起こし、安心そうな顔をしたユキカゼの頭を撫でる。

「浅かった……。武器さえ封じれば防御は破れると思った……。し

かしかし大陸一の剣士、そう易々とは事を運ばせてくれなかったか……！」

憎々しげに呟き、奥歯を噛み締めてソウヤは目の前の敵を睨みつけた。ブリオツシユが上体を完全に起こし、心配そうに手を貸そうとするユキカゼを左手で制して立ち上がった。

「騙し合いまでは拙者の完敗でござった。しかしそれにしてもいい突きでござるな。あれだけ紋章術を酷使した後に放ったというのに、咄嗟とはいえ本気で防御してこれだけダメージを受けるとは見事でござる」

「褒められてもあまり嬉しくはないですね……。決め損ねた一撃ですから」

「勇者殿、戦いとは勝つことが全てではござらん。己の命を賭して得る勝利など危険が高すぎる。そんな勝利にどこまでの価値があるのか、拙者は疑問でござる」

「なんとも言うってくれて構いませんよ。……でも俺は『勝つために』ここに呼ばれた。だったらそれを成すだけだ」

ソウヤが立ち上がる。既に体の鎧は吹き飛び、血が流れる左腕は力なく垂れ、呼吸も荒い。完全に満身創痍の状態である。

「さて……まだ決着はついてない。続けましょう。今のを外したので俺の勝ちの目は消えた。でもただじゃ引かない。このまま粘れるところまで粘って、あなたの体力を削る。その上で次にあなたと戦う人に譲る。もうちょっと付き合ってもらいますよ」



肩で呼吸をしながら右手1本でソウヤが剣を正面に構える。しかしブリオツシユは目の前に突き刺さる刀に手を延ばそうとしない。

それどころか、パツと胸の前まで上げた両手には小さな白旗が握られていた。

「参った。降参でございます」

一瞬驚いた顔を見せたソウヤだったが、うつむいてフツと一ツ笑った。

「お館様！なぜでありますか!？」

「これ以上は拙者の露出が増えるかもしれない、それは困るでございます。それに今日召喚された勇者殿に華を持たせる、というのも悪くないと思つてござるよ」

そう言つとブリオツシユはソウヤのほうを向いた。

「そついつことでございますが、勇者殿はよろしいでございますか?」

「俺の目的は『勝つこと』だ。手段はどうあれ、ね。そちらが降参というならそれでいいですよ。あなたを完全に打ちのめせるだなんて思つてもいけませんでしたし」

「うむ。では決まりでございますな」

その瞬間、ガレットの兵達がワツと再び沸きあがった。

ソウヤは構えていた剣を右肩に乗せ、ガウルの元へ戻ろうとする。

「……それから勇者殿」

今までの声の雰囲気と明らかに違うブリオツシユの声にソウヤは一瞬肩を震わせたが、何事もなかったかのように首だけを振り返らせた。

「先ほど拙者が言ったこと、よく考えて、覚えていてほしいでござる。もし次に戦場で合うときにそのことを覚えていないようだったら……。今度は容赦はしない故……」

冷たく、重い声。

それを無表情で聞いていたソウヤだったが、一瞬口元を緩めた。

「ええ、わかりました。なるべく覚えておくようにしますよ。他人の身を案じるために降参を選択するような優しいあなたに、『出来ないことをやらせたくはない』ですからね」

捨て台詞のようにも聞こえたその最後の言葉を聞くと、ブリオツシユは表情を僅かに曇らせて勝者の背中を見送ったのだった。

Episode 5 激突・勇者VS自由騎士（後書き）

必殺死んだぶり！

こういう姑息というか、奇策は大好きです。モンハンでいうとゲリヨスみたいな。

紋章剣の名前については、原作キャラがほぼ和名なので若干悩みました。が、突きのパイルバンカーは譲れない感があつて（漢のロマン的な意味で）当初考えていたものをそのまま採用。

ソウヤ自身がラノベ読んでて厨二的なところもある、という具合なのでそれっぽい名前に。今後登場する紋章術はさらに厨二具合が悪化します。

ダルキアン卿との戦闘シーンはちよつとカポエイラの要素が薄いかな、とも思いました。まあそれは今後に、ということ……。

それから初対面の女性を「巨乳ちゃん」とか呼んだら絶対怒られますよね……。

## Episode 6 戦を終えて

『なんとなんと！自由騎士ダルキアン卿がまさかの降参宣言！これにより勝者はガレットの勇者、ソウヤ・ハママ！』

2人の戦いの様子は実況放送され、プラリネ砦のレオはその様子を放送を通じて観戦していた。ソウヤの勝利が宣言された瞬間、砦内のガレット兵士達が沸き立つ。

『これにより拮抗していた点差が崩れます！ダルキアン卿を倒したことによりガレット側に大きなボーナスが加算！ガレットは非常に有利を通り越し、勝利はほぼ確定となりました！』

実況の内容は自軍にとって喜ばしい情報であるはずなのにレオはどこか浮かない顔をしていた。

「うわあ……あのダルキアン卿に勝っちゃうなんて……ガレットの勇者はすごいなあ！」

代わりにシンクが興奮気味な声を上げた。

「うるさいぞ勇者。今こちら側が不利になったというのに喜んでいるとは貴様は阿呆か？それにあのダルキアン卿が本当に負けるわけないだろう。召喚されたばかりの相手だ、華を持たせるために勝ちを譲ったと考えるのが普通だ」

「でもエクレ、勝ちじゃ勝ちなじゃない？」

「やかましい！大陸一の剣士が今日呼び出されたヒヨッコなんぞより弱いわけがないだろうが！」

「エクレ……何をムキになってるの？」

「なっていない！」

「まったくお前らは仲がいいのう」

「誰と誰がですか！」

レオの冷やかしにエクレールが怒りの矛先を向けて反論する。その様子を見てレオはやれやれと一つため息をついた。

「……レオ様、あまり嬉しそうじゃないですね」

シンクの不意の質問にガレット総大将は驚いた表情を見せ、次いでその顔がやや陰った。

「……あいつの戦い方は好きになれん」

「戦い方？」

「お前も見てただろう。奴は騙まし討ちで勝ちを取った。騎士道精神に反する」

「タレ耳の言うことも一理ある。じゃがそれ以上に己の身を危険に晒したことが、ワシは気に食わんのじゃ。戦は怪我のないように気

をつけて行つもの。なのにあの捨て身とも言える方法……。そういう考え方ではいずれ奴自身の大怪我が、あるいは他人を傷つけることにもなる」

「でもフロニヤカに守られててけものだまになるから怪我はしないんじゃ……」

「お前はならないぞ、勇者」

エクレールの指摘にシンクは「あつ」と声を上げた。

「そう。あいつがお前と戦うときが1番気がかりじゃ。あいつはいまひとつ何を考えているかわからんとこがある……。互いに怪我をするとわかつたうえでお前に戦いをふっかけるかもしれん、そんな不安があつた。これからもあんな戦い方を続け、それでも勇者、お前と戦うことになったら……」

そこまで話すとレオは言葉を切った。

「……ワシらしくもない、考えすぎじゃな。杞憂と思いたい。……それに話しすぎた」

「続き……ですか？」

シンクが身構える。

「いや。それも面白そうじゃが、そちらのダルキアンが敗れた以上、ミルヒはこの後退却を命じそうだと思うがの」

「ええ!？」

「……確かにこの点差は決定的ですからね」

驚くシンクを尻目にエクレールも同意した。

「ま、このままもう少し待ってみるとするかの……」

レオがそう言い、事の進展がないか空中に映し出される実況放送へと目を移した。

ソウヤとの戦いが終わった後、ブリオツシュは心配そうな顔で主と話したがるユキカゼを制し、フィリアンノ城との連絡を取り次ぐように指示していた。

しばしの後、通信装置にピンクの髪をしたかわいらしい少女が映し出された。

「突然の通信失礼するでござる、姫様」

ブリオツシュが畏まって話すこの相手こそ、現在のフィリアンノ領の領主であるミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティであった。

「構いません、ブリオツシュ。この通信は戦況についてですね」

「はい。お恥ずかしながらガレットの勇者殿との一騎打ちに敗れてしまったでござる。拙者が負けたことで向こうが圧倒的有利になった以上、これから先は負け戦になってしまふ可能性があるのではないかと……」

「映像で拝見させていただきました。ブリオツシユもガレットの勇者様も、見事な戦いぶりでした。恥じることはありません。戦は今日の一戦だけではありませんし、召喚されたばかりのガレットの勇者様の活躍を称えるのも悪くないでしょう。元老院の方々に私の方から撤退を進言してみたいと思います」

「かたじけない。よろしく頼むでござるよ」

ブリオツシユがそう言うのと通信が切れ、1つため息をついてから振り返る。

「待たせたでござるな、ユキカゼ。それで言いたいことは何でござるか？」

「何でござるか、ではないでありますよ！なぜあそこで降参したのですか！？」

「さつき拙者が勇者殿に言ったのは聞こえていたでござろう？それ以上の意味はないでござるよ」

「しかし！」

「ユキカゼ」

有無を言わせないブリオツシユの声色にユキカゼは肩をビクッと



震わせ、目を伏せる。

「……申し訳ありません。出すぎた発言でした」

「いや、わかってくればいいでござる」

ポン、とブリオツシユはユキカゼの頭に手を乗せた。

「あの勇者殿は……勝利に固執しすぎていたでござる。……強い者と戦いたいと言う気持ちは拙者もよくわかる、最初は拙者と似た者かもしれないと思っていただでござる」

そこまで話すと大陸最強の剣士の顔が曇った。

「……しかしあの一撃、最後の紋章剣を受けた後、わかつたでござる。彼には戦いを楽しむ気持ちはあるが、その一方で、それ以上に勝利に飢えていた、と。それ故手段を選ばない。そして、拙者の思考まで読み切つて、最後の突きへと繋げた……」

「お館様の思考……?」

「別に自分の力を誇示するつもりはないでござるが、拙者が本気で紋章剣を放てば今の勇者殿では到底耐えられないでござろう。その結果、けものだまになれない異世界人の勇者殿は怪我をする可能性がある。拙者はそれを好まない、よって勝てるギリギリの力しか出さない。そして不測の事態が起これば対処してくる。……勇者殿はここまで読みきつた上で、あの捨て身の演技を敢行したと思われるでござるよ」

「でも、騙まし討ちと言うのは……」

「よくない、と言うでござるか？ではユキカゼ、そなたは相手に勝てるかもしれないが、同時に自分の命を落とす可能性もある方法を考えていたとして、それが実行できるのでござるか？」

ブリオツシユの質問にユキカゼは口を噤む。

「そう、普通はそれでいいのでござる。それでもあの勇者殿は何の躊躇もためらいもなく、それを実行に移した。あのまま続ければ本当に倒れるまで戦い続けたでござろう。華を持たせる、と言うのは半分本当でござるが、もう半分は勇者殿にこれ以上愚かな戦いをしてほしくなかった、ということとでござる。だから最後に忠告をしておいたでござるよ。……しかし……」

「しかし……？」

「勇者殿はそこでの拙者の心まで見抜いていた。『他人の身を案じるために降参を選択する』、『出来ないことをやらせたくない』。……つくづく恐ろしい者でござる」

「お館様……」

心配そうな声を上げるユキカゼの頭をブリオツシユが撫でる。

「大丈夫でござる。次に戦が始まるまでに勇者殿と話す機会もあるでござろう。それにレオ様もそういったことに対して全く気に留めてないとは考えにくいでござるし」

ブリオツシユがそこまで話したところで、実況放送の方で動きがあった。

『ガレットの勇者がダルキアン卿を下して興奮冷めやらないところですが、ここでミルヒオーレ姫様から戦場の方々へメッセージがあるということですよ！どうぞお聞きください』

「どうやら拙者の提案は聞き入れられたようでごさるな」

ブリオツシュがそう言い、先ほど通信で話した少女が空中に大画面で映し出されて話す様子を眺める。

『ビスコッティ、ならびにガレットの皆さん、こんにちは。ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティです』

「フィリアンノ・ビスコッティ……？ってことはあの女の子が……」

「ああ。今俺達が戦っていたフィリアンノ領の領主、相手国の姫様だ」

活躍を称えられていたところで始まった放送、それを見ていてソウヤが呟いた質問にガウルが答えた。

『ただいまの我が国のダルキアン卿とガレットの勇者様の戦い、放送で拝見させていただきました。手に汗握る、素晴らしい戦いでした』

「姫様に褒められるとは、お前、誇ってもいいことだぞ？」

「そんなもんですか？」

興味なさそうにソウヤは答え、画面の姫を眺める。

『その他の戦いも拝見させていただいてます。プラリネ砦の我が国の勇者様とマルティノッジ親衛隊長、それに立ち向かったガレット総大将、レオ様の戦い、湖での騎士団長同士の激突、それ以外でも互いの国の兵士の方々の戦いは、どれも見事なものであったと思います』

「あの年で姫、か……」

「あの年って、15だぞ。姉上と2つしか変わらないし、俺より1つ上なだけだ」

「……ってことは殿下、俺より2つ年下だったんですか。ちょっと意外だ」

「意外って、俺がガキっぽいって言いたいのか!？」

「いえ、そんなつもりは。自分と同じ年か1つ下ぐらいだと思っていただけです」

ソウヤの答えに不満気味のガウルはまだ嘸み付いているが、そんな2人をさておいてミルヒのメッセージは続く。

『さて、先ほどのガレットの勇者様の活躍により、我がビスコッティは点数に大きく差を開けられてしまいました。そのため、今回はガレットの勇者様の功績を称え、ビスコッティ全軍に撤退を命じたと思います。このような指示を出すのは心苦しくもありますが、戦は今日だけではありません。しっかり休んで、次に備えるのも作戦の1つとも言えます。兵の皆さん、帰投してゆっくり体を休めてください。……このようなことしか言えない領主で申し訳なく思っています。今日は皆さんお疲れ様でした』

ふう、とミルヒのメッセージを聞いていたレオがため息をついた。

『以上、ミルヒオーレ姫様のメッセージでした。……なんと、撤退命令です！ではこれを受け、勝利を収めることになったガレットのレオンミシエリ閣下のお言葉をいただきたいのですが、よろしいでしょうか？』

自分のところに次は回ってくると予想していたレオは、前もってマイクを用意させており、準備は万端だった。

『レオンミシエリだ。話は聞いていた。まずビスコッティ側の勇気ある決断に敬意を表したい。ガレットもビスコッティもご苦労であった。……しかし勝ちも勝ち、悪いが今宵は勝利の宴として大いに盛り上がらせていただこう！』

レオの放送を聞き、砦のガレット兵達が一気に沸いた。

マイクを騎士に渡し、レオはシンクとエクレールに声が届く距離

まで歩み寄る。

「……というわけじゃ。悪いの」

「いえ、姫様が決められたことですし」

「今日のところは貸しにしておくだけですから」

「言っのタレ耳！」

ハツハツハとガレットの総大将は声を出して笑った。

「……とにかく、今宵はこれから宴じゃ」

「出来れば行ききたいですね。ガウルと話したいし、そっちの勇者とも会ってみたい」

シンクの言葉にレオは一瞬複雑な表情を浮かべた。

「ガウルはいいが……勇者と会うのはどうかの……」

「え？」

「いや、なんでもない。……実は明日、ビスコッティを訪問しようかと思っておる。この後ミルヒに話してみるつもりじゃが」

「そうなんですか？」

「珍しいですね。通常は戦勝国の戦勝イベントに敗戦側を招待するのが常ですが……」

「まあ……ちと思つと」ろがあつての。……ともかくそういつわけ  
じゃ。2人とも、今日は戦えて楽しかったぞ」

「僕もですよ」

「ではこれで」

ビスコッティの2人の背中を見送り、レオは再びため息を1つつ  
いた。

プラリネ砦からヴァンネットの城下町へと凱旋したレオは、領民  
からの歓迎を受けた後、自分の治める城へと戻ってきていた。

「おかえりなさいませ、レオ様」

側近のビオレが帰還した主にねぎらいの言葉をかけ、それに「う  
む」と答えた後で城の主は玉座へと腰を下ろした。部屋には既に騎  
士団長のバナードが戻ってきて待機している。

「プラリネ砦の攻防、見事でした」

「お前もビスコッティの本隊をよく止めてくれた、バナード。感謝  
するぞ」

「いえいえ。私の活躍など勇者殿に比べたら」

ガレット騎士団長のバナードはそう謙遜の言葉を述べた。

「して、その勇者は？」

「まだ戻られていません。ガウル殿下の隊がもう間もなく到着と言うことですので、おそらく一緒かと」

「ふむ……」

そこまで話すと背もたれに寄りかかる。

「しかし……私は知っていたからよかったです、何も知らされていなかった兵士や騎士達は大層驚いてましたよ」

「それはそうじゃろうな。ガウルにも言っていなかったから、帰ってきたら文句の1つは言われるのを覚悟しておるが」

「それは言われるでしょう。援軍のことをどう説明していたんです？」

「運がよければ援軍を送る、としか言っておらん」

「はは……」

バナードは苦笑を浮かべた。

「ガウル殿下のご帰還！」



外から兵士の報告する声が聞こえてきた。

「お、噂をすれば、ですね」

バナード将軍がどこか他人事にそう言った時、部屋の入り口のドアが開いた。

「姉上！」

「ご苦労じゃったの、ガウル」

「ご苦労、じゃねえよ姉上！勇者を召喚するなんて俺は一言も聞いてねえぞ！」

「そうじゃろう。言ってなかったからの」

「いつそんなことが決まったんだよ！」

「決まったの自体は昨日です。勇者召喚については前々から議論されていましたが」

「バナード、お前知ってたのか！？」

「はい。閣下を補佐する騎士団長として会議には出席していましたから」

「すみません、私もレオ様の側近と言うことで会議に出席していたので既知しておりました」

ピオレも口を挟む。

「だったら俺にも言ってくれたってよかったんじゃないかねえか？」

「お前に言ったら浮ついた心が行動に出るじゃろ？それで勘ぐられるのは嫌だったからの」

「なんだよそれ……。ったく、運がよければ援軍を送るとか言っておいて蓋を開けてみれば召喚したばかりの勇者ときたもんだからな……」

「活躍は十分だったじゃろっ？」

「そりゃあ……。あの自由騎士に勝っちまうくらいだからな」

「して、その勇者は？」

「ああ、今医務室に行ってる。なんでもダルキアンとの戦いの後から左手が動かないとかって……」

その言葉を聞くとレオは顔色を変えた。

「何！？怪我をしているのか！？」

「血流してたぜ。本人は大したことないとか言ってたけど……」

ガウルの言葉も耳に入っていない様子でレオは立ち上がると部屋の入り口の方へと速足で歩き出す。

「おい姉上！」

「閣下、どちらへ？」

「医務室だ。勇者に会ってくる」

顔を見合わせ、ガウルとバナードがそれを見送った。

豪華な造りの廊下を城の主が進む。いつもと違う雰囲気の主の使用人や兵士達がやや不思議そうな顔をしたが、当人には問うことなく、すれ違ったびに道を譲っていく。

医務室に着くとレオはノックもせずドアを開けた。

「おお、これはこれは閣下」

初老の男が振り返り、眼鏡を上げながら答えた。その向かい、左腕を伸ばして診察してもらっているソウヤが腰掛けていた。

「レオ様」

驚いた顔のソウヤを一瞥し、レオは初老の男、つまりこの部屋の主である城の医師の方に視線を移した。

「勇者の具合は？」

「はい。左腕の傷が深かったですが、今輝力で治療したところですよ。一晩も寝れば完治するでしょう」

「そうか」

安心したようにレオが肩をなでおろした。

「この後レオ様のところに伺おうと思っていたのですが、遅くなっ  
てしまって申し訳ありません」

「いや、よい。……それより怪我はもういいのか？」

「ええ。今説明があったとおり、明日には治るそうです。さすが輝  
力は便利ですね」

「輝力とて万能ではない。命を落とせば勿論、それに関わるような  
身体への大きなダメージのときは効果がないときもある。それは忘  
れるな」

「……わかりました。頭に入れておきます」

ソウヤが椅子から立ち上がる。

「……そうだ、レオ様」

そう言つとソウヤはポケットから何かを取り出しレオに手渡した。  
鮮やかな青い宝石の指輪、他ならぬエクスマキナであった。

「返しておきますよ」

「返すつて……なぜじゃ？」

「これはこの国の宝剣なんでしょう？だとしたら俺のような者は持  
つに値しない」

「しかしお前はこれを使いこなしていたではないか」

フツとソウヤが笑った。

「使いこなす？何言ってるんです。先ほどの戦では俺はそれを使っ  
てすらいませんよ」

「なん……じゃと……？」

レオの表情が固まる。

「エクスマキナを使わずにあれだけを戦いを……。しかし、なぜじ  
ゃ？なぜ使わなかった！」

「言ったでしょう。俺は持つに値しない人間だと。そんな大切な剣  
をよそ者である俺が使うわけにはいきません。レオ様かあなたの弟  
君がお使いになるべきでしょう」

「しかし……」

「とにかく俺はそれを使うつもりにはなれません」

「……わかった。そこまで頑なに断るならこちらも無理強いはせん。  
じゃがお前がこれが必要に思ったときはいつでも言ってくれ。……  
それともう一つ」

「なんです？」

より表情を厳しくし、レオは続ける。

「さっき言ったとおり、今後は怪我をするような危険な戦い方はし

ないようにしてほしい」

「……頭に入れておくといいましたが。でもわかりませんね」

「何？」

「結局は俺の体です。仮に死のうが俺の責任だ、レオ様がそこまで気にかける必要はないと思います」

「……貴様、それは本気で言っているのか？」

厳しくなるレオの顔。答えずソウヤは無言を通す。

「ワシはお前を呼び出した召喚主じゃ。お前が元の世界に戻るまでを保障する責任がある」

「そうですね。……ま、つまるところ俺もあなたも他人同士、ましてやあなたは主で主従関係なんだ、気にかけるすぎないほうがいいでしょう」

「……勇者、なぜ貴様はそうなのじゃ？元の世界に戻れば心配する者がおるじゃろう？」

「いませんよ。せいぜい顔を知ってる、ぐらいの間柄です。その程度の人付き合いしかしてません」

そう言って自嘲的に鼻を鳴らす。

「……深く付き合い合えば、それだけそれを失ったときの痛みが大きくなる。出会いがあれば別れがある。住む場所が変わる、ケンカをす

る、最終的に言えば人はいつか死ぬ……。だったらいずれ別れは訪れる」

ソウヤがレオの瞳を見つめた。それは冷たく悲しいものであったが、どこか物寂しくも見えた。

「仲の良い間柄で別れを喜ぶ人間なんていませんよ。なら別離の痛みなんて少なくすむほうがいい。自分も、他人も傷つくことだ。……だから俺は人とは深く付き合わないようにしてるんです」

「勇者……」

「なのでレオ様も俺にあまり肩入れしなくて結構です。どうせ十数日で帰るんですから。戦のときに役に立つ助っ人、または傭兵程度にでも考えてください」

レオは言葉を発せなかった。ただ驚いたような、どこか悲しそうな顔のままその場に立つだけだった。

「……出すぎた発言すみませんでした。輝力を使いすぎた反動がきてるんで、今日はもう休ませていただきます」

そう言つとソウヤは領主に背を向け、自室へと歩き出した。

## Episode 6 戦を終えて（後書き）

ひとまずはここで一区切り、この後は投稿ゆっくりめにする予定です。ストックがどんどん減ってきてるし……。ようやく原作ヒロインのミルヒ初登場。でもリコはまだ出てきてないですよ……。もしわからないであります……。それでも次回で登場予定です。

前回、及び原作でもダルキアン卿が使用した紋章剣・裂空一文字ですが、コミックスだとこの表記なのですが、公式サイトのまとめ4コマだと「裂空一文字」表記になっていてどちらに合わせるか迷いました。

一応後発のコミックスに合わせてあります。空を裂く一文字斬りのほうがいい気もしますし。

あとEpisodeもアニメだと全部大文字なんですよね、ドラマCD及びコミックスがEpisode表記なのでこっちも後発に合わせてあります。



## Episode 7 フィリアンノ城訪問

翌日、前日の輝力の使いすぎからか体に気だるさが残っていたが、晴天の空の下でソウヤはセルクルに乗っていた。

無論、昨日の戦勝イベントの参加を拒否し、その時間からずっと倒れるように寝ていたソウヤ自身がそれを望んでいるわけはなく、左手側でセルクルを走らせているレオにほぼ無理矢理連れ出された形である。「出かけるから支度をしろ」とだけ言われてために目的地もわかっていない。

昨日半ば口喧嘩に近いものになってしまったためか、レオの機嫌もあまりよくなり、城を発ってから結構な時間が経過しているのにソウヤに対して一言も口を開かなかった。

その2人のぎこちない様子をやや後ろからビオレが心配そうな面持ちで見つめている。

ビオレだけではなく、この一団の中にはガウルやジェノワーズもおり、騎士も相当数連れていることから、ただの散歩や自分にこの世界を案内する程度の目的ではなく、それなりの意味のある事だとは予想していた。

だが昨日レオに自分のことを「傭兵」と言ったソウヤの言葉は本心であり、そのため込み入った事情や目的があるなら別に聞く必要もないと考えていた。

「……どこに行こうとしてるのか、気にならんのか？」

不意に羽の黒いセルクル、ドーマを寄せ、レオが話しかけてくる。

「ま、ならないと言ったらウソになりますかね。これだけのメンツをそろえての行軍ならそれなりに重要な内容でしょう。なら情報が漏れないように一部の人間にしか情報を与えてないものだと考えてました」

はあ、とレオはため息をつく。

「そんな重要なものでもない。実際お前以外ほぼ全員目的地を知っておる」

「そうですか」

薄い反応に領主は苛立つような表情を一瞬浮かべた。

「……本当にお前は……。まあいい。今ワシらが向かっているのはフィリアンノ城じゃ」

「フィリアンノ城って……ビスコッティ領でしょう？」

ソウヤが珍しく驚いたような声を出す。

「そうじゃ」

「敵国じゃないですか。本陣に仕掛けるにしては奇襲にしても兵力が少なすぎると思いますが……」



と。

『さすがは百獣王の騎士様だ、お陰で威嚇する手間がはぶけた』

森の中から拡声器を通したような声が聞こえてくる。

『俺達は【武装遊撃団・クーシュ】だ！金目になりそうなものはいただかせてもらっぜ！』

兵達がざわつく。

「静かにせい！」

レオが一声発し、それにしたがって兵達はざわつくのをやめ、己の領主のほうへと視線を向ける。

「……勇者、お前も待て」

明らかに殺気を出しながら左手を背の弓に回したソウヤにもそう言った。

「なぜです？相手は自分達を盗賊だと宣言したでしょう」

「そうじゃが、まだワシはその宣戦布告を受けておらん。断ればそれで済む話じゃ」

「……言ってる意味がわかりませんが」

「えっと勇者様、戦興業がどのように始まるか、昨日説明したのを

覚えてますよね？」

後ろからビオレが口を挟んでくる。

「ええ。宣戦布告をしたあとそれを受けて初めて正式に戦になる。逆に言えば受けなければ戦にはならない」

「これも同じことなんです。この場合相手は武力による戦いを宣言してますから、受ければこちら側から出した戦力の何%が失われたか、何名倒されたかによって、積荷やあるいは金銭を奪われる割合が決まるんです。相手としてはそれ以上に『相手を倒した』という名声も得られるようですが。基本的に戦は安全を考慮してフロニヤ力が強く働く場所で行われますが、ここは比較的フロニヤ力が強い場所ですから、怪我也あまり心配ありません。相手もそれを考えているようです」

「……ちょっと待てよ、それじゃあつまり戦と同じくこれも……」

「はい。興業になります。ですから、受けなければこのまま何事もなく通過できると言うわけです。もっとも、その場合『ガレット軍が怯えをなして盗賊の宣戦布告を断った』などという風説も流れることがあります……」

「……道理でバカ正直にこれから襲うことを宣言したわけだ。合法の強盗とはまったく恐れ入った」

呆れたようにソウヤがそう言った。

「それで……いかがされます、レオ様？」

「ワシらの目的はフィリアンノ城の訪問じゃ。こんなところで道草を食うのは本来の目的から外れる」

「ですが、先ほど申しましたように余計な風説が流れる可能性もあります……。実際この手の野盗が増えているのは元老院の方々も頭を悩ませていたようです……。それにクーシユと言えば野盗の中でも最大規模の集団です。そんな集団が得意になるのも得策ではないかと……」

「じゃが兵力を割くというのは……」

「なら俺がやりますよ」

何の躊躇もない申し出に2人がソウヤのほうを振り返る。

「何……?」

「要は戦と同じく相手を倒せばいいわけでしょう?」

「それはそうじゃが……しかし」

「言い合ってるだけ時間の無駄です、こうしてる間にケリはつけられる」

一方的に会話を切り上げ、ソウヤがセルクルから降りる。

「おい勇者!」

レオの制止も聞かず、ソウヤは部隊が待機する道から離れて森側へと近づいていった。

『……なんだア！？そっちは1人か？』

「ああ、俺1人でいい」

『ふざけやがって……てめえ、多少は名のある騎士か？』

「騎士ではない。傭兵みたいなもんだ」

『そんなわけのわからん奴1人倒したところで俺達の評価が……。……いや、待てよてめえ確か……。』

拡声器から聞こえてきていた男のいかつい声が止まる。

『……思い出した。てめえ、昨日の戦でビスコッティの自由騎士を倒した勇者だな？』

「……一応そうは言われてる。もっとも、俺自身は自分のことを勇者なんて器じゃないと思ってるがな」

ヒューと拡声器の向こうから口笛が聞こえた。

『昨日の戦い、放送で見させてもらった。あの自由騎士を倒した勇者とあれば相手にとって不足はない。そしてそんな勇者を倒したとあれば俺らの評判はうなぎのぼりだ！金目のものよりも価値がある』

「皮算用だな。そういう算段は勝てる見込みがあつて初めてするものだ」

ソウヤが背中中の弓を左手に持ち、右手を背の矢筒の矢にかける。

『言っじゃねえか。でもな、1人で挑んできたこと、後悔させてやるぜー』

その言葉が開始の合図だった。森の中から無数の矢がソウヤ目掛けて飛来する。

「勇者！」

その身を案じてレオが叫ぶ。

が、一瞬のうちにソウヤの背後に紋章が煌き、弓を持ったままの左手を振るった瞬間、飛んできた矢は全て見えない壁に当たったかのようにその場に落ちた。

そして弓を横に構える。矢筒から持ってきた右手には親指以外の指の間に2本づつ、計6本の矢が握られていた。

それを横に構えた左手の隣に移動させ、弦を引き絞る。同時にソウヤの背後に先ほどよりも鮮やかな紋章が浮かび上がった。

「避けられると思うなよ……！ヘッジホッグ・アルバレスト！」

そのソウヤの声と同時に体から発する光を吸い込んだ矢が放たれ、それは次の瞬間には倍以上へと数を増やし、森の中へと飛翔する。

「うわっ！？」

「ぎゃーっ…！」



何名かの悲鳴が聞こえた後、「ニャー」という声と共にけものだまになったときの音が多数聞こえてきた。

「く、クソツ！なんだ今の紋章砲は……！被害は！？」

「だ、ダメです頭！ほとんど直撃で戦闘不能です！壊滅的ですね！」

「な、何イ！？」

頭と呼ばれてた最初に拡声器から聞こえてきた男の声とその部下と思われる声が聞こえてくる。2人ともかなり狼狽しており、向こうの被害が甚大なのは明らかだった。

「ぐっ……！撤退だ！勇者、今回の借りはいずれ返すぞ！」

ガサガサと森の中を人が駆ける音が聞こえ、やがて殺気も人の気配も消えた。

それを待つてガレットの兵達がワツと沸く。

「すごい！」

「さすが勇者殿だ、まさか一撃とは……！」

賞賛の声を上げる兵達の声に気にもかけない様子で、ソウヤは待機させておいたセルクルへと飛び乗る。

「勇者、今のは……」

「進みましょう。話は進みながらでもできます」

「あ、ああ」

レオが前進の声をかけ、一団が目的地へ向けて前進し始める。

まだ兵達は興奮が冷めないのか、互いに話している者もいる。浮ついた様子にはレオはそれを咎めようかと思っただが、自分もソウヤに對して話そうとしていたためにそれをやめた。

「……それで勇者、今の紋章砲、輝力により矢の勢いを加速させ、数を増やし、さらには誘導までした、という原理か？」

全体が進みだしてしばらくしてから、レオはソウヤに尋ねる。

「そうです。相手は矢を一斉射した。そのせいで場所はバレバレですからね。……それにしてもさすがですね、一目でそこまで見抜くとは」

「さすがというのはこちらのセリフじゃというのに……。3つを同時にこなすなどなかなか出来んことじゃぞ。ワシも気安くおいそれとはできん」

「でもつまりはできると言っことじゃないですか。なら驚くに値しないでしょう」

「……いつ、今の紋章砲の練習をした？」

「してませんよ。ついだに言っこと昨日使ったものもね」

「……やはりか」

呻くようにレオが呟いた。

「なぜそこまで自信を持って試してもいけないことができる？」

「できる、とわかっているからです。昨日最初に紋章砲を撃ったときに一発で撃てた。なら他のもできると思っただけです。……ああ、ちなみにその紋章砲、名前を『スマツシャーボルト』か『エクस्पロードショット』にしようかと思ってるんですが、どっちがいいと思います？。」

「知らん。好きにしる」

珍しく嬉しそうに話すソウヤだったが、レオは興味がなさそうに短く答える。

「なんだ……つれないですね」

「……それよりその自信はどこから来る？紋章術はまず技のイメージを固め、その上で輝力を用いる。そのイメージが強ければ強いほどいい。とはいえ、輝力を使うのは昨日が初めてのはずじゃが？」

「確かに輝力を使うこと自体は昨日が初めてですがね。イメージならとうの昔に固まっていたよ」

「なんじゃと？」

「言いましたよね、俺の趣味のひとつはファンタジー小説を読む事だって」

「ああ。要は空想の物語、ということじゃったな」

「ええ。それを読むたびに俺の心は躍った。華麗な技を持つ登場人物に憧れた。じゃあ俺がその登場人物になれたらどんな技を使う？……そんなことをしよつちゆう考えてた。だからイメージはずっと前から固まってるんです」

「……そういうことだったか。じゃがそれと実際にできるといふことは別問題じゃろう」

「だからさっき言ったとおり、最初の紋章砲が自信に繋がってるわけです。あれが出来れば輝力を使う量、手間、共にそれより簡単な紋章剣のオーラブレードとパイルバンカーは間違いなく使える。……まあ今のアルバレストだけは絶対に、とは言い切れませんでした。でも大切なのは自信だ。己に自信がなければ何も出来ない。負ける、と思えば勝てる戦いも勝てない。だから俺は自分を信じた、ということですよ」

ソウヤの説明を無言で聞いていたレオだったが、その説明が終わるとふうとため息をついた。

「……自信、か。それだけで説明が付くことではないと思うがな。いずれにしろそれで出来るというのなら、お前は天才かもな」

「俺は決して天才じゃない。それだけは言えますよ。天才と言うのは血筋が優れていて、かつ努力を惜しまない人のことだ。……例えるならあなたのような」

「世辞はよせ。……じゃがお前の親は達人だった、ということとはな

いのか？」

それを聞くとソウヤは一瞬眉をしかめた。が、何事もなかったかのようにいつもの抑揚のない声で話し出す。

「親父もおふくろも普通の人でしたよ。……達人だったらよかったのに」

「『でした』……？」

「死んだんですよ。5年……いや、もう6年前かな」

「な……。……そうだったか、すまなかった」

「いえ。昨日も言ったでしょう、レオ様が何かを気にやむ必要はないと」

「しかし……。……いや、わかった。そうしよう」

それきりレオは口を閉じ、ソウヤも何も話そうとはしなかった。

一団はガレット領を抜け、ビスコッティ領にさしかかろうとしていた。

朝に城を発ち、フィリアンノ城に着いたのは昼前だった。中央の

巨大な門が開くと、城の前に騎士と、それとは異なる風貌の者が数名立っていた。

ソウヤは目を凝らす。集まっている人々の真ん中に立っているピルクの髪の少女は見覚えがあった。

「ミルヒ、急な訪問の要請を受け入れてくれて感謝する」

レオが手を差し出し、ミルヒオーレがそれを固く握った。

「いえ、こちらこそお待ちしております。……それでガレットの勇者様というのは……」

「ああ。……おい、勇者！」

一団の中に埋もれるように待機しているソウヤをレオが呼んだ。

「……なんです？」

「なんです、ではないだろう！ 貴様を紹介するためだと言っただろうが」

ポリポリと後頭部を掻きつつ、めんどくさそうにソウヤは領主の下へと進む。

「こいつが勇者、ソウヤ・ハママだ。もっとも、本人は勇者とは思ってないようだ」

「ええ、その通りです。自分では傭兵みたいなもんだと思ってます」

嫌味に言ったつもりの言葉だったがソウヤには効果がなかったよ  
うだ。

「いえいえ、ご謙遜を。昨日のブリオツシユとの戦いはまさに勇者  
と自由騎士の戦いとして見事なものでした。……挨拶が遅れました。  
私がミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティです、初めまして」

「姫様のお姿は昨日の戦中に映像で拝見させていただきました。…  
…おっと、こちらは『姫様』でよろしかったですか？」

「……勇者、貴様……」

小憎らしそうにソウヤを睨みつけるレオ。

「ま、まあレオ様落ち着いて……。あと数名紹介させていただきま  
す。ビスコッティ王立学術研究員主席研究者のリコ」

「リコツタ・エルマールであります。リコと呼んでほしいでありま  
す」

ミルヒの紹介を受けて現れたのは茶色の髪をした小さな少女だっ  
た。

「……主席研究者？」

「はい。リコはとても優秀で、小さいときにつくた通信機は今大陸  
中で使われていたり、他にも以前シン……ビスコッティの勇者様が  
帰還できなかった問題を解決してくれました」

「へえ……。見かけによらない、ってことですね」

「うう……た、確かに自分は小さいですがそこまで言わなくても……」

リコッタが悔しそうな声を出す。

「……失礼。失言でした。……しかし俺が召喚されたときはもう帰還は保障されてる、って話だったと思います。帰還できなかった問題なんてあつたんですか？」

「う……」

今度はミルヒが気まずそうな顔をした。

「ひ、姫様は悪くありません！」

「で、ですがあれは召喚した勇者様を元の世界に返せない、ということを知らずに召喚してしまった私が悪いことで……」

「でもでも、勇者様は実際に戻ることが出来たし、再召喚することができたであります！それにそのことをきちんと確認しなかった自分にも……」

「まあうまくいったことじゃ、今更気にすることもなかるう。一応再確認しておくが、今はもう戻る方法も確立されとる。だから勇者、その点は心配いらんぞ」

「……わかりました」

ビスコッティの2人がついたため息に呼応するようにソウヤも一



つため息をつく。

「そっじゃ、発明王」

「はい……ってそれは自分のことではありませんか？」

「他に誰がおる。その……こちらも少々手違いがあつて勇者が急にこちらに呼び出された形になった。連絡を取らせてやりたいんじやが、できるか？」

「はい、大丈夫であります。『ケータイデンワ』があればここからでも連絡が出来るように装置を改良してありますから」

「そりゃ助かります」

リコッタが誇らしげに胸を張った。

ミルヒの紹介が続く。

「直属親衛隊長のエクレール・マルティノツジ。今この場にはいませんが騎士団長のロラン・マルティノツジは彼女の兄に当たります」

緑の髪に少し垂れた耳、やや不機嫌そうな表情の少女が数歩前に出る。

「エクレールだ。よろしく頼む」

そう言つとエクレールは元の場所へと戻っていく。

「エクレ、もう少し何か……」

「いえ、姫様。他に話すこともありませんので」

「エクレは恥ずかしがりやでありますな」

「……リコ、誤解を招く発言はやめてくれ」

あははとミルヒが少し困ったように笑った。

「本当は勇者様やオンミツ部隊のブリオツシユ・ダルキアン卿とユキカゼ・パネトーネ筆頭も紹介したかったのですが、今この場にはないので、後ほどということとで……」

「ダルキアン卿とは昨日戦場で手合わせしましたし、パネトーネ筆頭とも一応面識はあります」

「勇者様はユツキーたちと一緒にダルキアン卿の住まいである『風月庵』にいます。自分が呼びに行つて来るであります」

「お、だったら俺達も行くぜ。ついでにシンクと軽く手合わせしたいし」

話を聞いていたガウルが後ろからそう言った。

「そうじゃな……。会食まで時間もあるじゃろうし。ではガウルたちはリコッタと一緒に行くといいじゃろ。ミルヒ、リコッタ、いいか？」

「はい」

「了解であります」

「ワシはミルヒと会談がある。他の者はビスコッティの兵達と合同訓練じゃ。……勇者、お前はガウルと一緒に行くか？」

一瞬、間があつた後でソウヤが答える。

「……いえ。ですが、かといって合同訓練、と言つのも遠慮したいです。できれば城下町を見て歩きたいですが」

「ふむ……」

「でしたら私が案内役をしましょう」

そう言つて出たのはエクレールだった。

「エクレー？エクレーがいいのであればいいですが……」

「構いません、姫様。元々こちらの勇者の教育係は私ですから、こつというのは慣れていきます。あとはそちらの勇者が不満でなければ」

「何も文句はありませんよ」

「決まりじゃな。すまんの、タレ耳。……しかしこちらの人間も一人ぐらいはつけておいた方がいいか……」

レオが視線を動かす。

「ジョーヌ」

「は、はい!？」

急に名前を呼ばれたことに親衛隊の黄、ジェノワーズのジョーヌ・クラフティは驚いた声を上げた。

「お前も勇者について行ってやれ」

「え、ええ!？なんでウチが……」

「ビオレはワシと一緒にミルヒとの話合いに付き合ってもらおう。そうなるらとジェノワーズ辺りから1人を選出すべきじゃろうが……お前は面倒見もいいほうじゃいな。無口とドジよりマシじゃろ」

「そ、そんな!ジェノワーズのセンターはノワヤ、そういうのはノワに……」

「ワシの命令が聞けんのか？」

「……へーい」

一方的に決められて肩を落とすジョーヌの隣でノワールとベールも「無口……」「ドジって言われたー……」とがっかりしている様子だ。

「では勇者様達が戻ってきましたら会食とします。兵士の方々は口ラン騎士団長の指示に従ってください。それではまた後ほどお会いしましょう」

ミルヒがそう言うとレオ、ビオレと一緒に城内へと入っていく。

兵達はビスコッティの兵が訓練をしている場へ、その他の者たちは城門を抜けて街の方へと進んでいった。

## Episode 7 フイリアンノ城訪問（後書き）

誘拐興業があるなら盗みの興業もあるだろう、なんて考えて興業化してみました。が、システムについて全然考えを詰めてないのでこれじゃ受けた側が損するだけになるような……。

こういう布告をしないで行うただの「強盗」はいくらフロニヤルドといえど重罪でしょうから厳罰になると思って書いてます。

ですが、ドラマCDによるとかなり福祉や雇用政策が充実しているらしく、ちゃんと職につかないのはむしろ珍しいくらいらしいです。今の寒い日本を見てるとなんて羨ましい世界だ……。

実際ドラマCDでゴドウィンの過去の話が出たとき、武者者といって各国を渡り歩っていたゴドウィンはガウルだったかジェノワーズだったかに「つまりただの無職じゃん、仕事なんか簡単につけるだろ」といったニュアンスの冷やかな言葉を浴びせられていました。

盗賊団の「クーシュ」についてですが、実は当初、ソウヤが団を丸々スカウト、自分が指揮する遊撃部隊のメンバーとする予定でした。クーシュというのはジェノワーズ（お菓子用語の意味ではスポンジケーキの生地のこと）の薄切りによる層のことで、ソウヤの親衛隊、つまりソウヤにとってのジェノワーズにしようと思っつけてつけた名前の名残です。

その際リーダーを女性にしようとか、ジェノワーズの名前が色から来ているので、団員幹部の名前はまだ使われてない色のモーヴ（薄紫）とブラン（白）という名前にしようとか色々考えていたのですが、構想を練るうちにどうしてもソウヤとの絡みが薄くなってしまいいそうな予感がしたのでスッパリカットしました。

なお盗賊は自分を盗賊ってあんまり言わない、というかこの世界では強盗も興業、という形で書いてる以上、もっと聞こえのいい名称の方がいいとも思ったりしたので武装遊撃団なんてネーミングにな

ってます。

ヘッジホッグ・アルバレストについて。

ヘッジホッグはハリネズミ、アルバレストはクロスボウ系の弓です。ハリネズミの針のように無数の矢を撃つ、という感じですよ。

こてこてな名前です、ソウヤ君そのくらいノリノリで名前つけてるってことで……。

## Episode 8 それぞれの時間

城内に入ったレオとビオレを待っていたのはミルヒの秘書であるアメリカ・トランプだった。多忙なミルヒのスケジュールを管理し、ミルヒを公私共に支えているよき理解者である。幼い頃のミルヒとレオの関係をよく知っている人物でもあった。

「お待ちしておりました、レオ様。応接間に案内します」

「すまん」

アメリカを先頭にミルヒ、レオ、ビオレと続く。

歩いている途中、ミルヒがレオに近づき、そっと耳打ちをしてきた。

「レオ様。アメリカのことなんです……」

「ん？アメリカがどうかたのか？」

「近々結婚するかもしれないんです」

「な、なんじゃと!？」

思わずレオが大声を出してしまい、前を歩くアメリカが驚いて振り返った。



「ど、どうしましたレオ様？」

「アメリカ、お前……」

「あー！レオ様、せっかくこつそり話したのに……」

そのミルヒの様子を見て何を話したのか気づいたであろうアメリカが大きくため息をつく。

「もう……姫様、そのことはあまり広めないでほしいと言ったはずです。このことをよく思われない方も少なくないでしょうから……」

「でもレオ様もアメリカのことをよく知っていますし、お耳に入れておいた方がよかつたかと……」

「そうじゃ、ミルヒの言う通りじゃな。……して、相手は誰じゃ？」

再びアメリカはため息をついて右手で頭を抱えてしまった。

「ロラン騎士団長です」

代わりにミルヒが答える。

「なんと！……アメリカ、お前もなかなか隅に置けないのう。」

「茶化さないください。……私などでは身分が違うという事はわかっていたのですが、あの方が……あまりに熱心にアプローチをなされるので……」

「よいではないか。細かいことは気にするな。いざとなったらミル  
トの一声でよく思っていない者などどうとでもなる」

「そうですね……ってレオ様、それじゃ権力濫用ですよ!」

「いざとなったら、の話じゃ」

愉快そうにレオが笑う。

「それで式には是非とも呼んでほしいが、予定はいつじゃ?」

「まだそこまでは……。何分あの方も忙しい方ですし、私達の仲も  
正式に、というわけでありませんから……。今のところは折を見て、  
としか申し上げられません」

ほう、とレオが相槌を打った。

「しかし相手が騎士団長とはのう……。どうじゃビオレ、お前もバ  
ナードと……」

「あの方は妻帯者ですよ?レオ様、私に不倫の相手をしるとおっし  
やるのですか?」

困り顔で領主へとビオレが問いかける。

「それよりもレオ様の方こそ早くお相手をみつけれられては?」

「な!?!や、やかましい!ワシは領主じゃ。そんな色恋沙汰などや  
つとる暇はない!」

なぜかその言葉を聞いたミルヒが一瞬固まったが、誰もその様子には気づかなかった。

そんな話をしているうちに応接間に到着する。通された応接間は豪華な造りで、フィリアンノ城の威厳のようなものが感じられた。

「コホン……。では私は外でお待ちしております」

「別に外さなくてもいいぞ？こちらもビオレを同伴させておるんじやし」

「私もそう言ったんですが、アメリカがこれは自分の仕事の範疇ではないと……」

ミルヒの言葉に応じるように、アメリカが軽く頭を下げる。

「姫様なら私の助けがなくても十分外交をこなせますし、おそらくそれなりの機密のある話し合いでしょう。でしたら私は席を外させていただきます」

「そうか……すまんな」

「いえ、お気になさらず。……では私はこれで」

アメリカが部屋を後にしたのを見て、ミルヒとレオが椅子に腰掛ける。

「ビオレさんもどうぞ」

「いえ、私は結構ですので」

「早速だが……頼んでいた件、やってくれたか？」

さつきまでより表情を硬くしてレオがミルヒに尋ねる。レオのその言葉にミルヒは表情をやや曇らせて俯いた。

「……申し訳ありません。昨夜と、それから今朝も試したのですが……」

そこで一度言葉を切って顔を上げる。

「ガレットの勇者様に関連することを『星詠み』しようと思いました……影に包まれたように、ビジョンが見えないのです」

「……ワシと同じじゃ。ミルヒを持ってしても見えんか」

「星詠み」というのは紋章板を使って様々なことを見ることが出来る紋章術の一種である。人によっては少し未来のことを視ることができる。

「すみません、力になれずに……」

ミルヒが申し訳なさそうにレオに頭を下げる。

「いや、ワシも昨日戦の後にやってみたが見えなかったから頼んだのじゃ、謝ることはない」

「こんなことは珍しいです。普通、星詠みでは何かしら多少のビジョンが見えるはずなのですが、全く見えないというのは……」

2人の間に沈黙が流れる。

「……はつきりと悪いビジョンが見えなかった、というだけでもよかったです考えるべきかの」

「……以前、魔物が現れたときのレオ様の星詠みは……」

「ああ。見えたのは悪いビジョンだった。それもはつきりと……そしてワシがそれを変えようとしても、見えるビジョンの結末は変わらなかった」

「ですが、最後は変わったではありませんか」

「……そうじゃな」

以前、レオは星詠みでミルヒの死というビジョンを見た。それを避けるため、レオはビスコッティに戦を仕掛けたり、戦に国の宝剣を賭けてみたりと様々な手を尽くした。

しかしレオの言葉通り見えるビジョンの結末は変わらず、一度はそこで視たとおりの光景を目にしてしまう。

だが最終的にはその結果は変わり、今もミルヒはこうして元気に領主としての役割を全うしていた。

「確かにビジョンが見えないというのは不安なものです。ですがそれは如何様にも変えることができる、ということだとは考えられませんか？あの時も言ったように、未来は自らの手で決めるものだと私は思いますし」

「……相変わらずミルヒは前向きじゃの」

「それが私の取り柄でもありますから。それにレオ様がお選びになった勇者様です、信じてもいいと思います」

「そうならいいんじゃないが……」

レオは1つため息をついた。

「昨日のダルキアンとの戦い、見ていたのだろうか？」

「はい。見事な戦いでしたが……」

「……ミルヒにはそう見えたか」

違うのですか、とミルヒが一瞬驚いた顔を浮かべた。

「いや、確かに見事な戦い、という見方は間違っではない。じゃが奴のあの騙まし討ち、そして自分と相手の両方の身を危険に晒すようなあの戦い方……。戦は怪我がないように行わなければならぬ以上、ワシはあの戦いの全てを評価すると言っことはできない。……ダルキアンには余計な気をかけさせた。ワシが謝っていたと伝えてくれ」

レオが頭を下げる。

「レオ様、頭を上げてください。勇者様が怪我をされたと言っ噂も耳にしました。だとしたら謝らなければいけないのはむしろ私の方です」

「……怪我はしたが大したことはない。城の医師が輝力で治療した。さっきここに来る途中野盗が現れたが、あやつはそれを1人、紋章砲一撃で片付けているし、もはや完治しているじゃろう」

「そうだったんですか。それにしてもさすがレオ様がお選びになった勇者様ですね。もう紋章術をそこまで使いこなしているのですか」

1つため息をつき、レオが口を開く。

「……ワシがあいつを初めて見たのは、星詠みであいつが出ている弓の試合を見たときじゃった。周りはあやつより数歳年上の者ばかり。なのに奴は全く気圧される雰囲気はなく、それどころか緊張、不安、そういった類とはまるで無縁であるかのように矢を放っていた。……ワシはそれを見て驚いた。雑念も何も一切なく、ただ目の前の的を射抜くその姿は、まさに勇者にふさわしいとそう思った」

「私がシンクを迎えようと決めたときと同じですね」

「……じゃが実際に会って、その戦いを目の当たりにして気づいた。初めて会った時に見たその目はまるで虚ろで何も見えていないようじゃった。そしてあの戦い方と思考……。奴には雑念がない、それは間違っていないかもしれない。しかしそれは雑念だけでなく、夢や希望、そして感情さえも欠落しているではないか、何も思っていないのではないかとまで思うようになってきた。事実、だとすればまるで死に急ぐかのような戦い方も納得できる」

「レオ様、いくらなんでもそれは……」

「ですが……レオ様のその考え方も……あながち外れてはいないのかもしれない」

レオの傍らに立つビオレが口を開く。

「私は勇者様をお迎えするために異世界に行きました。そしてフロニヤルドに戻ってきたとき、上空から降りてくるときです。あの方は動物状態だった私を懐に寄せ、『この高さから落ちたら死ぬだろうが、自分がクッションになってやるからお前は強く生きる』ということをおっしゃりました。普通、予期せぬ状況になった場合、原因を究明しようとしたり取り乱したりするはずです」

「……確かに私がシンクを召喚したとき、地上に降りた後もまだとても慌ててました」

「なのにあの方は早々に自分の死を受け入れようとしたのです。生への未練がないのか、絶望しているのか……」

「……ともかくそういうこともあって、ワシは勇者のことを不安に思っておる次第じゃ。そこで勇者を召喚したことについては先輩であるミルヒから助言をもらいたいと思つての……」

「助言、ですか……」

ミルヒが考え込む様子を見せる。

「と言っても、そっちの勇者はバカが付くほど正直で素直な奴じゃからの……。こっちは状況がまるで異なるから参考になりそうにもないな。ミルヒに名前と呼ばれるほどの仲になつてるほどじゃし」

「そうですね……。……って、ちょ、ちょっとレオ様何を……!」



真面目な顔で考え込んでいたミルヒの顔が見る見るうちに赤くなる。

「べ、別に私はそんな……」

「形式上は会談ということでもそこそこ堅苦しい喋り方をしてる割にもう2度もあやつのことを名前で呼びおって……。惚気か？」

「そ、そんなんじゃないありません！それは……その……つい癖で……」

「ほう！癖！やはり仲がいいんじゃないのう、ミルヒ。どうじゃ、アメリタに続いてお前も……」

「か、からかわないでください！」

恥ずかしそうにうつむくミルヒを見てレオは声を出して笑った。が、笑った後でレオの顔が真剣なものに戻る。

「……ワシはあいつのことをダメ勇者と言ってきたが、これだけ信頼を得ているんじゃない、勇者としてふさわしい存在に成長したのかもしれんな」

「レオ様……」

ミルヒが不安そうな顔でレオを覗き込むが、表情を固くして口を開く。

「レオ様、今レオ様はシンクを成長したとおっしゃいました。でしたら、そちらの勇者様もこれからその名にふさわしい存在へと成長する、とも言えるのではないですか？」

「ミルヒ……」

レオがミルヒの顔を見つめる。

「そしてそれを助けることが出来るとしたら、レオ様を始めとしたガレットの方々、勇者様を取り巻く人たちだと思えます。勿論私も手助けできることがあればそれは惜しみません。ですが……」

「結局最後は勇者自身、というわけか……」

ふう、とレオが1つ息を吐き出した。

「……ミルヒの言う通りじゃな。ワシとしたことが、弱気になっていたようじゃ。これでは変わるものも変わらん。ワシらがもっとしっかりして奴をいい方向へと導くようにしなくてはな。助言、感謝するぞミルヒ」

「いえ、私の力など微々たる物ですから」

「堅苦しい話はこのぐらいにしよう。あとはガウルがシンクを連れて帰ってくるまで、肩の張らん話でもしようぞ」

レオがリラックスした様子で足を組む。ミルヒもそれに習って肩の力を少し抜いたようだった。

「……して、さっきの話の続きじゃが、勇者とはどのぐらいの関係なんじゃ？」

「も、もう！レオ様！」

困ったようなミルヒの声とレオの笑い声がフィリアンノ城の応接間に響いた。

「じゃあちよつくらダルクアンのところに行つてシンクを呼んでくる。ジョー、勇者のお守は任せませ」

「……へーい」

ガウルの言葉にもどこか気の重そうなジョーヌ。

「ジョー、私達3人の中からの大抜擢なんだから頑張つてね」

「……頑張れ」

「お前ら、他人事だと思つて……」

ジェノワーズの残り2人に声をかけられても効果は薄かったようだ。

「エクレも一緒でありますから、何かあつたらエクレに聞くといいであります。……では自分達は行つてくるであります」

「ああ。リコ、また後でな」

リコツタ達風月庵に行くメンバーとエクレール達城下町を散策するメンバーで分かれ、エクレールを先頭にソウヤとジョー又が続いて街の喧騒の中へと紛れていく。

街の通りは非常ににぎやかで、人通りも多い。通りの脇には出店が並び、食物の焼けるおいしそうな匂いが漂ってきた。そんな中を速足気味に歩くエクレールを追いかけるように2人が人ごみを掻き分けて歩く。

「ちょ、ちよつとエクレー！ウチらを置いていく気か！？お前案内する気あるんか？」

「こつ人が多くては案内も何もない。もう少しで中心部を抜ける。それまでははぐれず付いて来い」

「んな付いて来い言うても……」

後ろの様子を確認することなくどんどん前へと行くエクレールを見失わないよう、2人もペースを上げて歩いていく。

しばらく歩くとやや郊外へ出たのか、人通りが減ってくる。

「おいエクレー！もうペース落としてもいいやる！」

それでも速度を落とさないエクレールにジョー又が不満を口にし、その言葉を聞いて後ろを振り返ったエクレールはようやく歩調を緩めた。

「しかし活気のある街だ。さすが城下町というだけのことはある」

「ここは景観がよく下水等も整備されてて、何より食い物がうまいからな。いい街だと思っわ」

ソウヤとジヨー又の会話を聞き、だがエクレールはどこか不機嫌そうにフンと鼻を鳴らす。

「当たり前だ。姫様が治めている城の城下町だ。不満を持つ者などいるはずがないだろう」

「なるほど。こちらの姫様は民の心をよく掴んでいるようだ。あの年で領主というのも納得だ」

エクレールが不快そうにソウヤを睨む。

「勇者、その言い方だとレオ様は民の心を掴んでない、とも聞こえかねんで？」

「そういう意図は全くなかったんだが、失言だったかな。ともかくやり手だということはよくわかった」

「姫様は歌もうまいからな。ビスコッティで開かれるコンサートはそれはそれは盛り上がるで。勇者もこっちにいるうちに1回ぐらいは聞けるんちゃうかな？」

「そうか。別に興味はないが」

「そう言わんと、聞かなもつたいないで」

ジヨー又は呑気にそう言ったが、一方エクレールはますます機嫌を損ねたようにソウヤを睨みつけた。

「勇者、貴様姫様を愚弄する気か？」

「してるように聞こえるか？そんなつもりはなかったが」

「……貴様、ダルキアン卿に勝ったからと少々調子に乗っているのではないか？」

「そう見えるか？ならそうかもしれんがな」

「あんな卑怯な騙まし討ちでの勝利など、私は認めん。ダルキアン卿は貴様に勝ちを譲っただけだ」

「お前に認めてもらう必要はない。確かにあの人は俺より間違いなく強い。が、それでも昨日の戦いで勝ちを取ったのは俺だという事実には変わりはない」

「貴様……！」

エクレールがソウヤの胸元を掴みかかろうとする。慌ててジョー又がその間に割って入った。

「ちよ、ちよい待てエクレー！落ち着け！」

「邪魔をするな！」

「ケンカはあかんで！ウチまでレオ様に大目玉くらうわ……。そうやなくてもこんな貧乏くじで散々やってのに……」

「ジョー又の言うとおりだな。落ち着いた方がいい。俺は丸腰でも

体術がある」

「勇者！お前も煽るなっのー！」

はいはい、と言わんばかりにソウヤは肩をすくめた。

「……ま、エクレールの気持ちはわからんでもない。どこの馬の骨とも知らん奴が正攻法とは到底言えん手段で自国の名高い騎士を敗ったとなれば、腹も立つだろうからな」

そのソウヤの言葉にようやく少し落ち着いた様子で、エクレールが間に入ったジヨーヌから離れた。

「……ダルキアン卿は私の目標だ。強く、気高く、そして何にも縛られなく自由だ。あの人に憧れて編み出した紋章剣もある」

「なるほど。それは悪いことをしたな」

挑発地味な発言に再びエクレールがソウヤを睨みつけるが、慌ててジヨーヌがそれをなだめた。

「……ったく。エクレ、なんでお前こいつに同行するなんて言ったんや？つまるどころこいつのこと最初からいい目では見てなかったってことやろ？」

「だからだろ」

ソウヤのその言葉にジヨーヌが驚いた表情を浮かべる。

「え？どういう意味や？」

「半分は監視目的、もう半分は俺がどういふ奴か実際話してみたかった、と言ったところだろう。違うか？」

エクレールの眉がピクリと一瞬動く。

「……本当に小憎らしい奴だ、貴様は」

吐き捨てるようにそう呟いた。

「ダルキアン卿に勝ったとはいえあの騙まし討ちを平然と行うような者。そんな貴様がどういふ奴なのか実際にこの目で確かめ、その心の本心を聞いてみたかった。……だが確かめるだけ無駄だったな。確かに貴様は勇者として召喚され、この世界では勇者と呼ばれる存在だ。しかし、真の意味で勇者と呼ぶには値しない」

「だろうな。俺もそう思う」

「何……?」

「さっきそちらの姫様に挨拶するときも言っただろう、俺は自分でそんなもんだとは思ってない。勝つための手段を選ばず、今後味方が前線を支えているときに後ろから弓を撃ってるだけであるう俺など、勇者などと言う存在からは程遠い」

「勇者……」

ソウヤの自暴自棄とも言える言葉にジョーヌが思わず心配そうな声を出す。



「なら貴様が変わればいいだろう」

「その気もない。こつちの世界で勝手に俺を呼び出しておいて変われ、と言うのは一方的すぎると思うが。ましてや俺がここに呼び出された理由は『戦に勝利してガレットの窮地を救うため』だ。勇者としてふさわしい姿になればと言われてない」

フン、とエクレールがそっぽを向く。

「……貴様は私やアホ勇者より年上と聞いていたが、心の方はまだまだ子供なようだな」

「かもな」

「貴様とアホ勇者が同じ勇者と呼ばれてるのが不思議でならん。あいつは貴様ほど強くないかもしれないが、ひねくれてもない真面目な奴だ。……そんなあいつと貴様が同じ勇者だなど……」

「……なるほどな。シンクってのはそんなに人の信頼を得るのがうまい奴なのか。……ついでに人の心を惹きつけるのもな」

それに対してエクレールが何も言わないのを確認すると、ソウヤは続ける。

「お前はてつきり俺とダルキアン卿の件だけが気に食わないのかと思ってた。……だが違ったな。俺が勇者であること自体が気に食わないんだ」

「ああ、そつだ」

「なぜ気に食わないか。自国の勇者とあまりにかけ離れているからだ。お前が『勇者』と呼ぶシンク・イズミとな」

「……何が言いたい？」

「お前にとつて勇者を侮辱されることは姫様やダルキアン卿を侮辱されること同様に苦痛だつてことだよ。言い換えるなら……その2人と同様にシンクを心の中では大切に思つてるつてことだ」

「な……！」

エクレールの顔が見る見る赤くなっていく。

「そ、そんなわけないだろう！別に私はあいつのことなどなんとも……」

「おーおー、真っ赤やでエクレ」

「だ、黙れ！」

ジョーヌがエクレールをからかうが、ソウヤはそれを横目に見つめてフンと一つ鼻を鳴らした。

「……俺はここに来るべきじゃなかったかもな」

その一言にジョーヌが驚いたように視線をソウヤのほうへと移した。

「どつという意味や？」

「俺と同じ世界の人間であるシンクがここまで慕われているのを見ると……時折、羨ましいとも思える」

「嫉妬か？ だったら貴様もそういった人徳を得れば……」

「必要ない。……いや、必要であつてはいけない」

「『あつてはいけない』……？ どういう意味や？」

ソウヤがゆつくりと振り返る。2人にはその目に何の色も感情も無いように見えた。

「この世の事柄はプラマイゼロだ。いいことがあれば、悪いことがある。人と出会い、付き合いを深めて得た喜びが大きければ大きいほど、それを失うときの悲しみは大きくなる。俺の両親は俺を深い愛情を持って育ててくれた。だが、6年前に両親が死んだとき、俺はその絶望感に耐えられなかった。だから俺は人との付き合いを避けてきた。……なのに羨ましい、と感じてしまっている。ここに来なければ、そんなことで葛藤せずとも済んだだろうがな」

「で、でもな、勇者……」

ジョーヌが何かを言おうとしたのをエクレールが止めた。

「……放っておけ。私達がいくら言葉を重ねても、こいつには届かない」

「エクレー……」

「変わらないことを望むお前なら、その方がいいんだろう？」

エクレールのその言葉にソウヤの口元が一瞬緩んだ。それは自嘲的な笑みにも見えた。

「心遣い感謝しますよ、親衛隊長殿」

皮肉っぽく言われたはずのその言葉が、なぜかエクレールにはさつきまでよりも力なく聞こえた。

「うむ、双方ともそこまで。いい勝負でござったな」

ブリオツシュのその声を合図にシンクとガウルの2人が地面に大の字に寝転がった。

「ちくしょーこりゃ引き分けてるところかー……」

「疲れた……疲れたけど……楽しかったよ、ガウル」

そのシンクの言葉を聞いてガウルはニヤツと笑う。

「ああ、俺も楽しかったぜ、シンク」

互いに右手をがっちり握り合って体を起こした。

ブリオツシュとユキカゼ、それにオンミツ達が暮らしている風月

庵に着いたガウル達だったが、到着と同時にガウルはシンクと模擬戦を希望し、丁度今それが終わったところだった。

「そろそろ出発した方がいいでござるな。会食の時間に遅れるのはまずいでござるから」

「そうですね。じゃあ急いで汗を流してきます。ガウル、こっち」

シンクがガウルを連れて裏の方へと消える。

過去にも風月庵でブリオツシユやユキカゼと手合わせし、稽古をつけてもらっていたシンクは裏に井戸があることも把握しており、体を動かした後はそこでタオルを絞って体を拭くようにしていた。

「勇者殿もガウル殿下も腕を上げられたようでございますね」

風月庵の縁側、腰掛けながら茶をすするブリオツシユにユキカゼがそう話しかけた。

「うむ。昨日ガウル殿下と手を合わせたときもそう感じてはいたが、今の勇者殿との戦い、見事でござったな」

「そういえばダルキアン卿は昨日、最初ガウル殿下と戦っていたでありませんたよね？」

リコッタが横から口を挟む。

「そうでござるな。あのあとの勇者殿との戦いの印象が強いせいで皆忘れていそうでござるが」

「うー……あの勇者……」

ユキカゼの湯飲みを持つ手がわなわなと震えている。

「あんな卑怯な方法でお館様に勝ったなど、拙者は認めないでござる！」

「ユキカゼ、昨日からそれはもう4回目でござる。何度も言ってるでござるう？あの勝負で負けたのは拙者でござると」

「しかし！」

「勇者殿の勝利への執念に拙者が負けたと言っただけでござる」

「……それでも拙者はやはり納得いかないでござるよ」

自分のことのように悔しそうにユキカゼが呟いた。

「……ジェノワーズのお二方には、勇者殿はどう映ってるでござるか？」

ブリオツシユの問いにノワールとベールの2人は考え込む様子を見せ、

「強いです。冗談じゃなく」

そうノワールが短く答えた。

「今ノワが言った通り強いです。今日ここに来る途中に野盗に襲われたんですが、有無を言わせず紋章砲一発で戦闘を終わらせちゃっ

たし……。同じ弓使いとしてはいきなりあんなことやられるとへこみますよー……」

「紋章術を使ったのでござるか？どんな風に？」

珍しく興奮気味に質問する自由騎士。

「えっと……技名はヘッピ……ヘンピ……？とにかく長くてよく覚えてないんですが、指の間に複数の矢を挟み、放った矢を輝力によって加速、増殖、さらには追跡までさせて結構な数いたはずの相手を一発で撤退させちゃいました。あんなのありえないですよー……」

「なんと……こちらに来てからこの短時間でそこまで……」

「加速と増殖と追跡を同時に……？そんなのそう簡単には出来ない芸当のはずでござるが……」

ブリオツシユに続き、ソウヤに敵対意識を向けているユキカゼまでも思わず驚きの声を上げる。

「確かにすごいです。すごいけど……あの人怖いです」

「怖い、でありますか？」

リコッタが不思議そうにそう問いかける。

「他者との接触を拒絶してるように感じる……。お守させられたジヨーがちょっとかわいそう」

「ジヨーには悪いけど、正直言ってあの役割を任せられなくてよか

「たったって思っちゃった」

「……でも無口に任せるよりマシって言われたけど」

先ほどレオに言われたことをまだ引きずっているのか、ノワールは拗ねたようにそう言った。

「勇者殿はガレットの人々とはうまくいってないでござるか？」

再びのブリオツシユの問いに親衛隊の黒と緑は互いの顔を見合わせた。

「仲良く、って感じじゃないです。昨日はレオ様とケンカしたとか」

「ケンカ！？あのレオ様とでありますか？」

「あ、ケンカといってもそういうのじゃなくて、考えのすれ違い、みたいなものでちょっと口論というか、そういう感じだったらしいですよ」

「レオ様にケンカを売るなど……あのバカ勇者、命知らずでござるな……」

「これ、ユキカゼ」

主に咎められてユキカゼは軽く頭を下げる。

「しかし、だとすると拙者の心配は杞憂とは言えないかもしれないでござるな。レオ様ならなんとかできると思っていたでござるが…

…」



「姉上はなんとかするつもりではいる。ただあの勇者が異質すぎる……自己が強すぎるうえに性格が変わりすぎてるんだ」

首にタオルをかけ、さっぱりした様子のガウルが姿を現すとその口にした。その後ろにはシンクも同じような格好で立っている。

「おまけにべらぼうに強い。確かな戦果を上げてるしこちら側が召喚している以上、こっちとしても強く言えないってんで姉上も困ってるんだろ。俺の方も話とか手合わせとかしてみようとは思ってたんだが、昨日の今日だからまだだしな……」

「ガレットの勇者……ソウヤさんってそんな変わってる人なの？」

ガウルが振り返る。

「シンク、あいつに関わるのはやめとけ。特に戦場ではな。……あいつ、お前を殺す気さえ起こしかねないとか姉上がぼやいてたぞ」

「え、ええー！？そんなまさか……」

「……まあそれはあまり真に受けなくてもいいと思うでござるよ。拙者も釘を刺しておいたでござるし。……ただ、少々変わり者、と感じた拙者の感覚だけは本当のようでござる」

ブリオツシュがそう言うとシンクはなにやら考える様子だった。

「……でも強いのは確かなんですよね？ だったら僕個人としては一度戦ってみたいと思うんですが……」

どこか呆れたように、だが表情は嬉しそうにブリオツシユがため息をついた。

「勇者殿も拙者の悪いところが似てしまったようでございますな。……まあこのあとの会食で話す機会もあるとござろう。その時に実際に会って話してみるといいでございます。……さて、準備も出来たし、そろそろ向かうとしますのでござるか」

中身を空けた湯飲みを盆の上に置くとブリオツシユは立ち上がった。

## Episode 8 それぞれの時間（後書き）

来ましたね、これまで公式ガイドブックがまだ発売してないから云々と予防線を張ってきたのはこのためというのが大きいです。

OPでも一緒、コミックスでも一緒、おまけに両方同時独り身。

だったらもうお前ら結婚しちゃえよ！ってことでロランとアメリカタをくつつけました。DDDでやりたかったことの3割がこれだったります。

そもそもシンクが帰るときの挨拶を思い出してみてください。奴はガレット側こそレオとガウルの名前しか出しませんでした、自国の方は名前付きキャラはほぼ全て出し、リゼル、エミリオはおるか、食堂のおばちゃんにまでお礼を言ってるのにアメリカタだけ完全ノータッチとはどういうことですか！？

そうでなくても彼女の見せ場はミルヒとレオの過去の話をするところしかありません。この作品中唯一の眼鏡キャラになんて扱いを！かっこいい戦闘服に着替えて颯爽と敵陣に乗り込んだのにあっさり捕まってその後セリフすらなかったビオレ姉さん並に不遇な扱いだと思います。

あまりに不憫なのでせめて自分の話の中では幸せにしようということとでこうなりました。

実はアメリカタの書いた日記という形で番外編を計画してたりもしません。もしかしたらこのDDD全話投稿終了後に書くかもしれませ

というか原作2期始まったら普通にロランと結婚してたりしないかなあアメリカタ……。

## Episode 9 会食

会談を終えたミルヒとレオ、そして付き添いのピオレが応接間から出てくる。

「予定より少し早く終わりましたね」

「元々形式上の会談じゃったしの。……お陰で後半はミルヒの惚気話になってしまったわ」

「あ、あれはレオ様が根掘り葉掘り聞いてくるから、仕方なく……」  
困った様子のミルヒを見てレオが笑った。

「もうレオ様……笑わないでください……」

「……会談はそのような愉快的内容だったのですか？」

3人が応接間から出てきたのを確認して近づいてきたアメリカが思わず怪訝な表情を浮かべる。

「え、い、いえ。ただ最後の方はちょっと関係のない話になってしまっ……」

「関係なくはないじゃろ。今日の会談は『勇者について』じゃったからのう」

「もう！レオ様！」

再びレオが笑う。

「……その勇者様ですが、あ、ガレットの勇者様です。先ほど騎士エクレールとジョーヌ様と一緒に戻られましたので、食堂にお通しております。こちらの勇者様はもう間もなく到着されるかと」

「そうですか。では私達も食堂に向かいます。いいですかレオ様？」

「……いつまでもタレ耳とジョーヌにあいつを任せておくのも悪いの。行くとしよう」

レオの言葉がどこか引つかかる部分はあったが、ミルヒは特にそれについて聞こうとはせず、自分達を案内するアメリカタに続く。

食堂のドアを開けると窓から外を眺めるソウヤ、その様子を横目に眺めながら柱に寄りかかるエクレール、疲れた様子で壁際で中腰になっているジョーヌの3人が目に入った。自分の主が登場したのを確認すると、すぐにエクレールは姿勢を正す。

「姫様、ガレットの勇者の城下町案内を終えました」

「ご苦労様でした、エクレ。勇者様、フィリアンノの城下町はいかがでしたか？」

ミルヒの声にソウヤがゆっくりと振り返った。

「いい街でしたよ。活気があって行きかう人々が皆生き生きとしてる。さすがやり手の姫様のお膝元だ」

「いえ、私はまだまだ未熟ですし……」

「丁寧に案内してくれたそちらの親衛隊長殿にも感謝してます」

一瞬エクレールが横目にソウヤを睨みつける。

「何が丁寧に案内や……」

誰にも聞こえないようにボソツとジョー又が呟いた。

「ジョー又もご苦労だったな」

自分の下に近づいて労いの言葉をかける領主に、ジョー又は視線を声の主に向ける。

「もう大変でしたよ……。この役割は金輪際遠慮したいですわ」

「まあそう言うな」

ポンポンとレオに肩を叩かれたジョー又だったが、答える代わりにため息を返した。

「姫様、レオ様、今勇者様やダルキアン卿方が到着されました。もう間もなく会食を始められそうです」

「わかりました。ご苦労様ですアメリカ」

アメリカタが一礼して入り口から姿を消す。

少し間を置いて一団の足音が部屋へと入ってきた。

「姫様、勇者様到着であります！」

「遅くなってしまうって申し訳ないでござる、姫様」

「いえ、私の会談も先ほど終わったところです。勇者様……えつと、ガレットの勇者様、先ほど紹介できなかったオンミツ部隊のダルクアン卿とパネトーネ筆頭です。もう戦場で会っているのでご存知かと思いますが」

ブリオツシユが数歩前に進み、不機嫌そうにユキカゼがそれに続く。

「オンミツ部隊頭領、ブリオツシユ・ダルクアンでござる。改めてよろしくでござる、勇者殿」

「昨日はごつも。……言われたことは忘れてませんから、心配しなくてもいいですよ」

「そうでござるか。それはありがたいでござるな」

そう短く答えるとブリオツシユは後ろのユキカゼに挨拶を促した。

「……ユキカゼ・パネトーネでござる」

「機嫌が悪そうだな、巨乳ちゃん」

「次にその呼び方をしたら怒るでござるよ」

「そりゃ失礼。なんでも俺と似た戦い方をすると聞いたんだが」

「……答える必要はないでござる」

プイッと後ろを振り向いてユキカゼが離れていく。「こら、ユキカゼ」とブリオツシユが声をかけるが歩を止める気はないらしい。

「やれやれ、嫌われたな」

ソウヤが肩をすくめた。

「最後になりましたが、我らビスコッティの勇者様、シンクです」

金色の髪に凜々しい表情。ビスコッティの勇者、シンクがソウヤの前に出る。

「初めまして、シンク・イズミです。よろしくお願いします」

シンクが右手を差し出す。ソウヤはその右手を握り返すと、

「……ソウヤ・ハママだ」

そう短く答え、すぐに手を離してしまった。

「ソウヤさん、昨日のダルキアン卿との戦い、放送で見させてもらいました。すごい戦いで興奮しましたよ！」

嬉しそうに話すシンクに対し、ソウヤは何も返さない。いや、そ



れどころかシンクの目を見ようともしていなかった。

「えっと……住んでるところはどこですか？僕は紀乃川って言う……」

「シンク・イズミ」

「は、はい……？」

これまで逸らして視線をシンクの方へと戻す。

「悪いな、馴れ合う気はない」

「えっ……？それってどういう……」

「2人とも挨拶はそのぐらいでいいじゃろう。せつかくの会食じゃ、続きはそこでということだ、ミルヒ、いいかの？」

「あ……はい、そうですね。もう料理も出来てるでしょうし」

ミルヒのその言葉に場の全員が席へと向かう。それに倣ってソウヤも向かおうとしたとき、レオに腕を捕まれ引き寄せられた。

「……勇者、ミルヒの前であまりワシに恥をかかせんでくれ」

「……努力しますよ。でも俺としてはあまりシンクと馴れ合うことはしたくないですが」

「なぜじゃ？」

「戦場で会ったときに情を挟めば手が鈍る可能性がある。互いの命がかかっている状況ならなおさら、その躊躇は致命的なものになる。それは避けたいですから」

「ワシらは殺し合いをするわけではない。あくまで戦じゃ。互いの国の親睦を深めるという意味でも……」

「だとしても、昨日も言いましたよね。どの道10日もすれば自分は帰る存在だと。それに俺は人と深く付き合わないとも。だから……」

「……わかった、もういい。じゃがここに来る途中に言ったと思うが、これは外交の1つとも言える。こちらにとって不利益を生む発言は控えてもらうと助かる」

一応要求の体裁は取っている形ではあったが、ソウヤは言葉の端々からレオに半ば強制されていることを感じ取った。

「……努力します」

先ほどと同じ言葉を口にする。レオは少し不満そうに一つ息を吐いたが、掴んでいたソウヤの腕を離れた。そしてそのままテーブルへ。長机の中央に座るミルヒの向かいの席へとレオが腰を下ろす。

「勇者様はレオ様の右隣へどうぞ」

ビオレがそつと耳打ちをし、端の席へと離れていく。

ソウヤがレオの右隣の席に座ろうとすると、フィリアンノ城のメイドの1人が椅子を引いて座らせてくれる。慣れないことに一瞬躊

踏したが、椅子に座り顔を上げると、向かいではシンクが座ろうと  
しているところだった。

「こつという経験はないのか？」

戸惑ったことに気づいたのだろう、レオが小声で話しかけてくる。

「俺は庶民ですからね。こんな改まった席ってのはないですよ」

「そうか。お前にも苦手なものがあったとはな」

「さっきの仕返しですか？」

「さあ？さっきのとはなんじゃったかの」

思わずレオの表情が意地悪く変わる。だがソウヤは特に気にした  
様子もなく、汚れ一つない机のテーブルクロスを見つめていた。

全員が席に着くとドアが開き、フィリアンノ城のメイド隊が料理  
を載せたカートを押してくる。そのメイド隊長、リゼル・コンキ  
リエが一步前に出て頭を一つ下げた。

「お待ちせいたしました。ビスコッティの名産をふんだんに使用し  
た料理をご用意させていただきました。ごゆっくりお楽しみくださ  
い」

メイド達が料理を各人の前に持ってくる。皿に盛り付けられたの  
は色とりどりの野菜の数々。

次いで、グラスに色鮮やかな液体が注がれていく。

全員の前に最初の料理が出揃うとミルヒがグラスを持って立ち上がった。

「ではこれより会食を始めたいと思います。……一応公式な会ではありませんが、あまり硬くなりすぎずにお話できたらと思います。…  
…それでは、昨日のガレットの勝利とビスコッティの健闘を称え、  
また、両国のこれからの友好関係を祈って、乾杯」

ミルヒがグラスを前に差し出す。他の全員も同様にグラスを前に差し出し、ソウヤもそれを見て真似た。

続けてグラスの液体を口に運ぶ様子を確認し、同じ様に口に含んだところでソウヤは顔をしかめた。

「……レオ様、これ酒じゃないですか？」

「何を言っておる。会食の席じゃ、当然じゃろう」

「勇者様、もしかしてお口に合いませんでしたか？」

腰を下ろし、グラスの中身を半分ほど飲み終えたミルヒが尋ねる。

「いや、口に合わないというより……」

「姫様、僕達のいた世界、というか国では未成年者は飲酒禁止で、  
20歳にならないとお酒は飲んじゃダメということになってい…  
…」

ソウヤに次いでシンクが答えた。

「そ、そうだったんですか！？すみません、気づかずに……」

「こんなうまいものを飲めんとはもったいないのう、なあダルキアン？」

「そうでござるな。拙者が普段飲む酒とは違うものの、これはこれで美味でござる」

「レオ様もブリオツシユもお酒が好きですからね。……勇者様、他のお飲み物を用意しましょうか？果実ジュースなどありますが……」

「あ、じゃあ姫様、僕はそれをお願いします」

ミルヒとしてはソウヤの方を見ながら尋ねたのだが、横からシンクがそう答えた。

「勇者、お前はどつする？」

前菜のサラダを半分ほど食べ終えた　というより、我慢して食べた、という印象の方が強かったが　レオがソウヤに尋ねる。

「……水をいただけますか？」

「はい、かしこまりました」

ミルヒが隅で待機していたリゼルに視線を送る。メイド長が1つ頷くと、メイド隊の2人がドアから出て行った。

「姫様、『勇者』と呼ぶ存在が2人いてはどちらがどちらかわから

なくなるでしょう。『硬くなりすぎずに』ともおっしゃりましたし、そちらの勇者を呼ぶときは普段通りに呼んではいかがですか？」

ソウヤがそう言うとミルヒとレオが驚いたように顔を見合わせた。

「な、なぜそのことを……」

「お前が知っておるんじゃ……？」

「さつき城の前で紹介があったとき、名前で呼ぼうとして訂正したと思ったからです。以前1度召喚したとも聞きましたし、仲がよければ名前で呼ぶぐらいはあることでしょう」

ミルヒがどうしようか迷ったようにテーブルに目を落とす。

その間に次の料理である白い色をしたスープが運ばれてくる。

次いで、先ほど部屋を出て行ったメイド達がオレンジ色と透明な液体の入ったグラスを持って入ってくる。前者をシンクに、後者をソウヤの前に置くと、早速ソウヤはその水を口に運んだ。

「よいではないか、ミルヒ。紛らわしいのもなんじゃし」

「……ではそうさせていただきます。ガレットの勇者様のことはソウヤ様とお呼びしてもよろしいでしょうか？」

飲んだ水のグラスを戻すソウヤの手が一瞬止まる。

「……勇者とか言われるよりはじっくり来るか。構いませんよ」

「では拙者達もシンク殿、ソウヤ殿と呼んだほづがよそそついでいぢねるの」

「あ、僕のことはシンクでいいですよ」

「だ、そうじゃ。……よかつたの、タレ耳」

「な!?! な、なぜそこで私が出てくるのですかレオ様!」

「さてな。自分で考えればよかるつ」

レオが声を上げて笑う。

「えつと……エクレ、これって笑うところなの?」

「や、やかましい!」

エクレールが顔を真っ赤にしながらシンクの頭をグーで叩く。その光景に思わず周りから笑いがこぼれた。

「い、痛いよエクレ!なんで僕が殴られなくちゃならないの……」

「黙れ!アホ勇者が!」

「これこれ、『勇者』ではなく、『シンク』じゃろ、タレ耳」

「レオ様もからかうのはやめてください!」

「ま、まあまあレオ様もエクレもその辺で……」

思わずミルヒが2人をなだめたところで3品目の料理が運ばれてくる。

肉料理、おそらくメインだろう。焼けた表面の色と対照的にやや厚く切られた肉の内部にはまだ赤みが残っており、周りに添えられたソースが香ばしい香りを漂わせている。

その料理を目にすると同時にレオの目の色が変わった。

「ミ、ミルヒ……もしかこれは……」

「はい。フォンセのロースト、ランシッドソース添えです。レオ様はこれがお好きでしたよね？」

「そうじゃ！よく覚えていてくれた……」

レオにしては珍しく興奮気味に、そして目を輝かせて、運ばれてきた目の前の料理をナイフで一口大に切って口へと運ぶ。

「ああ……この噛み締めるほどに味の溢れ出すフォンセの旨みと、芳醇な香りのランシッドのソースが格別じゃ……。ほれソウヤ、お前も食べてみる」

初めてレオに名前と呼ばれたことにソウヤは一瞬ナイフを持つ手が止まったが、気にかけていない様子で肉を切り分けて口に入れた。

そのまましばらく噛んで味を確かめた後に飲み込む。

「あの……お口に合いませんでしたか？」



心配そうにソウヤの方を見つめるミルヒ。

「いえ、おいしいですよ。……よく考えたらこんなうまいものを食べたのは久しぶりだったってことを思い出しただけです」

「普段は何を召し上がっておられるのですか？」

ソウヤが二口目を飲み込んで口を開く。

「朝と昼はブロックの栄養バーかゼリー飲料、夜はスーパーの半額弁当か惣菜辺りです」

「え？えいようば……え？」

単語の意味がわからなかったらしくミルヒが固まってしまった。

「えつとですね、姫様……栄養バーっていうのは僕の世界にある食べ物で……このぐらいのサイズのお菓子みたいなものなんですが、それで食事を取ったと同じぐらいの効果を得られるって食べ物です」

説明する気のなさそうなソウヤの代わりにシンクが補足を始める。

「シンクの世界ではそんな食べ物があるんですか！？」

「はい。急いでもときとかは僕もお世話になりますね。あとゼリー飲料っていうのはその飲み物版みたいなものです」

「面白そうであります。それは美味しいんでありますか？」

「いや、味の方はあんまり……。あとスーパーっていうのは僕の世

界のお店みたいなものです。そこではお弁当やおかずとかを前もって作り置きしていて、作ってから時間が経つと悪くなっちゃうんで、その前に値段を下げて買っていつてもらおうという売り方があるんです」

「へー。やっぱりお前の世界って色々面白いんだな、シンク」

ガウルが早くも料理のほうを平らげてそう言った。

「そうかな……僕はこれが普通だと思ってたけど……。でもソウヤさん、そんな食事で大丈夫なんですか？」

「……1人暮らしの食事などそんなもんだらう」

「お一人で生活されてるんですか？ご両親とかは……」

ミルヒのその質問にそれまで料理を食べることに集中していたレオがしまったという表情を浮かべた。

「……もういませんよ。6年前に死にました」

「あつ……。……失礼しました、私……」

「いえ、気にしないでください」

「亡くなったって……両親とも……？」

シンクの問いかけにソウヤが顔を上げる。

そこにあっただのは、まるで空虚な瞳だった。

「ああそうさ……。父親も母親も6年前に……。俺の目の前で殺され  
た」

## Episode 9 会食（後書き）

シリアスな時の後書き書きにくいな……。

レオが好物といった「フォンセのロースト、ランシッドソース添え」ですが、「牛フィレ肉のトリュフソース添え」辺りをイメージして  
ます。が、生まれてこの方高級フランス料理なんて食べたことない  
ので味は全然わかってません……。

本来の意味では、フォンセというのは型の底に生地を敷きこむこと、  
ランシッドは油脂の酸化、加水分解のことです。

他の料理についてですが、フランス料理をイメージして出す順番等  
考えてみました。

お酒についてはフロニヤルドは生まれたときからお酒飲んでオツケ  
ー、あるいはいわゆるアルコールではないか、アルコールが非常に  
弱い、ぐらいの解釈で書いてます。日本において未成年者の飲酒は  
法律で固く禁じられています。

Episode 10 暗闇の過去

あれは雨が強い夜だった。

ソウヤ！

当時10歳だった俺は夜中、母親の声で目が覚めた。

「何……？」

起きてこっちに来なさい！

「眠い……」

いいから起きなさい！

普段は聞かないような母の焦ったような声。その声に眠い目をこすりながら俺は起き上がる。

「どろしたの……？」

何か物音がしたって。今父さんが下に様子を見に行っただけど、泥棒かもしれないから私達の部屋に来なさい。

やはり母にしては珍しく焦った顔をしていた。

そして俺が両親の部屋に行った、その時だった。父の悲鳴が聞こえたのは。

母の顔は蒼ざめていた。俺もどうしたらいいかわからなく、ただ震えるだけだった。

階段を1段1段上ってくる音が近づいてくる。

押入れに隠れなさい。いい、何があっても絶対に声を出してはダメよ！

そう言っただけを押し入れに隠れさせると、母は電話を手にして警察へとかけはじめた。

押し入れに隠れた俺は隙間から部屋の様子を窺っていた。

開く部屋のドア。そこに覆面を被った男が紅く染まった包丁を手に立っていた。

部屋に入ってくようとした男の脚が一瞬止まる。

振り返った男の視線の先に、這うように階段を上ってきた血まみれの父の姿があった。

逃げろ！

父がそう叫んだとき、男は躊躇なく父に包丁を振り下ろした。

血の海の中に沈む父を目の当たりにし、電話を持つ母が悲鳴を上げる。

部屋に入ってきた男は母を押し倒すとその胸にも刃物を突き立てた。

そして男は棚や引き出しを漁り、現金や通帳、金目のものを奪うと俺の存在に気づかないまま家を出て行った。

その僅か後に警察が来た。押入れの中に隠れ、ただ震えていることしか出来なかった俺はそこで見つけ出され、両親と無言の再会をした。

俺は自分を責めた。……もし自分がもっと強ければ、父さんも母さんもこんなことにならずにすんだ、全ては自分が弱かったからいけなかったんだ、と。

その後俺は親戚の叔父に引き取られた。叔父の家族は俺を本当の家族のように扱ってくれたが、いつかこの人たちも自分の前からいなくなるんじゃないか、そう思えて怖かった。

そんな俺を心配してか、叔父は何かやりたいことはないかと聞いてきた。俺は強くなりたい、と答え、そのときから空手、剣道、弓道を始めた。

……だがどんなに強くなっても心の中で両親を失ったときの喪失感を生めることは出来なかった。また俺の知っている人が目の前で突然消えてしまう、そうなってしまっうんじゃないか。

……そこで俺は気づいた。だったら、そんな状況が起こりうる事態を最初から作らなければいい、と。互いに深く付き合うほど、別れの痛みは大きくなる……。そして別れは必ず訪れる。

だから俺は人との付き合いを極力避けてきた。今までも、そしてこれからもそのつもりでいる。

「そんな……ことが……」

ソウヤが長い告白を終えて水を一口運んだところで、ようやくレオがその声を絞り出した。その声を聞いて、フツとソウヤが自嘲的に鼻で笑う。

「……場を白けさせてしまいましたね。すみません。……外の空気でも吸ってきますから、俺に気にせず続けてください」

ソウヤが席を立つ。

レオがそれを止めようとするが、開きかけた口を閉じた。そのまま戸惑うメイド隊の脇を抜けてソウヤは入り口のドアから部屋の外へと出て行く。

「ソウヤさ……」

「お前は行くな」

「エクレー!どうして……」



「……私が行く」

立ち上がるうとするシンクを抑えてエクレールが代わりに立つ。

「エクレール、拙者達もいくでござる」

ブリオツシュとユキカゼがエクレールに続いて3人が部屋を後にする。

部屋には沈黙が残された。

「……姉上、なんであいつが出て行くのを止めなかったんだ？」

「止めたところで……ワシはなんて声をかけたらいいんじゃない……？」

「レオ様……」

「ワシはあいつを召喚しておきながら何も知らなかった……。あいつの話は今までちゃんと聞いてやることも出来なかった……。ワシは……召喚主として……失格じゃ……」

ギリツとレオが奥歯を噛んだ。

1人中庭に出たソウヤは空を見上げてため息をついた。と、背後

から近づくと気配を感じて口を開く。

「俺のことは気にせず会食を続けてくれと言ったはずですが？」

その言葉は聞こえているはずなのに足音は近づいてくる。

「私に貴様の言うことを聞いてやる義理はない」

ソウヤが振り返る。

エクレールとその後ろのブリオツシュ、ユキカゼの姿を見て一つ鼻を鳴らした。

「意外だ。自由騎士殿はまだしも、親衛隊長と筆頭がいらっしやるとはね」

「貴様がさっき言ったことこの理由がやっとわかったからな」

「さっき言ったこと……？」

「ああ。城下町を歩いているときに貴様が言ったことだ。『自分は他人と深く関わるつもりはない、そして変わるつもりもない』。そういうことを言ったな？」

一瞬の沈黙。

「……それが？」

「貴様のその考えの根本に……過去の両親の件があることはわかった。だから貴様がそういう考えでいることも納得した。……だがな、

そんなのは逃げてるだけだ」

「逃げてる……?」

「ああ。貴様は深く付き合えば付き合うほど、別れる時の痛みも大きくなる、と言った。でもそんなのは逃げた。後の痛みのことだけを考えすぎて出会いまでもないがしろにしている」

「そうだ。逃げて悪いか?」

「……貴様はアホだ、うちの勇者……シンク以上に。私もかつて似たようなことを考えたことがあった。シンクはいつか元の世界に戻る、思い入れすぎると別れが辛くなる、と。……だが同時にこうも思った。いつそ別れがなくなるくらい楽しい思い出ができるなら、それはきつといいことだ、とも。……私は……あいつに会えてよかった。短い時間だったがともに過ごせて楽しかった。……たとえ別れの時がきても私がその時に感じた気持ちは変わらない。貴様はプラマイゼロだとも言った。でも私はそうは思わない。あいつがフロニヤルドで過ごした時間はあいつにとっても、そして姫様や私やリコ……ビスコッティの人々にとってもプラスの方が大きいと信じている」

ソウヤはエクレールの話を黙って聞いていた。

「……頭はいいほうじゃないんで、要点をまとめて言ってもらえますかね?」

「出会いで得るものは別れで失うものと等しいものではない、とエクレールは言いたかったでござるよ」

ブリオツシユがエクレールの代わりに答える。

「ソウヤ殿、別れを恐れて出会いも避けるというのは勿体ないこと  
でござる。せつかくの人生、より多くの人と出会って楽しく過ごし  
たいとは思わないでござるか？」

「……思いませんね。俺はあの人に死んだようなもんだ」

「でも今生きてるではないでござるか」

3人目の声にソウヤが意外そうな顔をした。

「……巨乳ちゃんは俺のことは嫌いじゃなかったのか？」

「嫌いでござるよ。その呼び方をする時点で嫌いでござる。……で  
も目の前で両親を失うという気持ちは……わかるでござる。拙者も  
魔物によって両親を失ったでござるから。あの時は自分の命も、何  
もかももつどうでもいいと思ってたでござる。……それでも拙者  
はお館様に会えて、その過去から立ち直ることが出来た……。だか  
ら……！」

「もついい」

ソウヤが目を逸らす。

「……なぜだ？エクレールもユキカゼも俺のことなどよく思ってな  
いだろう？なのになぜそこまで俺のことを気にかける？放っておけ  
ばいいだろっ？」

「2人ともわかっているからでござる。ソウヤ殿の考え方は間違っ

ている、と」

「間違っている……?」

「かつては自分が思っただけで選ぼうとした誤った道……その道を今ソウヤ殿が進んでしまっている。だからそれを止めたいと思っていますでござるよ」

「……だとしても俺を気にかけるという理由にならないと思います  
が」

「そんな理由も必要ないでござる。困っている人、悩んでいる人がいたら助ける……ただそれだけでござるよ」

ソウヤは反論しない。いや、出来なかった。

今までここまで突っ込んで話をしてくれる人はいなかった。これが初めての経験だったからだ。

そしてひねくれていると自分でもわかっている物言いに対してここまで真摯に答えを返してもらえることも初めてだったからだ。

「……落ち着いたら戻ってきてほしいでござる。リコッタがソウヤ殿の世界と連絡を取れるようにしてくれると言っていたでござるから。……では拙者たちは先に戻ってござるよ」

遠ざかる足音を目で追おうともせず、ソウヤは中庭に1人立ち尽くしていた。

会食は終わった。

結局ソウヤはあの後戻ってこようとはせず、リコッタとリゼルが呼びに行くまで中庭にずっと立っていた。

その後はリコッタの案内でフロニヤ周波の強化増幅装置によって元の世界に数件メールを送り、レオと合流。

そのままヴァンネット城へと帰る運びとなった。

「急な訪問ですまなかった。久しぶりのランシッドソースのフォンセは美味じゃったぞ。また馳走になりたいものじゃな」

「わかりました。またご用意して待たせていただきます」

「うむ、それは嬉しいのう。……ソウヤ、お前からは何かあるか？」

会食を途中で抜けてからより一層不機嫌そうに、そして口数の減った自国の勇者にレオが話を振る。

「……せつかくの会食の場を乱してしまってますみませんでした。親衛隊長、ダルキアン卿、筆頭、わざわざ俺なんかを気にかけてくれたことは感謝します。……次は戦場で会いましょう」

そう言つとソウヤは口を閉じる。

「ではワシらはこれで失礼する。……ミルヒ、近いうちにまた戦になるかもしれんが、そのときはよろしく頼むぞ」

「こちらこそ。次は負けませんよ」

ニツと笑ってレオが自分のセルクルであるドームを進ませる。ガレットの一団がそれに倣って進み始めた。

「じゃあなシンク！またな！」

ガウルに対して笑顔で手を上げたシンクだったが、その姿が見えなくなると力なくその手を降ろした。

「やっぱり……ソウヤ殿のことが気になるでござるか？」

シンクは無言で頷く。

「私やダルキアン卿が話をしたが……あいつは相当なひねくれ者で頑固者だ。どこまで私達の話が届いたか……」

「エクレ、何を話したの？」

「あいつは別れの痛みを避けるために出会いも避けてる、と言っただからそれは間違っている、出会いで得るものと別れで失うものは等しくはないという話をしてやった」

「……確かに僕はここに来て、姫様やエクレやリコ、ダルキアン卿やユツキーやロラン騎士団長、他にもたくさんの人に会って楽しい思い出をたくさん作れた。そしてまたここに来ることができた。それはとても嬉しいことだった」

エクレールが一瞬頬を染めたように見えた。が、シンクは気づかずに続ける。

「だから僕は……ソウヤさんにもこの気持ちをわかってもらいたい……。同じ世界から来ている人間として、悲しいことがあってもつらいことがあっても、それ以上の嬉しいことできっともっと元気になるって教えてあげたい……！」

「シンク……」

ミルヒがどこか嬉しそうに勇者の名を呼ぶ。そして頷いて言葉を続けた。

「シンクの言うとおりでと思います。いつまでもシヨンボリしているより、笑って楽しく過ごせれば、それがきつと1番だと思います」

「姫様……。……よし、決めました！」

そう言つとシンクの顔が明るくなる。次いでブリオツシユのほうへと向き直った。

「ダルキアン卿、僕に稽古をつけてください。修行したいと思っています」

「修行……でござるか？」

「僕は次の戦でソウヤさんと戦つつもりです。そこでソウヤさんにフロニヤルドの戦は明るく楽しいものであることを示して、全力でぶつかって、そして仲良くなりたいと思っています。……でもソウ



「ヤさんは強い、今の僕じゃ相手にならないかもしれない。それに異世界から召喚された勇者同士の戦いは互いの身を傷つけあう危険性もある……。だからダルキアン卿、お願いします!」

シンクが頭を下げる。その様子を見てブリオツシユはやれやれと、しかしやはりどこか嬉しそうにため息をついた。

「わかったでござるよ。……姫様、いいでござるか?」

「ええ。シンクが望んでいることです。それに、ソウヤ様と仲良くなれるということであれば、私のほうからも大歓迎です」

「決まりでござるな。……拙者の修行は楽ではないでござるよ?」

ブリオツシユの脅しとも取れる発言にシンクが苦笑を浮かべる。

「う……が、頑張ります!」

「シンク、拙者も手伝つでござるよ。あやつは体術も使う、拙者のユキカゼ式体術も役に立つでござるつ」

「ありがとう、ユツキー」

自分と同じ「勇者」と呼ばれる者と戦うため。

言葉を重ねるより、互いの力をぶつけ合って、その思いを伝えるため。

ビスコツティの勇者、シンク・イズミの表情に迷いはなかった。

Episode 10 暗闇の過去（後書き）

ソウヤの過去の話。シリアス色がかなり強い、というか重いです。後書きすごく書きにくいですね……。

そしてソウヤと対照的にシンクがすごくいい子に見えるという……まあある程度は狙っています。

最初の方を一人称で書いてますが、久しぶりに書いたので結構ダメダメな感じが……。内容も重いですし……。

今回は日常というか戦の前段階を書く予定なので、多少は軽くなる……はず。

翌日はソウヤにとってフロニヤルドに来てから初めての落ち着いた日であった。

今日は特にどこに行くという話はなく、朝食を取り終えて自室に戻り、そのままベッドへと腰掛ける。手持ち無沙汰になると昨日のフィリアンノ城での会話が頭をよぎった。

『2人ともわかっていいるからでござる。ソウヤ殿の考え方は間違っている、と』

(間違っている……か。たえそうだとして、俺はどうすればいい……?)

答えの出ないとわかっている質問を自分に投げかけ、やはりわからない答えによって頭を悩ませる。

これ以上考えるのはやめよう、そう考え、ソウヤは荷物の中からファンタジー小説を1冊取り出して読み始めた。もう何度も読んでいたものだったが、お気に入りのために持ち歩いているものだったが一般的には受けなかったのか、巻数は全3巻までしかなく、荷物の中にはそれが全て入っている。

読み始めてしばらく経ったときにドアをノックする音が聞こえた。

「どござ」

しおりも挟まずに小説を閉じる。何度も読んだこともあって話の流れで大体のページがわかっているからだ。そうしたところで部屋の入り口から1人のメイドが入ってくる。

ガウルに仕える近衛メイドのルージュ・ピエスモンテ。メイドでありながら時には武器を取って戦うこともある。

普段ソウヤの世話をしていたのはレオの側役であるビオレであったが、ビオレが手を離せない時や他の優先すべき用がある時等、時折ルージュもその役割を受け持つことがあった。

「失礼します勇者様。……本を読んでいらっしやっただのですか？」

「特に他にやることも見つからなかったから読んでただけです。もう何度も読んだものですし」

「そうでしたか。……もし勇者様がよろしければ、兵士達の訓練と一緒に参加されてはいかがですか？特にガウ様は勇者様と一度手合わせを試みたいとおっしゃっていましたし……」

「……わかりました。レオ様からやることも特に言われてませんでしたが、参加させてください」

「かしこまりました。では訓練場に案内しますので着いてきてくださいませ」

ルージュの後にソウヤが続く。

城の中庭まで案内され、そこが兵士達の訓練場であった。兵士達の視線の先、その中央で少年と大柄な男が模擬戦を行っていた。

「ん……？ゴドウィン、ちょっと待て！」

「む……なんですか？」

少年　ガレット王子・ガウル　が自分の相手をしていた戦士団將軍のゴドウィンに中断を命ずる。兵士達も何事かとガウルの視線の先を追った。

「来たかソウヤ。なんでも暇そうだったって聞いたからな。よかつたら相手でもしてくれねえか？」

右手に持っていた長剣を肩に担ぎながらガウルが言った。

「まあ昨日何言われたか知らねえし、お前自身色々あったってことはわかるが……俺は頭いい方じゃないからよ、とりあえず体動かすつてのはどうだ？その方が気も紛れるだろ」

「……うまいこと言って、実際のところは俺と戦ってみたいってのが本音でしょう？」

ニヤツとガウルが笑う。

「わかってるじゃねえか。そういうことだ。どうだ？」

「やらせていただきます。実に面白そうだ」

ソウヤが手近にあった武器立てから剣を1本手に取り、重さを確

認するために横に一度薙ぐ。

ゴドウィンが場所を開け、2人が近づいた。

「得物はそいつでいいか？」

「ええ。そう言う殿下は先日のように爪じゃなくていいんですか？」

「ありゃあ輝力武装だが、俺はどんな武器でも戦えるってことをモットーにしてるからな。これでも遅れを取る気はないぜ。……それから姉上のことを愛称で呼んでるなら、俺のこともガウでいいぜ」

「そうですか。ではこれからはガウ様と呼ばせていただきます。……ルールは？」

「紋章術はなし。それだけだ」

「では武器以外での攻撃もいいわけですね」

「体術か？いいぜ、俺も使わせてもらっけどな」

フ、と唇の端を一瞬緩め、ソウヤが剣を両手に持って正面に構える。

「……ダルキアンのときの構えはしないってか？」

「まずは様子を見させてもらいますよ」

「へっ、いいぜ。……それじゃ、行くぞ！」

ガウルが地を蹴り、2人の模擬戦が始まった。

一方その頃、元老院との会議を終えたレオはため息をこぼしながらバナードとビオレを従え、自室へと歩いているところだった。

「ある程度予想はしていましたが……それ以上でしたね」

騎士団長バナードが話しかける。

「ひとまず大敗で起きたイメージは大分薄れたようですが、逆にこちらにも勇者を召喚したということで、今度はそっちの期待が大きくなってしまった……」

「仕方ないじゃろうな。元々ガレットは戦好きな者達が多くおる。負ければそれを返上する勝利を、勝てばそれ以上の大勝を求める。……そしてソウヤは良くも悪くも活躍しすぎた」

「まさか自由騎士相手に勝ちを治めるといふのは……正直言っても予想していませんでした」

「ワシもじゃ。それなりに善戦、程度を想定していた。ダルキアンは物事をわきまえておる。それで退くと思っていたが……。あそこで勝ったのはかなり影響が出たな」

「元老院の方々もおっしゃっていましたが、勇者殿の活躍をさらに

見たいという領民の声は多く挙がっています。勇者同士の戦いを希望する声もあります。……やはり、再度戦の機運かと」

ふむ、とレオは考え込むように間を置く。

「レオ様、戦の風潮はビスコッティ側でも高まっています。自国の自由騎士と勇者の再戦、あるいはやはり勇者同士の戦いを望む声は少なくないようです」

ビオレに補足され、レオは難しい表情を浮かべた。

「……閣下としてはあの勇者殿にご不安が？」

「……バナード、昨日の会食のことは聞いているな？」

「はい。しかし杞憂かと思いますが。過去の話から性格に少々癖があるのはわかりますが、閣下もダルキアン殿も釘を刺したのです。う。ならば大丈夫かと」

「……だといいんじゃないが」

レオは難しい表情を崩さない。

「レオ様、あまりお一人で考え込まないでください」

「そうは言うが……。あやつを呼び出したのはワシじゃ。何か問題があれば、責任はワシにある」

思わずバナードとビオレが顔を見合わせ、真面目すぎる領主に対して苦笑する。



「……じゃが、同時に戦を通じてあやつの心が変わるかもしれんという期待も抱いておる」

「そうお考えになっているのはレオ様だけではないようですよ」

「レオ様が足を止めて窓から外を眺め、レオとバナードもそれに倣う。」

外ではガウルとソウヤが剣を取り、互いに手合わせをしているところだった。

「……ガウル」

「レオ様、ガウ様はガウ様なりにソウヤ様のことを気にかけていらつしゃるんだと思います。そしてそれはガウ様だけではなく他の方々も。……以前レオ様はおっしゃったではないですか。なんでも1人で背負い込みすぎていた、と。もう少し周りの方々を、そしてソウヤ様自身を信じられてはいかがでしょう」

自らの側役の助言にレオは考えた様子を見せる。

「……レオレの言う通りかもしれんな。なんでもかんでも1人でなんとかしようとしてしまうのはワシの悪い癖のようじゃ。ここはひとつレオレの言うことを信じてみようかの」

再び窓の外へと目を移す。

ガウルと戦うソウヤの姿は楽しんでいるようにレオの目に映った。

ソウヤとガウルの攻防にそれを見つめていた兵士達は目を奪われていた。先ほどまでガウルと手合わせをしていたゴドウィンでさえ、瞬きを忘れるほどであった。

「お、おっちゃん……あの勇者、ホンマとんでもないんじゃない？」

「とんでもないどころではない……さすがあの自由騎士に勝利しただけのことはあるということか……」

目を離さず呟いたジョーヌにゴドウィンが答える。

その間も2人の攻防は続いている。

ガウルが剣による突きを繰り返せばソウヤも剣でその軌道を逸らし、空いている右手で裏拳を繰り返す。その拳をガウルが上体を屈めてかわして下段へと足払い。

バランスを崩したかに見えたソウヤだったが、右手と右脚を地に着き、体を捻らせながら左足の蹴りでガウルの顔を狙う。アクロバティックに出された蹴りに、上段からの攻撃を狙ったガウルは咄嗟に剣の柄の部分で攻撃をやり過ぎすと間合いを取った。

「またかよ。お前、なんて姿勢から蹴り打ってくるんだ？」

「俺の習ってる格闘技の特徴ですからね。いや、厳密には本来は相

手に当てないから格闘技、とは言い切れませんが。監視の目を盗んで格闘技の練習をしてみると思われないようにするために、ダンスに似せたという話も聞くようなものですからね」

「へえ……。やっぱりお前らの世界は面白そうだな」

「そうですね、俺としてはこの世界の方が十分面白いと思います  
が」

左手に持った剣の感覚を確認するように左手首を1度回してソウヤが構える。

既にソウヤはブリオッシュと戦ったとき同様、剣を左手に持って重心を低めに取る構えに変えていた。最初の構えで受けたのは数度、あとはこの構えに切り替えて先日同様に体術を織り交ぜながらの戦い方をしていた。

一方のガウルは剣を主体に攻撃してきたが、先ほどの足払いなど時折体術を見せてきていた。

「よっしゃ、もうちょっと続けるとするか」

「まだやるんですか？ガウ様も好きですね」

「このまま引き分け、ってのも盛り上がりには欠けるからな。どっちか決定打を一発入れたらそこで終わりにしようぜ」

「……言っておきますが俺は空気が読めない方なんで。相手が王子でプライドがどのとか全く気にかけません、いいんですね？」

「勝つ気にいるのか？それは考える必要はないぜ。勝つのは……」  
ガウルが駆ける。

「俺だッ！」

真っ直ぐ突っ込むと見せかけて重心を左へ。

ソウヤが右足で上段へ回し蹴りを放つがガウルがそれを掻い潜る。反撃の斬撃を出そうとした瞬間、ソウヤが体を浮かせて軸足にしていた左足で蹴りを撃つ。ガウルは剣の胴でそれを受け、数歩後ずさる。

開いた間合いを詰めながら横に剣を薙ぐが、今度は剣でソウヤがそれを受け、両者とも間合いを取った。

舌打ちをしつつ、再びガウルが飛び込む。今度は真っ直ぐ、左脚側から逆袈裟に剣を切り上げる。

だがソウヤが数歩後ろに退いたことで切っ先は空を切った。その隙を見逃さずにソウヤが突きを繰り出す。剣を振り下ろしてそれを叩き落とし、ガウルはもう1度間合いを取り直した。

「……へッ！やるじゃねえか」

言いながら笑みを浮かべる。だがその表情にはどこか焦りの色が滲んでいるようにも見えた。

「……ノワ、ベル、信じられるか？ガウ様は間違いない本気や。なのにあいつはそんなガウ様と互角以上に戦つとる……」

「ここまでの戦いを眺めていたジョーヌが呟く。

「信じたくなくても、目の前で起こってることが全て」

「弓の技術もあれだけ高いのに……それ以外でもここまでだなんて……」

ジェノワーズが驚くのも無理はない。確かにガウルは強かったが、自分達やゴドウィンと戦うときはやはりどこか余裕を持っていることが多かった。

それが今はその余裕が全く感じられない。それどころか焦りすら見え始めていた。

その色を振り切るかのようにガウルが突っ込む。

と、これまで待ちに徹してきたソウヤも前へと出た。上段からの剣筋では間合いの内側に入り込まれる、と判断したガウルは上げかけた剣を斜めに振り下ろす。しかしソウヤはそれを剣で止めながらなおも前へ、ガウルの左の懐へと潜り込む。

「なっ……!？」

慌てて左の膝でソウヤの胴体を狙うガウル。

だがソウヤは右の拳をその膝に合わせて直撃を避けると、体を半回転させて左手で剣の柄の部分をガウルの後頭部目掛けて叩きつけようとする。

目の端でその動きを捉えたガウルは頭を沈み込ませて攻撃をやり過ぎす。が、同時に腹部に鋭い衝撃を受けてそのまま数メートル吹き飛んだ。

「がはッ……！」

今の攻撃を放った勢いを殺さず、ソウヤが右の膝蹴りを中段に放ったのだ。

見ていた兵達がざわつく。今まで見ることのなかったガウルの背が地に着くという光景、それをたった今日の当たりにしたのだ。

「大丈夫ですかガウ様？」

クリーンヒットさせてしまった王子の身を案じてソウヤが声をかける。

「ああ、なんともねえ。……体のほうはな」

ガウルが立ち上がる。

「……だが心の方はダメージがでかいぜ。完膚なきまでに叩きめされちまった」

「いいえ、紙一重でしたよ。今の中段蹴りを止められてたら危なかった」

「よく言ひぜ……」

地に着いた背中と腰を手で叩き、汚れを落とす。

「やっぱお前は強いな。……その強さを見込んで頼みがあるんだが、次の戦が始まるまで俺やゴドウィンと一緒に兵達を鍛える役をやっ  
てはくれねえか？」

ガウルの申し出に再び兵達がざわついた。

「ガ、ガウ様！ウチらそいつみたいなのそんな突拍子もない動き出来  
へんで……？」

「そんなの俺だって出来るわけねえ。そういうことじゃなくてもこ  
いつから学べることは多くあるだろ。例えば……ベール！」

「は、はい！？」

突然名前を呼ばれてベールは自慢のウサギ耳を思わずピンと立た  
せる。

「こいつは弓も得意だ。お前や弓部隊の訓練を見てもらっつてのも  
いいだろ。逆に紋章術についてはお前らのほうが使ってる経験が長  
い……とはいっても、もうこいつも大分使いこなしてるようだが……  
。まあ教えられることは教えてやれば、互いにとって有益だろ？」

「えっと……それはそうですが……」

ベールが困ったように返事をする。本人の前で言うてはないとはい  
え、一旦「怖い」と感じてしまった相手である以上、やはり若干  
抵抗がある。

「ソウヤさん本人はどうなんですか……？」

「あ、そついやお前の返答聞いてなかった。どうだ？」

ふう、とソウヤがため息をつく。

「……俺は教えるのは下手ですよ」

「だとしてもお前が強いのは事実だしな。まあ人に教えれば自分もその分うまくなるとか聞くし、やってみるよ」

一瞬無言で考えたようなソウヤだったが、

「……わかりました。引き受けましょう。これ以上ガウ様の顔に泥を塗るようなことはしないほうがいいでしょうからね」

「おう、ちょっと待て！」『これ以上』ってのは聞き捨てならねえぞ  
「！」

「……失言でしたね」

「けっ！一回勝ったぐらいでいい気になるなよ？今の言葉はいつかそっくり返してやるからな。……まあともかく任せるぜ、勇者」

ガウルがソウヤの肩をポンポンと叩く。

思わずやれやれとソウヤは1つため息をついた。



『……そして我等ガレットは再び勝利し、美酒を味合うことになるだろう！ここに、ガレット獅子団領国はビスコッティ共和国への宣戦を布告する！戦の開催日は3日後。ビスコッティの返答を待つ！』

悠々堂々としたその様子は国营放送の人間からの「オッケーです」という言葉と共に消えた。

ソウヤがガウルから兵達の指導役を引き受けた翌日、レオはビスコッティに宣戦布告を行っていた。両国共に戦の風潮が高まり、加えて勇者と言う存在が期間限定であるということもそれに拍車をかけていた。

今国营放送を通じての宣戦布告を行ったところで、あとはビスコッティからの返事を待ち、了承された上でそれに応えれば3日後の戦は確定する。もっとも、ミルヒと仲のいいレオは昨日のうちにプライベートながら連絡を取っており、ほぼこうなることは確定済みのことではあった。

カメラが回っていないことを再度確認し、レオは国营放送の人間の後ろへと目を移す。

「……あまりじろじろ見るな」

肘掛に肘を置いて頬杖をつきながらレオが不機嫌そうにそう言う。

「……失礼。領主なんてのはやっぱりめんどくさいものなんだなと思っただけですよ」

やや表情を緩めながらソウヤが答えた。関係者以外は立ち入り禁止であったが、せっかくだからというガウルの計らいで側役のピオレと共にソウヤはこの場を見学させてもらっていた。

「戦は興業じゃ。こういう布告の仕方では領民の機運を盛り上げて戦へと向ける」

「わかってますよ。ガウ様から色々と言われました。戦い方に華がないといけないとか、紋章砲は派手に使ってなんぼだとか。俺のような曲芸染みた戦い方は受ける、とかっても言われました」

「……あいつの言うことは極端じゃ」

「それは思いますね。でもシヨーとして見せるのであれば、ガウ様の言うことも一理あると思います」

話しながら、レオは少し安心して話していた。フィリアンノ城での会食の後はどうしたものかと頭を悩ませたが、ガウルと模擬戦をした後、兵達の指導に当たったせいもあるのか、まだ癖はあるものの角は若干取れてきていたと感じたからだ。だとすれば弟の行動には感謝をしないといけない。

そんなことを考えているとピンク色の髪をした少女の映像が浮かび上がる。

『フィリアンノ領領主、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティです。ただいまのレオンミシエリ閣下の放送を拝見させていただきました。……さて、ただいまの宣戦布告に対してですが、我々ビスコッティはそれに対して受けて立ちたいと思います！』

レオは無言でミルヒの演説を聞く。

『先の戦では残念ながら敗北してしまいましたが、今度はそうはいきません！ガレットも勇者の召喚を成功させていますが、ビスコッティにだって素敵な勇者様がいます！』

フン、とレオが1つ鼻を鳴らす。

「公共の場で惚気話か、さすがやり手の姫様ですね」

皮肉をこぼしたソウヤをレオが睨みつける。

『敗戦でシヨンボリなんてしてられません！ビスコッティの皆さんの力を、私に貸してください！そして共に勝利の喜びを分かち合いましょう！……以上、ミルヒーオーレ・フィリアンノ・ビスコッティでした』

映像として映し出されていたミルヒの姿が消える。

代わりにレオが厳しい表情へと変えて口を開いた。

『ビスコッティの英断に感謝する。……それでは3日後、互いに雌雄を決しようぞ！』

そこで放送は終わるが、既に気分の昂ぶった兵達は少なくないらしく、外から雄叫びのような声が聞こえてくる。

「ありがとうございます、閣下」

「うむ。そなた等もご苦労じゃった」

国営放送の人々に労いの言葉をかけるとレオは立ち上がり、そのまま急遽放送用に設えた応接室を出る。ビオレとソウヤもそれに続いた。

「宣戦布告つてのはいつもあんな感じに行われるんですか？」

「ああ。大抵は数日後を指定してその日から戦が始まる。……まあ先日の戦は召喚されたシンクによって早い段階に点差を大きく開けられてしまったからな。早々にワシが撤退を宣言し、同時に翌日の宣戦も布告した。そういう場合もある」

「戦は国を挙げての興業です。盛り上がる形にしなければなりません」

ビオレが補足する。

「その通りじゃ。まあそのせいで熱くなることもあるが。例えば……戦に互いの国の宝剣を賭けよう、などという提案があったりな」

「そんなことがあったんですか？」

その時の状況を知らないソウヤの発言にビオレが思わず苦笑する。

「あれは、レオ様が星詠みで見たミルヒ姫様の未来のビジョンを変えようとして行った苦肉の策ではありませんか。熱くなって、言うことではないと思いますが」

「じゃが民が盛り上がったのは事実じゃ。……とはいえ、魔物の乱入で結局はなかったことになったがの」

「それってビオレさんが話してくれた戦場に魔物が現れたと言っ話ですか？」

「そうじゃ。……あれは例外中の例外じゃったな」

思い出すようにレオが話す。

と、ソウヤが立ち止まった。廊下の分かれ道、右に行けば兵達の訓練場へと続いている。

「俺はここで。レオ様の放送の様子を見終わったら弓部隊を見てくれとガウ様に頼まれてますので」

「そうか。手腕に期待しとるぞ」

「あまり期待しない方がいいですよ。教えるのは下手ですから」

自嘲的にソウヤが軽く笑った。その様子を見たレオも表情を崩す。

「そう謙遜するな。戦の日取りも決まったことじゃし、兵達の士気も上がつとるだろう。任せたぞ」

「努力しますよ」

ソウヤが訓練場へと向かい、その後ろ姿をレオが見送る。

「……やはり少し変わられましたね」

「ビオレもそう思うか？」

「はい。特に最初会ったときとフィリアンノ城から帰ってきた直後は……刃物のような、誰にも触れられたくないような感じがありました。ですが今はそれが少し和らいだような気がします」

「だとすればガウルには感謝せねばならないな。あいつが兵士達の指導役を任せたおかげじゃろう。……その調子で3日後の戦も、『勇者らしく』活躍してもらえれば何も言うことはないんじゃないか……」

戦は3日後、しかしそれまでに戦の準備や関連した公務など仕事は多くある。

まずは戦に向けて商工会への書類の確認作業のためにレオは自室へと歩を進めた。

Episode 11 束の間の日常（後書き）

戦の前、ガレットでのソウヤの日々の話。

シンクがすごくいい子、と書きましたがガウルもいい子ですよ。

原作でもなんだかんだで姉のことを心配しての先走りだったわけですし。

そんなわけでガウルなりになんとかしよう、という話でもありません。あとは何気にルージユ初登場です。原作ではミルヒとの戦闘や、ドラマCDでの出番やや多めなど比較的優遇されてるなーと思っただけでもないか、登場がかなり遅くなってしまいました。でも今後出番あるかな……。

## Episode 12 再びの戦

そして3日後。玉髓たまぐすいの月つきから瑪瑙めのうの月へと変わったその日が戦の日であった。

今回の部隊構成は大きく2つ、レオ率いる本隊とガウル率いる攻砦戦の奇襲部隊に分けられた。本隊にはバナード、ゴドウィンといった將軍と多数の騎士、兵士が配備される。一方の攻砦部隊はガウル親衛隊のジエノワーズの他は本体と比べると遙かに少ない数であった。

ガウルが攻めるべきシトロン砦の場所は今回主戦場となるであろうロックフォール平原の前方に位置しており、普通に考えれば平原を抜けての進軍が考えられる。しかし少数部隊なら見つかりにくい点もあり、あえて進軍ルートを変えて奇襲をかけることをガウルが提案した。

砦を攻めて落とせれば退路を絶て、挟撃を狙うことも出来る。それが無理でも後方への奇襲は相手の動揺が期待できるためであった。

ソウヤはガウルの部隊に配属された。

「お前がいるとは心強いな。こっちは少数精鋭による奇襲だ、お前なら弓と突撃と両方の役をやってもらえる」

セルクルを走らせながらガウルがソウヤに話しかけた。本隊より



先に出撃し、ビスコッティと国営放送の両方の目を避けるように進  
行している。

「それはいいですが、この戦力、やはり少々厳しいかと思いますが」

ソウヤがそう言うのも無理はない。ガウル、ソウヤ、ジエノワー  
ズ以外は騎士団、戦士団から選りすぐった200名程度を連れてい  
るだけであった。

「正直言つて落とすきれなくてもいい。後方を攻めることで本隊に  
揺さぶりをかけることは出来る。それだけでも効果はあると思うぜ」

「しかし攻めるからには俺は落としたいと思えますがね」

「言うじゃねえか。……まあその意見には俺も賛成だ」

ニヤツとガウルが笑う。

「そう言うからには何か策でもあるんだろ？」

「ありますよ。……うまく転べばこの戦力でも砦を落とせる」

「やっぱりか。お前のことだ、何か考えてはいるだろうと思ったが  
……本当に考えてやがったか」

後ろからジエノワーズがセルクルを寄せてくる。

「なんや、いい案があるならウチらにも教えてな」

「大分無茶な話だ。今聞いたら士気が下がりがねない。もっと戦場

に近づいてからの方がいい」

「……本当に落とせるのか？それ」

ガウルのもつともな質問にソウヤは苦笑を浮かべた。

「この戦力で砦を落とす、と考えたらまともな考えじゃ無理でしょう。……もっとも、勝機があるとするなら、その『無理』と思いついでいる、そこだとは思いますがね」

ソウヤがそう話したところで上空に花火が打ち上がった。

「始まったな。……俺達も急ぐぞ」

ガウルがペースを上げ、全員がそれに続いた。

『さあ、たった今戦が開始されました！今回の実況放送は私、ガレット国営放送のフランポワーズ・シャルレーでお送りいたします！今回も勝利条件なしのポイント勝負です！戦の開始と同時に今回の主戦場になると予想されるロックフォール平原ではさっそく両軍が激突しております！』

流れてくる実況放送に耳を傾けながら、本陣キャンプのテントの中でレオは戦の様子を眺めていた。

「よろしかったのですか、閣下。ガウル殿下の部隊はいくら挙動を敵に察知されないためとはいえ数が少なすぎたのでは……」

「自分もバナード將軍の意見に賛成ですな。出来れば殿下の部隊に同行させていただきたかった」

「それはすまなかった、ゴドウィン。じゃがあくまで本隊はこっちじゃ。戦力を充実させなくては本隊が押し切られる」

「それはごもつともですが……。でしたらあちらに配属した勇者をこっちに回せばよかったです……」

「それも考えた。しかしあいつ自身が攻砦戦を望んだのだ」

ゴドウィンが顔をしかめる。

「勇者殿自身が、ですか？」

「少数の遊撃的な部隊の方がやりがいがある、とか言っておったな。ともかくゴドウィン、戦士団將軍であるお前がこっちにいてくれる方が前線の兵士達の士気も上がるだろう、という考えもあつての判断じゃ」

「……承知しました。出すぎた発言でしたな」

「いや……。攻砦部隊がうまくやってくれるかはワシも気にかけておる故な……」

レオはポケットからある物を取り出してそれを見つめる。色鮮やかな青い宝石のはまった指輪。ガレットに伝わる神剣、エクスマキ

ナ。

使用者が望む形に姿を変えるこの指輪は、これからレオが使う予定の魔戦斧・グランヴェールと対をなす神剣である。以前の戦でソウヤに渡したが結局ソウヤはそれを使わず、今回もレオが渡そうとすると頑なに拒否した。

「前も言ったはずです。自分はよそ者だ。勇者なんて器じゃない。国の宝剣を使ってもしものことがあったら、と考えると気が引けます」

ガウルも似たようなことを言っただけで、この神剣は使い手がいないままレオが所持していた。

エクスマキナを見つめてため息をこぼし、ポケットに戻したところで実況放送から興奮気味の声が聞こえてきた。

『ビスコッティは早くも親衛隊のエクレール・マルティノッジの登場！さらに騎士団長ロラン・マルティノッジも戦場にその姿を現しました！この兄妹の前にガレットが押されております！さあ、レオンミシエリ閣下はどのような判断を下すのでしょうか！？』

「閣下、そろそろ私達の出番では？」

バナードの提案にレオが頷く。

「そうじゃな。ガウル達もそろそろシトロン砦に着く頃じゃろ。」

……「ここらでワシらも派手に暴れるとするかの」

「了解しましたぞ閣下。自分はタレ耳の相手をすればいいので？」

「そうじゃな。バナードは兄のほうを任せる」

「お任せを。閣下はどうなさいます?」

「最前線でビスコッティ兵を蹴散らす。……シンクとダルキアンが動いていないのが気になる。ワシが動けば動かざるを得なくなるじやろう。ダルキアンとまた戦うのも悪くはない」

レオの顔から笑みがこぼれた。領主としての務めも多く、難しいことを考える時間も増えたが、やはり強敵と相見えるときは心が躍る。

それまで腰掛けていた椅子からゆっくり立ち上がると、レオは愛あい禽きんのドーマに跨った。

戦が始まりロックフォール平原で両軍の激突が始まった頃、ソウヤは森の中にいた。場所はシトロン砦の西側の高台。

だがガウルはこの場にはいない。ここにいるのはソウヤとジェノワーズの他は軽戦士、重戦士、弓術士がそれぞれ10名と元々少数な部隊からさらに少数であった。

「しかしソウヤ、ホンマにこの作戦成功するんか?」

皆の方の様子をじっと伺っているソウヤにジヨーヌが不安そうに尋ねる。

「……さあな」

「な……！さあなつて、お前……」

「成功する可能性があるから、ガウ様にあんな無茶な役をやらせたんじゃないの？」

ノワールの指摘にフン、とソウヤは鼻を1つ鳴らした。

「黒いのの言うとおりだ。勝算がなきゃ、王子様にこんな危険なことはさせねえよ」

「そのガウ様……そろそろ仕掛けるようですよ」

ベールの言葉にソウヤは皆の正面に目を移す。

見ればガウルを先頭に率いた全ての兵力がセルクルと共に迫る様子が見える。

『……えっ！？シトロン皆！？シトロン皆ですか！？ここで未確認の情報ですが、シトロン皆にガレット軍が奇襲をかけているという情報が入ってきました！ということでしょう、ロックフォール平原に進撃してきた数を考えると皆を奇襲するほどの戦力はないはずですが……』

実況が奇襲を伝えるとほぼ同時に皆からガウル達の方へと矢が放たれるのが見えた。敵も気づいたようだ。

『ただいまの奇襲の情報ですが、ここで映像が入ってきました！現場のビスコッティ国営放送のパーシーさんと連絡が繋がったようです！パーシーさん？』

『はい！こちらシトロン砦前のパーシー・ガウディです！ここに奇襲をかけてきたのは……なんとガウル殿下です！殿下自ら隊の先頭に立ち、猛然と砦へと突っ込んでいきます！しかし兵の数があまりにも少ない！これは何か狙いがあったのでしょうか……！？』

その放送を聞いたソウヤが口の端を僅かに緩めた。

「儲けたな。国営放送のレポーターが仕事熱心で助かった」

「え………どういうことや？」

「普通あんな少数で正面切って突撃というのは考えられない。数の差がありすぎる。しかし隊を率いているのは王子であるガウ様だ。囷、あるいは陽動としての部隊にしては重要な駒が配置されている………よって敵はあの部隊を囷と決め付けることは出来ない。ガウ様が本当に砦を狙って突撃してくるのか、他に別働隊があるか、あるいはさつき実況が言ったような別の狙いがあるか……。そんな具合に相手を惑わすことが出来る」

言いながらソウヤは背の弓を手前に持ってきた。

「実況の方で何かあるかもしれない、ということを示唆してくれたおかげで、相手は無意識にその困惑を植えつけられる。そしてそのタイミングで別方向からの攻撃があれば……別働隊がいる、と思うだろう。その攻撃が激しければそれが本隊、とみなす。そうなれば

戦力の大半は本隊と思われるほうへと割いてくる」

「え……えーっと……?」

「つまりこつちの部隊を本隊と思わせて敵を多く割り、その隙にガウ様達に正面を突破してもらおう、ってこと」

ノワールの説明になるほど頷いたジョーヌだったが、段々と何かに気づいたように顔色が変わっていった。

「……ってちょい待て!それってつまりウチらが敵の猛攻にさらされるってことじゃ……!」

「そういうことだ。お前たちには敵の矢の防御も頼むが、他に相手が見つ込んできたときの近接要員が必要でジェノワーズと軽戦士、重戦士を借りたんだよ」

「な……実質ウチとノワと20の兵で突っ込んできた皆の兵士ほとんど相手にしろってことか!？」

「ここに来る前にある程度数は減らす。この数日間毎日ベルと弓兵の弓の訓練を見てやったんだ、そのぐらいやってくれるだろう」

「え……ええ!?!……が、頑張ります……」

困り気味のベルを見てソウヤが1つ笑う。が、すぐに顔を引き締めた。

「……そろそろやるぞ。いいか、とにかくこつちを大部隊の本隊と相手に錯覚させるのが目的だ。出来る限り矢を撃て。相手の戦力が



こっちに集中し始めたたらお前たちは無理せず退いてガウ様となんとか合流しろ」

「その時のしんがりがウチとノワってことか……」

「そつだ。……よし、弓兵、矢を構えろ」

とても大部隊とは思われない僅か10名の弓兵、そしてベールが矢を構える。ベールは紋章を輝かせて紋章砲の準備をしている。

が、ソウヤは何を思ったかその場に腰を下ろした。

「……ソウヤ、なんで座るの？」

ノワールが怪訝な目でソウヤを見る。

「なるべく多く矢を放つ、なら撃てるだけ多く元の矢を放ち、あとは紋章術で増やす。多く矢を番えるには……」

両脚で弓を支える。さらに紋章術によって弓自体を強化、両手の指の間にありったけ挟んだ矢を強化した弦に当てて引き絞る。

「な、なんつー……」

「……こいつが1番だ。名づけて吹き荒ぶ弩弓の嵐、ストーム・オブ・バリスタ……！」

ソウヤの紋章がひときわ明るく輝く。

「いくぞー！弓隊、撃てエツ！」

その声と共に西側からシトロン砦へと矢の雨が降り注いだ。

『じ、実況席！こちらシトロン砦のパーシーです！大変です！なんと砦の西側から矢の雨が砦に降り注いでいます！やはり別働隊がいた模様！それにしてもこの矢の数、かなりの大部隊を隠していたようです！』

『なんとなんと！これは驚きです！ガレット王子のガウル殿下を囮に使って別方向からの奇襲！弓ということとここまで姿を見てないことから推測するに……おそらくガレットの勇者、ソウヤ・ハママが指揮を取っているのではないかと思われれます！』

自分の方へ飛来する矢の数が激減したところでその実況を聞いて、ガウルは不敵に笑った。

「やるじゃねえか、あいつ……。本当に向こうを本隊だと思わせやがった。矢は来なくなっただし攻撃も散発的……。このぐらいなら、いける！」

ガウルは背後を振り返った。敵の弓により元々少ない兵の数は最初よりさらに減っている。だが自分が先陣を切れば兵達は間違いないく着いて来る。砦を落とせる可能性は0ではない。

「行くぞお前ら！この人数でシトロン砦を落としたとなりやあ全員

大ボーンナスだ！気合入れるオ！」

うおおおおっ！と背後から心強い雄叫びが聞こえてくる。

「ガレットの底力、見せてやれ！」

## Episode 12 再びの戦（後書き）

冒頭で瑪瑙めのうの月が出てきましたので、ここでプロローグで言っていた月の説明です。

フロニヤルドの月の呼び方ですが、公式で登場しているのが小説で「紅瑠の月」（ただし自分は小説版を読んだことがないのでネットの情報で知っただけで未確認です）、コミックスで「珊瑚の月」、ドラマCDで「水晶の月」となっています。

これはプロローグの後書きでも書いたように誕生石を基にしたの暦と言えるので、自分の中で以下のように月の呼び方を勝手に決めてます。詳しくは「誕生石」でぐぐってウィキペディア先生辺りに教えてもらってください。

1月	紅榴（ただし小説の記述は紅瑠）	2月	紫水晶	3月	珊瑚					
瑚 <small>すい</small> （原作記述あり）	4月	水晶（ドラマCDで登場）	5月	翡 <small>ひ</small>						
翠 <small>すい</small>	6月	金緑 <small>きんりょく</small>	7月	玉髓 <small>ぎよくすい</small>	8月	瑪瑙 <small>めのう</small>	9月	董青 <small>きんせい</small>	10月	
紅水晶	11月	黄水晶	12月	瑠璃						

公式でどう転ぶかはわかりません。設定がぶつかってもその場合は「発売前で知らなかったから（以下略）」ってことになります。

なので、このソウヤにとって2度目の戦の日は我々の暦で言うと8月1日に当たります。

まあこれは「学校が夏休みかつお盆の前」という半ば適当な日取りで決めたものなので、あまり細かくは考えてません。特にソウヤのインターハイの日程とか。

それから輝歴についてですが、これは我々の西暦に900を足すと輝歴の年になります。

日の表現はどこにも表記がないのでわからないですが、これもガイドブックで明らかにされることを期待しています。

## Episode 13 動き出す戦場

後方のシトロン砦への奇襲という突然の情報にビスコッティ側は明らかに浮き足立っていた。

最初の快進撃はガレットの將軍、バナードとゴドウィンによつて止められていた。現在の戦績は五分と五分、この状態で後方の砦が落ちたとなれば部隊を退かざるを得ない。それではポイントに水をあげられてしまう。

「まずいでござるな。こうなつてしまつては致し方ない、拙者たちも砦の方へ……」

ブリオツシュが作戦連絡を取り持つ騎士と話をしていたそのときだった。

「獅子王！炎陣！大！爆！破ア！」

聞こえたその声と共に大爆発が巻き起こり、ブリオツシュの前方にいたはずの兵達が吹き飛ばされてけものたまへと姿を変えられていた。

「決まつたー！レオンミシエリ閣下必殺の獅子王炎陣大爆破！前線を抜けていきなりの爆破にこれはビスコッティも驚きを隠せないー！」

不敵に笑みを浮かべながらレオが長柄斧を肩に担ぐ。

その様子を見ていたブリオツシユは実況の言葉通り一瞬驚いた表情を浮かべたが、すぐ平常どおりの顔へと戻った。

「意外でござるな、まさか閣下自らがこれほど深くまで切り込んでこられるとは」

「ワシはお前と戦いたくてのう、ダルキアン。今日はこの魔戦斧、グランヴェールも持ってきた。ちと本気でやるうではないか？」

ブリオツシユがレオの肩に担がれた斧にチラリと視線を移す。

「……なるほど、まさに本気、というわけではござるな。……しかしそれはレオ様本人の意思か、それともあくまで拙者をここで足止めしておきたいというのが本音か、どちらでござるかな？」

レオの瞼がピクツと動く。

「……貴様はここでワシが相手をする。皆へは行かせん」

「そうでござるか。承知した、その誘い、乗らせていただく」

ブリオツシユが腰の刀を抜く。

「お館様、では拙者が……」

「いや、ユキカゼ。皆へは行かなくてよいでござる」

「えー!? し、しかし……」

「……皆の方は、『彼』に任せようと思つてござるよ」

「何……?」

レオの表情に驚きの色が浮かぶ。

「まさか……シンクは皆に!?!」

「厳密にはこの部隊の最後尾でござる。しかしシトロン皆に奇襲があつたという情報と同時に飛び出して行ったでござるよ」

「まずい……あそこには……」

「ソウヤ殿がいる、でござるか?」

再びレオが目を見開く。

「シンクは奇襲をしかけたのはソウヤ殿と確信を持ったから行ったでござるよ」

「な……だがあの2人が戦えば……!」

「……異世界から召喚された勇者同士、傷つく可能性もある、でござるか?」

レオが無言で頷く。

「勿論拙者もそのことは知っていたでござるし、シンクも知っていた。だが知っていた上で、あえてシンクは今度の戦でソウヤ殿に挑

む、そのために拙者に稽古をつけてほしいと言ってきたでござる。  
強い者と戦いたいという気持ち、そしてそれ以上に、ソウヤ殿に全  
力でぶつかってその頑なな心を氷解させたいという気持ち……彼は  
そんな気持ちをずっと持っていたでござるよ」

「シンク……」

「だから拙者はその彼らの戦いを見守ることにしたでござる。出来  
る限りのことは教えた、あとは本人たち同士がどうにかするでござ  
る。レオ様はどうお考えになつていらっしゃるでござるか？」

「……お前と同じ考えだ。戦の中でなら、ソウヤは変わるかもしれ  
んという期待を持っている。……あのチビ勇者め、立派なことを言  
うようになりおつて……」

ブリオツシユの表情が緩む。

「そういうわけでござるから、あとは彼らに任せればいいでござる  
う。……拙者はレオ様の誘いを受けた。本気で手合わせ、というこ  
とでよろしく頼むでござるよ」

緩んでいた表情はどこか嬉しそうに、しかしブリオツシユからは  
確かな闘気の高まりが感じられる。

「……そうじゃな。ではひとつ、派手に行くのでしょうか？」

レオもグランヴェールを構える。

互いに同時に地を蹴り、百獣王の騎士と自由騎士の2人が激突し  
た。



その頃、シトロン砦の攻防は一層白熱していた。

ソウヤ達別働隊を本隊とみなした様子のビスコッティ軍はガウルの隊への攻撃の手を緩め、代わりにソウヤの隊が猛攻に晒され始めた。

始めは矢の応酬、しかしそれでは状況が変わらないと判断したビスコッティ軍は歩兵を進軍させる。状況はそれまでの砦への攻撃から、迫る歩兵を撃ちながらの後退戦へと変わった。

「どおりやあああ!!」

ジョーヌが自慢の大斧を振り下ろし、ビスコッティ兵を薙ぎ払う。仕留め損ねた数名が攻撃後の隙をつこうとするが、ノワールが目にも止まらぬ速さで動きつつ短剣を振るってカバーし、相手をけものだまへと変えていった。

「くっそー！おいソウヤ！こんなんじゃ押し込まれるで！兵士はどんどん来る……うちらだけじゃ止めきれん！」

後退しつつ、次の一団がも迫りつつあるのを見てジョーヌが悲壮感溢れる声を上げる。既に軽戦士と重戦士の20名はだま化して戦闘不能となっており、近接戦を行っているのはノワールとジョーヌの2人だけとなっていた。

「もう少し時間を稼げ！……ガウ様はまだ内部に入れてないのか？」

「相手が防御を固め始めた。こっちの数が少ないのがばれたのかも。正門も閉ざされてるし、あれじゃ無理かもしれない」

あくまで普段のように冷静にノワールが答えた。

ソウヤが振り返って残りの弓兵を確認する。連れてきた10名の弓兵のうち既に6名は敵との矢の応酬でだま化、戦線から離脱していた。

「……ここいらが限界かな」

そう言つとやや自嘲的な笑みをソウヤは浮かべた。

「……ジェノワーズ」

「何？」

「俺が活路を開く。お前たちは正門側に回ってガウ様の援護に行け」

「援護に行けって……敵がぎょうさん来とるんやで！」

「だから言ってるだろう、活路を開くと。俺がなんとかする。連れてきたセルクルがまだいるだろう。それでここから最短距離でガウ様のところまで突っ切れ」

「ソウヤさんは……どうするんですか？」

ベールの質問にソウヤが言葉を止める。

「活路を開くのはいいですが……ガウ様の元へ行くのは私達だけではソウヤさんは……」

ソウヤは答えない。代わりに残った弓兵の方を向いた。

「……お前たち、悪いが俺と一緒に地獄に付き合ってもらいたい」

弓兵が顔を見合わせた。

「な……！ソウヤ、お前まさか自分を捨て駒にする気じゃ……！」

「ジョーヌ、ちょっと黙ってる。……すまないが俺に命を……いや、死にはしないか。ともかく、俺のわがままに付き合ってもらえるか？うまくいけば砦を落とせる……頼む」

ソウヤの真剣な眼差しに4人は互いに顔を見合わせた後で大きく頷いた。

「わかりました、勇者殿を信じますよ」

「うまくいきやあ大儲けだ、やってやりますぜ！」

「恩に着る」

小さく頭を下げ、ソウヤはジェノワーズのほうへ向き直る。

「お前たちが出た後、俺が囷になってお前たちへの攻撃をそらせる。

「弓兵には俺を援護してもらおう」

ベールがセルクルを3人分引いて来る。ジェノワーズはそれに乗った。

「……ソウヤ、お前は異世界の人間や。怪我をすれば……」

「わかってる、ジョーヌ。言われるまでもなくな」

「ならそんな無茶……!!」

「無謀にも砦に突撃してガウル殿下とその親衛隊ジェノワーズ、そして勇者は戦線から離脱しました、などアホな話になりたくはない。だからといってこのまま引く気もない。俺はこの砦を落とす。……敵が来る、行くぞ!」

一方的に続きを切ってソウヤが弓に矢を番えた。

「輝力解放……! 食らえ! スマツシャー・ボルト!」

放った矢は迫るビスコッティ兵に吸い込まれ、大爆発を起こす。吹き飛ばされた兵はけものだまに変わって空から落ちてきた。

「今だ! 行け!」

ソウヤの声と共にジェノワーズの3人を乗せたセルクルが駆け出す。敵兵がそれに気づき、狙いを3人へと変えた。自軍の歩兵進撃のために手を休めていた砦の弓兵が3人を狙いだす。

「俺が突入したらどこかに身を隠すか、うまいことなんとかしろ!

援護任せるぞ！」

振り返ってそう弓兵に告げるとソウヤも皆へと駆け出す。走りながら矢を指の間に挟み、ジエノワーズを標的とする兵に狙いを定める。

「ヘッジホッグ・アルバレスト！」

放たれた矢は次の瞬間には増え、弓を構えていた兵を次々と撃ち抜いた。が、数名の撃ち漏らしが確認できる。

「チツ……矢の軌道が制御しきれなくなってきた……」

既に最初の対攻皆用紋章砲から幾度となく紋章術を酷使している。元々紋章術を使いこなし気味であり、さらに最初の戦よりもその勝手がわかったとはいえ、これだけの連発は体のほうに堪えてきていた。

だがソウヤは疲労の色を滲ませたため息を一つ吐いたものの、背中の中の矢を抜き、純粹に弓の技術だけで敵弓兵を撃ち抜いていく。

しかしそうしている間に敵の兵5名がソウヤの元へと迫ってきた。

「勇者、覚悟——！」

敵兵が斧を振り上げる。が、次の瞬間後方から飛来した矢にその敵はけものだまへと変わった。

ソウヤの口の端が緩む。

「やるじゃないか。鍛えた価値があつたつてもんだ」

次の相手が怯んだ隙に太股の矢筒から矢を抜き、手の甲の紋章を輝かせて撃ち抜く。直線上の2人を巻き込み、これで残りは2人。

2人が左右に散る。左右からの挟み撃ち。

ソウヤは慌てず太股から矢を構えて左の1人を撃ち抜いた。さらに右から来る兵の攻撃を目の端で捕らえて体を捌いて交わす。その勢いそのままに右の回し蹴りを上段へと叩き込んだ。

5人を片付けたのを確認する間もなくソウヤは砦へと駆け出す。後方からの矢の援護により敵兵の脚が少し遅くなっている。

そこを見逃さずソウヤは両脚に紋章術を発動させた。

「この距離なら……届くはずだ！」

力いっぱい踏み切る。そしてソウヤは飛翔する。砦壁よりも高く。

その高さに、頭上を越えていく敵国の勇者に、敵の兵達が啞然と空を見上げた。

「スマツシャー・ボルト！」

砦壁の内側、着地点点と思える場所へ紋章砲を撃ち込む。運悪くその場にいた兵が吹き飛んだ。

着地と同時にソウヤは正門側へと駆け出す。それを捕らえようと

敵兵が迫るがソウヤはその攻撃を交わし、あるいはうまくやりすし、前へ。

そして巨大なレバーの前に構える兵を矢で撃ち抜くとそのレバーを一気に降ろした。

轟音と共に正門が開く。砦壁を攻めめぐっていたガウルと連れの兵士達はその様子に気づき、内部へと突入してきた。

「ソウヤ！」

ガウルが開門レバーの脇で壁にもたれかかるソウヤを見つけて声をかけてくる。

「お前……なんて無茶しやがる！」

「これで門の内側には入れたでしょう？ ジェノワーズは？」

「最後尾に合流した。しかし正門突破したとはいえこれで砦内戦は……」

ソウヤがガウルの視線の先を追うと、元々少なかった兵がさらに少なく、もはや当初の3割程度しか残っていない。

「……十分でしょう。中にさえ入れてしまえば、あとは俺達でここは落とせる」

「よく言っぜ。満身創痍だろ？ 1人で相当無茶しやがって……。しかしこれなら回りくどい手なんか使わず最初からお前が中に突っ込んで正門開けばよかったじゃねえか？」

「それは無理です。相手の戦力が集中しすぎる。ある程度分散させて削ったから出来たことです」

「そうかい。でもこっからは敵さんの戦力は全部集中だけ？」

「外と状況が別です。ここなら乱戦に持ち込める。俺にガウ様にジエノワーズ……残っている兵の数を考えても勝機はあると言えるでしょう」

「けっ、とガウルが笑った。

「……まあそうだな。ここまで来りゃああとは突っ込むだけだもんな……！よっしゃ、シトロン砦、落とさせてもらっぜ……！」

ガウルが輝力武装を展開しようとしたその時

「ちよつと待ったああああ……！」

空から叫び声と共に飛び降りてくる1つの影。

睨み合うガウルとビスコッティ兵団の間に着地したのは

「ビスコッティ勇者、シンク・イズミ！ただいま参上！」

『ゆ、勇者だー！ビスコッティの勇者、なんとシトロン砦に登場！どうやらミルヒオーレ姫のハーランを借り、それで空から砦壁を越えて飛んできた模様です！しかし、これで互いの国の勇者が初めて合間見えることとなりました！これは……もしかしたらこれは……』

『！』



シンクがガレットの兵団へと目を移す。

「へっ！来やがったかシンク！いいぜ、ここでお前と……」

「ごめん、ガウル。今日はガウルと戦うために来たんじゃないんだ」

驚いた表情を浮かべるガウル。

そんなガウルを差し置き、シンクの視線がソウヤへと向けられた。

「……ソウヤさん」

ソウヤは何も答えない。ただ、その言葉の次を待っていた。

「……ビスコッティの勇者として、あなたに一騎打ちを申し込みたい！」

### Episode 13 動き出す戦場（後書き）

当初12と13は一緒でした。が、結構長いので2つに分けることに。

まあ12話の後書きも相当長くなってしまいましたし……。

前回は月の名前で相当文字数を食ったので、今回は用語解説とか。ロククフォール……ブルーチーズの代表格。なんか名前的には平原として使うより峡谷とかに使った方がしっくり来る気もしましたが、谷とが出す予定もないので採用。

シトロン……フランス語でレモンのこと。リボンシトロンって飲み物もありますよね、安い三ツ矢サイダーみたいな。本当はレザン砦（レザンはフランス語でブドウ）にしようかと思ったのですが、ドラマCDにレザン王子が既いたのでシトロンになりました。

Episode 14 対決・2人の勇者

「き、き、き、来ましたー！ビスコッティの勇者、シンクによる一騎打ちの申し出！もしもこれをガレットの勇者、ソウヤが受ければ勇者同士による一騎打ちとなります！これは前代未聞！勿論私も見たことがあります！そして、おそらく両国の国民にもこの戦いを見たい人は数多く存在するでしょう！さあ、ガレット勇者の返答は如何に！？」

白熱する実況とは対照的にソウヤは冷たい視線をシンクに向けていた。

「ま、待てシンク！」

「ごめんガウル、僕はソウヤさんの答えが聞きたいんだ」

硬い表情を崩さず、そしてソウヤから視線を外さず、シンクははっきりとそう告げる。

「……俺もお前も異世界人、俺達がぶつかれば最悪の場合どうなるか、お前はわかってるんだな？」

「勿論」

「この戦の中で俺とお前の戦いは俺達の世界で言う『戦』とも言える。……それもわかってるんだな」

「わかってますよ」

「……そうか」

ソウヤが剣を抜き、背と太股の矢筒、腰の鞘を外して弓と一緒に地面に落とした。

そして切っ先をシンクへと向ける。

「我が名はガレット勇者、ソウヤ・ハヤマ。……その一騎打ちの申し出、受けさせていただく！」

ウオオオオオツ！と兵が沸いた。

「お、おいソウヤ！」

「ガウ様、これは俺達の戦いだ。口を挟まないでもらいたい」

「でもよ……！」

「……あいつはわかっている。あれは覚悟を決めた者の目だ。例えば己が傷つくかもしれないとわかっている、それでもこの戦いをやめる気はない者の目だ」

「そうは言うが……お前ここまでの攻砦戦で体力は随分消耗してるんじゃない……」

「……関係ありません」

「関係ないって……」

「この戦いは避けられない。……そして俺も避けるつもりはない。ガウ様にだってわかるでしょう？」

頑ななソウヤの心にガウルのほうが先に折れた。

「……わかった。もう言わねえ。お前に任せる」

「ありがとうございます」

「へっ……最初のダルキアンとの一騎打ちもこんなだったっけな」

そう言つとガウルは苦笑をこぼしながらソウヤから離れる。

ゆっくりとソウヤがシンクの方へと歩く。攻めるには僅かに足りない程度の距離を残し、ソウヤが足を止めた。

「……お前の目、命のやり取りをする覚悟は出来たみたいだな」

「そんなものは出来てないよ」

「何……？」

「フロニヤルドの戦は明るく、楽しく、元気よく！だから、互いを傷つけあったりの殺し合いじゃないんだ」

「何と言おうと俺とお前は互いの身を賭ける戦いだ。怪我をする、場合によっては命を落とす。なら殺し合いとなんら変わらない」

「それは違うよ！……ソウヤさん、本当はわかっているんでしょ？ソウヤさんは意地になっただけだってことを！」

「意地だと……？」

「本当は皆と一緒に笑ったり、仲良くしたり、そういうことが楽しい事だって。そしてこの戦はそういうものだって、わかっているんでしょ？」

「……黙れ」

「気づいているはずなのになんでそれを認めようとしないの？レオ様だってガウルだってジェノワーズの皆だって、ソウヤさんと本当はもっと仲良くしたいと思ってるはずなんだ」

「黙れと言ってる！」

ソウヤが地を蹴り、力任せにシンクに剣を振り下ろす。しかしシンクはそれを長尺棒にさせているパラディオンの腹で受け止めた。

「黙らないよ！仲良くなりたいうって気持ちには僕も一緒だ！」

シンクがソウヤを押し返す。

ソウヤが距離を離れた。

「だから僕は、僕なりのやり方で、無理矢理にでもソウヤさんと仲良くなるって決めたんだ！」

シンクが追撃をかける。右手側からの水平な薙ぎ。

ソウヤが剣の腹でそれを受けつつ距離を詰める。

「勝手なことを！」

右足の上段回し蹴り。シンクはパラディオンを握っていた左手を離し、それを受ける。次いで右手でパラディオンを一旦引いて突き出す。

軸足の左足一本でソウヤは後ろへと飛び退き、その突きの間合いから逃れた。

（棒か……厄介だな）

少し熱くなってしまった自分を反省しつつ、ソウヤは相手の得物を見つめた。

（こんなことなら剣道だけじゃなく他の武器の武道もやっておくんだったな……。ま、後悔しても始まらんが）

呼吸を整え、左手に剣を持って重心を落とす。

（相手は長柄物……なら懐に潜り込めば勝機はある、か）

足に紋章術を発動、加速力を高めてソウヤが飛び込む。

シンクが突きを出す。

間一髪、ソウヤはそれを右によける。が、その突き出された棒が横に振るわれる。

左手の剣でそれを受け止め、さらに距離を詰めて右の拳を固める。

だがシンクはパラディオンを手元に引き寄せると、背を通して反対側でソウヤの右肩へとぶつけてくる。

同時にソウヤも右の拳を脇腹に打ち込んだ。

「ぐっ……!!」

「うわっ……!!」

シンクが数歩分あとずさる。

ソウヤとしては追撃をかけたいところだったが、予想外のダメージに足が止まった。

「いったぁ……やっぱりユツキーより一発が重いな……」

脇腹を押さえつつ、だがダメージはあまりなさそうにシンクが咳く。

「チッ……巨乳ちゃんまで協力してんのか……」

「ユツキーのこと? まあね」

「だがそんな付け焼刃の体術で……」

ソウヤが地を蹴る。



「なんとかなると思うな！」

シンクのリーチを生かした攻撃がこない。変わりに懐まで呼び込んだところで棒をスライド、持ち替えての下段からの攻撃を繰り出そうとする。

しかしソウヤはそれを右足で踏みつけて攻撃を止めると、そのままそこを軸に左足で上段後ろ回し蹴りを放つ。

シンクは上体を逸らして攻撃を交わし、抑えられていたパラディオンを力任せに引き抜くと、そのまま突きへと移行。

左手の剣でソウヤは攻撃をそらし、そのまま接近して右拳をシンクの顔面目掛けて伸ばした。

が、シンクは左手でその拳を払い、右足の前蹴りの姿勢に入る。すかさずソウヤも右足をその蹴りに合わせて直撃を避け、そのまま自然と距離が開く。

だがソウヤはすかさず距離を詰めなおし、シンクが体勢を整えるより早く踏み込んで、パラディオンの真ん中に剣を打ち込む。

「罅迫り合いの密着体勢。」

「いやあああ！」

シンクがパラディオンを押し込み、さらに右の端で上段を狙う。

ソウヤは上体を逸らしてそれを避け、バランスを崩しながらも右の回し蹴りを上段へ放つ。

今度はパラディオンの左端でシンクはそれを受け止め、さらに先ほど攻撃を空振った右側でソウヤの軸足を狙う。

その攻撃をバク転でやりすぎし、着地と同時に地に腰がつくほど重心を落として右かかとの足払いを放つが、それは飛び上がったシンクの足の下をかすめていく。

だがソウヤはその勢いを殺さずさらに一回転、左手と左脚で体を支えたまま中段に右の後ろ回し蹴りを打ち込む。

しかしこれもシンクのパラディオンによって防がれ、両者とも間合いを取った。

『こ、これが勇者同士の戦い！目まぐるしいほどの攻防です！互いに軽装ということもあり動きが速い！目で追うのもやっと！なんと！という戦いでありましょうか！』

元々熱気は高かったギャラリーが実況によってさらに盛り上がる。

根っからの戦好きなシンクはやはり楽しそうな表情だったが、ソウヤもそれにつられてか、普段より表情が生き生きしてるようにも見えた。

「やっぱり強いな、ソウヤさん」

「……よく言う。相当俺の動きを研究してきやがったな」

「あ、わかる？」

「お前の間合いではリーチを生かした突きと薙ぎ、それを避けようと懐に潜り込めば今度は手元に戻して棒の両側による攻撃と防御、上段への徒手の攻撃に対する徒手の防御、さらに意表をついてるはずの蹴りまで初見で避ける……。ダルキアン卿に相当しごかれたようだな」

「体術はユツキーだけだね。足技が主体みたいだったから大陸を渡ってる時に聞いた武術を織り込んでみた、って言うてたよ」

ソウヤが一つ息を吐く。疲労の色が滲んでいるのが自分でもわかる。

「……いい師を持ったな」

「師であり、仲間であり、友達だよ。ソウヤさんも今度ダルキアン卿とユツキーに稽古をつけてもらおうといいよ」

「仲良く、などという考えはない」

「……戦ってるときのソウヤさん、楽しそうなのに……」

「フン……」

ソウヤが剣を左手から効き手の右手へと持ち替える。

「……前言は撤回する。付け焼刃かと思ったがお前の体術はなかなかだ」

「ありがとう」

「……だが」

ソウヤの背後に紋章が鮮やかに輝き出す。

「紋章術……」

「……勝つのは俺だ」

「僕も負けないよ。その勝負、受けて立つ！」

シンクも背後に紋章を輝かせた。

互いに得物を左脚の脇に構える同じ構え。

「俺の残りの輝力全てを叩き込んでやる……！」

「望むところ！」

ソウヤとシンク、互いの輝力が高まっていく。

眩いばかりの紋章を輝かせ、2人は同時に動いた。

「オーラブレイドッ！」

「紋章剣！裂空……」

「その技か！2度は通じん！」

ソウヤがシンクの「裂空一文字」に合わせて剣を振るう。

だが、シンクの右手に握られていたパラディオンは棒ではなく、  
一対の双剣へと姿を変えていた。

「なっ………!」

「十文字!」

右の剣がソウヤの剣を止める。さらに逆手に持った左手の剣が右  
の剣と重ねられ

ガギイイーン!

ソウヤの持っていた剣が中ほどから折れた。

さらにその斬撃はソウヤの身につけた甲冑も砕く。

僅かに後ろに仰け反るが、それでもソウヤの体に傷は付いていな  
かった。

信じられないというように折れた自分の剣を見つめつつ、ソウヤ  
は膝を突く。

「俺が………負けた………?」

視線がシンクの方へと移る。

「お前の今の技、あれはダルキアン卿の………」

シンクが首を横に振る。

「今のは『裂空十文字』。……ダルキアン卿の紋章剣を元にエクレが編み出したのを教えてもらった技なんだ」

「そうか……あの親衛隊長が言っていた技ってのはこれだったか……」

ソウヤが自分の体を触り、傷がないことを再確認する。

「……狙って切らなかったのか？」

「勿論。言ったでしょ、フロニヤルドの戦は明るく、楽しく、元気よかったです」

「……そうか」

その口元が緩む。

「一度見たことのある技と思わせて別の技……そして武器と防具だけを破壊するように調整された力加減……。俺得意の騙し合いも、戦闘での技量も、全て上をいかれた、ってわけか……」

ソウヤが声を上げて笑う。今までのような皮肉めいた、あるいは自嘲めいた、そんな意味を全く含んでいないような笑いだった。

そしてそのまま地面に大の字に寝転がった。

「……負けた。完敗だ。お前の強さに……それ以上にお前の素直すぎる心に」

「ソウヤさん……」

「実際に剣を交えてわかった。お前がこの世界を、この世界に住む人々を心から愛していること。……そしてこんな俺を本当に気にかけていること。……迷いのない真っ直ぐな剣だった。俺のように何も無いものとは違う、羨ましいと思えるほどの、真っ直ぐな……」

「……僕はソウヤさんと友達になりたかっただけなんだ。悲しいこと、辛いこと、今までそんなことが一杯あったかもしれない。でも、だからこそ、これからは楽しいことが一杯になってほしい。そしてフロニヤルドはそういう場所なんだってことを僕は教えてあげたかったんだ。同じ世界から来た人間として、ビスコッティの勇者として、何よりシヨンボリしてる人を見過ごせない、ただのシンク・イズミとして」

「友達……か……」

ポツリとソウヤが呟く。

「……久しく考えもしなかった単語だ」

「ソウヤさん、僕の友達になってくれる？」

「……ダメだな」

一瞬期待を裏切られたような表情がシンクに浮かぶ。

だがソウヤは意地悪そうに小さく笑って言った。

「友人にさんづけってのは変だろ？……ソウヤでいい」

そのソウヤの言葉にシンクの表情が見る見るうちに明るくなっていく。

「うん！わかったよ、ソウヤ！」

シンクが手を伸ばす。

ソウヤはその手をがっちり握り、体を起こした。

『決着！ビスコッティの勇者、シンク・イズミとガレットの勇者、ソウヤ・ハヤマの勇者同士の戦いは勇者シンクの勝利となりましたー！しかし互いに素晴らしい戦い！そして何よりこの微笑ましい両者の健闘を称えあうような握手！ビスコッティとガレットの戦の歴史に名を残すような名勝負といっても過言ではないでしょう！』

なおも興奮冷めやらない様子の実況が続く。その様子が放送されていたロックフォール平原でも、兵達の誰もが戦の手を一旦休めて2人の戦いを見ており、そして今は見事な戦いを演じた2人に拍手を送っていた。

それは一騎打ち中だったレオとブリオツシユも例外ではなく、2人も勇者同士の戦いを見守っていた。

「やはり拙者達は少々心配しすぎたようでごさるな」



ブリオツシユのその言葉にレオも胸を撫で下ろしたように1つ息を吐いた。

「……シンクには後で礼を言わねばならんな」

「必要ないと思つてござるよ。あれは彼が自分から望んでやったことである故。……それよりレオ様、我らの戦い、続けるでござるか？」

レオの耳がピンと立つ。

「それはどういう意味じゃダルキアン？」

「今ソウヤ殿は輝力を使いすぎの状態でござるつ。おそらくこの後救護班に拾われると思われる。……レオ様としてはその時近くにてあげたいのではござらんか？」

「なっ……！なぜワシが！？」

ブリオツシユが不思議そうに首をかしげる。

「レオ様はソウヤ殿の召喚主である故、そう思っただけでござるが……。特に他意はないでござるよ」

「な、なんじゃそういうことか……。確かにそう言われてみればその方がよいかもしれんな」

「この戦いは預けておくでござる。ゆっくり話す時間があってもいいでござるつ。行ってさし上げてはいかがでござるか？」

レオは一瞬黙って考える。

「……では言葉に甘えんとするかの。すまんな、ダルキアン。1つ貸しじゃ」

「なんの、気になさらないで下され」

魔戦斧グランヴェールを肩に担ぐと、レオは愛禽ドーマへと飛び乗り、自陣へと引き返していく。

「よかったですか、お館様？」

2人の戦いの様子を後方から見守っていたユキカゼがブリオツシユの元へと駆け寄り問いかける。

「確かにレオ様と戦うのは楽しみではあったが……まあ仕方ないことをごさるよ。心ここにあらず、という具合だった故なあ」

「そうだったのですか？」

「自身の心を懸命に隠しているようではあったが……内心では相当にソウヤ殿のことを心配していたようでごさるよ」

「あんなのでも気にかかれるとは、レオ様はさすがのごさるな」

「これこれユキカゼ」

主は困った顔を見せるが臣下のユキカゼは済まし顔で聞き流している。

「まあ実際のところ拙者も心配はしていたでござるから、一安心でござる。……ユキカゼ、そなたもなんだかんだで気にかけてはいたのでござるっ?」

「……確かに親を失った、ということでは拙者に似た境遇だったし、シンクや姫様、他の方々の協力をしたという心はあったでござる。……でも拙者のことをあんな呼び方で呼ぶ以上、個人的に好きにはなれないでありますよ」

「はは、ユキカゼもそういう自分に正直になれないところはエクレールに似てきたでござるかなあ」

「な!? 拙者はいつだって自分に正直でござる!」

愉快そうに笑うブリオツシュに対してユキカゼが懸命に反論している。

と、そこに作戦の連絡を取り持つ騎士がセルクルを寄せてきた。

「ダルキアン卿!」

「おお、作戦の変更でござるか?」

「はい! ダルキアン卿揮下の3番隊は本陣手前まで後退、シトロン砦の動きに注意されたし、とのことですよ」

「シトロン砦の動き? ……ではもしかやシトロン砦は……」

「はい……。勇者殿同士の一騎打ち後、ガウル殿下揮下の奇襲部隊によって砦内部を制圧されました……!」

## Episode 14 対決・2人の勇者（後書き）

DDDで書きたかったことの一つ、この物語のタイトルでもある「DUAL-BRAVER」つまり2人の勇者同士の激突です。

この物語中で非常に重みを置くところであるはずなのですが、どうも戦闘があっさりしすぎてるといふか、頑張つて書いたは書いたんですが、イマイチ盛り上げきれなかったかなという後悔と反省もあります。

というか、先のダルキアン戦は最初から最後は死んだふりで決めると流れを決めていたのですが、今回はどう決めるかを決定しきれないまま書き出し、書いている流れでいい感じにはなつたかなと半ば無理矢理納得してしまつたのが大きいかと思ひます。

要は夕日をバツクに河原で殴り合いのケンカして「お前強いな」「へっ、お前こそ」で友情を深める、なんてのがやりたかつたんです。

シンクのセリフにはなのはや原作DOG DAYSのぱく……オマージュが含まれてます。

まず「僕なりのやり方で」というのはなのはA・Sのなのはさんの「悪魔らしいやり方で話を聞いてもらうから」が基です。あれを初めて聞いたときは衝撃的でした。

あとは原作アニメ8話のラストでミルヒが言ったセリフですね。これは説明不要でしょう。心からレオのことを心配するミルヒを描いたセリフで、個人的に劇中でかなり好きなセリフです。

両方とも原作者の都築氏に敬意を表してぱく……オマージュさせていただきますました。

シンクの棒術について。

一応カポエイラ同様、動画を参考として見たのですが、棒術すごいですね。

てつきり長物と思っていたのですが、手元に戻すと近距離にも対応できるという。

2期でのシंकクのパラディオン捌きに期待です。

「な、な、なんと！ここでまたしても驚くべき情報です！先ほどの勇者同士の一騎打ちの熱気も冷めやらぬシトロン砦ですが、ガウル殿下が内部戦を攻略し、制圧したという情報が入ってまいりました！一騎打ちでついた点差がこれで大幅に縮まり、ビスコツティのロードが大きく詰められるという状況に変わりました！」

救護隊のセルクルが引く車に揺られながら、ソウヤはその放送を聞いていた。

「さすがガウ様だな。シンクという助っ人分を差し引いても、きっとちり落としたか……」

ソウヤは口元を緩めた。

今ソウヤはシトロン砦からガレット本陣へと戻る道にいる。シンクとの戦いのダメージはそれほどではなかったが、輝力の使いすぎのために救護班の世話になることとなった。そしてその際、レオからの命令で本陣で休ませたいという旨を受け、救護隊と共に引き返している途中だった。

しばらくしてソウヤを乗せた車がガレット本陣へと着いた。

救護隊が担架を出そうとするが、それをソウヤが手で止めて車から飛び降りる。少し足元がふらつくが、特に問題がない様子でレオ

専用のテントの前へと進んだ。

見張りの兵に事情を話し、兵が中のレオに確認を取る。レオの「入れ」という言葉を聞いた兵士は入り口の道を譲り、ソウヤはその入り口をくぐる。中にいたのは椅子に腰掛けたレオとその傍らに立つビオレの2人だけだった。

「ソウヤ・ハヤマ、戻りました」

「……まさか自力でここまで来たのか？」

「いえ、そこまでは救護隊に送ってもらいましたよ。さすがに輝力の使いすぎで足元が多少ふらつきますからね」

「やはりそうじゃろう。だから呼び戻したんじゃ。……貴様はそんな状況でも戦うとか言い出しかねんからな」

「さすが閣下、わかっていらっしやる」

ソウヤの減らず口にフンと不機嫌そうにレオは一つ鼻を鳴らした。

「そのベッドを使い。横になったほうが楽だろう」

「いいんですか？」

「構わん」

「では失礼します」

ソウヤはベッドに横になり、大きく息を吐く。シンクとの一騎打

ちの前から感じていたが、やはり疲労の色が濃い。

と、ビオレが扇子のようなものを手に扇ぎ始めてくれた。

「すみません」

その言葉にビオレはにっこりと微笑む。

「……お前とシンクの戦い、いい勝負だったな」

レオが椅子から立ち上がり、ソウヤへと近づく。

「いい勝負かどうかの判断は見ていた第三者に任せます。ただ俺はあの戦いで負けた、というのだけは事実です。……その点については謝らなければなりません、俺のせいでポイントに水を開けられたわけですから」

フン、と再び鼻を鳴らしてレオはソウヤが寝るベッドの淵に腰掛ける。

「相変わらず気取ったセリフを吐きおって……。貴様自身、シンクとの一騎打ちは楽しくはなかったのか？」

一瞬ソウヤは考えた様子を見せたが、

「……楽しかったですよ。あいつにこの世界の戦はこんなにも楽しいってことを教えてもらいましたから」

はっきりとそう言った。



「ならそういうことじゃ。お前自身がそう思えたならそれでいい。結果など二の次じゃ。相手が万全の状態で神剣まで使っていたのに対し、お前は攻撃戦で疲労困憊、使っていたのも普通の武器、これでは勝てるものも勝てんしな」

「負けたことに対しての言い訳はしませんよ。もしなんとかなら、つてのは仮定の話ですし」

「まったく可愛げのない奴じゃ。……ともかく、負けたせいで点差が云々も気にするな。ガウルがシトロン砦を落としたり、お前の負け分は差し引きゼロじゃ。今はゆっくり休め」

「そうしたいところですが戦はまだ終わってないんでしょう？ならゆっくりはできませんね。さっさと輝力を回復させて戦線に戻りたいところですが……」

「……やはりそう言うか」

レオがため息をこぼす。

「仕方ない、お前はそのまま休ませるつもりじゃったが……」

チラリとレオがビオレに視線を送る。するとビオレが扇ぐのを止めた。そしてそのまま外へと出て行く。と、レオが右手をソウヤへとかざした。手の甲の紋章が輝き始める。

「……何をするんです？」

「ワシの輝力を分けてやる」

「輝力を分ける？そんなことが出来るんですか？」

「……まあな」

「そうですか……」

そう言うとソウヤはフツと笑った。

「何がおかしい？」

「いえ……俺が普段読む小説じゃその手の方法は粘膜同士の接触、とかが多かったもので。ビオレさんも出て行ったし、てっきり空気を呼んだのかと。勝手にそう思っただけです」

「フン、そうか……って粘膜同士じゃと！？そ、それってまさか……せ、せ、接吻……」

レオの顔が見る見るうちに赤くなる。

「……レオ様、意外とウブなんですな。からかいがいがある」

「や、やかましい！」

声を出してソウヤは笑った。

「……ちゃんと笑えるではないか」

一瞬の間を置き、その様子を見てまだ顔が少し赤いままのレオがそう言う。

「ワシはお前のことが心配だった。何の感情もなく、虚ろな目をして他人との接触を拒む……そんな者なのではないかと不安に思っていた」

「……ま、ずっとそんなもんでしたよ。でもどこかの馬鹿がこんな俺のために無理矢理にでも仲良くなる、とか言い出して拳句俺に勝っちゃった……。そいつの真っ直ぐな心と剣に、俺は間違っていたって教えてもらったんです」

「……そうか」

沈黙が広がる。

「……そついやレオ様、まだ謝ってませんでしたね」

「謝る？一騎討ちに負けての点差のことならよいと言ったはずだが？」

「いえ、そのことではないです。……召喚してもらってからずっと迷惑ばかりかけてることです。ただでさえ領主の仕事に追われているだろくに俺なんかのせいで余計に気苦労も増えたでしょうし……。今もこうして迷惑かけてますしね」

「フン、謝る必要などない。お前を召喚したのはワシじゃ。言ったであろう、お前が元の世界に戻るまでワシにはその安全を保障する責任がある、と」

「そうですか。……あまり無理しすぎは体に毒ですよ。普段気丈に振舞っておられるから忘れがちですが、あなただって俺と大して年の変わらない女性なんだ。……それも意外とウブな、ね」

「や、やかましいわ！それ以上言うと輝力を分けるのをやめるぞ！」

「ええ、もう十分ですよ。大分体も楽になりましたし、ありがとうございます」

「む……。そうか」

レオがかざしていた右手を戻し、ソウヤが起き上がる。そのままレオと並ぶ形でベッドの淵に腰掛けた。

「……こうやってお互いにちゃんと話したのは初めてですかね」

「そうかもな……」

会話が止まる。

しばらく続いた沈黙を破ろうとレオが口を開きかけたとき、入り口からビオレが入ってきた。

「ソウヤ様、冷たいお水をいただいできましたが、お飲みになりますか？」

「ありがとうございます。いただきます」

しばらくソウヤの様子をみつめていたレオだったが、やがて床へと目を落とす。ビオレがソウヤの持つグラスになみなみと透明な液体を注ぐと、それを一気に飲み干してソウヤは大きく息を吐いた。

「……さてと、俺としては戦場に舞い戻りたいのですが、いいです

か？」

レオがやれやれとため息をつく。

「どうしても行くか？」

「行かせてください。俺のせいで取られた分の点を取り返す……というのがあります……。滞在期間が決められる以上、その間は勇者として戦って、この世界を満喫するってのも悪くない、とか思うようになりましたから」

そのソウヤの言葉を聞くとレオは一つ頷き、ポケットから青い寶石のはまった指輪を取り出した。

「……エクスマキナ……。使えと言うのですか？」

「そうじゃ。今のお前の言葉を聞いて確信した。お前は間違いなくガレットの勇者じゃ。今のお前にこそこの宝剣はふさわしい」

「ですが俺は……」

「ソウヤ様、お使いになってください。あなたはこの国の立派な勇者様です。きっとエクスマキナもあなたに使われることを望んでいるはずですよ」

「ビオレの言う通りじゃ。お前がこれを使うことを誰も咎めはせん。もしそんな輩がいたら、ワシがガレット獅子団領主、レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワの名の下に叩き伏せてやる」

しばらくエクスマキナを見つめていたソウヤだったが、根負けし

たように小さく笑った。

「……レオ様、それは領主権力の濫用でしょう。……でも、ま、領主様に認められたなら、喜んで使わせていただくと思いますかね……！」

レオがソウヤの手を取り、人差し指にエクスマキナをはめる。それを見ていたソウヤは小さく笑った。

「……何を笑っておる？」

「いえ、別に。使い方は？」

「お前が望めば剣だろうが弓だろうが、好きな形に変えることができる」

「へえ……」

指輪をまじまじと見つめた後、手を反対に返す。すると光と共に派手な装飾があらわれた金の剣が現れてソウヤの手に握られた。

「……それは剣か？」

「俺が読んでた小説の中に出てきた剣をイメージしてみたんですが……。なるほど、派手すぎますね。実戦には向かないな」

一度その剣が光に包まれる。再び現れた剣は先ほどまでソウヤが使っていたような実にシンプルな剣だった。

「ま、これでいいか」

「今度は逆にえらく飾り気がないな……」

「じゃあ……」

ソウヤの手の甲の紋章が輝く。すると刀身が鮮やかな青を放ち始めた。

「ほっ……」

「見た目でもある程度の派手さは必要でしょうからね。魅せてなんぼ、の戦でしょうから」

「なんじゃ、ガウルみたいなことを言うようになったの」

フツと笑みをこぼし、エクスマキナを指輪に戻す。

「……それで、俺はどうしたらいいですか、総大将殿」

「ビオレ、現在の状況は？」

「はい。主戦場のロックフォール平原ですが現在もガレットの本隊とビスコッティの1番、2番隊の戦いが続いています。戦況は五分と五分。ですがダルキアン卿揮下の3番隊が本陣前まで後退。おそらくガウ様が落とされたシトロン砦の動きを警戒していることかと思われます」

「シトロン砦には多少の戦力は向かわせた。が、到底本陣に攻め込めるほどではない。ガウルも三馬鹿の連中も疲労しきっておるじゃろうしの。逆にそこで3番隊、殊にダルキアンとユキカゼに攻め込

まれてはかなり厳しいじゃろう。そのままでは再奪還されてしまうかもしれない」

「じゃあ俺は3番隊を抑えに動くか？」

レオがソウヤを見る。

「お前ではない。ワシ達じゃ」

「ではレオ様もおいでになるのか？」

「当然じゃ。やはり戦場にいるほうが性に合っておる。それに……平原でのダルキアンとの戦いは預けたままだしの」

「私もお供します」

ビオレの発言に驚いた顔を見せるソウヤ。

「……ビオレさんって戦えるんですか？」

「あら、こう見えてもレオ様の側役である前に近衛隊の隊長ですよ」  
「？」

「ビオレ、すまないがお前の近衛戦士団を借りれるか？」

「お任せください。レオ様とソウヤ様、確かにビスコッティ3番隊の元へとお届けいたします」

ビオレが畏まったように頭を下げる。



「よし……では準備じゃ。出来次第出発するぞ」

## Episode 15 勇者と召喚主（後書き）

ソウヤ、デレ始めるの巻。

ここは書いていて楽しくて、自分としてはかなり速い速度で書き上げたのを覚えています。

大抵魔力の補給といったらチューが相場ですよね、スパロボの魔装機神でもそんなことしてたし。

他に特筆すべきこともなさそうなのでソウヤの戦闘スタイルについて。

参考にしたのは「ドラゴンクエスト」というネットゲアクションRPGに出てくるアーチャー、及びその上位職のアクロバットです。ちなみに自分はコミュニケーション取るのが苦手で、PT組むのが怖くてほぼソロ専、そのせいでレベル30ぐらいでやめてしまいました。

アクロはメインウェポンが弓なのにスキルに蹴り技が多くあるという面白い職で、本編中でソウヤの言っていた「両手がふさがるという遠隔武器の弱点を蹴りで補う」という形になっています。

余談ですがこのアーチャーの声優が阿澄佳奈さん、ご存知ユキカゼと同じ声優さんです。でも「ラララモルセヨ！」が聞けるのは本国版だけです。

また、一騎討ち時の剣と格闘というスタイルはるる剣の初期の蒼紫を参考にしたりします。彼はあの後小太刀二刀流になったためにあのスタイルはほとんど見られなくなってしまうましたが……。

ロックフォール平原を僅か20騎あまりの隊が駆けて行く。隊の指揮を取る総大将のレオ、さらに勇者のソウヤ、レオの側役でありながら近衛隊の隊長でもあるビオレ、そしてその近衛隊戦士団。

数こそ少ないが精鋭揃いの部隊であり、その目的はシトロン砦に揺さぶりをかけようというビスコッティ3番隊の足止めであった。

と、前方から先行して偵察に出ていた近衛戦士団2名が戻ってきて合流した。

「ビオレ姉様、ビスコッティ3番隊はどうやら先行隊約200騎をシトロン砦に向かわせて様子を見るようです」

「200……ですか」

「まずいな……今のガウル達の戦力がばれる……。このままだと砦戦に切り替えてくるじやろう」

「逆にチャンスでしょう」

ソウヤの発言にレオとビオレの視線が集まる。

「なぜじゃ？」

「200程度、となればこの隊で側面を突けばそれなりの打撃を与えられる。こつちにはレオ様の紋章砲もあることですし。しかも先行隊ならある程度の被害が出れば一旦引くでしょう」

「それはそうかもしれんが……。じゃがまた奇襲か？お前は奇襲が好きなのか？」

「真正面切つてぶつかるなんてのは大部隊同士がやることです。相手は200、こつちは20だ。10倍戦力差に正面からぶつかるのは無謀でしょう。……それに予想外の展開が起こった方が盛り上がりたりもするもんですよ」

ソウヤの目をしばらく見つめていたレオだったが、やれやれとため息をついた。

「……お前の案を採用するか。先の進軍ルートを使えるじゃろ？」

「はい。頭に入ってます」

「よし、案内せい」

ソウヤを乗せたセルクルが前に出る。これまでの道を逸れ林の中へ。木を避けつつ一団が進む。

しばらく進むと小高い丘の上に出た。右手前方にはシトロン砦、そしてそこを攻略しようかと砦に迫るビスコッティ兵の姿。

「うむ。いいタイミングじゃな」

レオの言葉にソウヤも口の端を緩める。

「それで、レオ様先行しますか？」

「うむ。ワシが先に突っ込んで蹴散らしてくれよう。適当に残敵の掃討を任せるぞ」

「期待してますよ、閣下」

ソウヤの方を振り替えしレオがニヤツと笑う。

「任せるがよい。行くぞ、ドーマー！」

レオの声に応える様に一つ嘶いなないたドーマーがスピードを上げる。

「……レオ様、楽しそうです。あんなに楽しそうにしてらっしゃるのは、きっと勇者様のおかげだと思います」

「……俺は何もしてませんが」

「レオ様としては、一緒に肩を並べて戦える方がいるというだけで嬉しいんだと思います。それが御自分が呼び出された勇者様なら、なおのことです」

「そんなもんですかね」

「それに……フフツ。……まあとにかくレオ様としては楽しいし嬉しいんですよ」

自分のことのように嬉しそうに話すビオレにソウヤは表情を崩して答える。

「……レオ様がそろそろ切り込まれる。こちらでもスピードを上げましょうか」

ソウヤのセルクルがスピードを上げる。ビオレ達近衛隊もそれにつられるように速度を上げていく。

『実況席！実況席ー！こちらシトロン砦のパーシーです！ガウル殿下に落とされたシトロン砦を奪回すべく、ビスコッティ3番隊の先行部隊が迫る中、なんと側面から迫る影があります！』

「今日は気分がいい……2発目、行くぞ！」

国营放送のカメラがその先行隊に迫る1人の戦姫の様子を捕えた。

『はいパーシーさん！こちらでも映像を確認しました！こ、これは……！』

先行隊の左側面から猛スピードで迫る黒いセルクル。そしてその主がそこから飛び降りて着地すると同時に紋章が浮かび上がり、地面から幾つもの火柱が立ち上る。

「獅子王！炎陣……」

さらには空から隕石かと思うような巨大な火の玉。突然のことに虚を突かれ、逃げ惑う3番隊の兵達がそれに巻き込まれてけものだま化していく。

『レ、レオンミシエリ閣下だー！』

「大！爆！破ア！」

愛斧グランヴェールを高々と掲げるとその周囲にすさまじい爆発が巻き起こり、けものだまの山の中にレオは堂々と立っていた。

『ば、爆破ー！今日2度目！戦場で2度もレオンミシエリ閣下が獅子王炎陣大爆破を披露したことがあったでしょうかー！？相変わらずこの威力！先行隊は大打撃だー！』

突然の奇襲に先行隊の残存兵達が動揺を見せる。が、紋章術直後は体への反動が大きく隙が生まれやすいこともまた彼らは知っている。

「紋章砲の連続はない！全員、総大将を討ち取れー！」

撃ち漏らした兵達がレオに迫る。だがそのレオの背後、1人の弓師を乗せたセルクルが駆け寄ってきていた。

「ヘッジホッグ・アルバレスト！」

放たれた矢はレオに迫ろうとした兵全てを少しの違いもなく撃ち抜いた。

『こ、これは！勇者だ！なんと先ほど一騎打ちに敗れて救護隊に連れられていったはずの勇者が戦線に復帰してきたー！』

レオがソウヤの方を振り向く。ソウヤはセルクルから飛び降りるとレオの横に並んだ。

「さすがじゃ。的確な援護じゃの」

「レオ様こそ。ド派手な技ですね」

フツとレオが得意気に笑い、ソウヤも微笑を浮かべる。

「近衛隊、レオ様と勇者様を援護しつつ残敵掃討！」

「了解！」

ビオレの凜々しい声と共に近衛隊戦士団が突撃していく。普段の服装とは異なる黒を基調とした服に身を包み、その右手には特徴的な形状をした短剣が握られている。

(カタル……いや、正式名称はジャマダハルだったか)

かつて読んだ小説にも似たような武器は登場していたため、ソウヤはその武器の名前を知っていた。通常の剣とは持ち手に大きな違いがあり、手に持つと拳の先に刀身が来る造りとなっている。そのため刺突に優れた格闘向きの武器だ。

ビオレはその短剣を振るい、ビスコッティの兵達を次々と打ち倒していく。普段のおっとりした様子からは想像できないほど俊敏に、そして華麗に舞うように戦い、時には頭部へのタツチアウトも決めていった。

「だ、ダメだ！全軍撤退！一時撤退！」

既に戦力の半分以上を失ったビスコッティ兵が敗走を始める。その様子を確認すると皆から歓声が上がった。



「姉上！ソウヤ！」

砦の門が開き、中からガウルとジェノワーズが駆け寄ってきた。

「ガウル、よくここを落としてワシらの到着まで持ちこたえてくれた」

「礼を言うのはこつちだぜ。姉上が来てくれなかったらあの数でもどうなってたかわからなかったからな。……それよりソウヤ！お前あんなに無理したつてのにもう戦線に戻ってきてもいいのかよ？」

「レオ様の許可は降りてます。……それに」

ソウヤは右手の人差し指をガウルへと見せる。

「お前まさかそれ……エクスマキナか!？」

「ええ。レオ様から正式に預かりました。俺はフロニヤルドの戦を楽しみたい、そう思ったからここに戻ってきたんです」

ガウルがソウヤの目を見つめる。が、何かを悟ったように微笑んだ。

「……なるほど。シンクと戦ってようやく自分に素直になれたらしいな」

「おかげさまで。……そのお礼をあゝ馬鹿に返してやりたいところですが、あいつは平原の方に行ったらしいですし。このあと3番隊を抑えないといけないんで、今日のところは見逃してやるってところですかね」

「3番隊を抑えるって……姉上、どうする気だ？」

「今向こうの3番隊にはダルキアンとユキカゼがいる。タイムアップも迫っておるし、この2人を攻撃戦に参加させなければここは守りきれぬじゃろう」

「それはそうかもしれないが……」

ガウルが少し考えた後、レオとソウヤを見る。

「……その2人、どうせ姉上達2人で抑える気だろ？」

「ワシはダルキアンとの勝負を預けたままになっておるからな」

「俺は個人的に巨乳ちゃんと戦いですし」

「やっぱり俺は除け者か」

思わずガウルがため息をこぼす。

「しかしソウヤが負けた後の内部戦、お前がシンクをうまく封じてくれたおかげで制圧が出来たんじゃろ？」

「……まあな。あいつが文字通りバカで助かった。俺との戦いに気を取られてる際にジェノワーズと残りの兵でここは制圧できた」

「じゃがその影響でお前には疲労が残ってる」

「それを言ったらソウヤだって一緒だろ？」

「俺は大丈夫です。レオ様に輝力を分けてもらいました」

そのソウヤの言葉を聞いてガウルの顔色が変わる。

「な……輝力を分けてもらった、って……。おい、姉上！」

「ともかく、ワシとソウヤで行く。お前はジェノワーズやビオレ、近衛隊、それに残った兵達の指揮を取ってこの砦を守り抜け。現在のポイント差ならここを守りきることは勝利へと繋がる。……あとは平原で動きがあるか、ワシかソウヤが善戦をすれば逆転勝利も見えてこようぞ」

しばらく黙っていたガウルだったが、

「……わかった。ここは守り抜く。向こうの2人は姉上達に任せませ」

硬い表情を崩さずそう言った。

「よし、そうと決まればワシ等に行く。ジェノワーズ、ビオレ、任せたぞ！」

「了解。お任せください」

ノワールが短く答える。

「大丈夫や、ビオレ姉ちゃんもいることやし。……姉ちゃん、頼りにしてまっせ！」

「ジョー、私達も頑張るのよ……」

いつもの調子のジョーヌとベールを見てレオは小さく笑った。

「……行くぞ、ソウヤ！」

「仰せのままに」

レオがドーマに跨り皆から離れていく。それに続くソウヤも見送り、ガウルは皆の中へと引き返していった。

## Episode 16 勇者の帰還（後書き）

DDDで書きたかったことの一つ、ビオレ姉さんの勇姿です。

原作では颯爽と敵本陣に急襲をかけるも、リコに一枚上手を取られ、リゼル隊長のドヤ顔で退場した後、出ては来るけどセリフがないという扱いが不憫でなりませんでした。

武器はジャマダハルを持たせていますが、これはビオレ姉さんのことを姉様と慕うルージユが原作で使っていたためです。また、格闘戦が得意そうな印象も受けたのでというのも理由です。なんかアサシン、って感じも合いそうですし。

姉さんの戦闘服は凛々しくてかっこいいです。MHFでいうとメロン装備に似てる気がします。

是非とも2期ではそんな姉さんが華麗に戦う姿を映像で拝見したいところです。

「なるほど、先行隊はレオ様とソウヤ殿、それに近衛隊の攻撃によつて被害甚大ということでござるか」

報告を受けたブリオツシユはそう言うと考え込むように右手を顎に当てる。

「いかがなさいますか、お館様？」

「ふむ、皆攻めのつもりではあったが、あの2人が来たとなると少々手こずりそうでござるな。残り時間とポイント差を考えると、ここを諦めて平原部へ行ったほうが得策とも思えるが……」

「現在僅かながらビスコツティがリードの状況であります故、このままなら我々の勝ちとなります。お館様のおっしゃるとおり、あえて火中の栗を拾うような真似はしないほうがよいかと拙者も思います」

「うむ。ポーナスがなければ今のところ我々の勝ちは揺るがない。……しかしそう易々と勝たせてくれるとは思わないでござるがな」

ブリオツシユがそう漏らすとほぼ同時、

「て、敵襲ですー！」

辺りを警戒していた兵の声が飛ぶ。

「やはり打って出てきたでござるか。数は？」

「そ、それが……」

ブリオツシュが兵から手渡された望遠鏡を覗き込む。

「……なるほど、これは面白いことになってきたでござる」

今度はユキカゼへと望遠鏡を手渡す。

「……2人!? レオ様と勇者の2人だけですか!？」

「そのようでござる。おそらく拙者たち2人を止めるために来たのでござる」

「でしたらこちらの戦力全てをぶつければ……」

「それは無粋でござろう。それにせつかくの向こうからの誘いを断るのもまた無粋でござる。勝つだけなら簡単でござるが、ここは向こうの誘いを受け、最後の盛り上がりを見せた上での勝利、ということでなければこの戦に勝ったとは言えない、と拙者は思っております」

「……承知しました。拙者はお館様の意思に従います」

「うむ。助かるでござるよ、ユキカゼ」

そう言うとブリオツシュは隊の騎士、エミリオ・アラシードを呼

んだ。

「何でしょうか？」

「拙者とユキカゼはここでレオ様と勇者殿を迎え撃つ。そなたにこの隊を預ける故、その間にシトロン砦へと攻撃を仕掛けてほしいで  
「じゅる」

「自分が指揮を……でありますか？」

「そうで「じゅる」。親衛隊注目株のエミリオ殿の手腕、期待してるで  
「じゅるよ」

「了解いたしました。ですが自分は注目株などでは……」

「ははは、謙遜を。ともかく任せたで「じゅるよ」

わかりました、とエミリオは頭を一つ下げ、兵達に命令を伝達して移動を開始する。その様子を見送ると、ブリオツシュは自分のセルクル「ムラクモ」から降りた。

「ですが……ここまで2回連続で奇襲をかけている勇者のことです、もしかしたら本隊の動きを読んで待ち伏せを仕掛けているのでは……」

「いや、それはないと思うで「じゅる」。2人がこちらに向かってくる、つまり拙者がユキカゼのどちらかに勝つことによるポイントの逆転が狙いと考えられる。しかしせっかくそこで勝ちを治めてもシトロン砦を奪取されてはその勝利によるポイントも水泡となってしまふ。なら下手な小細工をして多いとは言えない貴重な兵力を割くことは



せず、守りに徹してくる、と拙者は考えているでござるよ」

「……なるほど、お館様のおっしゃる通りと思います」

「もつとも、他人の心配をするより……」

2人の前に2羽のセルクルが近づく。そしてそこからそれぞれが降りてくる。

「……拙者達は自分達の戦いに集中した方がよさそうではござるが」

「ダルキアン、それにユキカゼ。貴様らだけか？」

「そうでござる。拙者達以外の3番隊の兵はシトロン砦へと進攻したでござるよ」

予想通り、と言わんばかりにレオがフンと鼻を鳴らした。

「そつちのことはガウルに任せてある。……ワシはさっき預けてもらった勝負の決着をつけに来た」

「ここでの勝利はそのまま全体の勝利へと繋がるから、でござるな」？

「ああ、そうだ。……できるなら先ほどの続き、一騎討ちでやりたいところじゃがの？」

一瞬言葉を切り考えるブリオツシュ。

「……その提案、お受けしよう。ユキカゼ、ソウヤ殿を任せるでい

れる」

「……承知いたしました」

少し嫌そうな顔を浮かべたユキカゼだったが、主の命を了解した。

「場所を変える。……ソウヤ、そっちは任せたぞ」

「努力しますよ」

自分の主を見送り、ソウヤは目の前の相手へと視線を移す。

「……さてと、邪魔もなくなったところで2人で楽しむとでもしますかね」

「拙者は別に楽しそうともなんとも思っていないでござる。……シンクとお主の戦いは見させてもらったでござる。いい戦いだっただござるし、シンクもお主も互いに認め合ったということはわかった。ただ、それでも拙者は個人的にお主が嫌いであるでござる」

「随分なことを言ってくれるな、巨乳ちゃん」

露骨にユキカゼが顔をしかめる。

「それでござる。……人のことをバカにしたようなその呼び方……。拙者ばかりそんな風に呼んで、胸だけで言ったらレオ様だって相当なものではござるう？」

「そりゃそうだが。……あの方は俺にとっては主にあたる、お前にとつてのダルキアン卿みたいなもんだ。ならそんな人に失礼な物言

いは出来ないだろ？」

「失礼とわかってるなら拙者に対してもやめてほしいでござる」

「そうか。……なら俺が負けたら呼び方は改める、ってのはどうだ？」

ユキカゼが不愉快そうに一つ息を吐く。そして懐から短刀を逆手に抜き、構えを取った。

「大した自信でござるが……拙者はお館様のように甘くないでござる。勝ちを譲るなどということはするつもりは毛頭ない故……」

「甘くない、じゃなくて俺が気に入らないだけだろう。……まあそれでいい。弓に剣に体術、俺と似た戦い方、見せてもらう……！」

ソウヤもエクスマキナを剣状に変化させて左手に持って構える。

「その剣……まさかガレットの宝剣……」

「そうだ。レオ様からお借りした」

「そうでござったか……。しかしたとえ宝剣を使っていようと、拙者は負ける気はないでござる」

「それはこっちも同じだ」

互いに構えを取り、張り詰めた空気が流れる。

先に動いたのはユキカゼだった。

紋章術による高速移動、ソウヤとの間合いを一瞬にして詰め、懐へと潜り込む。

「紋章拳！ユキカゼ式体術……」

ユキカゼの手の甲に黄色の紋章が浮かぶ。そしてその拳をソウヤの腹部目掛けて叩きつけた。

「狐流蓮華昇！」

ソウヤの足が宙に浮いたところで輝力を込めた蹴り。その体がさらに高く浮かぶ。

「斬！」

再び紋章術による高速移動で吹き飛ばしたソウヤに追いつき、右手の短刀を振るう。

だが、ソウヤは空中でその刀をエクスマキナで受け止めた。

「なっ！？」

そのまま体を捻り、左の膝をユキカゼの側頭部目掛けて振りぬく。

「くっ！」

攻撃を止められた右手でその膝蹴りの頭への直撃を避けるユキカゼ。そのままバランスを取り直して着地した。

ソウヤも何事もなかったように足を地につける。

「なるほど。突き、蹴りで浮かせてとどめの斬撃か。いい連携だ」

冷静なソウヤの分析を聞きつつ、ユキカゼは内心では穏やかでなかった。

（今の攻撃を全体的確に防がれた……。右の突きは左の肘、蹴りは足の裏、そして斬は剣で……）

ギリツと奥歯を噛み締める。

（この勇者……口だけではないでござる。先ほどあれだけ紋章術を使い、さらにシンクと戦った後でさえこの動き……つかつかしてはられない……！）

「どうした？尻に火がついた、って顔をしてるぞ？」

ソウヤの挑発にもユキカゼは乗らない。ただ隙をつかがうようにじっと構えている。

「やれやれ、今度は無視か……」

そういつとソウヤはエクスマキナを指輪へと戻した。

「なっ！？……何を考えているでござるか？」

「こいつじゃ長すぎる。かといって短いのであったとしても持てば左手の小回りが利かなくなる。……ならもっというのは……」

ソウヤの両手両脚が光に包まれる。装備している手甲と脚甲が蒼い光を放ち始めた。

「……輝力武装、でござるか」

「いや、格闘用にエクスマキナで補強しただけだ。あんなガウ様みたいに輝力武装なんてしたら輝力がいくらあっても足りなそうだからな」

そう言つとソウヤは今まで同様腰を落として構える。が、今度はまるでステップを踏むようにその体を左右へと振り始めた。

「……ふざけてるでござるか？」

「いいや、いたつて真面目だ。……来ないならこちらから行く」

体が右に振れた瞬間にソウヤが紋章術による高速移動を行う。瞬時に間合いを詰め、手について左脚で下段への足払い。

ユキカゼが足を浮かせてその攻撃をやり過ごすが、今度は体を捻らせながらの逆の右足による回し蹴りが上段へと伸びてきた。

左手でその足を止める。さらに今度は左脚による中段への突き出し式の蹴り。右手を割り込ませてユキカゼはなんとかそれを防御し、そのまま数歩後ずさった。

「なるほど、さすがシンクに体術を教えただけのことはあるってわけか」

追撃を止め、立ち上がりながらソウヤはそう言った。その表情が

らは動揺は見取れない。

だが一方のユキカゼには焦りの色が出始めていた。

（目の前でお館様との戦いを1度見てはいたが……そのときより明らかに動きがキレているでござる……。確かにシンクに対策を教えたのは拙者でござるが……ここまでは想定していなかった……）

一旦深呼吸し、気合を入れなおす。まずは心を落ち着け、次に倒すべき相手をキツと睨みつけた。

（奴の戦い方は蹴りがほとんど。なら拳の間合いに入り込めば……）

「俺は足技を中心に戦うから、懐に潜り込めばいい、とか考えてそうだな」

考えていることを的中させられたユキカゼの表情に今度は明らかに動揺が浮かぶ。

「な……なぜそれを……」

「なんだ、凶星か。素直ないい子、と聞いていたから最初に思いつきそうなことを言ってみただけだが、意外と当たるもんだ。本当に素直なんだな」

「……それを当てたからといって拙者に勝つことにはならないでござるよ」

「まあその通りだな」

ソウヤが構える。先ほどの動揺を振り払うかのように、今度はユキカゼの方から仕掛けていった。

「獅子王烈火！爆炎斬！」

レオとブリオツシユの戦いも白熱していた。

紋章剣の名を叫んだレオがグランヴェールを軽々と振り下ろす。

一方のブリオツシユも輝力を込めた刀でそれを受け止め、さらにうまく勢いを殺して攻撃から逃れた。

「ぬっ……」

レオが焦ったような声を上げる。

力で勝るレオと技に長けるブリオツシユ。その戦いは傍から見ればほぼ互角、しかしそれは周りから見た評価であり、レオの感じていることとは異なる。

実際レオの攻撃は今のようブリオツシユにうまくいなされ、一撃も命中していない。時折紋章剣を織り交せているのにも関わらず、である。

片やブリオツシユはほぼ防御に徹していたが、レオの攻撃後の隙を見て反撃していた。こちらにも直撃はない。だが気を抜けば当たる



ような場面はこれまで幾度とあり、そのことがレオに焦りを生ませ  
ていた。

加えて残り時間もその焦りに拍車をかける。もう残り時間が少な  
い。自分がここでブリオツシュを倒せば、その時点で勝利は大きく  
近づく。逆に引き分け、あるいは自分が負けるようなことがあれば  
ビスコッティの勝利は確定的だ。

「レオ様、少し落ち着いた方がいいでござる。攻撃が大振りになっ  
てきているでござるよ」

そんなレオの内心を見透かしたかのようにブリオツシュが苦言を  
呈す。

「やかましい、敵の貴様の戯言をワシが聞くと思ふのか？」

そう言いながらも、レオはブリオツシュの言っていることは適格  
だ、と判断した。

「いやいや、先ほどは勇者殿の心配で心ここにあらず、といった具  
合でござったが、今度は少々焦りすぎではないか、と思つた故……」

「な!?!心ここにあらず、じゃと!?!」

「おや、自覚がなかったでござるか?レオ様は相当に勇者殿のこ  
とを心配して戦いどころではない、と先ほどの剣は語っていたで  
ござるが」

「そ、そんなわけがあるか!」

「しかし実際に今度の剣は、ああ、まだレオ様の剣に焦りの生まれ  
てない一騎討ちが始まった直後でござるが、とても生き生きしてい  
たでござるよ。……それこそ御自分がお認めになった勇者殿と一緒  
に戦場を駆け、共に戦えることを喜んでるかのように」

「や、やかましいわ！……貴様、そうやって時間を稼ぐつもりじゃ  
な！？」

レオがグランヴェールを構える。

「おっと、拙者の企みがばれてしまったようでござるな。……とは  
いえ、今言ったことは拙者が感じたことというのは事実でござる。  
レオ様はどう思われたでござるか？」

「……確かに奴は勇者という名にふさわしい存在になった、とワシ  
は思っておる。それに……戦場であれば心踊ったのも久しぶりじ  
ゃ。……じゃがそれだけじゃ！別にそれ以外は……」

「やれやれ。ユキカゼのことをエクレールに似てきたと言ったでござ  
るが、ここにも似てきたお方がいらっしやっただでござるかな。レ  
オ様、もっとご自分の気持ちに素直になったほうがいいでござるよ  
？」

「だ、誰がじゃ！……ええーい、これ以上問答してる時間が惜しい、  
行くぞっ！」

レオが大上段からグランヴェールを振るう。その側面に刀を当て、  
ブリオツシユはその攻撃を逸らす。

「レオ様、心が乱れているでござるよ」

「誰のせいじゃー！」

さらに大斧を横へ薙ぐ。ブリオツシユは大きく飛び退き範囲の外へ。

「拙者のせい、と認めるとご自分が素直でないことを認めることにもなるでござるが？」

「ぬ、ぬう……。もう貴様の言うことには耳を貸さん！」

レオが不機嫌そうに地面にをグランヴェールで叩いた後、パタツとネコのようなその耳を閉じてしまった。

「おろ？レオ様？おーいレオ様ー？」

ブリオツシユが声をかけるが、レオは完全無視モードで構えを取る。

「少々やりすぎたでござるかな……」

苦笑を浮かべ、ブリオツシユも構える。

両者が再び激突する。

だが戦の残り時間はもう僅かになっていた。

『さあ戦の残り時間もあと僅か！現在の状況はビスコッティ側のリード！しかし十分ガレットの逆転もありえる状況です！』

実況の声が響く中、ソウヤとユキカゼの戦いは未だ続いていた。だが互いに決定打に欠いたままの状況。一発ではなく、手数勝負の打撃戦が展開されていた。

ユキカゼがソウヤの顎先目掛けて左の掌底を伸ばす。ソウヤが右手でそれを払い、代わりに固めた左拳をユキカゼの腹部へと打ち込む。だが、これには右肘を当てられて止められた。だがソウヤは体を半回転させ、上半身を低く倒しながら右の後ろ回し蹴りをユキカゼの上段目掛けて放った。

間一髪、後ろに飛び退いて鼻先をかすめつつその蹴りをかわす。そのまま蹴りの間合いを続けられることを嫌ったユキカゼはさらに大きくバックステップし、2人の距離が開いた。

『主戦場のロックフォール平原の戦績が五分と五分である以上、この戦いの勝敗の鍵を握るのがシトロン砦の攻防戦、さらにその砦の前方シトロン平野で行われているレオンミシエリ閣下とダルキアン卿、勇者ソウヤとパネトーネ筆頭の一騎討ちでしょう！、ガレットがここで勝利を収めるためにはシトロン砦を守り抜き、かつこの一騎討ちのどちらかが勝利、さらにもう一方も敗北としないことが条件となっています！しかし時間はもうほとんどありません！このままこの一騎討ちは引き分けとなってしまう、ビスコッティの勝利となってしまうのか！？』

肩で息をしながらユキカゼは実況を半分ほど耳に入れ、現在の状

況を整理する。

(そうでござる……。拙者がここでこやつに勝てばビスコッティの勝利はほぼ確実……。仮に勝てなくてもこのまま時間切れとなればお館様が負けぬ限り勝利となる……)

目を凝らしてソウヤの様子を確認する。やはり肩で息をして疲れは見せている。が、動きのキレは衰えていない。

このことに対しては殊ソウヤのことを好ましく思っていないユキカゼでさえも賞賛したくなるほどであった。ソウヤは攻撃戦からシンクとの一騎討ち、その後多少の休息は挟んでいるとはいえさらに連続で自分との戦い。疲労がないはずがない。

加えてソウヤの戦いのスタイル。自分との戦いの際にはこれまで以上にアクロバティックな動きが増えていた。おそらくそういった類の格闘技だろうと予想はつく。だがそれが余計に疲労を重ねているであろうことにもユキカゼは気づいていた。

しかしその動きに翻弄され、あるいは本来蹴りの間合いではない位置から放つ蹴りを目にし、ユキカゼは拳の間合いに入っても攻めきれずにいた。今のもそうである。拳の応酬が続くと思った矢先、ソウヤは無理矢理とも言える体勢から蹴りを放ってきた。今までの攻撃からある程度の予想がついたとはいえ、この状況からの蹴りというものはほぼ経験がなく、結果ユキカゼは間合いを空けて仕切りなおすしかなくなった、とも言えた。

(スタミナはかなりのもの……連戦に加えてあれだけ激しく動いてまだキレが衰えない。そこは見事でござる。……しかしそれももう限界のはず。このまま引き分け狙いの持久戦を続けてもいいが、こ

こは……)

「なんだ、考えごとか？それとも時間稼ぎか？……どちらにしろこちらが時間がもつない。そろそろ勝負に出させてもらおう」

ソウヤの闘気が高まる。しかし紋章術で来るというユキカゼの予想とは裏腹に、ソウヤの背後には紋章は輝かない。

「紋章術ではないようでござるな」

「真つ向勝負をかけてもあんたはそれを避けてくるだろうからな。なら一撃勝負ではなく手数勝負。避けきれないだけの攻撃を打ち込めれば、俺にも勝機は見える」

ステップを踏みつつ、ソウヤが構える。

「来ないのか？」

「勝負に出るといったのはそつちでござるつ？そちらから来てはどつでござるか？」

フツとソウヤが微笑をこぼす。

「ま、それもそうか。それにせっかくの巨乳ちゃんからの誘いを断つちゃ悪いな。……では、行くぞ！」

ソウヤが地を蹴る。

(乗ってきた！)

ほぼ同時、ユキカゼの右手の紋章が輝き、その掌に輝力が集中する。

(あれだけのスピードなら回避は不可能、仮に防げてもそこから追撃をつなげれば防ぎきるだけの余裕はないはず。つまりこれで……)

その輝力が巨大な手裏剣のように形作られていく。

「終わりでござる！閃華裂風！」

巨大な輝力の手裏剣をソウヤ目掛けて投げつける。紋章術の高速移動で向かってくる以上、その相対速度はかなりのものとなる。

「チッ！」

脚でブレーキをかけつつ両腕に輝力を集中させてソウヤがそれを防御する。だが強力な衝撃にソウヤの上半体が仰け反った。

それを見逃さずユキカゼが突進。再び右手の甲に紋章が浮かび上がる。

「ユキカゼ式体術……！」

その右手をソウヤの腹部目掛けて伸ばす。

「狐流蓮華……！」

「……狙いは悪くなかったんだがな」

そのソウヤの声を聞くと同時、ユキカゼが狙っていた場所からソ

ウヤの体が消える。慌てて目を動かすと側転気味に後方へと体を捌いたソウヤの姿が目に入った。

（まさか今の動きで勢いを殺した……！）

右拳が宙を切る。それを引き、踏み込みつつ逆の左拳でソウヤの体を狙う。

しかし側転後の左手を残して体を支えたままソウヤは側転で戻ってきた体を前方へと浮かす。そのまま倒れこむように右足でユキカゼの左拳を叩き落した。

「なっ!？」

あまりにも予想外のトリッキーな動きにユキカゼに一瞬の間隙が出来た。そこをソウヤが見逃すはずがない。

地面に着いた体を捻り、左脚による後ろ回しの蹴り込み。ガードの間に合わないユキカゼの体へとそれが吸い込まれる。

「カハッ……!」

肺の中の空気がユキカゼの口から吐き出される。

「ハアッ!」

さらにその勢いを乗せての浴びせるような右回し蹴りをソウヤは放った。

今度は声もなくユキカゼが吹き飛ぶ。数メートル吹き飛び地面に



ぶつかると同時、ユキカゼの装束がはじけ飛んだ。

「……悪いな。さっきシンクにはやられたが、騙し合いやら意表を突く策なんてのは俺の十八番なんぞね。一枚上手を行かせてもらった」

得意気にそう言うと、ソウヤはニヤツと笑みを浮かべた。

## Episode 17 決戦・オンミツ部隊（後書き）

ここもDDDで書きたかったことの一つ、ソウヤ対ユキカゼです。これまで剣を持ってきたソウヤですが、相手が格闘戦ということで剣を封印、こちらも格闘戦に特化。そのためカポエイラ色が一気に強くなっている……はずの戦いです。

「ステップを踏むように体を左右に振る」というのはカポエイラ基本の動きのジंगाというものになります。周りから見ると踊っているように見えますし、サンバのステップ酷似しているらしいです。下段の左脚払い 右回し蹴りは「シャペウジコウロ」をイメージしています。

勝負の決め手となる一連の流れはアウーバチードウ エスコラオン シバータという連携になります。……などと書いてますが、今動画を見ながら必死になって蹴りの名前を探しています。

もしカポエイリスタさんがいらっしやいましたら「アウーバチードウでパンチ落とせるわけねえだろ」とか「蹴りの名前間違ってたんだよ」とかどんだんだメ出ししてください、カポエイラの蹴り集の動画とトニー・ジャー主演のトム・ヤム・クン！のカポエイラとの戦闘シーン見たぐらいしか知らないんです……。

でもそういう動画を見て1番思うのは、あれだけ脚上がって綺麗に蹴りを出せたらかつこいいし気持ちいいだろうなということです。

そんな理由があつてカポエイラを採用した、というところもあつたりします。

お暇に興味のある方は動画探してみてください。その方が戦いの様子もイメージしやすいかとも思いますので……。

『き、き、決まったー！勇者ソウヤの鋭い蹴り！ここまで奇抜めいた攻撃を連続で出しながらもそれを捌かれていた勇者でしたが、ここに来て直撃！そしてパネトーネ筆頭の防具を破壊！さらにそれと同時にここでタイムアップ！もはや、これはもしかするともしかして……』

実況席が点差を確認する間が空く。その結果が出るのををソウヤは黙って待つ。

『……逆転！ガレット、ただいまの勇者の活躍によりその点差をひっくり返しました！よって今回の戦勝国はガレット獅子団領国と相成りました！』

その実況の言葉に平原や砦のガレット兵達が歓喜の声を上げる。

ソウヤもまた、一安心したように息を吐き出した。

『それでは勝利を収めたガレットのレオンミシエリ閣下のお言葉を頂きたいところですが……。えー、現在国営放送のレポーターがレオンミシエリ閣下とダルキアン卿の一騎討ちの場へと駆けつけているところですので、しばらくお待ちください』

そんな実況を聞き流しつつ、ソウヤは肌を晒している自分の対戦相手のほうへと近づいていく。

「巨乳ちゃん？」

「よ、寄るなでござる！見るなでござる！」

両手で前を隠すようにし、さらにソウヤに背を見せるユキカゼ。

「あーわかったわかった。でもちよつとだけ文句は言うな」

そう言うとソウヤは自分が身につけていたマントを外し、ユキカゼの体へとかけてやる。

「これでいい。言われた通りもう寄らないし見ない。……怪我はないのか？」

「……大丈夫でござるよ。ここは守護力が働いている故……」

「そうか。なら安心した」

ユキカゼが体を隠すようにマントを両手で掴みながらソウヤのほうを見る。自分が言ったとおりソウヤは距離を置き、自分の方を見ていなかった。

「……拙者の完敗でござるな」

「よく言う。辛勝つてところだ」

「予想外だったでござる。ここまでの連戦でもっと疲れている状態だと思っていたのに……」

「……久しぶりだ。こんな清々しい心でいられるのは。シンクに負けて、レオ様に認められて、エクスマキナを預かって、俺は何かが吹っ切れた。そうしたら疲れなんて感じなかった。……まあエクスマキナが俺を助けてくれたってのもあるだろうけどな。でも俺がずっと夢見てたようなこんな異世界に今俺はいて、そしてそこで勇者なんて呼ばれてる……。そう思ったら自然と体が軽くなったんだ」

空中の映像版にレオの姿が映る。どうやらレポーターが着いたようだ。

「ソウヤ……」

「……ま、俺のそんなどうでもいい話より、レオ様のありがたいお言葉でも聞くとしますかね」

ソウヤがそう言うとはほぼ同時、レオの話が始まった。

『ガレット総大将、レオンミシエリじゃ。ワシはずっとダルキアンと一騎討ちをしていたから、恥ずかしい話じゃが最後の方の状況をあまり把握しておらんかったが……。我らの勝利、ということのようじゃな』

『ワシとダルキアンの勝負は決着がつかなかった。……つまり今回も勇者がひとつやってくれた、ということになる。フランボワーズ、ワシなんぞより勇者の方の話を聞きに行ったほうが盛り上がるぞ？

そつちにカメラを移せ』

『え!?!、しかし……』

『ワシがいいと言っておるのじゃ、そうしろ。ワシの話などこの後の戦勝イベント、ガレット地酒祭りの最初にちよろつとするだけで十分じゃ。……ほれ、お前ら行かんか』

レオからマイクを預かると、言われるままレポーター達が今度はソウヤのいる方へと走っていく。

「レオ様、いささかぞんざいではありませんかな?」

「今回最も勝利に貢献した者はワシではない。ならその貢献者に譲るまでのことじゃ。……実際お主との決着はまたしてもつかなかった。しかしあいつは勇者としての務めを十分に果たし、ガレットに勝利をもたらした」

ふむ、とブリオツシュが相槌を打つ。

「……それよりダルキアン! 貴様先ほどの戦い中好き勝手なことを言いおって……!」

「おや、全部本当のことと思って言っていたでござるか?」

「ぐ……!」

レオが言葉に詰まったのを見てブリオツシュは愉快そうに笑う。

「……しかしよいではないでござるか。もっと御自分の心に素直に

なって、ソウヤ殿と話してみてもいいかな？」

「しかし……」

「うちの姫様はシンクに対してそれはもう仲良く接しているでござる。レオ様ももっと仲良くされては？今のソウヤ殿ならレオ様のお心にも気づくかもしれないでござるよ」

「……フン！」

レオは答えずそっぽを向く。と、映像版にソウヤの姿が映った。レポーターが今度はそっちに着いたようだ。

「えーそれでは閣下直々に勇者のコメントをもらえとのことでしたので、今回の最大の勝利貢献者といってもいいでしょう、ガレットの勇者ソウヤ殿よりコメントを頂きたいと思えます！」

映像の中のソウヤはマイクを持つとひとつ大きくため息をついた。

「……どうも、ガレットのソウヤ・ハヤマです。ま、話すのはあんまり得意じゃないんですが……」

レオがその映像を見つめる。その瞳は一国の領主、レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワとしてではなく、年頃の、一人の少女の瞳のようにも見えた。

戦が終了し、ガレット軍はヴァンネット城下へと戻ってきた。連勝に加え、このあと戦勝イベントが行われるとあって既に人々は興奮気味である。それはヴァンネット城内も似たような雰囲気であった。

そんな空気が城の内外に満ち溢れる中、ソウヤは前回の戦終了後と同様医務室に来ていた。

「ふむ、今回は大丈夫のようですね。ただ輝力の方は前回以上に酷使した様子が窺える。この後の祭りが終わったらゆっくり体を休めてください」

「わかりました。ありがとうございます」

礼を述べ、ソウヤが医務室を後にしようとする。と、その時入り口のドアが開いた。

「入るぞ。ここに勇者が来ると聞いたが……」

「おやおや閣下。またいらしたのですか。それほど勇者殿のことがご心配のようですね……」

「そ、そんなではないわ！……ただ今日も医務室の方に向かったと聞いたから来ただけじゃ」

「ご心配おかけしてすみません。ですが今日は輝力の使いすぎ、ということだけのようなので疲れてる程度です。言われた通り危険な戦い方は避けましたし」



「そのようじゃな」

レオは安心したような表情を見せる。

「しかし閣下、輝力の使いすぎも考え物ですぞ。閣下の方からも一応釘を刺しておいてくだされ」

「何、足取りもしっかりしとるしその程度は心配するに足らん。お主もあまりやかましく小言を言つとまたシワが増えるぞ」

「おやおや、これは手厳しい。閣下には叶いませんな」

愉快そうに笑う医師をチラリと見つめ、レオが医務室から出る。ソウヤもそれに続いて部屋を後にした。

「今日は戦勝イベントに参加するじゃろ？」

「ええ。そうさせていただきます。ガウ様に街の方に繰り出そうと誘われていますし。ビスコツティの連中にも声をかけたから、このことなので」

ヴァンネット城の廊下をレオと並び、話しながらソウヤが歩く。

「そうか。それはよかった。……祭りが始まるまでは今しばらく時間があるが、それまで用事はあるか？」

「いえ、特に。部屋で休もうかと考えていた程度でしたが」

「……よければ少し顔を貸してほしいんじゃが」

「構いませんよ。なんですか？」

「……先ほど戦場では少し話をしたが……その……もう少し話したいと思つての……」

レオにしては珍しく歯切れが悪い。だがソウヤは特に気にした様子もなかった。

「それは願つてもない話です」

「そ、そうか。……それで場所なんじゃが。……ワシの部屋ではどうじゃ？」

「レオ様のお部屋に？お邪魔してもよろしいんですか？」

「……嫌か？」

レオが不安そうな顔を見せる。が、ソウヤの口元が緩んだ。

「いえ。では遠慮なくお邪魔させていただきます」

この城で生活を始めてから約1週間。城の中はなんとなくわかってきていたソウヤだったが、それは基本的に自分に関係のあるところだけの話であり、レオの部屋のように他人の部屋へは入ったことがない。

レオに続き、ソウヤがこれまで来たことのない城の場所へと進む。自分の部屋の入り口を開け、レオがソウヤを中へと招き入れた。

「お邪魔します」

領主、ということである程度は豪華な部屋ではあったが、それでも思ったよりは質素だ、とソウヤは思った。

「まあ……適当にかけておれ。今飲み物を持ってこさせる」

そう言うとしオは一旦部屋を出て行く。来客用と思われる椅子に腰を下ろし、ソウヤはもう一度部屋を見渡す。やはり想像より質素だ、と改めて思った。

（お姫様なんてのはもつと豪華な部屋に住んでるものかと思ったが……。まあそれでもベッドは立派だしこの椅子もかなりいいものなんでしょう。壁に飾られた絵もきつと高価なもの……。ん？）

その時、床に寝そべる生き物がソウヤの目に止まった。似たもの言うならライオンか、あるいはトラか。思わずその生き物を凝視していると、閉じていた瞳が開いた。ソウヤとの視線が合う。すると体をのっそりと起こしてソウヤの方へと近づいてきた。

思わずソウヤが身構える。が、相手からは敵意を感じない、と思つたソウヤは恐る恐る右手をそのライオンの頭へと伸ばしてみる。目を閉じ、撫でられるのを待っている様子で、ソウヤの右手が頭を撫でると気持ちよさそうな顔を見せた。

「待たせたな。……なんじゃ、もうバノンと打ち解けたのか」

ティーセットが乗ったトレイを持ったメイドと共にレオが部屋へと戻ってきた。

「バノン？」

「今お前が頭を撫でている相手じゃ」

「噛み付きませんか？」

「何を言う。バノンは聡明じゃ。そんなことはせん」

メイドがティーセットを置くのと一礼して部屋を出て行く。それを確認したレオはカップにお茶を注いでいく。

「すみません、領主様にやらせてしまつて」

「何を言う。ここはワシの部屋じゃ、もてなすのは部屋主の義務じやろ。……甘さはどうする？」

「レオ様と同じで構いませんよ」

「そうか。甘くないと文句を言つてもお主の責任じゃからな？」

そう言つとレオは粘度の高い液体を少しお茶に垂らしソウヤの前へと差し出す。ソウヤはティースプーンでそれをかき混ぜ、熱い液体を口に運んだ。

「……紅茶ですか」

「口に合わんか？」

「いえ、おいしいですよ。……ただ個人的にもう少し甘い方が好みだったかもしれませんがね」

「だから言ったじゃろ。まあそれを適当に加えるとよい」

お茶の入ったポットとは別、先ほど垂らした粘度の高い液体の入った容器がソウヤの目の前に差し出される。中を開けてみると何かの蜜のような液体が入っていた。

「ハチミツ、ですか？」

「……ああ、そうか。お前たちの世界にも『ハチ蜜』はあるのか。じゃがそれは違う、花蜜じゃ」

「花蜜……」

「蜜の取れる大きな花から採取したものじゃ。ビスコッティの名産でな。ちなみにこのお茶の茶葉もビスコッティの名産、どちらもミルヒから贈ってもらったものじゃ」

「へえ……」

ソウヤは花蜜をお茶に少し垂らして口へと運ぶ。先ほどより甘さが増し、より香りも感じられたような気がした。

「ガレットの名産は酒じゃから、本当はそれを用意するのもよかつたんじゃが……。この後地酒祭りじゃし、何よりお前は飲めんのじやろっ？」

「そうですね。お茶の方が助かります」

「全く持って勿体無いのう。ガレットの地酒はうまいというのに」

そう言つとレオは1杯目を飲み干し、2杯目をカップへと注ぐ。

「もう一杯どうじゃ？」

「いえ、まだ残ってますので」

「そうか」

花蜜を2杯目の茶に入れ、レオがそれをかき混ぜる。そのまま2杯目を口に運び、カップを置く。その間、2人の間に沈黙が広がっていた。

「……話すのは嫌いかな？」

「嫌いではないですが、苦手なので。……まあ今までは意図的に話すを避けてましたが」

「やれやれ。シンクと戦つて少しは丸くなったと思つたが、そのひねくれた物言いは相変わらずじゃな。……ま、そんなところも、ワシは嫌いじゃないがな……」

口に運びかけたカップを止め、思わずソウヤが驚いたような顔でレオを見つめる。その視線に気づき、そして自分が言った言葉の意味をもう1度考え直したところで次第に顔が赤く変わっていく。

「い、いやーち、ちが……そ、そういうことじゃなくてじゃな、その、お前の個性として、なかなか面白い物言いじゃ、ということを言いたかっただけで……」

レオのしどろもどろな様子のせいか、ソウヤが笑みをこぼす。

「わ、笑うな！」

「すみません。ですが自分でもひねくれているとわかるこの物言いを面白いといってくださいしたのはレオ様が初めてだったもので」

「な、なんじゃ……。そつちの意味でか……」

「……勿論レオ様の慌てる様子が可愛かったってのもありますけどね」

「なっ……。いき、貴様！」

声を出してソウヤが笑う。

「……フン！貴様だって戦終了後のインタビューで相当いっぱいばいだったじゃろうが」

「あれは……。まさか俺のところになんなのが回ってくるとは思ってませんでしたから」

「お前は今日の戦の勝利貢献者じゃ。当然インタビューは求められるじゃろう。しかしもっと盛り上がるようなコメントを返してやったほうがよかったな。レポーターが困っていたではないか」

「……話すのは得意じゃない、とは最初に断りましたよ」

「あんなものは勢いで話せばいいんじゃない。お前の場合聞かれた質問に『そうですね』とか『そんなところです』とかしか言っていないからな。せっかく盛り上がる戦いをするのになれでは勿体無い。あの

手のことはガウルが得意故、あとで聞くといいじゃる」

「……わかりました。今後は努力します」

そう言つとカップに口を着け、ソウヤは残っていたお茶を飲み干した。

そのまま会話が途切れ、再び2人の間に沈黙が広がる。

「……そういえば」

そのレオの言葉にソウヤの視線がレオのほうへと動く。

「お前はさつき戦中にワシに謝つたが、ワシはお前にまだ感謝の気持ちを持ってなかつたな」

「感謝……?」

「ワシはガレットに勝利をもたらす勇者、としてお前を呼び出したんじゃない。そしてお前はそれに見事に応え、ガレットを2連勝へと導いてくれた。……ありがとう」

レオが顎を引き、頭を軽く下げる。

「よしてください。今回はともかく、今回は勇者としては失格と言つていい戦い方をしたんだ。それに俺自身この体験を楽しんでますし、何より楽しんでると素直に言えるようにもなった。礼を言うのはこっちの方です」

「……だとしても、ワシは礼を言いたい。……ワシが望んだことが



今日叶った、久しぶりに心躍る戦じゃった」

「レオ様が望んだこと……？」

どこか恥ずかしそうにレオが視線を外し、カップの中のお茶へと移す。

「……言っただかもしれんが、ワシがお前を初めて見たのは弓の大会の時じゃった。素晴らしい技術、揺れることを知らない心、そしてガレットの勇者としてふさわしいであろうその風格……。ワシは驚くと同時に、この者と共に戦場を駆けたい、背中を預けて共に戦ってみたい、そう強く思った」

そこまで言っただレオはひとつ息を吐き出す。

「……じゃがここに来たばかりお前の瞳はまるで空虚で、ワシは映っていないかった。そのままお前はワシを受け入れず、この世界の戦を受け入れず、ただ戦うだけなのかと不安にも思った。……しかしシンクと戦った後のお前はまるで憑き物が落ちたかのように、その瞳は意思を持ち、ワシを受け入れてくれていた。……そんなお前と今日一緒に戦えてワシは本当に嬉しかったのだ。だからもう1度言わせてくれ。……ありがとう」

再びレオは軽く頭を下げた。

それを見たソウヤは、珍しく困ったような表情を浮かべていた。

「……まいったな。そんなレオ様の心中は露知らず、本当に迷惑ばかりかけてしまいましたね。……でも俺も今日レオ様と一緒に戦えて楽しかったですよ。……それからこうやって一緒に話せること

も、ね」

フツとレオが微笑を浮かべる。

「……そうか。それはよかった」

三度訪れる沈黙。

深呼吸し、レオが口を開く。

「ソウヤ」

「なんです?」

ソウヤがレオを見る。が、レオの視線が定まっていない。尻尾も落ち着きなく左右に動いている。

「その……ワシは、じゃな……。……ワシは……」

その時部屋のドアがノックされた。

「レオ様?」

飛び上がるほどレオは驚く。

「な、なんじゃ!?!」

その声が裏返りそうになりながら返事をした。

「間もなく戦勝イベントが開始されるお時間です。ご準備の方、よ

ろしく願います」

「わ、わかった！すぐに行く！」

そう言うため息をこぼした。

「領主と言うのはやはりお忙しいんですね。ご苦労様です」

「……まあ、そうじゃな……」

どこか少し寂しそうにそう言うとレオは苦笑を浮かべた。

「ワシは最初の挨拶の後、戦で功績を挙げた兵を労い、それから商工会の方へも顔を出さねばならん。さらにその後はミルヒを接待することになるじやろう。そんなわけでワシはお前と一緒にには行けんが、ワシのことは気にせずガウルや三馬鹿、ビスコッティの連中と仲良くやってくれ」

レオが席を立つ。それに合わせてソウヤも立ち上がった。

「わかりました。そうさせてもらいます。話せて楽しかったですよ、レオ様」

「ああ、ワシもじゃ」

「では失礼します」

ソウヤが部屋を後にする。その姿を目で追い、レオは大きくため息をこぼした。

Episode 18 決着、そして戦勝祭へ（後書き）

レオがデレ始めるの回。

そういやなんでレオがソウヤを呼び出したのかちゃんと説明してなかったような、ということでもソウヤが丸くなってきたここに突っ込みました。

ここは書いてて楽しかったです、自分にしては結構な速度で書けました。

原作でレオの部屋が映ってるのは星詠みをしたとき、その話をバナーとビオレにしたとき、ガウルが翌日ビスコッティに行くという話をしたとき、ぐらいしかなく、あまりイメージが固まってないです。

この辺はガイドブックで詳細な描写があったりすると個人的には嬉しかったりします。

## Episode 19 ガレット地酒祭り

ガレットの戦勝イベント、地酒祭りが始まった。城の中では兵達がお祭り騒ぎをし、城下町もたくさんの人たちでにぎわっている。

ソウヤ、ガウル、ジェノワーズの5人はそんな城下町を歩いていた。

「ビスコッティの連中、もう着いてると思うんだけど……」

「ガウ様、ちゃんと連絡取ったんですか？」

ソウヤのもっともな質問にガウルは胸を張って答える。

「あたぼつよ！ちゃんとジェノワーズを通して向こうに連絡が行ってるはずだ！」

「……三馬鹿、なんて連絡したんだ？」

「ちょ、ちょい待ってソウヤ！お前までウチらを三馬鹿呼ばわりか！？」

「レオ様もガウ様もそう呼んでたからな。それでいいものかと思っ  
ていたが」

「よくないです！ちゃんとジェノワーズって呼んでください！」

ベールが必死に反論する。ジョーヌもそのベールの言葉にそうだそうだといわんばかりに大きく頷いた。

「リコにヴァンネットの城下町で、って連絡した。だからしばらく探してれば会えると思う」

「……この広い城下町を探すのか？」

ソウヤの当然とも言える問いかけにノワールが「う……」とつめき声を上げ、背を向けてしまった。

「……連絡したもん。リコがわかった、って言うてくれたもん」

「ああ！ノワ、いじけないで……」

「おいソウヤ！ウチのセンターは拗ねると長いんやで！？どうしてくれるんや！？」

「……どうするも何も、至極当たり前のことを言っただけなんだが」

ソウヤが苦笑する。と、その時。

「あ、いたであります！ガウル殿下ー！」

聞こえてくる聞き覚えのある声。

「お！来た来た、ビスコッティ御一行様だ。ほら見るソウヤ、うまく合流できたじゃねえか」

「……完全に結果オーライですよね」

再びソウヤは苦笑を浮かべたが、ガレット側残り4人は全く気にしていないらしい。

「ガウル！来たよ」

「おう、待ってたぜシンク！あとは……」

ガウルがビスコッティ側のメンツを確認する。シンク、エクレール、リコッタ、ユキカゼ……。

「そっちは全部で4人か。姫様は姉上のところか？」

「はい。とてもこちらに来たそうにしておりましたが……」

「まあ仕方ないだろうな。それが仕事みたいなもんだ。……よし、ジエノワーズ！場所のセッティングと食い物と飲み物の確保だ！」

「了解！」

ガウルの命を受けてジエノワーズが準備にかかる。ノワールは食べ物、ジヨー又は飲み物を確保に向かう。ベールに物を、特に飲み物を運ばせるところぼす、ということガウルはよく知っていたため、ベールは適当な場所を探してシートを広げて場所を取る役割だった。

「……ガウ様」

「ん？なんだソウヤ」

「さつき姫様のことを『それが仕事みたいなもんだ』って他人事みたいにおっしゃりましたが、いずれはガウ様がそうなるのでは？」

一瞬ガウルの顔が難しくなる。

「……まあ、な。俺自身、本当は早く姉上に認められてさつさと領主の座を奪い取って、『今までご苦労だったな、あとは俺がやるから適当に楽しんでな!』とか言っちゃりたいところではあるんだが……。なんだかんだで姉上は姉上でももう少し領主やってさうだしな。だったら、ま、今のうちに俺のほう楽しんでおくかな、ってころだ」

「へえー」

感心したような声を上げたのは質問したソウヤではなくシンクだった。その小馬鹿にしような言い方にガウルが怪訝な表情を浮かべる。

「な、なんだよシンク……」

「てつきりガウルは領主みたいなのは合わない、とか言うのかと思ってた。政治とか外交とか、そういう裏があったり細々したものの苦手そうだし」

「ぐ……！た、確かに得意じゃないが……。でもな！いつまでも姉上に任せっぱなしってのも気が晴れないってのは事実だ。……だからいざつてときは姉上を蹴落としてでも俺が領主になってやる。……ま、そういうことだ。覚えとけ、ソウヤ」

「わかりました。でも覚えておけ、とはどういう意味ですかね？」



「……へっ。ま、わかるるときがきたら、わかるんじゃないか」

答えになっていないガウルの返答にソウヤが突っ込もうとしたとき、ジエノワーズの2人が帰ってきた。2人とも両手に大量の戦利品を抱えている。

「屋台で色々売ってた。適当に買っておいだから」

「ウチは地酒たんまり持ってきたで。ああ、シンクとソウヤは飲めへんって話やったから酒じゃないもの持ってきたわ」

「場所のセッティング、完了ですー」

「よし！ほんじゃ、ま、全員座れ！」

全員が座り、手元に飲み物が渡ったことを確認。ニヤツと笑ってガウルが酒の入った容器を手にする。

「そんじゃ、今日のガレットの勝利と、ビスコッティの健闘と、両国の関係発展……ああ、まあいいか！あ！最後にこの勇者2人に！」

「え！？」

いきなり話題を振られて戸惑うシンクだったが、ガウルはそんなことお構い無しに容器を高々と掲げた。

「乾杯！」

「乾杯！」

全員が一気に飲み物を啣る。

「かあーっ！さすがガレットが誇る地酒！」

「うむ、やはりうまいでござるな」

「酒といえば、巨乳ちゃん、酒好きの主は？」

相変わらずのソウヤのその呼び方にユキカゼは嫌がる素振りを見せた。

「その呼び方……うー……でも今日拙者は負けてしまったでござるし……。……お館様はロラン騎士団長とアメリカと、あとそちらのバナード將軍らと一緒にござるよ」

「へえ、アメリカがこういう場に来るなんて珍しいな」

「ロラン騎士団長がお誘いになったから、まあある意味当然とは思ってください。お館様としてはお2人の惚気話が聞きたいご様子でしたが、しかしいくらバナード將軍も来るとはいえ、野暮と言えるような……。まったくあれは悪い癖と言わざるを得ないでござる」

「へ？惚気話ってなんだ？」

「あれ、ガウル殿下ご存じないのですか？」

「しらねえ。どういうことだ、シンク？」

「いや僕もわからないんだけど……」

エクレールがため息をつく。

「……兄上とアメリカ女史のおふたり……」

「近々結婚するかもしれないでありますよー！」

食べ終わった骨付き肉の骨をかじっていたガウルの手が止まる。

「え、ええー!？」

「アメリカはんってあのいつも姫様にくっついてる秘書の女性やる?」

「そのお相手が騎士団長!わあ、なんてロマンチック!」

ガウル、ジョーヌ、ベールが驚く様子を見せる。が、ノワールだけは普段のように落ち着いている。

「おいノワ、お前驚かないのかよ!？」

「うん。知ってたから」

「は!？知ってた、って……」

「リコから聞いてて、知ってた」

ジェノワーズの「黒」ことセンターのノワールとビスコッティ王立学術研究員のリコッタは実は親友同士で、時々プライベートでのやりとりもしている。今回ビスコッティ側にノワが連絡を取ったの

はこのことが理由でもあった。

「し、知ってたって、なんでウチらに教えてくれんかったんや!？」

「リコからあんまり言わないで、って言われたから……」

「アメリカ、秘書官の相手が騎士団長ということで身分の差とか気にしてたでありますから……。本人からもあまり無闇に口外しないでほしいと言われてたであります」

「そっか……。しっかしあのアメリカがなあ……」

「僕、あまりアメリカさんのこと知らないけど、そんなに意外？」

シンクがガウルに問いかける。それに対してガウルは笑いながら答えた。

「意外だ、意外。すげー意外。ずっと姫様のために尽くしてて仕事が生きがい、みたいに俺には見えたらな。……で、騎士団長のほうから言い寄ったのか？」

「らしいです。まあ……。このことを兄上にはあまり聞きにくいのでちゃんと聞いてはいませんが……」

「だとよ。シンク、ソウヤ、やっぱり男の方からいかねえとダメってことだな!」

「ガウル、なんでそのことを僕に言っの……?」

「ついでに俺が出たのもわかりかねますが」

「ケツ！これだ、勇者殿おふたりは……。ま、いいか」

酒が入っているからか、いつもより饒舌になっている様子のガウル。空にした容器に追加の酒を注ぐと焼いてある小さめの魚にかじりついた。

「それはそうと、勇者様といえば、今日の勇者様同士の戦い、すごかったであります！自分、感激であります」

「そやな。ウチは目の前で見てたけど、まさに名勝負やった」

「え！？そ、そうかな……」

シンクはどこか照れたように頭をかきながらソウヤのほうへと助けを求めるように視線を向けた。

「……シンク、勝者はお前だ、お前の口から答えてやれ」

「へっ！シンクとあんなにがちり握手交わしたわりににそういうところはお前相変わらずなんだな」

「……なんとでも言うてください」

少し面白くなさそうにソウヤが飲み物を口に運ぶ。が、ガウルはその様子から以前ほどの敵意、あるいは攻撃性がなくなったと感じていた。

「まあ……確かに勝ったのは僕だったけど、ソウヤはあの前からずっと攻砦戦に参加してて、しかも1人で強行突入して正門空けちゃ

つてるんでしょ？コンディションで言ったら圧倒的に僕の方が有利だったし……」

「しかもお前はパラディオン、こいつはそのときは普通の武器だったしな」

「攻撃戦のときのソウヤさん、すごかったですよ。1人で1個大隊レベルの火力を叩きだすような紋章砲使って……。あんなの連発して輝力大丈夫かって心配でしたし」

そこまで話を聞いていたソウヤが大きくため息をつく。

「……どうあれ負けたのは俺だ。言い訳するつもりはない」

「でもよ、お前としちゃあ勝ち負け以上に得た物はでかかったんだろ？」

「それを俺の口からわざわざ言わせますか？……どうせ全員気づいてるんでしょ？」

やはり不機嫌そうにソウヤがそう言う。しかし案の定、心から嫌がっている様子ではなかった。

「だったらあえて口にはしません」

「フン！相変わらず貴様は素直じゃない奴だな」

「お前にだけは言われなくなかったな、エクレール」

「な、なんだと！？」

その2人の様子に場にいた全員が笑った。

「……でもそのあとのソウヤとユツキーの戦いを見てわかったよ。今ソウヤはフロニヤルドの戦を楽しんでるんだって。僕のことも友達として認めてくれて、この世界は楽しいって事を伝えられて……。僕はそれがとても嬉しかった」

フン、とどこか決まりが悪そうにソウヤが鼻を鳴らす。

「……そのせいで気が抜けてガウ様に簡単に砦を落とされた、ってわけか？」

「え！？あ、あれは……」

「ああ！こいつアホだからよ、俺がつかかかっていたら見事にひっかかって俺との戦いしか目に入ってないでやがんの！」

「その際に私達が内部制圧」

「さっすがガウ様親衛隊のジェノワーズ！」

「シンク君には悪いことしちゃったけどね」

ガレットの4人が得意気に話す一方、シンクはうなだれていた。

「まったく、本当に貴様のアホさ加減にはうんざりする」

「……それについてはもう何回も謝ったじゃんエクレ……」

「何回謝っても謝り足りん！」

「でもま、そのおかげで……」

ソウヤが揚げ物を口に運びつつ話す。どうやら地球にもあるような芋の揚げ物のようだ。

「俺は巨乳ちゃんと戦えたわけだ。点差がもつと開いてたらあんな無茶はしなかったわけだしな」

「そういうことでいうと、シンクはソウヤさんの見せ場をもつ1つ作った、ということになったわけでありますね」

「……同時に巨乳ちゃんの恥ずかしい場面を作ることにもなったわけだがな」

ぐ、とユキカゼが動きが止まる。

「ああ！そ、そっか……。ゴメン、ユツキー」

「……謝らないでほしいでござる。あそこで敗れた拙者の実力不足である故……」

「まあ国营放送的には嬉しいサプライズだっただろうがよ！」

「もうガウル殿下……」

再びその場の全員が笑った。

「……こういうのも、悪くはないな」



全員の笑いが収まったとき、ポツリとソウヤが呟いた。

「シンの言うとおり、くだらない意地だった。親衛隊長のおっしやった意味が今ならわかる。『いっそ別れがつかなくなるくらい楽しい思い出』か……。……。しかし俺のこの滞在期間もあと半分しかなくなっちまったがな」

「半分『しか』じゃないよ。『まだ』半分ある」

ソウヤがその声の主 シンクに視線を移す。

「まだまだ、これから楽しい思い出を作ればいいじゃない。これで終わりじゃないだし、またここに帰ってくることも出来る。それに……。元の世界に戻っても、僕達は友達でしょ？」

真っ直ぐなそのシンの言葉にソウヤはうつむいて笑みをこぼす。ソウヤなりの照れ隠しだろう。

「……。そうだな」

その場の全員の表情が緩む。それを確認したガウルが容器を再び掲げた。

「よーっし！偉大なる2人の勇者のために、飲むぞー！」

おーっ！とジェノワーズがそれに乗っかる。ビスコッティ側はやや苦笑を浮かべていた。

「……。そうだ、シンク。忘れないうちに」

ソウヤがポケットから何かを出す。現在の地球ではよく見かけるもの、携帯電話だ。

「うわあ、すごい年季が入ってるね……」

「連絡取ればいいって考えだからな。一応これでも赤外線機能はついてる。……番号とアドレスの交換、いいか？」

シンクの顔が明るくなり、

「勿論！僕もそれをやろうと思って持ってきてたんだ」

言うなりシンクも携帯電話を取り出した。

「えっとこうやって……はい！」

「……お、きた。じゃあ今度は俺が……」

その2人の様子をも珍しそうに全員がまじまじと見つめる。特にリコッタはその目が輝いていた。

「うん！オツケー。ここじゃ電波がないから確認はできないけど……お互いに向こうに戻ったらメール送るよ！」

「そうだな」

互いに目を合わせ小さく笑う。が、すぐその手にある物を狙う影に2人は気づいた。

「いやあ……それが2つあるということは……どっちか片方は分解してもいいということでもありますよね……?」

「え!? ちょ、ちょっと待ってリコ! どっちか片方でも動かなくなつたから困るから! ほんと困るから! せっかく今いい雰囲気だったのに台無しになつちゃうから!」

「大丈夫であります! 動かなくなつても、自分が直すであります!」

「……いや、分解したら補償が効かなくなる」

「でしたら自分が保証を……」

「あー! それ前も聞いた! ダメなものはダメー!」

リコッタから逃げ惑うシンクに思わず全員が大きく笑う。同じように笑いながら、ソウヤは1人考えをめぐらせた。

(人とこんなに笑つたのなんていつ以来だろうな……)

ソウヤが夜空を見上げる。月が2つ浮かぶ異世界の夜空は、今まで地球で見てきたそれより美しく感じた。

(でも……本当に悪くない気持ちだ……)

澄んだようなソウヤの思いの中、ガレットの戦勝イベントと共に、夜は更けていった。

## Episode 19 ガレット地酒祭り（後書き）

ガレットの地酒祭り。

ここも書いてて楽しかったですね。シンクとソウヤのアドレス交換もやりたかったことでしたし。

それからリコの「自分が保証するであります」は原作3話でも言っていたセリフです。補償と保証をかける、うまい！と思った部分でした。

本編中でも書いてますが、リコとノワはとても仲良しです。

ドラマCDでは2人で国营放送の番組で戦の解説をしたりします。ノワは戦術学院トップ卒業生らしく、意外とインテリだったりします。

おまけに中の人は花澤香菜さんですからね……そりゃジェノワーズでぶっちぎりの人気になりますよ……。他の方の二次作品でもノワだけ別格扱いは結構多い気がしますし。2期も活躍しそうです。

でもここは是非ジョー又ちゃんにも2期の活躍の場を！

「ほう、八手蜜取り、でござるか」

戦勝イベントの翌日、ガレット領内で一夜を過ごした後、シンク達はビスコッティ領へと戻ってきていた。その後、シンクはここ風月庵に顔を出しているところだった。

「帰り道に皆で話してたんです。以前来たときに口にした八手蜜がすごくおいしくて、また皆で食べたいねって。前回リコは一緒に行くことができなかったから、今度は行こうって話になって」

「向こうの勇者やらガウル殿下も誘って皆で行きたいという話になったわけでございます」

ユキカゼがシンクの説明を補足する。その間この屋敷の主は茶をすすりながら話を聞いていた。

「よかつたらダルキアン卿もいらっしやいませんか？」

「ふむ、まあそういう楽しいことは若い者同士で……と思う心もないわけではないでござるが……」

そう言つと湯飲みを盆へと戻す。

「母熊殿と拙者は顔馴染み故、拙者もついていった方が話は通じそ

うでござるな」

「では、お館様」

「うむ。拙者も参るとしよう」

「本当ですか！？きっとエクレレが喜びます」

シンクが笑顔を見せる。

「ただ実力行使、ということになった場合、拙者はあまり手を出さない故、そこからは若い者同士汗を流してくださいませ」

「わかりました」

ブリオツシユが空いた湯飲みに再び茶を注ぎなおし、口に運ぶ。

「そういえば、先ほどソウヤ殿も来られる、と言ったでござるか？」

「確定ではないですが多分来てくれると思います。昨日の戦勝イベントでも一緒に話しましたし」

「おお、そうでござったか。……そのように心が変わったということは、シンクの願いは」

「はい。叶いました。昨日はアドレス交換……っと、僕のいた世界で仲がよくなった人同士が行うこともしましたし、色々話すこともできました」

「そうでござるか。いやあ、よきかなよきかな。あの子のユキカゼ

との戦いの様子を見たかたでござるが、拙者もレオ様の相手をしてきた故、ソウヤ殿の様子が確認できなかったでござる。……しかしこのユキカゼに勝った、ということは己をもう1度見定め直し、ガレットの『勇者』としてあるべき姿になった、とも言えるでござるな」

その主の言葉を聞いたユキカゼは大きいため息をこぼした。

「……拙者としてはあそこで敗れたのは不覚でござる」

「いやいや、話に聞けば先の勇者同士の戦いに勝るとも劣らない名勝負だったと聞いたでござる。両者とも最後まで果敢に攻め続け、最後の最後まで一步も譲らない、息をするのも忘れるような戦いだった。故にユキカゼ、何も恥じることはないでござるよ」

「そ、そうでありますか……？」

主にここまで称賛されてはユキカゼとしても納得せざるを得ない。

「……とはいえ、最後のサービスカットは放送的に非常においしかった、と昨日祭り中にフラン殿が感謝していたでござるよ」

「お、お館様！」

愉快そうにブリオツシユが笑った。

「あれ？ダルキアン卿、昨日は騎士団長とアメリカタさんと向こうのバナード将軍と一緒に聞いていたのですが……」

「途中でフラン殿とジャン殿に会ったでござる。……そういえば2

人はロラン殿とアメリタの関係はまだ知らなかったようござるが、2人の様子から『スクープの匂いがする』とか言い出して、無理矢理聞き出してしまったでござるよ」

「うわあ……」

若干呆れ顔でユキカゼ。

「すっごいプロ魂……。あ！でもあの人たちにバレちゃったら本当にスクープとかで流されちゃうんじゃない……」

「それは大丈夫でござる。ロラン殿もバナード將軍もすっかり釘を刺しておいたでござるから。……ただ、代わりに結婚式を行うことになったら是非ともビスコッティだけでなくガレットでもその様子を放送させてくれと頼み込んでいたでござるが」

「はは……。どこの世界にもああいう人っているんだな……」

シンクも少し呆れたような顔でそう言った。

「……さてと、じゃあ僕はそろそろお城に戻ります」

「おお、そうでござるか。もう少しゆっくりしていても構わないでいじわるよっ」

「いえ、お気持ちは嬉しいですが、この後騎士団の訓練に参加する、ってエクレに言っているんで」

「昨日戦は終わったばかりだというのに、シンクは元気でござるな」



「まあね。ここにいられる間は出来るだけ体を動かしていたいから。……じゃあユッキー、ダルキアン卿、また明日！」

「うむ。気をつけて帰られよ」

「また明日ーでござるー」

オンミツ隊の2人に手を振り、シンクが風月庵を後にする。

今日はこの後騎士団との訓練、そして明日は八チ蜜取り。

まだまだ楽しいことはたくさんある、とシンクの心はずんずんだった。

一方、ヴァンネット城内、大浴場、男湯。

「八チミツ取り、ですか？」

肩までお湯に浸かりながらのガウルに投げかけられた言葉を、のぼせてきたからか、風呂の淵に腰掛けたままのソウヤがオウム返しに口にした。

「ああ。以前シンクがフロニヤルドにいたときに皆で八チ蜜取りに行ったんだ。あん時はやけに盛り上がってよ。……んで、さっきノワのところにもリコッタから連絡があって、よかったらまた行かない

か、って話になったんだよ。お前も来るだろ？」

「そりゃ行きたいですが……。でもハチミツなんて大勢で行って取るものですか？」

当然のように行く、と即答したソウヤの様子にガウルから思わず笑みがこぼれた。

やはり数日前とはまるで別人。自分がなんとかしようとしても氷解することのなかったその心は、シンクとの戦いによって綺麗に晴れ渡っているようだった。

言うまでもなくそれは喜ばしいことではあるが、一方で自分ではそれができなかつたとも思うと少し寂しいというか、どこか悔しいと感じざるを得なかつたが。

「そりゃ大勢であるほうに越したことはないし、どうせ行くなら皆で行った方が楽しいだろ？」

「まあ、そうですね」

脚だけをお湯につけていたソウヤももう1度湯に体を沈めながらそう答えた。

「ぶうああ、訓練後の風呂はやはり最高ですな。……殿下は、明日はハチ蜜取りでございませうかな？」

聞こえてきたいかつい声とともに巨軀が湯船に浸かり、お湯が豪快にこぼれていく。

「おう、ゴドウィン。なんならお前も来るか？」

「殿下とご一緒したい気持ちはやまやまですが、明日も兵達の訓練を見なければなりません故……」

「ああ、そっか……」

「私めのことなど気にせず、殿下はお楽しみになってきてくださいませ」

「わりいな、言葉に甘えさせてもらっわ」

「いえいえ、と言いながらゴドウィンが大きく伸びをする。それだけでもたお湯が少しこぼれていった。

「そっぴやよ、ゴドウィン。お前昨日はバナードと一緒にいたのか？」

「いえ。閣下が兵達を労った際は城内で兵達と飲んでおりましたが、その後は……」

ゴドウィンにしては珍しく、どこか決まりが悪そうに言葉が尻すぼみになる。

「あ、エリーナか。まあそうだな」

「エリーナ？」

ソウヤの問いかけにガウルがにやけながらソウヤの方を振り返る。

「ああ。こいつの妻だ」

「妻、って……」

「嫁さんってことだよ。こいつ、こう見えて結婚してんだよ」

ソウヤにしては珍しく、相当驚いた様子でゴドウィンを見つめている。

「……ソウヤ殿、そんなに自分に妻がいることが意外ですか？」

そんなソウヤの顔を見るのは初めてだったか、ゴドウィンは訝しげな表情でそう問いかけた。

「意外ですね。あなたのような方は戦が全て、という感じだと思ってましたが……」

「ぬう……。そこまではつきり言いなさるか……」

思わずゴドウィンが苦笑を浮かべる。

「こいつだって最初はそんなだったんだぜ？俺と初めて会ったときは武者とか言っって各国渡り歩いてて、国の王になりたい、とか言っってたっけな」

「……やめてください殿下。もはや昔のこと故……。あの頃はまだまだ未熟者でしたしな」

「んで俺が姉上に口を利いてスカウトしてもらったらめきめき頭角を現して、今じゃガレットの將軍だからな。しかも美人な奥さんま

でもらつてよ」

「惚気話と思われるかもしれませんが……。自分はエリーナと結婚できて、彼女との家庭を、そしてドリユール家の名誉を守るということを生きがいにできました。かつては何の背景もない自分のような男がそのような生きがいを持てる。人生とは何があるかわかりませんな」

愉快そうにゴドウィンが笑う。

「やっぱ結婚する、ってのは何かが大きく変わるもんなんだな」

「そりゃそうでしょう。俺のいた世界じゃ『結婚は人生の墓場』なんて言葉まであるぐらいです」

「なんだそりゃ！？どういう意味だ？」

「結婚すれば自分1人の時間や使える金、そして空間。それら全てが不自由になる、ってことから言われる話です。つまり生活の様子はこれまでと一変する、ってことでしょう。……もつとも、この言葉もこんなネガティブではなく、もっとポジティブに捉える人もいますよ」

「……そことこどうなんだ？愛妻将軍？」

「自分はそれほど愛妻家というわけでは……。しかし、それら自分1人のときにあったものを失っても、得るものは大きいと思いますぞ。……などと私めが申し上げても惚気にしかならないでしょうが」

へっ、とガウルが小さく笑った。

「ま、本人が幸せならいいんじゃないか？いつまでも一人身つても寂しいだろ。そういう意味だとロランとアメリカもようやく、って感じだよな」

「む……？ロラン殿とアメリカ殿が何か……？」

「ああ、お前も聞いてないのか。あの2人結婚しそうらしいぜ」

「おお、それはめでたい。結婚の際には是非お祝いの品を送りたいところですね」

少しのぼせてきた、と感じたソウヤは再び風呂の淵に腰掛ける。  
が、上がるうとする様子はない。

「これでバナード、お前、そしてロランと妻帯者が増えるな。……この調子だと次は姉上か？」

「こつ言っではなんですけど……閣下を迎える男性は、閣下と張り合えるぐらいでなくては務まらないでしょう」

「だよな。……つーわけでソウヤ、お前姉上と結婚する気はないか？」

急に話を振られ、一瞬ぱかんとした表情を浮かべた後、ソウヤは眉をしかめた。

「……なぜそこで俺が出てくるんです？」

「だってよ、お前姉上にケンカ売ったそうじゃねえか？」

「売ってませんよ。あの方にケンカなんて売ったら今頃ここでこうしてられないでしょう」

「おや、妙ですな……。自分の耳にも勇者殿が閣下を黙らせた、と入ってきましたが」

ソウヤの表情がおかしいと言わんばかりの様子に変わる。

「……ちょっと待ってくださいよ。ガウ様、その話の出所どこですか？」

「ジエノワーズだ。お前と姉上が口論してるところを見た、って言うってたぜ」

「確かに口論はしてましたよ。ですが俺がレオ様を黙らせたとかケンカ売ったとか、尾びれ背びれが着きすぎでしょう」

「噂話などそんなものですぞ。……しかし実際閣下と口論はした、ということなら、まさに閣下と張り合える男性ではありませんか」

「だな。どうよソウヤ？姉上もお前のこと段々気に入ってきたみたいだし、お前もまんざらじゃないんだろ？」

「はあ、と大きなため息。」

「相手は領主、俺は勇者とか言われてても元の世界に戻ればただの学生ですよ？身分が違いすぎるでしょう」

「身分なんて気にすんなよ。ゴドウィンとエリーナは騎士とそれに」

仕えるメイド、ロランとアメリカタだつて騎士団長と姫様の専属とはいえ一秘書だぜ？ましてやここじゃお前は勇者だ、何の問題もねえよ。お前さえその気なら明日にでも俺が領主になって姉上を引き摺り下ろしてやる。その方が都合もいいだろうしな」

「……昨日俺に『覚えておけ』と言ったのはそういう意味だったんですか」

再びため息をこぼし、ソウヤが立ち上がった。

「……のぼせてきました、先にならせてもらいます」

そう言うと2人に背を向け、浴室から出て行ってしまった。

「おや……気に障ってしまったようですか」

「いや、あいつきつと照れてやがるんだよ。……まったく、シंकと戦ってちつとは素直になったかと思つたが、ああいうところは素直になつてねえなあ」

「……本当にそうですかね？」

ゴドウィンはガウルの予想は見当違いだ、と言いたげであったが、一方のガウルは間違いない、と自信たつぷりである。

と、その時ガウルはあることを思い出した。

「……あれ？そついや俺あいつに八手蜜取りに行くつて事しか言つてなかつたような……。ま、いつか！」



「昨日今日とお疲れ様でした、レオ様」

ヴァンネット城、レオの自室。昨日の戦に対する領主会見を終えて部屋に戻ったレオにビオレが労いの声をかけた。

「うむ。戦も一段落つくじやろう。ようやく少し落ち着けそうじゃ」

椅子に腰掛けると手にグラスを持ち、ビオレがそこに色鮮やかな液体を注いでいく。

「……これでやっとソウヤ様とゆっくり話でもできるんじゃないですか？」

口に運んだ果実酒を思わず噴出しそうになってレオが咳き込む。

「な、なぜそこでソウヤが出てくるんじゃない!」

「あら、だってレオ様、昨日の地酒祭りの前の僅かな時間にソウヤ様とお話したと聞きましたよ。あれだけの時間では何も話せなかつたでしょうから、もっとゆっくりお時間を取りたいと思ってるのではないかと」

「……何でそのことを知ってる?」

「メイド達の間で話題になってましたよ?レオ様の部屋にお茶を持

っていったらソウヤ様がいらした、って」

チツとレオが舌打ちをする。

「……あいつら、本当にそついう話が好きじゃな」

「ですからそんなレオ様のために、明日のスケジュールを空けておきました」

「……は？」

「ガウ様から聞いたんですが、明日八子蜜取りに行くそうです。勿論ソウヤ様も一緒に。なのでレオ様も明日一緒に行ってはいかがですか？」

「いや一緒に……明日のレザン王子との定例の通信会談はどうするんじゃない？」

「ドラジエの方から、こここのところ戦続きで忙しいだろうから今回は中止で構わないという申し出があったので、私のほうでそれを了解しておきました」

ドラジエ領国。それはガレットの貿易相手で近隣国である。ビスコッティ同様友好な関係を築いており、時折戦も行われていた。レザン王子はそのドラジエ領国の王子にあたる。

「中止、って……仮にも公式の会談じゃぞ!？」

「……レオ様、向こうからの申し出を断っては逆に失礼に当たります。こここのところ戦の連続で忙しかったのは事実です」

「しかし……」

「とにかく、それを除けば後に回しても構わない公務ばかりです。明日は気分転換にお出かけください。こうでも言わないとまた無理をされるし、ソウヤ様がこちらに滞在してられる期間も限られてるんです。勇者様の接待をするというのも、召喚主として重要な仕事としますよ」

レオは何も返さずグラスの液体を一口呷った。

「……わかった。せつかくのビオレの気遣いじゃ。それに甘えるとしよっ」

「ありがとうございます」

頭を下げ、ビオレが空いたグラスに再び酒を注いでいく。

「では私の方からガウ様に伝えておきますね。……レオ様がソウヤ様と一緒にに行けるのを楽しみにしていた、と」

「だ、だからなぜそうなるのじゃ！」

「違うのですか？」

「違うわ！……まったく寄って集って人をからかいおって……」

不機嫌そうにそう言つとレオはグラスの中の酒を一気に飲み干す。

しかし口ではそういいながらも、内心では明日を楽しみにしてい

るのであった。

やっとソウヤとゴドウィンを絡ませることができました。

本編中でもあるとおり実はゴドウィンは公式設定で妻帯者です。これについてはドラマCDの2を是非お聞きください。妻のエリーナの声優は田中理恵さん、2人のデュエット曲は必聴です。

ゴドウィンについてはほぼ公式のままです。元武者とか新参の將軍とか、この辺もドラマCDの2で詳しく語られています。

というかあのCDは若本さん頑張りすぎです。

それからビオレ姉さん役の丹下さんの「ゴドウィン君」って言い方がマジでヤバイです、鼻の下伸ばしながら「はい〜」って返事しちゃうそうです。もっとも、丹下さんは某魔法少女で既に書いてる人の人生をブレイクしてくださったりしていらっしやるんですがね…。

ドラジエのレザン王子についてもそのドラマCD中に登場します。

こちらの声優はダルキアン役も兼ねている日笠さん。彼女はドラマCD2にダルキアンでもクレジットされているのですが、ダルキアンで喋ったのを聞いた記憶ありません。

そもそもダルキアンの話題が出たのはリゼル隊長が「おい、お前の主もう酒飲んでんだけど」ってユキカゼに話振ったところぐらいな気がします。

とにかくこのCD面白いんで、自分のようにガレット好きな方から中の人好きな方まで、広く楽しんで聴けるものだと思います。2期の前には是非お聞きを。

というわけでドラマCDの宣伝でした。……違う、20話の後書きでした。

Episode 21 八手蜜取りにたちこめる暗雲

明くる日。ビスコッティ南部、八チエスタ森林地帯を目指し、一行はヴァンネット城を出発してビスコッティへと続く街道を進んでいた。

「しかしよ、姉上が来るなんて珍しいな」

セルクルを寄せ、ガウルがレオに話しかける。

「丁度スケジュールが空いていたのでな。ビオレに行ったらどうだと薦められたので、行くことにしたんじゃない」

「へえ……」

姉のその言葉を聞いて弟はニヤリと意地悪そうに笑つとそつと耳打ちをした。

「……ビオレからはソウヤが行くっていったからついていく、って聞いたぜ」

「なっ……!」

見る見るうちにレオの顔が赤くなっていく。

「ち、違うぞガウル!ワシは……」

「大丈夫だって姉上、わかってるから。まったく、いつの間にこんなからかいがいのある姉になっちまったんだ？」

昨日ソウヤにも同じようなことを言われた、とレオは思い出し、再び顔を赤らめた。

「ん？どうした、姉上？」

「な、なんでもないわ！」

そう言っただウルの背を平手で叩く。

「いってえ！」

思いのほか力が籠っていたようでガウルがセルクルから落ちそうになった。

「あ……。す、すまん」

「すまんじゃねえよ！弟をもっと労われよ！」

そんな姉弟の後ろをソウヤとジェノワーズの4人が続く。

「いやあ、やっぱりあの2人は仲ええで」

「いや、どう見てもガウ様が一方的にどつかれたように見えただが……」

「多分そんなことない。きっとガウ様が余計なこと言ったんだと思

う。……ベール、どうなの？」

「んー……。おそらくそんなところですねー。さすがにこの距離だとあまりよくは聞こえないけど……」

自慢のウサギ耳をピンを伸ばしつつ、ノワールの質問にベールが答えた。

「この距離で2人の会話が聞こえるのか？」

「サンクト聖ハルヴァー王国出身の私の聴力を持ってすれば結構遠くの音まで聞こえたりするんですよ。……でもさすがにこれだけ離れてて小声だと全て聞き取るのはちょっと難しいですけど」

「せやからソウヤ、お前も誰にも聞かれてないと思って迂闊に話すと、ベールには全部筒抜けだった、何てこともありかねんで？」

「……これからは話すときに周りにベールがいないか確認してからにする」

「え、ええ！？なんかそれちょっと酷くないですか！？」

ソウヤがベールのほうを向いて一つ小さく笑った。

「……ソウヤ、変わったね」

「何がだ？」

ノワールにかけられた声に対し、振り返りながらソウヤが尋ねる。



「前はもつと無愛想で、全然笑わなくて無口だった。でも今は私たちとも普通に話すようになった、と思って」

「……お前に無愛想とか無口とか言われるとは思ってなかったな」

その返しに思わずノワールが「う……」と言葉を詰まらせる。

「おいソウヤ、前も言ったと思うけどこの子拗ねると長いんやから、あんまいじめんといてな」

「……今のも悪いのは俺か？」

ソウヤが苦笑を浮かべた。

「おう、三馬鹿プラス勇者。楽しそうなのはいいけどよ、遅れるのは嫌だからちょっとばっかしスピード上げるぞ？」

「りょうかい。……ほら、ガウ様にまで怒られたわ」

「別に怒ってはいなかったろ。……お前らと話すと疲れる。先に行くとぞ」

少し呆れ気味に、だが本心から嫌がっている様子ではない表情を浮かべ、ソウヤがセルクルの速度を上げた。ジェノワーズの前に出て、さらに距離が開いていく。

「あいつ、本当に先に行ったわ」

「元々無口な人だったし、話すことに慣れてないのよ、きっと。……でもノワの言うとおり変わったわね」

3人が顔を見合わせ、全員が笑って頷く。そしてソウヤに遅れないよう、3人ともセルクルのスピードを上げた。

ソウヤ達6人がハチエスタ森林地帯に着いたとき、ビスコッティ側で到着しているのはブリオツシユとユキカゼの2人だけであった。

「おや、レオ様がいらっしやるとは珍しいでござるな」

「そういうダルキアン、貴様もな」

昨日2度にわたって激闘を演じた2人が言葉を交わした。

「他の連中まだ来てないのか？」

「拙者達は先に出て来たでござる故。シンクとエクレとリコのお城組も荷物と共にもうすぐ到着すると思うでござるよ」

ソウヤがオンミツ部隊の2人を見る。共に戦や任務のとき用の装束を身に纏い、ユキカゼは背に矢筒と弓まで持って完全武装である。

それはガレット側も同様で、輝力武装するガウルこそ丸腰に見えるが、ジェノワーズの3人も武器を用意し、レオも右手の指には緑の宝石の指輪、すなわち魔戦斧グランヴェールが存在している。

「ガウ様、城を出たときからずっと気になってんたんですが……」

「ん？どうした？」

「なんで全員武器持参なんです？」

「そついうお前だってエクスマキナ持ってきてるじゃねえか」

「それはそうですが……。国の宝剣を正式に預かってるわけですから、責任持って肌身離さず身につけているぐらいのつもりでいます」

「ほう、なかなかいい心がけじゃな。さすがわが国の勇者、というわけじゃな」

「……からかわないでください、レオ様」

ソウヤが苦笑を浮かべる。

「それでさっきの俺の質問なんですが……」

「ごめーん！ガウルー！」

口にしたソウヤの質問は、遠くから聞こえてくる声によってかき消された。

「お、シンク！」

シンクにエクレール、そしてリコッタが合流する。さらにその後ろには大量の荷物が積んであると思われるセルクルとそれに引かれる荷車。

「すみませんレオ様。お待たせしてしまい……」

「気にするな、タレ耳。それより食料を用意させてしまってますまなかつたな」

「いえ。元々こちらが言い出したことですし、それに前はガレット側に出してもらっている……」

「……お話中いいですかね？」

ソウヤがレオとエクレールの会話に割り込んだ。

「なんじゃ？」

「ハチミツ取るのに食料とか必要なんですか？ついでにさっき聞きそびれた全員が武器持参してる理由も出来れば答えてもらおうと助かります」

「それは勿論必要でありますよ」

「詳しいことは行ってからのお楽しみ、ってことで。僕も最初びっくりしたし」

「シンク、知ってるなら教えてくれ」

「ダメダメ。行ってからの楽しみだつて。その方が楽しいだろうし」

「シンクがそう言うなら行くまで伏せておくか」

ガウルも意地悪そうに笑う。

「……それならそれでいいですが、でしたら早いところ行きましよう。意外とこう見えて気になるのはさっさと処理しておきたい性格でしてね」

ソウヤにしては珍しい、ジョークとも取れる一言に思わずレオの表情が緩まる。

「では勇者殿のご希望通り、『ハチ蜜』取り、行くとするかの！」

『なんやワレエ？』

いざ、「ハチ蜜」を取りに来た一向だったが、森に入って出会ったのはなんとクマだった。

「……クマ？」

「ああ、クマだ。こいつらがハチくま、正式名称『ハチエスター黒熊』だ。こいつらは摂取した蜜や果物を体内の蜜袋に溜めて熟成させるんだ。で、それを取り出したのが『ハチエスター黒熊の蜜』、略して『ハチ蜜』ってわけだ」

「……は？」

得意気なガウルの説明を聞いたソウヤが、らしくなく間の抜けた声を上げる。

「ね、びっくりしたでしょ？僕も自分の世界のハチミツ取りを想像してたから、最初すごく驚いちゃって」

「いや、驚くというか……。略し方が紛らわしすぎる……」

「ま、ガレットやと『ハチくま蜜』って言い方もするんやけどな」

「なら最初からそう言っておいてくれよ、黄色いの。……それで、まさかこのクマの腹を掻っ捌いてハチ蜜を持ち出すとか言っんじゃないだろうな？」

「そんな恐ろしいことはしないでありますよ。ハチくまはハチ蜜を巣に溜め込んでいるのでありますから、それを分けてもらうのであります」

「その第一段階が交渉。だから食料をシンクたちに持ってきてもらった、ってわけ」

ノワールの補足にようやくソウヤが納得した表情を見せた。

「なるほどな。それで交渉決裂したら実力行使、ってわけか。だから全員完全武装だったのか」

「まあそういうことだ。……おいハチくま！今日はハチ蜜を分けてもらいに来たんだ！食料はたんまり持ってきたし、これと交換ってことでどうだ？」

「こいつの姉、ガレット領主のレオンミシエリ・ガレット・デ・ロ  
ワじゃ。ワシからも頼みたい」

ガレット権力者の2人の頼みを聞き、八千くまは一瞬考えた様子  
だったが、

『おとといきやがれや』

そっぽを向き、あっちへ行けと手を動かす。

「この野郎、上等じゃねえか！ だったら決闘を……」

「あー、ガウル殿下、しばし待っていただいてもいいでござるか？」  
血気に逸るガウルを制するようにブリオツシュが一步前へと出る。

「八千くま殿、母熊殿は元気にしてるでござるか？ 昔馴染みのダル  
キアンが参ったと伝えていただけると嬉しいでござるが」

『ダルキアン……？ もしかしておかさんが武芸を教わった……？』

「そつでござる。頼めるでござるか？」

『……ちょっと待ってってや。おかんに話通してくる』

そつ言つと八千くまは森の奥へとこのし歩いていく。

それを確認するとソウヤはブリオツシュへと話しかけた。

「ダルキアン卿、知り合いなんですか？」

「そうじゃないよ」

「このハチくまの母熊さんの先生なんだって」

「……さすが大陸一の剣士。獣までが師事してるとは思ってもませんでしたよ」

ソウヤの皮肉っぽい一言に思わずエクレールとユキカゼがムツとした表情を浮かべ、ソウヤを睨みつける。

「……信奉者の2人、そう睨むな」

「別に」

「睨んでないで」

「嘘付け。……こりゃダルキアン卿のことで迂闊な発言は出来そうにないな」

「はは。拙者は気にしていない故、構わないで」

「そうは言いますが、あなたが構わなくても、あの2人が許してくれそうにないですからね」

苦笑を浮かべつつソウヤがそう言った時、森の奥から2頭のクマが近づいてくるのが見えた。片方はさっきまでここで話をしていたハチくま、もう1頭はそれより大きく頭に花の飾り物をつけたハチくまだった。



『あら、ほんとにセンスやないの』

「元気そうでなりよりでござる、母御殿。実は今日はお願いがあつて来たでござるが……」

『ああ、息子達から話は聞いたとるで。八千蜜がほしいんやろ？いくらセンスでもただでは……と言いたいところやが、まあウチとセンスの仲や。食料と交換でええから持っていきいや』

母熊が子熊に視線を送る。それを受け、子熊が再び森の奥へと戻っていった。おそらく八千蜜を持つてくるのだろう。

「かたじけない。恩に着るでござる」

『ええつてことよ。……代わり、と言ったらなんやが、一つ頼み聞いてくれんか？』

「頼み……でござるか？」

母熊がブリオッシュに頼んだ内容とは、「近頃森の土地神が減つたよつな気がしており、守護力が弱まったよつに感じる。その原因を調べてほしい」というものだった。

土地神とはその土地に暮らす精霊に近い生き物で、その土地神が

住む場所は自然の実りが豊かな証、そしてフロニヤの守護力が強く働いている証でもある。

「つまり人であれ獣であれ、大抵は土地神が多く住む、フロニヤ力の強い場所に住居を構える。その方が生活がしやすいからじゃ。そのため、土地神が減るということを何か良くないことの前触れ、と捕える者もいる」

「土地神が減るということはフロニヤ力が弱まるということ。私達が戦で怪我をしないのはフロニヤ力のおかげ。だからその地のフロニヤ力が弱まるのはよくないことだし、原因は究明した方がいい」

レオの説明にノワールも補足し、ソウヤはその説明を黙って聞いていた。

今この場にいるのはガレット側の6人のみ。ブリオツシユとユキカゼは別行動を取り、シンク、エクレール、リコツタの3人はハチくま相手に食料品とハチ蜜の交換作業を行っていた。

「でもよ、ダルキアンが言ったのは本当なのか？『もしかしたら魔物の可能性がある』とかって……」

「ありえると思うで。魔物ってのはフロニヤ力の弱いところで出やすいんやろ？」

「だとすると……またあのときみたいな魔物が出てくるの……？」

「それはないじゃろ。ダルキアンもそう言っておったし」

平和であるはずのこの世界、フロニヤルドにおいてその平和を根

底から覆しうる存在、それが魔物である。歴史を紐解けば国が一つ魔物に滅ぼされた、という事例もある。

かつてシンクとミルヒが打ち倒した魔物は古に封印された強大な存在であり、それほどの存在となれば気候が代わり、大気は荒れ、大地を切り裂くほどの力を持つものとなる。

だがそこまでの力を持つ魔物は非常に稀である。それは魔物を生み出す元となる呪い、あるいは悲運の元凶となる怨恨、憎悪など、そう言ったものの重さと魔物の力が比例するからであり、そこまでの呪いを持つ存在自体が稀少であるから、というのが理由だった。

「討魔の剣聖」とも呼ばれるブリオツシユとその右腕であるユキカゼは、実はこういった魔物を狩る狩人である。その狩人が母熊から土地神が減った、という話を聞いたとき真っ先に疑ったのは魔物の存在であった。

通常、魔物狩りは極秘に行われることであり、ブリオツシユも基本的にユキカゼに口外を禁止するほどである。だが、ブリオツシユとユキカゼが危険すぎるほどの強大な力は感じないこと、今顔を合わせているメンバーは信頼できること、何より魔物が原因と決まっただけでないこと、という点から協力を要請してきたのであった。

「通常は極秘でござるが、今回はそこまで強大ではないようであるし魔物と確定したわけではない故、皆で手分けして魔物、あるいは土地神が減少した原因を探してほしいでござる。ただし、魔物の類を見つけたら真っ先に拙者に連絡すること」

それを条件とし、現在手分けして探しているところである。もっとも、ここまで原因らしい原因は見つかっていない。

「しかし魔物か……。平和なファンタジーの世界かと思っただけと危険な存在もあるんだな」

「お前の読んでも物語にも魔物のような存在が出るのか？」

「しょっちゅう出ますよ、というか敵のほとんどはそういう類です」

「ならお前としては嬉しい展開ではないのか？」

レオにそう言われ、ソウヤは苦笑を浮かべる。

「本音を言えばそうです。……ですがこれは物語じゃない。俺だけならまだしも、フロニヤ力が弱まっているとあればここにいる全員が怪我をする危険性がある。なら浮ついた気持ちだけではいけないってこともわかってます」

ソウヤのその言葉にレオはほう、と感心したような声を出した。

「なかなかいいことを言うようになったの。じゃがな、『俺だけならまだしも』というのは気に入らん。お前はもっと自分を大切にしろ」

「無論、もう自分を粗末にするつもりはありませんよ。ただ、覚悟を言ったままで。……もしあなたを傷つける存在がいれば、俺がこの身に変えてもあなたを守る、ってことですよ」

「な……!!」

レオの顔が赤くなる。それを見ていた4人もニヤけ出して2人を見る。

「き、貴様ごときがワシの身を守るなど、思い上がりもはなはだしいわ！馬鹿なことを言つとらんでさつさと原因を探すぞ！」

レオがソウヤに背を向け、ドーマを進める。

「レオ様、あなたを守る存在より前に行っちゃダメやないですか？」

「う、うるさいぞジョーヌ！貴様、ワシをからかうなどどうなるかわかってやっておろうな！？」

グランヴェールを実体化させて手にしたレオの背後に紋章が輝き始めた。

「え、え！？いやそんなマジギレされました……。ちょ、ちょっとノワ、ベル！ついでにガウ様も！見てないで助けてな！」

「しらねえな、お前の責任だ」

「自業自得」

「ジョー、骨は拾ってあげるからね……」

「あー！もうこの白状者共！」

ジョーヌがセルクルを走らせレオから逃げようとする。が、レオもドーマをそれより早く走らせ、もはや紋章砲を放ちそうな勢いだ。

そんな様子を見ていたソウヤがやれやれとため息をつく。そして少し距離を離された一団に追いつこうと自分のセルクルを進めようとした。

その時だった。

『見つ……けた……』

「ん……？」

何か声が聞こえたような気がしてソウヤが辺りを見渡す。だが少し距離を離されたじゃれあう5人以外の姿はどこにも見えない。少なくとも聞こえたのは老人のような皺枯れた声だった。一緒にいる者の声ではない。

(気のせいか……)

ソウヤがそう思い、再びセルクルを進めようとした時。

『見つけた……』

今度はよりはっきりとその声が聞こえる。

「誰がいるのか!？」

声が聞こえたと思う方へソウヤが尋ねる。だが返事はない。

『じつちだ……』

代わりに自分を呼ぶ声が聞こえる。

ソウヤはセルクルを降り、その声の方へと歩いていく。

「ちょ、ちょっと待ってーな！レオ様落ち着いて……。ほら、ソウヤからも何とか言ってる……」

5人が異変に気づいたのはその直後だった。

「あれ？ソウヤどこや？」

ここにきてようやくジョーヌはソウヤがいなくなっていることに気づく。

「ジョーヌ、その手は食わんぞ……！」

「いや、ほんとにいないんや！さっきまで一番後ろにいたはずなのに……」

ジョーヌのその言葉に全員が今までソウヤがいたはずの場所へと視線を移す。しかしそこには誰もいない。

「ソウヤ？どこ行っただ？」

ガウルが言葉を投げかけるが答えはない。ガウルは自分のセルクルを来た道を少し引き返す形で進ませる。

「おい……。こいつ、ソウヤが乗ってたセルクルじゃねえか!？」

主を失ったセルクルはその場で立っていた。4人もその場所へと駆け寄ってくる。

「おい！お前の主人、どこに行った！？」

そう問いかけられたセルクルはクエツとより木が生い茂る森の奥をクチバシで指す。

レオがその指し示された先へ行こうとしたその時 身震いするほどの寒気が背中を走った。

「……ジヨーヌ、ベール。ダルキアンを呼んで来い」

「レオ様？」

「どうかなさいまし……」

「いいから呼んで来い！今すぐに！」

さっきまでの雰囲気と一転した硬い声色、そしてその口調に2人は顔を見合わせ、ただことではない、とセルクルを走り出させた。

「どうしたんだよ、姉上！？」

「……ガウル、お前は感じないか？この奥から感じる禍々しいまでのこの気配……」

「気配？……いや、俺は何も……」

ガウルの返答を最後まで待たずに、レオがその奥へと脚を踏み入れる。



「お、おい！姉上！」

嫌な予感がする。

ミルヒの死を星詠みで見たときのような。一度その光景を目の当たりにしたときのような。そしてソウヤを星詠みしようとして何も見えなかった、あのときのような。

鼓動が早くなる。先ほど感じた寒気は止むことなく続いている。ますます強くなる嫌な気配に、まるでそれを振り払うようにレオが足を進める。

そして、レオは見た。

「ソウヤ……？」

そこに立っていた「ソウヤ・ハママ」を。

だが、その右手には漆黒の剣が握られ、その周りには剣同様の色の瘴気が立ち上り、その瞳は血に飢えた獣のように紅く変わっていた。

「ソウヤ」を取り巻いていた漆黒の瘴気が広がる。

「こ、これは……」

ドクン、と大きく心臓がなる。

ソウヤを星詠みしようとしたとき、影に包まれたように何も見えなかった。

(違う……!)

レオはその時ようやく気づいた。

あれは見えていなかったのではない、間違いなく「見えていた」のだ。それもここまでではっきりと。

「ソ、ソウヤ!」

自国の勇者の名を呼び、瘴気を振り払いながらレオが「ソウヤ」に駆け寄ろうとする。

その時、瘴気が漆黒の剣に吸い込まれていく。

(あれだ、あの剣を離させれば……!)

レオがそう思うと同時。

「レオ様! いけない!」

背後からノワールの声が聞こえたと思ったその刹那、レオは体に何かがぶつかった衝撃を感じ、ややあつて腹部に激痛が走った。

「ソ、ソウ……」

だが、呼ぼうとしたその名を最後まで口にする代わりに喉に熱い液体がこみ上げ、それを吐き出す。

見れば自分の脇腹に漆黒の刃が突き立てられ、今この瞬間も赤い

染みを服に広げている。

そして自分を刺した者の口が残虐そうに醜く歪み、レオはそこから発せられる人ならざる者の声を耳にした。

『見つけたり……私の最強の使い手……！我、ここに甦らん……！』

Episode 21 八千蜜取りにたちこめる暗雲（後書き）

本編が冗談抜きにシリアスなんでこの後書きも真面目に、短めに八千蜜取りについてはコミックスで描かれています。やけに肌色率が高いです。

ちなみに八千くまはまだま化するとくまだまになるようです。

「この気配……！」

ソウヤの異変と時を同じくしてブリオツシュとユキカゼはただならぬ空気を感じていた。

「お館様、これはもしか……！？」

「ああ……。拙者の嫌な予感が当たってしまった……！」

ガレット勢と手分けして八チエスタ森林を調査し始めてから数刻、自分達が調べていた範囲において土地神は減っているどころか、むしろ増えていると感じた辺りで、ブリオツシュは一つの不安を抱き始めていた。

土地神とはその地に留まるのが常ではあるが、己の身の危険を感じれば留まっていた地を離れることもある。そしてその己の危険とは「魔」の存在。すなわち魔物である。

魔物はフロニヤ力の弱いところに生息すると言われている。一般的にその説明で間違いはない。だが厳密にはフロニヤ力の弱いところに生息するのではなく、魔物を恐れて土地神が逃げるためにその地のフロニヤ力が弱くなるのだ。

その逃げた土地神は当然他の地へと移る、すると今度はその地の

フロニヤ力が強くなったと感じられる。すなわち、フロニヤ力が弱くなった気がする、といわれた地においてむしろ逆に強くなったと感じられた場合、その地の近辺に魔物の存在する可能性が高い、ということでもある。

(それにしてもこの気配……。最初拙者が感じたときよりかなり邪悪に感じられる……。どういふことか……)

胸騒ぎがする。そしてその胸騒ぎは不幸なこと到的中することとなる。

「ダルキアン卿！ユツキー！」

聞こえてきたのはジョーヌの声だった。

「ジョーヌ、それにベールでござるか。この気配、魔物でござるな？」

「え？そ、そうなんか？ウチらはレオ様にすぐにダルキアン卿を呼んで来いって言われただけで……」

「ソウヤさんがいなくなっちゃって、それを探しているときに突然そう言われて……。すぐく焦っていたようでしたが……」

ベールからの報告を受けるとブリオツシユの顔色が変わる。

「……ジョーヌ、ベール、すまないがエクレール達にこのことを伝えてもらえるでござるか？」

「え？まあいいですけど……」

「よろしく頼むでござる」

「あ！場所は……」

「大丈夫、大体の予想はついでござる」

そう言うとダルキアンは自身のセルクルであるムラクモを全速力で走り出させ、ユキカゼもそれに続いた。

「お館様、先ほどの話、もしやソウヤは……」

「考えたくはない……。が、この胸騒ぎ……。拙者の見積もりが未熟だったと言わざるを得ないかもしれないでござる……」

ユキカゼが主の顔を窺うと、珍しく焦燥の色が濃く出ている。

(それほど良くないことが起ころうとしている……)

そう思って表情をやや曇らせ、ユキカゼはブリオッシュに遅れぬようセルクルのスピードを上げた。

「姉上っ……!?!」

ガウルが目にしたのは自国の勇者がその召喚主に刃を突き立てる

という衝撃的な光景だった。

その「ソウヤ」が左腕を突き出す。そこから放たれた衝撃波がレオの体を吹き飛ばした。

「姉上っ！」

咄嗟にガウルが地面に激突しようとするレオの間に体を割り込ませた。

「おい姉上！大丈夫か！？しっかりしろ！姉上！」

「ガ……ガウ……ル……」

弟の呼びかけにレオは呻くように名を呼ぶ。

レオの腹部を支えた左手に熱くぬめる感覚を感じる。見れば、その左手は赤く染まっていた。

慌ててノワールが駆け寄り、手の甲の紋章を輝かせながらレオの傷口に両手から生まれる光を当てる。

「ソウヤ……てめえ……！」

レオをノワールに任せ、ガウルが立ち上がった。

「ガウ様！ダメだよ！」

ノワールの忠告を無視し、



「輝力解放！獅子王爪牙！」

両手に輝力武装による爪を展開してガウルがソウヤへと飛び掛った。

「だ……ダメじゃ……ガウル……」

「レオ様喋らないで！今紋章術で治療してるから……」

「そいつは……間違いなくソウヤなんじゃ……そいつを斬れば……ソウヤが傷つ……ゴホッ！」

「レオ様……」

口から血を吐き、そして気を失ってしまふ。それでもレオはガウルにその「ソウヤ」と戦ってはいけないと伝えようとしていた。

だがその声はガウルには届かない。

「うおおおおおっ！」

ありったけの力を込めてガウルが「ソウヤ」へと爪を連続で叩きつける。しかしそれは右手の漆黒の剣によって軽々と打ち払われていく。

「なぜだソウヤ！お前は姉上を守るって言ってたじゃねえか！なのになぜだ！」

その問いへの答えはない。代わりにその口元が残忍そうに歪んだ。

「答える！ソウヤ！」

『なるほど……。ソウヤというのはこの者の名か……』

「な、何……！？」

聞こえた声に思わずガウルが動揺する。その一瞬の隙を突かれ、下からの切り上げに反応が遅れた。

「ぐっ……！」

両腕が大きく払われる。続けて突きの構えを取られたのがガウルの目に入った。

（間に合わねえ……！）

やられる、そうガウルが覚悟を決めた時、

「一の矢・花嵐！」

紋章術の矢が「ソウヤ」目掛けて飛来する。その矢を弾くために追撃の手が一度止まる。が、続けてガウルへの追撃を仕掛けようと踏み込む瞬間、今度は2人の間に割って入る影があった。

その者の刀によって斬撃を防がれ、さらに反撃を交わすために「ソウヤ」が飛び退き、距離が空いた。

「ダルキアン！」

割り込んだ騎士の名をガウルが呼ぶ。

「ガウル殿下、お下がりください」

「下がるかよ！あいつは姉上を……」

「お下がりください」

有無を言わせぬ二度目の口調に思わずガウルがたじろいだ。

「……あれを討つのは我々の役目故……」

「何……？『あれ』って……ソウヤじゃねえのか？」

「我々が狩るべき『魔物』とは不幸に見舞われた存在。ある者はその体を妖刀で貫かれて魔物となり、またあるものは捨てられた悲しみが怨恨となって魔物となる……。しかし前者のように、そういった呪われた物……すなわち、『禍太刀』が原因となって、魔の物へと変えてしまう場合があるでござる」

説明しつつ、ブリオツシュとガウルの間ユキカゼが立つ。最初に紋章術の矢を放ったのは彼女だった。

「な……！じゃ、じゃあソウヤは……！」

「そう……。今はその禍太刀に体に乗っ取られている状況でござる」

『乗っ取られている、とはいささか間違っているぞ、我らを討つ者よ……』

「ソウヤ」の口から発せられた、しかし明らかにソウヤとは異なる

る声。

『もはやこれは我が完全に支配した……。すなわち我は器で器は我なり。これは実に素晴らしい器だ……。まさに最強の器……。そして我は最強の剣なり……。すなわち我に敵なし……』

「ほう、最強とは大きく出たでござるな。……それを証明するためにソウヤ殿の体を使つつもりか？」

『理解が早いのは助かるぞ……。我らを討つ者よ……。すなわちそのために……。まずは主達を斬る……』

「させぬでござる。『討魔の剣聖』として」

『我を討つことはこの器を斬ることと同義なり……。主に斬れるのか……。？この器を……』

ソウヤを通して出る「禍太刀」からのその声に一瞬ブリオッシュの言葉が止まる。

「……斬る。ソウヤ殿もきつとそれを望むはず」

『よかるう……。できるものならやるがよい……！』

「禍太刀」がブリオッシュへと斬りかかる。手に持つ太刀でそれを止めて鏝迫り合いへ。

そんな主の戦いを見つつ、ユキカゼは視線は逸らさずに首だけを少し後ろへと傾けた。

「ガウル殿下、レオ様を安全な場所へ。可能ならシンク達と合流し、拙者達の戦いが終わるのを待っていてほしいでござる」

「しかし、お前ら2人で……」

「禍太刀狩りは拙者達の役目故……。まずはレオ様の無事を確保してほしいでござる」

ガウルが返答に詰まる。

「ガウ様、私1人の治癒じゃ限界がある……。出来ればリコの手も借りたいし、ここから離れた方が守護力も働くから、その方がレオ様のためにもいいと思う」

「……わかった。ノワがそう言うならそうする。……ユキカゼ、ソウヤを頼んだぞ」

「了解でござる」

最後まで主の戦いから目を離さずに答えたユキカゼを見送り、レオの右腕を肩にかけてガウルがその場を離れていく。

その間もブリオツシュと「禍太刀」の攻防は続いていた。「最強」と自負しただけのことはあり、その剣はブリオツシュにも引けを取らない。加えて器となるソウヤの体の影響により、時折出される格闘が非常にやっかいなためにブリオツシュは攻めあぐねていた。

「くっ……!」

今も相手の剣を払ったために追撃をかけようとした瞬間、見えな

い角度から飛んできた蹴りを避けるために、ブリオツシユの手が止まったところであった。

「閃華裂風！」

ユキカゼの手に生み出された輝力による巨大な手裏剣が「禍太刀」を狙い、反撃を諦めさせる。その援護を受けてブリオツシユは距離を取り直した。

「助かったでござる、ユキカゼ」

礼を言う主の顔からは余裕の色は完全に消えていた。

(やはり……乗っ取られた相手が悪かった……。剣術だけでなく体術にも長けるソウヤ……。しかも相手がソウヤというせいもあってお館様は迂闊に相手を斬れない……)

ギリツとユキカゼが奥歯を噛み締める。

(もはやソウヤの体自体が禍太刀として支配された以上、その体ごと斬らねばならない……。フロニヤルドの者なら弱いとはいえフロニヤルの働いているこの状況ならなんとかなるかもしれないでござるが、異世界人のソウヤは……)

『……剣が迷っているな、我らを討つ者よ』

そのユキカゼの不安を見越したかのように「禍太刀」が口を開く。

『我ごと器を斬ることを躊躇っているのだらう……。我には解る』

「……斬る、と言ったはずでござる」

あくまで冷淡にブリオツシユはそう返すが、「禍太刀」は器となつているソウヤの口を醜く歪ませた。

『……ではそうするがよい』

「禍太刀」が地を蹴る。上段からの力のこもった一撃をブリオツシユは刀の腹で受け流す。返す刀は離された距離に空を切る。

再度両者の打ち込み。力が拮抗した瞬間、互いの刃が離れて「禍太刀」が中段へと右の回し蹴りを放つ。それをブリオツシユが肘で防ぐと同時に、今度は上段からの打ち込みが迫る。

だが蹴りの直後、バランスを取りきれない状態からの攻撃をブリオツシユが力強く上へと払う。剣ごと両腕が開け、防御を失った体がブリオツシユの目の前に見えた。

（好機……！）

上へと払った刀を振り下ろす、狙うは上段からの袈裟斬り。防がない、と確信したブリオツシユだったが。

しかしその手は振り下ろすことを一瞬躊躇した。

『……やはり迷いがあつたな』

残忍な笑みを浮かべ、ブリオツシユの刀より早く、払われていた剣を「禍太刀」が振り下ろす。

「ぐっ……!!」

「お館様アー!」

ブリオツシユのうめき声とユキカゼの悲痛な叫び声が森に響き、そして鮮血が宙を舞った。

「ここまでくりゃいいだろ……」

ガウルは傷ついたレオを連れて戦闘の場から離れていた。

「ノワ、姉上の様子は?」

「……傷が深い。命に別状はないけど、私1人じゃこれ以上の治癒は難しいかもしれない……」

「くそっ……。なんだってこんな……」

愚痴りながら素手で地面を殴り、意識が虚ろな姉の顔を心配そうに覗き込むガウル。

確かにガウルは輝力の使い方には長けているが、こういった治癒といった方法として紋章術を使うことは不得手であった。こんな状況なのに何も出来ない自分が恨めしい。



「ガウ様ー？ガウ様どこやー？」

と、その時ガウルを呼ぶ声が聞こえてきた。

「ジョー！ここだ！」

立ち上がって声を張り上げ、自分の所在を知らせる。少し離れた位置に残りのジェノワーズであるジョーヌ、ベール、そしてハチクまとの物資の交換を行っていたシンクとエクレールとリコッタの姿が見えた。

「ガウ様！無事そうでしたわ……ダルキアン卿が魔物が出たとか言うとしたし、エクレ達もハチクまに嫌な空気を感じるって言われたとかで……。え！？」

「レ、レオ様！？」

ガレットの2人は領主の傷ついた姿に思わず言葉を失う。それは少し遅れてその場に着いたビスコッティの3人も同じだった。

「な、なんでレオ様が……」

「リコ、手伝って。治癒の紋章術使えたよね？」

「……あ、ご、ごめんであります。使えるであります」

リコッタは自分の手をノワールの手の近くへとかざし、手の甲の紋章を輝かせ始める。心なしか、レオの顔色が少し良くなったようにも見えた。

「フロニヤルドの人達って怪我するぐらいのダメージを受けるとだま化するんじゃないの？」

ずっとそれを聞くタイミングを窺っていたようにシンクの質問が切り出される。

「説明しなかったか？フロニヤカの弱いところでは私達も怪我をすることもある、と」

「……そうか。そういえば……そうだった」

おそらくシンクは以前魔物と戦う前に、単身ミルヒを救出しようとして叶わずに怪我をしたレオを思い出したのだろう。

「……それでガウル殿下、このレオ様の傷はやはり魔物が……？」

「……魔物といえば、もう魔物なのかもな……」

ため息と共に意味ありげなセリフを一つ呟き、

「……姉上を刺したのはソウヤだ」

「「なっ……！？」」

ガウルの言葉にその場の全員が息を飲んだのが解った。

「そ、そんな……どうしてソウヤが！？」

「……厳密には、もうあいつじゃねえ。ダルキアンがそう言った……」

……」

「あいつやない……?」

「……魔物に体を奪われた、ということですか?」

その言葉の主であるエクレールの方を向くとガウルは重々しく頷く。

「禍太刀とか言ってたな。ソウヤはそれに体を支配された、と」

「あの時の子狐と一緒に……」

シンクは再び以前の魔物と戦ったときを思い出す。あの時の原因は子狐に突き刺さった妖刀。すなわち禍太刀が原因であり、シンクとミルヒの手によってその妖刀は抜かれ、子狐を呪いから解放している。

「だったら、その禍太刀を破壊しちやえば……」

「いや……。どうもそれが……できないらしい」

「そんな!」

「あの禍太刀はソウヤの体に乗っ取って言葉を話していた。どうも自分を消したければ、ソウヤごと切るしかない、ということを書いていた……」

「ダルキアン卿の様子を考えると……それが嘘じゃないんだと思う……」

ガウルに続いてノワールからももたらされる事実にはシンクが愕然とする。

「じゃあ……どうしたら……」

そのシンクの問いは皆答えが知りたい問いだ。だがその答えは誰も教えてはくれない。

誰もが言葉を発せず、その場で黙り込んでいた。

「う……」

その沈黙を破ったのはレオのうめき声だった。

「レオ様!？」

「意識が戻ったでありますか!？」

うつすらとレオの瞼が開かれていく。

「ワシは……」

「レオ様は怪我をしたんです。今私とリコの紋章術で治療を……」

「怪我……。確かソウヤを見つけて……。それで……」

そこまで言ったところでレオの瞳が見開かれ、意識が完全に覚醒する。

「そうじゃ……。ソウヤ!ソウヤは……!」

そう言って上体を起こそうとして、左腹部に走った激痛にレオは思わずうめき、顔をしかめた。

「レオ様、まだ応急処置しかしてないんです。無理しないで……！」

「ワシのことなどいい……！それよりソウヤは……」

レオがその場の全員を見渡す。だが誰もその質問に答えようとせず、目を伏せる。

「……そうか。あれは……現実じゃったんじゃな……」

そのことを確認させるように腹部がまたズキリと痛んだ。

「今ダルキアンとユキカゼが戦ってる……。もうあいつの体は禍太刀に支配されていて……あいつを斬るしかないとかって……」

「……そうか」

辛そうに現状を報告するガウルを見つめた後でレオは目を地に落とす。

「……本当になんとかできないの？」

シンクが再び訪れた沈黙を破る。

「シンク……」

「だって前のときは僕と姫様で禍太刀を抜いて、それで子狐を救う

ことが出来た。だったら……！」

「実にお前らしい意見じゃ。……もしかしたらまだワシらのことを覚えていて、禍太刀の呪いに打ち勝てるかもしれん……」

「レオ様……！」

同意を得てシンクがレオのほうを見返した。

「よっしゃ！ だったら行くこうぜ！ 俺達の声であいつを元に戻してやればいい！」

「でも……うまくいくでしょうか……？」

ガウルの提案にベールが不安な表情でそう尋ねる。

「知るかよ！ でもよ、何もしないでいるよりは可能性はあると思わねえか？」

「さすがガウ様、たまにはいいこと言うでー！」

「一言多いぞ、ジヨー！……とにかく行くぞ、皆が反対しても俺は行く」

「無論ワシも行く。……無理強いはせん。残りたい者はここに残ってもいいぞ」

そう言ってレオが全員を見渡す。だが皆の目はもはやその意思を決めている輝きを放っていた。

その様子を確認したレオがフツと笑いをこぼした。

「……これだけ多くのものに心配してもらえようになりおって。  
……行くぞ、あの偏屈勇者を説得するために……！」

ガウルに肩を貸してもらいながらレオが歩き出す。そこにいた全員がそれに続いた。

Episode 22 魔の胎動（後書き）

シリアスはここで終わらせる予定だったんですが、予想以上に文字数が多くなったのでもう1話続きます。  
やはりこの後書きも短めに。



左肩を抑えながらブリオツシユが飛び退く。仕掛けようと思えば追撃が出来ただろうに、「禍太刀」はそれをしなかった。

「くっ……」

傷の具合を確認する。左肩から胸部にかけてぎっくりと斬られてはいたが、思ったよりは深くはない。だがそれよりも「己の剣が迷っていた」という事実を突きつけられたことのほうが痛手であった。

「お館様、大丈夫ですか!？」

不安そうな声を上げて駆け寄ろうとするユキカゼだが、ブリオツシユが怪我をした方の左腕でそれを制した。

「心配ない。致命傷からは程遠いぞござる」

そう聞いて一度胸を撫で下ろすユキカゼだったが、傷口を押さえていた右手が離れ、そこが赤く染まっているのを目にして再び表情に不安の色が生まれた。

『肩から上を離してやるつもりだったが……少し浅かったか……。さすがだな……。』

そう言った「禍太刀」の口元が歪む。

「……よく言う。先ほどは追撃をかけようと思えばかけれたはず。だがそれをしなかった。……拙者が苦しむ姿を見て楽しんでいるんでござろう?」

今度は歪んだ口元から歯が覗いた。

『……聡明聡明、実に物分りがいいな、我らを討つ者よ……。悲哀は愉悦に、苦痛は快楽に……。主達の心が絶望に染まるその瞬間こそ、我の至高の瞬間なり……』

「お世辞にもいい趣味とは言いがたいでござるな」

軽口とは対照的にブリオツシユの顔に嫌悪の色が浮かぶ。

『……ではどうする?我らを討つ者よ……』

「禍太刀」の質問に答えず、ブリオツシユは僅かに顔をユキカゼのほうへと向けた。

「……ユキカゼ、『封魔陣』を頼むでござる」

主からのその言葉にユキカゼが驚愕の表情を浮かべた。

「しかしお館様……それは……」

そこまで口にしたところでユキカゼは主の表情に気づく。

その表情はもはややむをえない、と言いたげであった。だがそれを言葉にはしない。すれば今迷いが生まれているその剣がより迷う、

とわかっているからだろう。

もはや目の前の「ソウヤ」を斬るより他にない、と解っているつもりでいても、それでも何か方法がないかと考えてしまっている。しかしそれ故に心に隙が生まれ、剣が迷う。その結果が左肩の傷だ。

ブリオツシユはそのことを痛感している。そして封魔の者として自分が倒れることは許されない、そのことも承知している。加えるなら、心を決めねばならない、ということも。

だからこそその「封魔陣」の要求なのだ。ユキカゼはそのことに気づいた。

「……承知しました」

短く答え、一つ息を吐く。そして懐から短刀を取り出し、逆手に持つと顔の前に構えた。

「……浮世に仇なす外法の刃……」

ユキカゼの紋章術の詠唱が始まったのを聞くと同時、ブリオツシユが地を蹴り、「禍太刀」に斬りかかる。

「……封じて廻るが、我らの務め……」

ブリオツシユの刃を受け流し、反撃に右の上段回し蹴り。だが深追いしないためにそれは空を切る。

「……大地を渡って幾千里……浮世を巡って幾百年……」

ユキカゼの足元に光り輝く魔方陣が広がる。さらに辺りにも同じ光が満ち溢れてくる。

しかし今剣を交える2人の手は止まらない。

「……天狐の土地神ユキカゼと、討魔の剣聖ダルキアン……」

一層光が激しくなる。ユキカゼの周り、いや、そこを中心として半径数メートルの周りを取り囲むように、光の剣が宙へと浮かんでいた。

「……流れ巡った旅の内、封じた禍太刀……五百と十本……！」

これまで切り結んでいたブリオツシュが大きく後ろへと飛び退き、距離を開けた。追おうとした「禍太刀」だが異変を感じたのか、その脚が止まる。

「天地に外法の華は無し！」

光の剣が「禍太刀」の方へと切っ先を向ける。次の瞬間それは一斉に飛来し、「禍太刀」の全身へと突き刺さる。

『ぐ……！』

「朽ちよ！禍太刀！」

光の剣によって「禍太刀」は動きを封じられ、さらに残りの光の剣がブリオツシュの刀に吸われていく。それを受けて刀身は紫の輝きを放ち出し、一回り巨大化したようにも見える。いや、実際にそれは光を纏い巨大化していた。そしてその紫の光はブリオツシ

コをも包み込む。

「……ソウヤ殿、御免……！」

小さくそう呟いたブリオツシユの体が宙に舞う。大上段に構えた光を纏うその刀に、落下のスピードを加え。

「神狼滅牙、天魔封滅！」

叫びと共に、刀を振り下ろす。

「禍太刀」は動かない。いや、動けないのだ。

封魔陣と神狼滅牙は一体の技と言ってもいい、光の剣によってその技の文字通り動きを封じ、そこをブリオツシユにしか扱えない秘技の神狼滅牙によって魔を封じる。

2人の連携は完璧であり、これまで数百もの禍太刀を封じてきた方法である。それ故、逃れる術は存在しない。

はずだった。

ギイイーン！

「な……！」

ブリオツシユが驚愕する。動けるはずのない封魔の術を受けたのに、目の前の「禍太刀」は器であるソウヤの腕とその漆黒の刃によって己の太刀筋を受け止めたからだ。

『甘いぞ……我らを討つ者よ……』

勝ち誇ったような声と共に剣を払い、体を一回転させて右の後ろ回し蹴りでブリオツシュの胸を狙う。動揺、加えて空中でバランスを崩していたブリオツシュはそれへの反応が遅れ、右のかかところが綺麗に体に吸い込まれていった。

「ガハツ……！」

何かが折れるような音と共にブリオツシュの体が吹き飛ぶ。木を数本なぎ倒したところで、その体はようやく止まった。

「お、お館様！」

慌ててユキカゼが駆け寄る。木にぶつかったときに出来た切り傷が目につくが、おそらく問題はそこではない。

「ぐっ……！っ……」

苦悶の表情を浮かべ、ブリオツシュが左手で胸の右の部分を抑えている。

「……抜かった。まさかこのようなことが……」

「封魔陣は完璧でありました……。なのになぜ……」

『言わなかったか……？我らを討つ者よ……』

背後から聞こえた声にユキカゼが懐から短刀を出して構え、主を庇うように間に割って入る。

『我は器で器は我である、と……。我に支配されたとはいえこの器は元はヒト……。すなわち、我には通じず……』

ニヤリ、と冷酷な笑みが口元に浮かぶ。

「そんな……」

悲壮感溢れる声をユキカゼが漏らす。それを聞いた「禍太刀」はますます愉快そうに笑みをこぼした。

『いいぞ……主のその絶望の顔……。それこそまさしく我らの糧……！』

悦に浸る「禍太刀」を苦痛に歪む表情で睨みつけつつ、ブリオツシユはユキカゼにそっと耳打ちをする。

「……ユキカゼ」

その言葉にユキカゼが僅かに首を傾げる。

「……お主だけでもこの場を離れるでござる」

「なっ……！」

思いもしない主からの言葉にユキカゼが振り返った。

「そんなことできるはずありません！例えお館様の命令であっても拙者は……」

「ユキカゼッ！」

自分と呼んだその声は、最初自分を咎めているのだと思った。しかしブリオツシユの視線はその先に向けられていることに気づく。

振り返ったユキカゼの目に入ってきたのは上段に剣を構える「禍太刀」の姿であった。

「しまっ……！」

剣が振り下ろされる。

間に合わない。

そう直感したユキカゼは反射的に目を瞑る。

だがその剣の衝撃が体にぶつかることはなかった。

恐る恐る目を開けると、自分と相手の間に割り込んだ緑髪の友が、その両手に持った短剣で漆黒の刃を受け止めてくれていた。

「……いくらユキに相手にされないからって……」

「エクレール！」

両手に力を込め、エクレールがその剣を押し返す。

「戦って互いに認め合った友に剣を向けるほど貴様は愚かだったのか、ソウヤ！」



一度黒い剣が引かれる。だが続けて中段への斬撃へ移行。しかしそれも今度は白銀に輝く長尺棒の腹で受け止められた。

「シンク!? お主まで……………」

「目を覚ましてよソウヤ! 僕に言ったじゃない、フロニヤルドをもっと楽しむって! 元の世界に帰っても僕達は友達だって!」

攻めあぐねる、と判断したか、「禍太刀」は一旦距離を取り直した。

「エクレール、シンク、2人ともなぜ……………」

「2人だけではない」

声の方へブリオツシュが視線を移す。そこに自分同様傷つき、肩を借りながらも威厳を漂わせて立つレオの姿があった。

いや、レオだけではない。ガウル、ジェノワーズ、リコッタ……。先ほどまで八チ蜜取りのために集まったメンバーが全員その場に集まっていた。

「そんな、なぜ……………」

「…………皆、ソウヤを助けたいからじゃ。体は禍太刀に支配された、と言われて、はいそうですか、と納得できんのじゃ」

「うちの呼びかけなんてもう届かんかもしれん。無駄かもしれん。でも…………こうでもしないとウチらは納得できんのか…………!」

「俺はあいつを信じるぜ。あいつが禍太刀なんぞに負けるわけがねえ！」

「ガウルの言うとおり。……僕もソウヤを信じる……！」

「皆……」

全員が目はまだ諦めていないことをブリオツシユは確認する。

「ワシらは誰もまだ諦めてはおらん。……自分達の呼びかけでソウヤの心が打ち勝つのではないか、ソウヤへの信頼が勝るのではないか、そういう希望を抱いている」

『……それは実に愚かな考えだな、獅子の姫よ……』

レオの、いやその場にいる全員の上に僅かに残る希望を打ち砕くような声が響く。

『信頼……？希望……？笑わせる……。その心が絶望へと墜ちる瞬間、それこそが我らの至福のとき……。すなわち我の愉悦となるより他はない。……そしてそちらから来てくれるとは、探す手間が省けた……。先ほど仕留め損ねた主、まずは獅子の姫から切り裂いて……』

「黙れ下郎」

短く、だがはつきりとレオはそう言った。

「貴様に気安く姫などと呼ばれる筋合いはない。そして……貴様に斬られる気もない！」

怪我をしているにもかかわらず、レオの体から溢れんばかりに闘気が高まる。

「ワシはソウヤを信じる。自分が選んだ……ガレットの勇者を信じる！笑いたければ笑うがいい。じゃがこのレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ、己の選択に、後悔は一切ない！」

一瞬空白が流れるが、「クッククク……」と声を漏らして「禍太刀」が笑い出す。

『……笑止。主がなんと言おうと結局は……』

「……信じた者が最後は勝つ、それがお約束なんだよ」

「ソウヤ」の口から出た人ならざる者の言葉、しかし次に聞こえた声はまごう事なくソウヤの声であった。

『な……何……？』

「自分」の口から出た言葉に「禍太刀」が動揺する。

『馬鹿な……この器は我が完全に支配したはず……』

「そう思うなら、目の前の『姫』を斬ってみたらどうだ？」

『あ、ありえぬ……体が動かぬ……』

「ちょっとばっかし……返してもらおうぞ」

同じ口から発せられる、独り言のような会話。しかしそれが独り言ではないことは、この場の全員が気づいていた。

「そ、その声……ソウヤ……なのか……？」

「ええ、俺ですよ、レオ様……」

「ソウヤ……！」

側に寄ろうとレオが数歩足を進めるが、ソウヤが「待ってください」とそれを止める。

「……今現在、この体は俺のものであって、俺のものではない状態です。……呼びかけが聞こえて、あるいはユキカゼの封魔の術のおかげもあるかもしれませんが、俺は自我を保つことに成功しました。しましたが……気を抜けば一瞬でこの体を再び占拠されかねません」

「な……。で、ではどうすれば……」

ふう、とソウヤが息を吐き出す。まるで何かを決意するかのよう

に。  
「……俺を斬ってください」

「なっ……！」

思わずレオが言葉を失う。

「ダルキアン卿とユキカゼの封魔の技でも封じ切れなかった。なら、

俺がこいつを抑えて抵抗しない間に、俺ごと斬るしか方法はない。俺の体は禍太刀に支配されている状態にある……だがそこを逆手に取って器である俺ごと禍太刀を破壊すればそれで済む話だ」

「じゃ、じゃが……」

「そんなのダメだよウヤ！」

レオの言葉をかき消して叫んだのはシンクだった。

「何かきつと方法があるはずなんだ！だから……」

「……気持ちはありがたい、シンク」

ソウヤが短くそう答える。

「だがもうこれしか方法がない。俺にとって……大切な人たちが、この手で傷つけられていくのを何も出来ずに見させられるぐらいなら、いつそ死んだ方がマシだ。……だがな、俺は死ぬ気はない」

矛盾とも取れるソウヤの言葉。

「ここはフロニヤルドだ。俺が夢見たファンタジーの異世界だ。……だったら奇跡なんてもんは、きつと起こるはずだ。たとえ禍太刀ごと斬られても、俺だけが生き残る、そうなるはずだ……」

そう言うとソウヤは視線だけをブリオツシユと、そこに付き添うユキカゼのほうへ向ける。

「……ダルキアン卿、ユキカゼ、その可能性は、ゼロではないんで

しよつ？」

「……拙者の見解から言えば、無謀、と言わざるを得ないでござるな……。ソウヤ殿は異世界の人間である故、フロニヤの守護力の恩恵は受けられない……」

「……それでも拙者はソウヤを信じるでござる」

ブリオツシュに対し、ユキカゼははっきりとそう言い切る。

「ユキカゼ……」

「ソウヤはガレットの勇者、そしてレオ様が信じた者。……なら、奇跡だつてきつと起こすでござる」

フツとソウヤが笑った気がした。

「……承知した。では拙者が……」

顔を苦痛に歪ませ、右の肋骨辺りを押さえながらブリオツシュが立ち上がるうとするが。

「いや、いい、ダルキアン。……ワシがやる」

言うが早いか、レオはグランヴェールを実体化させた。

「レオ様！？しかし、もしものことがあっては……」

「そんなものはない。……万が一にあったとして、召喚主はワシじや。そうなった場合全ての罰は、ワシが受けてしかるべき。……ソ

ウヤを斬った、という罪を永遠に背負う覚悟はできておる……!」

レオの背後に紋章が輝き出す。

「……お前の覚悟はいいか、ソウヤ?」

「レオ様に斬られるなら本望ですよ」

「その気取ったセリフは相変わらずじゃな」

「……そう聞こえますか?」

「……何?」

「あなたに斬られるなら本望だ……それは紛れもなく俺の本心です」

「ソウヤ……お前、まさか……」

何かを悟ったようなレオの声。だがその続きは口にしない。いや、できないのだ。それを口にしたら本当にそうになってしまう、そんな予感がしたからだ。

口では強がっていた。しかしそれは虚勢だ、とレオ自身気づいていた。むしろ逆に、だからこそ虚勢を張るような態度を取らなければ、不安に押しつぶされてしまう、それを怖れていたのだ。

そしてソウヤの言葉はそのレオの本心、怖れを呼び起こすのに十分すぎた。ソウヤ自身、死を覚悟している。そう気づいてしまったのだ。

一瞬空いた間の後、ソウヤがゆっくり口を開く。

「……最初にも言ったとおり死ぬ気はありません。……ですが、もしこの命を落とすことになったとして……他でもないレオ様の手で俺の命を奪っていただけなら、俺個人として思い残すことはありません。……ただ、あなたの高貴な手を俺の血で染めさせてしまうという事は申し訳なく思っています……」

「ワシの手など……！」

うつむいたまま、レオがその声を絞り出す。その声は震えていた。

「ワシの手など……どうなってもよい……。それよりもワシは……ワシは……！」

レオが顔を上げる。その瞳には涙が溜まっていた。

「ワシは……お前を失うのが怖い……！ 召喚主としてだの、領主としてだの、そんなものは全く関係なく……ただお前を……お前を失いたくないんじゃない……！」

嗚咽交じりの涙声。その姿は普段の凜としたレオン・ミシエリ・ガレット・デ・ロワではなく、大切な人を失いたくないがために涙を流す一人の少女そのものであった。

「……あなたにそこまで気にかけてもらえるとは、俺は幸せ者です」  
ソウヤが呟く。

「ですが俺だってあなたを失いたくない。このまま体を支配されれ



ば、先ほどのようにまたあなたを斬ることになる。……あんなことをするのはもう2度とゴメンだ。だから……そうなる前に、俺を斬ってください」

再びの懇願。そのソウヤの言葉を聞き、レオのは下をつつむき、涙を零した。

「ソウヤ、その言い草じゃソウヤは……」

「口を出さないでくれ、シンク。……もう時間がない。心配しなくても……俺は……」

ソウヤの口調が遅くなる。体も小刻みに痙攣しているように見えた。

「いけない……禍太刀に体を支配されてしまう……！」

「レオ様、やはり拙者が……」

その声をさえぎるようにレオが左手をブリオツシュの前へと突き出した。

「……言っただはずじゃ……。……ワシがやる……！」

右手の甲で涙をぬぐい、決意を決めた表情のレオがソウヤを見つめる。

「……ソウヤ、ワシはお前が言った奇跡を信じるぞ……！」

「……俺は……死にませんよ……。約束します……ガレット勇者の

……名にかけて……！」

「その約束を違えたら……ワシが死ぬまで一生貴様を呪ってやるから覚悟しておれ……！」

レオの背後の紋章が鮮やかに輝き始める。グランヴェールを両手に持ち、大上段へと構えた。

(やめさせよ……。主は思い人の手を己の血で染めさせる気が……?)

朦朧とするソウヤの意識に「禍太刀」の音が聞こえてくる。

(お前はわかってない……。思い人「だからこそ」斬ってもらうんだよ。命あるものはいずれその命を落とす。……だったら、その唯一の命、思い人にこそ奪ってほしい、そうは考えないか?)

(な、なんと……。主は……)

(狂ってる、そう思うか?……そう思ってしまったなら、この俺を乗っ取るうとした貴様は最初から間違いを犯してたってことだよ。今貴様が抱いた感情は他ならぬ「怖れ」だ。……貴様は俺を「怖れた」、ならそんな相手に乗っ取ることなどできるはずがないだろう?)

(主は……主は……!)

己の意識の中で聞こえる声に対して鼻で嗤い、薄れつつある意識を保ちながらソウヤはレオの姿を目に焼き付ける。

「獅子王烈火！」

斧の刀身に燃え盛る炎がほとばしる。涙で視界がぼやけながらも、レオは己の斬るべき、自身が呼び出した大切な人を見つめ続けた。

「……さよならは言いません。また会いましょう、レオ様……」

ソウヤの呟きが聞こえた瞬間、レオの瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

それが地に着くより早く

「爆炎斬！」

レオは己の手にした魔戦斧を、漆黒の剣と、それを持つ者目掛けて振り下ろした。

**Episode 23 悪夢の終焉（後書き）**

今回も後書き短めです。

裏話等々、ここは多いんですが、シリアスな空気を壊したくないので全部終わった後の後書きで書こうと思います。

## Episode 24 甦る蒼

夢を、見ていた。

平凡な少年はある日、自分が住む世界とは違う世界へと召喚された。

そして自分呼び出した美しい姫に少年はこう言われる、あなたはこの世界を救う勇者だ、と。

少年は戦う。魔を斬り、邪を払い、とうとう倒すべき魔の長のもとへ辿り着く。

魔の長は勇者となった少年へと囁きかける。我の元へ来い、そうすればこの世界を半分あたえてやるう、と。

少年はそんな誘いには全く耳を貸さない。

両者の激しい戦いが始まる。

いつ終わるとも知れない激闘の果て、両者の相打ちという形でその戦いは幕を閉じた。

城へと無言で帰って来た少年の亡骸を目にし、姫は泣き崩れた。

だが、その姫の涙が少年へと触れたとき、開かれるはずのない少

年の目が開いていく。

目覚めたことを不思議そうにする少年へと姫は抱きつき、「こう言ったのだった。」。

「……………あなたを信じてよかった。やはり奇跡は起こるものなのですね、か……………」

どこかたどたどしい口調で独り言のように文を読む声。その声で目覚めたか、眠り姫よろしく眠り続けていた「彼」は閉じていた目をゆっくりと開けた。

「んー……………1冊目は……………あとは後書きやからこれで終わり、と……………。なんや、えらいご都合主義やな……………。それに最初でいきなり敵の親玉倒したらまだ2冊残つとるのにどうするんや、これ……………」

「2巻は戦うべき敵を失った人間同士の醜く愚かな争い、3巻は再び魔王が甦り、もう1度人間達が結束して戦う話だ」

「ひゃあ！」という声を上げ、その少女 ジョーヌ・クラフテイは思わず椅子から飛び上がる。同時に手に持った本を落としてしまい、慌てて拾い上げた。さらに普段はかけているところを見かけない眼鏡を額にずらしていたが、飛び上がった拍子に半分ずり落ちていた。傍らで眠る「彼」がまさか起きている、とは夢にも思っていなかったのだらう。

「……俺の荷物を勝手に漁るとはあまり感心しないな」

「ソ、ソウヤ！いつから起きてたんや!？」

名前を呼ばれ、ベッドに横になったままのソウヤ・ハヤマは小さく笑う。

「どの辺りかな……。夢では見ていた気がするんだが……。目が覚めている、と実感したのは多分245ページ目、帰ってきた勇者を見て姫が泣くところ辺りからだ」

「え……。245……。？」

ジョーヌが額の眼鏡を目元に戻して慌ててページをめくっていく。

「……お前、眼鏡なんてかけるのか？」

「いや、視力はいい方や。これはリコの発明品で、これのおかげでソウヤ達の世界の文字をフロニヤ文字に解読して読むことができる、つちゅーもんや。……ってほんとに245ページ……。お前すごいな……」

「もう何度読んだかわからんからな。もっとも、個人的に1番好きなのは2巻だ。共通の敵を失ったことで己の利益を得ようとする人間のエゴがぶつかりあい、主人公が翻弄されていく。その泥沼の展開が面白く、またそこがあるから3巻でのドラマが深まってる。俺は思ってる。……しかしあまりに展開が暗く、内容が重すぎたために読者が離れ、次の3巻で終わりにせざるを得なかった、とかっ  
ても聞くな」

「へえ……」

本を閉じ、眼鏡を再び額にずらしながらジョーヌが関心したような声を上げた。

「それからお前は『ご都合主義』なんて言ったが、まさか紋章術でほとんどの問題を解消できるようなこの世界の人間の口からそう言われるとは思ってもいなかったぞ。……だから実際に俺はこうして今も生きてるわけだろうしな」

「そ、そうだった！こんな世間話しとる場合やない！レオ様に報告にいかんと！」

手に持った本と額にずらしていた眼鏡を近くの机に置き、ジョーヌが立ち上がる。

「すぐレオ様連れてくるから待ってよ！」

「あ、ジョーヌ、ちょっと待て」

部屋を出て行くこととするジョーヌをソウヤが呼び止める。驚いた顔でジョーヌが振り返った。

「なんや？」

「……意外と眼鏡姿も似合ってたぞ」

「な……！」



ジョー又の顔が赤くなっていく。

「あ、アホなこと言っとらんとおとなしく寝とけ！」

乱暴にドアが閉められ、足音が遠ざかっていく。その様子を見てソウヤはやれやれとため息をこぼした。

「……まさか本当に生きてるとは、な」

ポツリと独り言を呟き、ソウヤは自嘲的な笑みを浮かべる。

あの時は死ぬ気はない、などと大層なことを言った。しかし心の中では既に死を覚悟していた。

だから先ほどのようにジョー又をからかいつつ話し、今こうして生きているということに今ひとつ実感がもてない、と思っているのも事実だった。

(……夢オチ、って話はないよな?)

そんな小説も読んだな、という考えがふと頭をよぎる。いや、夢であるなら自分は生きてるということになるはずだ。だがその夢はもしかしたらフロニヤルドに来る前から続いているとしたら。それに死の間際に見る夢もあると聞く。

取り留めのない、妄想とも言える考えを頭に巡らせながら天井を見つめ、ソウヤは来るべき人を待つ。

と、早足で足音が近づいてくる。その音を耳にしつつ、ソウヤは上体を起こすと一つ大きく深呼吸をした。

当然その足音の主には会いたい。それは相手も同じであろう。

だがこれだけ迷惑をかけた自分がどんな顔をして会えばいいのか  
わからない。

結局、その答えが出るより早く、扉が開かれた。

「ソウヤ……」

ずっと、会いたかった。その人を前にした時、さつきまで悩んでいたことなど、もうソウヤの頭の中から消え去っていた。

「……おはようございます、レオ様」

まるで不慮の事故で引き裂かれた恋人同士が、ある時突然に再開を果たしたような、そんな表情を浮かべ、レオン・ミシエリ・ガレット・デ・ロワは開けた扉の前で立ち尽くしていた。

「ソウヤ……！」

瞳に涙を溜め、ソウヤに駆け寄ったレオは 躊躇なくその体を抱きしめた。フワリ、とレオの髪の毛の香りがソウヤの鼻腔をくすぐる。

「れ、レオ様……」

「この……馬鹿者が……！ワシが……ワシ達が……どれだけ心配したと……！」

「……本当に申し訳なく思ってます。それでも……」すみません」

なんて月並みな言葉しか出てきませんが……」

「いい……。それで許す……。許してやる……。お前のその素直でない物言いをまた聞けて……。ワシは嬉しいぞ……」

その言葉を証明するかのようにレオがより強くソウヤを抱きしめる。

「俺もあなたの声がまた聞けて嬉しいですよ。ですが……。さすがにちょっと苦しいんで……」

「あ……。す、すまん」

慌ててレオがソウヤから離れた。

そのまま互いの瞳を見つめ、思わず頬を赤らめてレオがその視線を外して下を向く。そこでさっきまでジョーヌの座っていた椅子を見つけそこに腰を下ろした。

「……。さっき謝りましたが、改めて謝らせてください」

「ん……?」

「俺はあなたを守る、なんてことを言っておきながら実際は全く逆のことをしてしまった……。あなたに選ばれた勇者として情けないと思うと同時に本当に申し訳なく……」

「もうよい。ワシの傷は癒えた。それにお前自身望んでやったわけではないのだろう。だったら……」

「だとしても……。すみません」

ソウヤが深々と頭を下げる。

「いいと言っておろくに……。そういうところは真面目な奴じゃ。……だが……。本当にすまないと思っているなら……。」

下げていた頭を戻し、レオを見つめる。だがレオはソウヤから少し目を逸らし、ベッドの辺りを見つめている。

「その約束を……。『ワシを守る』と言った約束を……。2度と違えないと……。」

ソウヤは答えず、レオを見つめ続ける。レオは顔を上げ、今度は正面からソウヤを見つめた。

「ワシを守るための盾となってくれると……。誓ってくれるか……?」

その瞳は不安、あるいは決意の色を滲ませていた。それを感じ取ったソウヤは1度開きかけた口を閉じる。そしてやや考えたように間があつた後、ゆっくり口を開いた。

「俺は……。」

と、その時、廊下から騒がしい声が近づいてきた。「ソウヤが目を見ましたんだろ!」というガウルの声と、「そうですけど、今はダメです!」「そやそや、今はあかなくてガウ様!」と言うそれを止めようとするジェノワーズの声。結局は「邪魔すんな!」というガウルの声が聞こえ、乱暴に走る足音の後、扉が開けられたのだった。

「おいソウヤ！目覚ましたって……」

開いた扉、ガウルの奥ではジエノワーズが申し訳なさそうに謝るようなジエスチャーを繰り返している。

ソウヤはそれに一瞬視線を移した後で、ガウルのほうを見直した。

「……ご覧の通りです。おはようございます、ガウ様」

「この野郎……！おはようございます、じゃねえ！散々心配かけさせやがって……！」

「……返す言葉もありません。すみませんでした」

顎を引いてソウヤが頭を下げた。

「……けっ！俺だけじゃなく、姉上やジエノワーズ、それにその他大勢にもちゃんと申し訳ないって気持ちを持ってよ！皆散々心配したんだからな！」

「ガウル、その辺はワシがもう言うておる。あまり言わんでやっても……」

「姉上はこいつに甘いんだよ！かく言う姉上はこの数日間、ほとんど飯も喉を通ってないような状況だったじゃねえか！」

「ま、まあまあガウ様……」

「せっかくソウヤが目を覚ましたんや、そのぐらいで……」

「……ソウヤ、もう1回寝たふりとかした方がいいかも」

「おいノワ！余計なこと言ってんじゃねえ！」

普段通りのガウルとジェノワーズのやり取りを見て、やれやれと、だがどこか嬉しそうにソウヤはため息をついた。

「……話が逸れちゃった。とにかく丸3日……お前はこの3日間ずっと眠り続けてたんだよ。医者が言うに『命を落とすことはないが輝力が著しく損なわれている状態で、いつ目を覚ますかわからない』とかだったらしいぞ」

「3日……」

「ワシがお前を呼び出して今日で11日目じゃ。滞在期間中にお前が起きなかったらどうしようかと心配もしたんじゃぞ」

そう告げるレオの顔は先ほどまでのような不安や決意の色は消え失せ、いつも通りとなっている。

「そうでしたか」

そう言い、ソウヤが一つ息を吐く。

「……もし、知ってる方がいたら教えてほしいんですが」

そのように切り出すと、ソウヤはその場にいる5人を見渡した。

「……なぜ、俺は助かったんですか？」

「なっ……！てめえ、それはどういう意味だ！あるとき死ぬ気はねえとか言っただけだ……！」

「……やはり、お前はあの時……」

驚くガウルと対照的、レオは静かにそう呟いた。

「あ、姉上……？」

「……気づいていらっしやっただんですか」

「……ああ」

レオが俯く。

「口では死ぬ気はない、だの奇跡を信じる、だの言っておったが……。本当は死ぬ気だったんじゃない？」

「お見通しでしたか……。あの時は魔物狩りの専門家であるダルキアン卿でさえ、器である俺ごと禍太刀を破壊しなければならぬと判断した状況でした。……ですが、皆俺を斬ることためらい、助ける方法を考えてくれた。それはとても嬉しいことでしたが……その方法を模索したせいでより被害が拡大する、なんてのは絶対に嫌だったんです。……ああでも言わないと、皆心を決めることができないそうでしたから」

「そうじゃろつな。……じゃが言われても心を決めかねた」

「それでもレオ様は俺の頼みを聞いてくれた。……俺が死ぬ気だとわかっているにも関わらず、です」

「ワシもお前と同じ立場に立ったなら……きつと同じ頼みをした、  
と思ったからじゃ。……まあその結果、実際お前は今こうして生き  
ておるがな」

「ええ。そこで最初の質問に戻るわけです。なぜ俺は助かったんで  
すか？」

「やっぱ……『アレ』かな……？」

一瞬の間を空け、ジヨーヌがそう口にした。

「『アレ』？」

「ああ、レオ様がお前を斬った直後や」

「突然蒼い光と緑の光がソウヤを包んで……蒼い光はソウヤが握っ  
ていた黒い剣を包み、緑の光はレオ様が斬った傷を包んだ」

「そうしたら……ソウヤさんの傷が見る見るうちに塞がって行って  
……。剣の方もダルキアン卿が力を完全に失ってる、って……。一  
応大事を取ってユツキーさんが封印していたみたいですけど……」

「蒼い光と緑の光……」

ソウヤには心当たりがあった。布団の中に入っている右手を上へ  
と出す。

「やはり……お前もそう思うか」



レオも自身の右手を見つめた。

「エクスマキナ……それにグランヴェール……お前達が俺を守ってくれたのか……？」

答えはない。しかし、自分の指にあるエクスマキナが一瞬光ったように見えた。

「可能性としてはあるじやろうな。宝剣には宝剣の意思がある、という話を聞いたこともある。……だとすれば、エクスマキナはお前を主として認めて助けようとし、グランヴェールもその己の対となる剣を助けるために力を貸した、と考えられなくもない」

「……確かに俺を乗っ取った禍太刀には意思があった。だとすれば宝剣に意思がある、というのも十分頷ける話ですね」

自分の指にあるエクスマキナに語りかけるようにソウヤが言った。

「そういえば、なんでお前禍太刀に乗っ取られるようなことになったんだ？ダルキアンがお前を乗っ取る前の禍太刀はそこまで強力な力は発していない、みたいに言ってたんだが……」

ガウルにそう尋ねられると、ソウヤは思わず苦笑を浮かべた。

「……間抜けな話ですよ。俺を呼ぶ声が聞こえたんです。その声の方へ行ってみると、見るからに禍々しい漆黒の剣がそこにあった。……頭ではそれに触っちゃいけないってわかっていたのに、俺の体は言うことを聞いてくれなかった。そしてその剣の柄に触れ……あとは俺の意識が存在するのに体は好き勝手にあいつに動かされてる、って状態でした」

「それも禍太刀の魔の力じゃろうな……。ソウヤを優れた使い手とみなしたからじゃろう」

「ったく半分ぐらいはお前の不注意じゃねえか。……まあダルキアのの話じゃあの禍太刀自体の力はそれほどでもないが、お前と合わさったことによって何倍にも膨れ上がった、ってことだそうだ」

「なんにせよ、お前が無事で本当に良かった。……お前の言ったとおり奇跡は起こるものなんじゃな」

先ほどジョー又が読んでいた小説の文章のようなセリフにソウヤが思わず小さく笑う。

「……運がよかったです。奇跡ってもんが、たまたま安売りされてただけですよ」

「けっ！その調子は相変わらずだな。……でもま、それだけの口が利けるなら心配はいらなそうだな」

「はい、体にだるさは残ってますが、それだけですな」

「さつきガウルが言ったかもしれないが、医者の話では体自体はなんともないが、輝力が著しく損なわれている状態じゃそうじゃ。意識は戻ったし、もうしばらく休めばすぐによくならじゃろう。……さてと」

レオが椅子から腰を上げる。

「あれ、レオ様、ソウヤの付き添いはいいんで？」

「ああ。もう大丈夫そうじゃな。ビスコッティ側もお前のことを心配していたから、ちとミルヒに連絡してくるとしよう」

そう言っつてレオが背を向けるが、

「待ってくださいレオ様」

ソウヤがそれを呼び止めた。

「なんじゃ?」

「ビスコッティ側に連絡するなら……1つお願いがあります」

## Episode 24 甦る蒼（後書き）

山を越えた……！

ドシリアスはここまでです。DOG DAYSの元の世界観から考えるに、ここまで命がどうのとかという重い展開に持っていったいものかずっと悩んでましたが、思い切って当初の考えをそのまま書きました。まあ長くなるんで本編終了後の後書きに書きます。

この話のタイトルは完全に某RPGのエンディングの曲名のパロです。さらにソウヤが持っていた小説の魔王のセリフも某RPGのあまりに有名なセリフのパロです。堅苦しい話から解放された反動です。

また、魔王の我の元へ来い、というのもまおゆうを意識して書いてあります。

ソウヤの声をイメージするときにも男性声優はあまりイメージがわからず、当初はイメージが全くないまま書き進めていたんですが、いつ頃からかレオが清水さんということじゃあもう福山潤さんしかねえじゃん（ギアス、狼と香辛料、咲等々……）、みたいな感じでイメージして書いたりしてます。そのためまおゆうパロです。しかし書いてる人はまおゆうを全然読んでなかったり……。

それから、ジョーヌの眼鏡についてはどうしてもやりたくてやってしまいました。眼鏡かけてる女の子って可愛いと思うんだけど、この作品中だとアメリカ女史だけじゃないかよ……。

困ったときのリコえもんです。あ、発明するからリコレツかな……。なんか特典ドラマCDで「もうアイツ1人に任せればいいんじゃないかな」状態になってると聞きました。本当にリコえもんになっちゃう……。

それにしても自分で書いててあれですが、1巻が王道ファンタジーなのに2巻で人間同士の泥沼戦争って結構すごい小説ですね……。

それから3日後。

『皆さんこんにちは！ガレット国営放送のフランボワーズ・シャルレーです！ここからの時間はレギュラー放送の予定を変更してお送りいたします！……しかし、この変更を不満に思う人は少ないのではないのでしょうか！？先日レオンミシエリ閣下からされた驚くべき発表……本日はその特別興業、勇者シンク対勇者ソウヤの再戦の様子を全編生放送でお送りいたします！さらにさらに！その後夜はミルヒオーレ姫様によります特別コンサートの様子まで生放送でお送りさせていただきます！』

いつも通りのハイテンションでフランボワーズの声が響く。

3日前にソウヤがレオに言った「お願い」とは、他ならぬシンクとの再戦であった。

その話を聞いたとき、レオはおろか、その場にいた全員が賛成しかねるといふ表情をした。だが、ソウヤも譲らなかつた。

「俺は今回の一件で多くの人たちに迷惑をかけた。……だからそのことに対して謝罪の意味を込めて、同時にもう元気だから心配いらない、ということ伝えたいんです。それに……俺を主として認めてくれたなら……このエクスマキナを手に、もう1度シンクと戦ってみたいんです」

こうなるとソウヤは頑固である。渋々レオがそれを承諾し、ミルヒに連絡して都合をつけてもらい、さらに一騎打ちの場となる会場を確保、商工会や後援会の協力を得て、わずか3日での強行開催へとこぎつけたのだった。

同時にミルヒはこの興業後に自分のコンサートも計画し、そのためにこの再戦の会場にビスコッティの施設を提供。その後のコンサートにも移動しやすいように、と利便を図ってくれたのであった。

『会場となりますフィリアンノ闘技場は既に満員の大人り！それもそのはず、昨日発売されたチケットは発売前の列段階で席全ての分がなくなるといふ人気の高さです！しかしチケットを買えなかった皆様もご心配いりません！我々がレット国营放送が責任を持って最後まで放送いたします！さらにさらに！ここに強力なゲストをお二方招いております！まずはビスコッティ騎士団、現在幸せ絶頂の口ラン・マルティノッジ騎士団ちよ……え……？』

響いていた放送が一旦止まる。関係者用の特等席に座っていたレオはそれを聞いて苦笑を浮かべた。

「フランめ、余計なことを言いおつたな」

「バナード將軍も釘を刺したとおっしゃっていただけですけどね……。やっぱりあの人には効果がなかったみたいですね」

傍らのビオレがそう返す。

「喋り好きにはいい薬じゃろ」

身も蓋もないレオの言葉に今度はビオレのほう苦笑を浮かべた。

『えー……大変失礼いたしました。手元にあつた……えっと原稿が……少々間違っております……』

「苦しい言い訳じゃ」

声を噛み殺してレオが笑う。

『……では改めまして、ビスコッティ騎士団より、ロラン・マルティノッジ騎士団長にお越しいただいております！』

『……こんにちは』

ロランの声が少し不機嫌そうに聞こえる気がするのには、おそらく気のせいではないだろう。

『そしてもう一方！こちらは既に妻帯……あーっと！なんでもありません！え、えー、ガレット騎士団、バナー・サブラージュ将軍です！』

『こんにちは、今日はよろしく願います』

一方のバナーは何事もなかったかのようにあいさつした。

『さて、両国の騎士団長にお越しいただいたわけですが、まずはお二方にこれから互いに戦います、各国の勇者殿の話を知りたいと思っております。最初にロラン騎士団長。ビスコッティ勇者、シンク殿はどのような方でしょうか？』



『そうですね、非常に明るく、活発で元気な少年です。戦をご覧になった方はわかるでしょうが、すばい身のこなしと棒術、何より戦を盛り上げる戦い方は見事、の一言に尽きます。うちの妹の婿にほしいぐらいですね』

会場から笑いが起きる。また、どこからともなく「兄上！」と咎めるような声も聞こえてきた。

「ロランめ、それは墓穴じゃぞ……」

ボソツとレオが呟き、

『いやあ騎士エクレールまで婿をもらったとなつては、それこそマルティノツジ家は安泰……』

『フ・ラ・ン・君……？』

『お、おわああ！し、失礼しました！な、なんでもありません！』

「ほれ見ろ、言わんこつちやない」

再びレオが笑いを噛み殺して笑った。

『……えー、では気を取り直して。今度はガレット側にお聞きしましょう。バナード將軍から見てガレット勇者、ソウヤ殿はどのような方でしょうか？』

『彼は弓術と体術が非常に長けており、紋章術もこの短期間で物にするなど、こちらも見事、の一言に尽きるでしょう。……もっとも、私と彼はあまり話したことはないんですけどね』

『おや、そうなのですか？』

『元々彼は話すのはあまり得意ではないそうですし、彼の周りには大抵ガウル殿下か、あるいはレオ閣下がべったりですので』

「な……！おいバナード！べったりとはなんじゃ！」

思わずレオが立ち上がって放送席の方へ文句を言う。それを見ていた会場から再び笑いが起こった。

「もう……やめてくださいレオ様、恥ずかしい……」

「ぐ……！バナードめ、あとで覚えておれ……！」

憎々しげにレオがそう呟き腰を下ろした。

『さて、両者について騎士団長に伺いましたが、2人のこれまでの戦歴を映像にまとめてあります。両国の勇者がどのような活躍をしてきたのか、これをご覧になればわかることでしょう。では映像、スタート！』

会場の中央にある巨大な映像板に映像が映し出される。シンクの初めての戦の様子が映り、それが解説され始めた。

『まずは勇者シンクにとって初の戦、レイクフィールド防衛戦です』  
『ここでの勇者殿の活躍は目覚ましいものでした』

シンクが次々とガレットの兵達を相手にノックアウト、あるいはタッチダウンを行っていく光景が映し出される。さらには棒を空に高々と舞い上げ、落下してくる間に次々にタッチダウンを決めるなど、その動きはかなりアクロバティックである。

「昔から派手好きな奴だったんだな……」

闘技場の選手控え室、そこで国営放送が編集した過去の戦のダイジェストを見ていたソウヤはそう独り言をこぼした。

今この部屋にはソウヤしかない。ただ、入り口には付き添いとしてルージュとメイド達数名が待機しているために、ソウヤから要望があればすぐに動いてくれる状況ではある。

と、その入り口がノックされた。

「ソウヤ様、お客様がお見えになっていますが……」

あの禍太刀騒動のあと、ソウヤはビスコッティ側の人間とは顔を合わせていない。本当なら自分の方から行くべき、とわかってはいたのだが、レオが「シンクとの再戦の場で元気な顔を見せればよい」と言ってくれたからであった。

そうではあったが、おそらく自分の控え室を訪ねてくる人はいるだろう、ともソウヤは考えていた。そのため、ルージュには前もって客が来たら通していい、とは言っている。だが真面目なルージュ

はそれでも改めて確認を取ってきたのであった。

本音を言うとシンクの過去の戦いが気になり、もう少し映像を見ていたかったが、そうも言っていられない。

「どうぞ、お通ししてください。……それからルージユさん、最初にも言ったと思いますが、次からは確認とらなくてもいいですよ」

「……かしこまりました」

ルージユの返答から一呼吸置いて入り口の扉が開かれる。

「ダルキアン卿、それに……ユキカゼ」

「元気そうでござるな、勇者殿」

部屋に入ってきたのはソウヤにとってビスコッティ側で最も関係が深い人物達であろう、オンミツ部隊の2人であった。

「ご覧の通りです。シンクと戦う、と言ったぐらいですから体調の方は万全ですよ」

「そうでござるか、それはよかったでござる」

「そういうダルキアン卿のほうは大丈夫ですか？……あの時はあなたを随分傷つけてしまった……すみません」

「なんのなんの、もう何ともないでござる。それにソウヤ殿が望んだことではないとわかっている故、気にすることはないでござるよ」

そう言ってブリオツシユは笑顔を見せる。

「……そう言っていただけだと助かります」

ソウヤは頭を下げた。

「事の顛末は、レオ様から聞いたでござるか？」

「はい。……どうやらエクスマキナが俺を守ってくれたみたいですね」

「そのようござるな。……よき剣に主として認められた、ソウヤ殿は素晴らしき使い手とみなされたと言うことござる」

「どうですかね……。禍太刀にも見初められたような人間ですよ、俺は」

と、自嘲的な笑みを浮かべつつソウヤ。

「つまりそれほど使い手として引く手数多、優秀である証明でござる」

今度は声を上げてソウヤが笑った。

「……これは一本取られた。あなたには敵いませんね」

それを聞いてブリオツシユも小さく笑った。

「……拙者はソウヤ殿の顔を見ておこうと思って来ただけでござるから、用は以上でござる。あとは言葉を交わさずとも、シンクとの

戦いの中でわかることにござるからな。……ユキカゼ、お主からは何かあるでござるか?」

「……元気そうで安心したでござる。拙者もシンクとお主の戦い、楽しみにしてゐるでござるよ」

「ありがとう、巨乳ちゃん」

その呼ばれ方でユキカゼの眉が一瞬動いた。

「さつきは普通に呼んでくれたというのに……。……まあいいでござる。好きなように呼べばいいでござるよ。もしかしたらもうそんなふざけた呼び方で呼んでくれることはなかったのかもしれないからな……」

「……なんだ、らしくないな」

「そのぐらい、ユッキーもソウヤさんのことを心配してたでありますよ」

その声は部屋の入り口から聞こえてきた。

「リコッタ、エクレール」

「勿論自分も、それにエクレーでもあります」

「フン！私は貴様の心配など大してしていないがな」

「またまた、エクレーは本当に素直じゃないでありますな」

「お、おいリコ！」

ソウヤを含めた、その場にいたエクレール以外全員が笑った。

「……なんだかんだで本当にいろんな人に迷惑をかけちゃった。謝っても謝りきれないぐらいだな……」

「だが貴様はその気持ちがあつたから、この戦いを企画したんだろ？……ならその気持ちは勇者同士の戦いの中で証明してみせろ」

普段通りの仏頂面に厳しい口調だったが、それがエクレールなりの気遣いだとソウヤは感じていた。

「……言われるまでもなく、そのつもりですよ、親衛隊長殿」

だからそれが少し嬉しく、ソウヤは表情を緩めながら、こちらも普段通りの物言いで答えた。

「なら私はもう貴様に用はない。うちのアホ勇者にはお前は全快しているから、遠慮なく戦えと伝えておいてやる」

「よろしく頼む。……ついでに本気で来なかつたらただじゃおかない、っても追加しておいてくれ」

「わかった。確かに伝えてやる」

そんなソウヤとエクレールの様子を見ていたリコッタが口を開く。

「では自分達はそろそろ退散するであります」

「あれ、リコもついでござるか？」

「はい、自分はソウヤさんの様子を見たかったというのが目的で、ほとんどエクレレの付き添い、という意味合いが強かったでありますし、あまり長居してお邪魔しても悪いでありますから」

「では拙者たちも御暇するでござるよ」

部屋の入り口へ向かったエクレール、リコツタに次いでブリオツシュとユキカゼも続く。

「わざわざ来ていただいたありがとうございます。ご心配をかけた分、いい興業にできるよう頑張りますよ」

ソウヤのその言葉を聞き4人が表情を緩める。

「期待してるでござるよ。では、拙者達はこれで」

4人を見送り、椅子に腰掛けるとソウヤは一つ息を吐く。と、遠くから賑やかな声が聞こえてきて今出て行った一団と会話する声が聞こえてきた。

「やれやれ、今度は賑やかな連中か……」

そう言い終わるとほぼ同時、入り口の扉が勢いよく開かれた。

「ようソウヤ！」

「どうも、ガウ様に三馬鹿の皆さん」



「また三馬鹿って言った……」

「馬鹿っていうほうが馬鹿なんやで！」

「そうですー！ちゃんと呼んで下さい！」

いつもと変わらない様子の4人にソウヤが大きくため息をこぼした。

「……俺は今戦いの前ですよ？空気読むとかって発想はないんですか？」

「必要ねえだろ。お前はいつもの調子で戦えば、それだけで十分興業として客を喜ばせるだけの戦いになるんだからよ。調子の方はもう戻ってるんだろ？」

「一昨日丸1日休んで、昨日動いて大丈夫でしたから。……それで俺がどれだけ出来そうかは、手合わせしたガウ様が1番わかっていると思いますが」

「なら問題ねえよ。余計に気負ったり緊張する必要もねえ。……なんてこと俺が言わなくても、お前はわかっているだろうけどよ」

フツと、ソウヤが笑う。

「今シンのところに行ってきた。あいつも調子は万全そうだ。お前が病み上がりだってんで大丈夫かって心配してたが、余計なこと考えてると痛い目に合うって忠告しておいたぜ」

「ありがとうございます。あいつが俺に余計な気を使うんじゃない

か、つてのだけが気がかりでしたからね」

「大した自信やな。ズバリ、勝算は？」

ジョーヌの問いに、ソウヤは不敵な笑みを浮かべた。

「お前馬鹿か？100%に決まってるだろう。2度負ける気はさらさらない」

「すごい自信……」

「でもまた馬鹿って言ったー！」

「馬鹿って言う方が馬鹿なんですー！」

変わらぬジェノワーズの様子に再びソウヤが大きくため息をこぼした。

「まあ、調子の方はバツチリそうだな」

「おかげさまで。……さっき来たビスコッティ連中にも言いましたが、今まで心配かけた分と、俺はもう大丈夫だってことをアピールするために、あとはシンクと派手に戦ってきますよ」

「よっしゃ、その意気だ。期待してるぜ」

ガウルとソウヤの目が合い、2人が笑う。その時、入り口をノックする音が聞こえた。

「ソウヤ様、そろそろ選手入場の入り口においでください、とのこ

とです」

「わかりました、今行きます」

ソウヤが立ち上がる。ガウル達が一足先に入り口へ向かい、ドアを開けた。

「行って来い勇者！ガレット勇者の名は伊達じゃないってところ、見せて来い！」

ガウルが激励し、右拳を顔の位置まで上げる。ソウヤが小さく笑うと、その拳に自分の右拳を合わせた。

「行って来ます」

「おう！客席で見えてやる！」

ガウルとジェノワーズに背を向け、ソウヤがルージユの後ろをついていく。

その後姿にかつて見ることは出来なかった勇者としての威厳、風格、そう言った物を感じ、ガウルは満足そうに笑みを浮かべた。

Episode 25 緊急開催・特別興業（後書き）

新年あけましておめでとございます。  
今年もよろしくお願いします。

ソウヤとシンクの再戦……の前の一幕です。

戦闘まで突っ込もうと思ったんですが、意外とここまでで長くなつたので分割に。

個人的にエクレはデレないほうが可愛いと思うんです。あるいはちよっとだけデレる程度が丁度いいと思うんです。シンクに対してはデレデレしすぎです。まあそれも可愛いんですけどね。

なので、「エクレはソウヤに対しては最後までデレない、デレすぎない」を密かに目標にして書いたりしてました。その目標は今のところ達成してると思います。

しかしその皺寄せが来たのがユツキーでした。結果、ユツキーが若干エクレ化してしまい、猛省しております。この懺悔は本編終了後の後書きで深く、深くしたいと思います。

そしてロラン騎士団長がここでようやくの初登場。名前はずっと出てたんですけどね……。

もうこの話の中じゃ「アメリカタと結婚する人」というポジションにしかなくてない……。

『以上、過去の映像から振り返る勇者2人の活躍でしたが、いやあ両者とも素晴らしいですね』

これまでのソウヤとシンクの戦いの様子をまとめたダイジェストが終わり、フランボワーズはそう感想を述べた。

『我がビスコッティの勇者殿はレオ閣下から、ガレットのソウヤ殿はダルキアン卿から、形はどうあれ勝利を収めている、ということですからね。腕は折り紙つきでしょう』

『その両者の再度の激突……実は私も楽しみにしているんですよ』

『そうでしょう、ですがそんな楽しみにしているのはバナード將軍だけではないでしょう！この会場、そして放送をご覧になっている視聴者の方々、もう少々お待ちください！もう間もなく始まるかと思われませぬ！』

相変わらずのハイテンションなアナウンスが続く。

「遅くなりました！立て込んでしまっていて……まだシンクとソウヤ様の再戦は始まってませぬよね！？」

可愛らしい声とともに、レオの座る特等席へと駆け寄る姿があった。

「丁度いいタイミングじゃ。間に合ってよかったの、ミルヒ」

「本当ですか！？よかった……」

息を切らせながら、しかし間に合ったことをホッと安堵するようにレオの隣の席へと腰掛けるミルヒ。

「今勇者2人の過去の軌跡が終わったところじゃ。これから双方とも入場になるじゃろ」

「そうでしたか。……ですがレオ様、連絡を受けたときよりずっと兼ねてから気がかりだったので、ソウヤ様は今戦っても大丈夫な状態なんですか？」

ミルヒの最もな質問にレオは一瞬言葉を詰まらせた。

「……本音を言えば、ワシとしてはあいつをもっと休ませてやりたかった。……じゃがやる、と言い出したら聞かない奴じゃからな。それにあいつなりに今回の責任、だとかまあ思うところもあったようじゃし……。昨日ガウルと軽く模擬線をして、問題ないとガウルからのお墨付きじゃ。問題ないじゃろ」

「……わかりました。では大丈夫そうですね。シンクもそのことだけを気にかけていましたから」

「そうじゃろうと思ってガウルが既にシンクのところに行っておる。余計な心配は無用、と伝えるためにな」

「さすがガウル殿下、抜かりはありませんね」

そう言ったミルヒに軽く笑いかけ、その後でレオは何か考え込むような表情に変わった。

「……ワシとお前の星詠み、あれは何も見えていなかったのではなく、ああもはっきりとソウヤの不吉な未来を見ていたんじゃない」

「みたいですね……」

「ワシはかつてお前の未来が見えてしまった時……そしてその光景を一度目にしてしまった時同様、ワシにとって大切な人が目の前で失われてしまうのではないかととても怖れた。事実ソウヤは一度は禍太刀の手に落ち、ワシに刃を向けたしな……。まあ最後は結果よし、と言つところじゃが……」

「レオ様は最後、ソウヤ様をその手でお斬りになった、と伺いましたが……」

一度間を空け、レオが重々しく口を開く。

「……ああ。あいつが懇願したんじゃない。これ以上自分の意に反して大切な人たちを傷つけるくらいなら、いつそ斬ってくれ、と。その後口では斬られても自分は生き残るみたいなのを言っておったが……本心ではそのまま禍太刀と命を共にする覚悟だったようじゃ……」

「そうでしたか……」

レオ同様にミルヒもうなだれる。

「……なあミルヒ」

「何でしょう？」

「……ワシの行動は正しかったのじゃろうか？」

「レオ様……」

「ワシは自らの手で召喚した勇者を、結果はどうあれ、一度はこの手で斬った。……それは正しかったのじゃろうか？」

考え込むような素振りを見せ、ミルヒが口を開く。

「……すみません、私にはわかりません。それに、私なら同じ状況になっても、シンクを切るという決断はできません。最後まで皆が納得できる、助かる方法を探すと思います」

「……そうか」

「ですが……」

その言葉に一度視線を下に落としたレオがミルヒへと視線を移す。

「結果としてソウヤ様は助かりました。でしたら、レオ様の取った行動は間違いではなかったのだと思います」

強い、真っ直ぐなミルヒの瞳に見つめられ、レオは再び恥ずかしそうに視線を下に移した。

「……そう言ってくれるか」



「それに……」

「ん……？」

「レオ様はソウヤ様のことを本当に大切に思っていていらっしゃるんですね。……私同様失いたくない存在だとおっしゃいましたもの」

「な……！いや、ワシは……」

レオの顔が赤くなる。ミルヒは小さく笑うと先を続けた。

「隠さなくてもいいですよ。……この間フィリアンノ城でソウヤ様のことを話したとき、今ソウヤ様のことを話してるレオ様の目はまったく別なものになってますから。……でも、だとしたらレオ様は本当にお強い方だと改めて実感しました」

「強い……？」

「はい。先ほど言った通り、同じ状況に私がおかれたら、シンクを斬ることはできません……。言葉通り『できない』のです。ですがレオ様はソウヤ様をお斬りになった……。そこまで大切に思っていないらっしゃる方を斬る、という判断をなされたレオ様の強さは、私などには到底真似できないものだと感じましたのです」

「ワシは……強くななどない……。あいつがそう望んだから……。もしワシがあいつの立場なら、きっと同じことを望むと思ったからそうしただけじゃ……。……じゃがもしあいつを失っていたら……。ワシはどうなっていたかわからん。それはミルヒ、お前が相手でもそう言えることじゃがな」

「レオ様……」

どこか照れくさそうに、ミルヒがレオの名を呼んだ。

「……やめじゃ。今更過去の話をしても結果は変わらない。ソウヤは助かった、その事実だけでワシは十分じゃ」

「そうですね。……ですがレオ様、そこまでソウヤ様のことを思っ  
ていらつしやるなら、レオ様のお気持ちをお伝えになってもよろし  
いのではないでしょうか？」

「な！？な、何を言うっ！」

「私は……シンクが以前元の世界へと帰ってしまう時に勇気を出し  
て自分の気持ちを伝えました。それに対してシンクは私のことが、  
そして皆のことが大好きだ、と答えてくれました。ですが……それ  
は、私が求めているものとは違う、と時折思ってしまうんです……」

ミルヒがぎこちない笑顔でレオへと向ける。

「浅ましい、とお思になるかもしれませんが。確かに私はシンクと  
一緒にいれて、皆のことが大好きだと言ってもらえてとても嬉しい  
です。嬉しいですが……私の本当の気持ちはシンクにはうまく伝わ  
ってないのかな、って思ってしまうんです。……ですからレオ様に  
はご自分の気持ちをちゃんとソウヤ様に伝えてほしいんです」

「ミルヒ……」

「……なんて、私らしくもないですね。すみません、レオ様に対し

て出すぎた発言でした。忘れてください。……あつ、そろそろ始まるみたいですよ！」

今までの話の雰囲気振り払うようにミルヒが闘技場を見るようにレオに言葉をかける。

その横顔を見たレオは自分はどうするべきなのかを考えつつ、その気持ちを伝えるべき相手が決戦の場に現れるのを待った。

『皆さん大変お待たせいたしました！これより特別興業の本番、勇者シンク対勇者ソウヤの一騎討ちが始まります！それでは両者入場！まずは赤ゲートよりビスコッティ勇者、シンクの入場です！』

片側の入場ゲートを閉ざしていた門が開き、そこから1人の金髪の少年を乗せたセルクルが走り出してくる。駆け出してしばらくしたところで少年は持つていた棒を空高く放り投げた。そのままセルクルを飛び降り、側転、バク転、そして飛び上がった空中で回転を加える。そこで投げた棒を掴んで着地を決めた。

「ビスコッティ勇者、シンク・イズミ！ただいま参上！」

『今回もド派手に鮮烈に登場！今巻で話題のエクストリームキャッチを華麗に決め、ビスコッティの勇者、シンク・イズミが見参です！』

それを見ていた会場の観客達が声援と拍手を送る。シンクはそれに対して手を上げて応えた。

『いやあ鮮やかな登場でしたね、ロランさん』

『勇者殿は派手好きでいらっしやるからね。それがまた見ている者の心を惹きつけるというわけですね』

『そうですねー。……さあ、続きまして、青ゲートよりガレット勇者、ソウヤの入場です！』

先ほどと反対側の門が開き、鞘に収まる剣を持つ黒色短髪の少年を乗せたセルクルが走り出す。こちらはシンクより長くセルクルを走らせたが、そのまま普通に降り、鞘ごと剣を空中へと放り投げた。

そしてバク転しつつ、右足で鍔の部分を蹴り、剣を空へと跳ね上げる。その隙に地上では鞘を左手にとりと飛びながらの回し蹴り、側転、バク転と全て蹴り技としても通用する動きをし終えたところで、左手の鞘を構える。そこへ空から降ってきた剣が綺麗に収まった。

『な、なんと！こちらにも派手な登場だー！華麗な足技を披露しつつの登場、ガレットの勇者、ソウヤ・ハヤマ！』

こちらにも観客は熱い声援と拍手を送った。ソウヤもそれに対して慣れていない様子だったが右手を軽く上げて応える。

『バナード將軍、こちらにも派手な登場となりましたね』

『驚きですね。もっと落ち着いた、淡々とした登場かと思いました』

が、これは相手方に刺激されたのでしょつかね』

実況放送を耳にし、ソウヤは鼻を鳴らす。

そのままシンクの方へと歩き出す。シンクもソウヤの方へと近づいてきた。

「ソウヤ、元気そうだね。安心したよ」

「おかげさまでな。……迷惑かけたな、お前にも」

「ううん、全然。ソウヤが無事ならそれでいいし」

「ありがとう。……だが、それと戦いは別だ。ガウ様やエクレールからの話もいつてると思うが、俺はもう全快だ。俺は本気で行くし、お前も本気で来い」

「勿論！手を抜くなんて失礼なことはいらないよ！」

ニツとソウヤが笑う。そして右腕を前へと差し出した。

「いい戦いにしよう。……それでも勝つのは俺だな」

「こっちも負けないよー！」

シンクもその手を握り返す。握手を終えると両者は距離を開け、ソウヤは鞘と剣を一度消したあとで蒼く輝く輝く刀身の剣を実体化させて左手に持つ。シンクの方も感触を確かめるように長尺棒を数度回転させて構えた。

『神剣パラディオンを操るビスコッティの勇者シンクと、こちらも今度は神剣エクスマキナを持つガレットの勇者ソウヤの戦いが今始まるうとしております！ルールはどちらかがギブアップするか、防具破壊までの時間無制限！では、開始の合図は両国の代表であるミルヒオーレ姫とレオンミシエリ閣下によって行っていただきます！』

手元にマイクを渡されるとミルヒとレオの両者が立ち上がった。

『シンク、頑張ってください』

『ソウヤ、ガレット勇者として連敗は許されんぞ』

レオの言葉を聞き、ソウヤは苦笑を浮かべた。

『それではいいですか、両者、構えて……』

『始めッ！』

開始を告げるレオの声と共にソウヤとシンクの両者が同時に地を蹴った。

戦いが始まると同時に会場の熱気は一気に高まった。

シンクのパラディオンによる突きを左手のエクスマキナで弾き、ソウヤは間合いを詰めようとする。シンクはそれを読んでいたか、

後ろにステップを踏みつつ、手元に戻した棒の反対側で攻撃を繰り出した。が、右の掌でその攻撃を防ぎつつ、さらにソウヤが加速して踏み込む。

(速い……！)

出されるソウヤの右の膝。それに対してシンクも左の膝をぶつけて一度間合いが空く。

再びソウヤが駆ける。今度はシンクがパラディオンを横に薙いだ。上体を屈め、エクスマキナでそれを上に払って受け流す。その屈んだ姿勢のまま左の後ろ回し蹴りが上段へと伸びる。シンクが上体を反らせてやり過ぎす。

両者が体勢を立て直すと同時、シンクが力を込めてパラディオンを振り下ろす。ソウヤもそれにエクスマキナをぶつけて力比べとなるが、それも長くは続かず、再び両者が間合いを空けた。

『や……やはりすごい！まさしく勇者同士の戦い！』

興奮気味の実況に会場も沸き上がった。

呼吸を整えなおしてソウヤから仕掛ける。それに対してシンクがパラディオンを突き出す。先ほど同様剣の腹でそれを受けて間合いを詰めようとするが、シンクもより早くパラディオンを引き、再度突き出した。

それをまたエクスマキナで払うが、代わりに突進の脚が止まる。そのチャンスを狙い、シンクは自分の間合いで連続で突きを繰り出していく。ソウヤも負けじと打ち払い、あるいは身を交わして隙を

うかがう。

事態が動いたのはシンクが上段への突きを出したときだった。ソウヤが上体を屈めつつ勢いよくそれを上へと払う。そのまま踏み込み、蒼い刃を返して振り下ろしを狙った。

「まだまだ！」

同時にシンクが脚に紋章術を発動、大地を強く蹴って一気に間合いを空けた。蒼く煌く切っ先が宙を切るが、ソウヤは距離を詰めようとはせず、もう一度仕切り直しを選んだ。

『なるほど……勇者シンクは自分の距離での戦いをやり通すつもりの方ですね。長尺棒、というリーチを生かして勇者ソウヤを懐へと潜り込ませないつもりでしょう』

『だとすると、ソウヤ殿はまずその間合いを切り崩すところから始めなくてはならない。しかしうちの勇者殿の機動力を考えると、それも簡単なこととは言いかねる……。これはソウヤ殿がどう戦うか、見ものと言えそうです』

解説を聞き流しつつ、ソウヤは一つ鼻を鳴らした。

（まったくもって両騎士団長の仰るとおりだな。前回と打って変わってあいつは自分の間合いを守ることに専念してる。……だが、だったらそれを逆手に取れば……）

「前回のように俺の間合いでは戦わないのか？」

「悪いけどこちらからは遠慮するよ。ユッキーとソウヤの戦いを見



て、ベストな状態でのソウヤは相当やりにくい、ってことがよくわかったからね」

ソウヤの挑発とも取れる言葉に、シンクはあくまで自分の戦い方を続けることを返す。

「一応断っておくがあれもベターだ。ベストじゃない。……まあそっちにその気がないなら仕方ない、強引にこちらのペースに持って行かせてもらおう……！」

「またもソウヤが距離を詰める。それに合わせてシンクの突き。今まで同様にエクスマキナでそれを払う。」

後方へと飛び退きつつ、シンクがパラディオンを手元に戻して下段からの振り上げ。ソウヤは突撃の脚を一度止めてそれをやり過ぐす。シンクの攻撃が空振ると同時、再び間合いを詰めつつ、エクスマキナの突きを伸ばす。パラディオンでその切っ先を変えるが、ソウヤは右手に拳を固め、踏み込む姿勢に入った。

「くっっ！」

先ほど同様にシンクが脚に紋章術を発動、距離を空けなおす。

ここまではほぼ先ほどと同じ展開だった。

だが今度はソウヤの左手のエクスマキナが弓状に変わり、右手には輝力で作り出された矢が生まれていた。

「くっらえっっ！」

手の甲の紋章を輝かせて矢を引き絞り、放つ。

間合いを空けたことで一旦集中が途切れていたシンクはそれに対する反応が遅れた。

「う、うわっ!？」

咄嗟に両手を交差させ、輝力による防御。威力はそれほどではなかったものの、隙をつかれた形にシンクの心に動揺が生まれた。

矢を防ぎきり、シンクが防御を解く。だが自分の相手が視界の中にいない。慌てて左右に目を動かすが相手は見つからず、その時自分の足元に影が生まれたことに気づいた。

「上!？」

落下の勢いを乗せてソウヤがエクスマキナを振り下ろすのと、シンクがそれに気づいてパライオンで防御の姿勢に入ったのが同時だった。金属音を響かせて2本の神剣がぶつかる。

「くっ……!」

互いに押し合いの状態ですうヤが着地、すぐさま下段へと脚払いを仕掛ける。シンクが脚を上げてそれをかわすが、休むことなく上段への回し蹴り。それを避けられるもさらに攻撃を続け、シンクを防御一辺倒へと追いやっていく。

しばらく続いた攻撃に耐えかね、シンクが間合いを空ける。それを待っていたかのようにソウヤは再びエクスマキナを弓へと変化、先ほど同様狙い済ました一発を放った。

再びシンクはそれを腕を交差させて防ぐ。が、エクスマキナを剣に変えていたもののソウヤの追撃はなく、そこで両者の手が止まった。

『な、な、なんとという攻防でしょう！先ほど両騎士団長が述べた間合いの問題、勇者ソウヤはそれに対してエクスマキナを得意の弓にするという方法で解消！そして自分の間合いに入ってから連打連打！まさに独壇場！』

『今の勇者ソウヤの弓による攻撃は見事でした。攻撃自体は紋章術のレベル1程度、威力はそこまででないにしろ、エクスマキナの形状変化、輝力による矢の生成と同時に行った、と言うことを考えれば素晴らしい攻撃です』

『加えて今のは我らの勇者殿の動揺があったために攻勢に転じるこことが出来たと言えるでしょう。つまりそれだけ迅速な攻撃、と言うことでもあります。しかし今ので逆に距離を離しすぎれば自分の間合いになる、と言うことを植え付けたとも言えそうですね』

一旦肩の力を抜き、ソウヤが左手に持った剣を手首ごと1度回す。

「なんで今仕掛けなかったの？飛び込まれてたら僕は危ないところだったよ」

かけられたシンクの言葉に対し、ソウヤは一つ鼻を鳴らした。

「よく言う、悪いがその手には乗らん。……今のは俺を誘い込むための罠だろう？」

「え！？な、なんのこと……？」

「しらばっくれても無駄だ。言ってるだろう、騙し合いは俺の専門分野だと。俺を呼び寄せてカウンターを狙ってたんだろ？」

はあ、とシンクがため息をこぼす。

「なんだ……バレてたのか……」

「同じ手がそうそう通じるとも思っていない。……だが俺には弓がある、ってことは思い出してもらえたようだな」

「ソウヤは弓の名手だもんね。実を言うところちょっと忘れてたけど……」

フン、とソウヤがもう一度鼻を鳴らした。

「……さて、次も俺が飛び込んでもいいが……さすがにまた同じ展開になったとあれば客も飽きてきそうだしな。乱打戦は見せたわけだし、そうなったら次は……」

ソウヤの背後に弓矢が描かれた濃紺の紋章が鮮やかに輝き出した。

「……大技勝負、ってのはどうだ？」

それを聞いたシンクも僅かに微笑む。

「……あの時と同じってことだね。いいよ、その勝負受けて立つよ」

シンクも負けじとオレンジの紋章を輝かせた。

『こ、これは！両者とも紋章術の構えのようです！以前の戦いでは勇者シンクが親衛隊長直伝の紋章剣、裂空十文字によって勝利を収めています、果たして今回はどうなるのでしょうか！？』

実況によつて熱を煽られ、観客の歓声が高まる。

「行くぞ……前回の手は食わないから、覚悟しておけ……！」

ソウヤがエクスマキナを利き手の右手に持ち替え、左脚の脇に構える。

「その構えだと前回と同じだね。……なら僕も、今回はダルキアン卿直伝の一字で勝負するよ」

シンクもまた同じ位置にパラディオンを構えた。

「いいのか？自分の技を宣言して。俺がそれを聞いて考えを変えるかもしれないぜ？」

「それはないね。ソウヤはこの一撃に関しては真つ向からの全力勝負で来る。……だって、それを望んでるんでしょ？」

ソウヤの口の端が緩む。

「……ま、その通りだ。力でお前を捻じ伏せる……！」

「望むところ！」

互いの闘気が高まっていく。

それに連れて、それまで歓声が飛んでいた観客席が次第に静かになっていった。観客も2人が全力で打ち込む、と言うその緊張感を感じ取ったのだ。

場内が水を打ったように静まり、普段ハイテンションで喋りやめないフランボワーズでさえ思わず言葉を発せずに行ったとき、両者が同時に飛び出した。

「紋章剣！裂空一文字！」

「斬り裂けッ！オーラブレード！」

両者の全力による打ち込み。

その互いの輝力のぶつかり合いは荒れ狂う風となって観客席を吹き抜け、あるいは地を抉り砂礫を舞い上がらせる。

輝く力同士のぶつかり合いの中心で、2人の紋章剣の威力はほぼ拮抗していた。

だがしばらく続いた互角の均衡状態が破れる。ソウヤがシンクを押し切ったのだ。

「う、うわっ!?!」

パラディオンを持つシンクの両腕が戻される。だがソウヤはエクスマキナを振り抜いたものの、シンクの腕を弾く程度に留まり、シンクにダメージは与えられていない。

その振り抜いた右手を今度は上段へと構える。蒼い刃が煌き、シンクはそれを止めるために痺れが残る両手で上段への防御の姿勢を取った。

だが次の瞬間、シンクは信じられない光景を目撃する。

「え、ええっ!?!」

ソウヤの右手からエクスマキナが消えていた。先ほどまで確かにあった、刃から走る蒼い光を見ていたはずだったのに。

「……約束どおり、最初の一撃は真つ向勝負したぞ」

そう言ったソウヤの口元が笑う。それを一瞥した後、シンクは目を動かし、エクスマキナの在り処を見つけた。

「左手……!?!」

「撃ち抜けッ!」

「ま、まずいッ!」

ソウヤが右足を踏み込みなおすのとシンクが防御を咄嗟に突きへと切り替えたのがほぼ同時。

「パイルバンカー!」

両者共まったく同じタイミングで突きを放った。

「くっ……!?!」

「うわっ……！」

そのまま互いに吹き飛び、身につけた鎧も打ち砕かれた。

『あ、相打ちー！？い、いや！これは……』

ソウヤが立ち上がる。鎧は吹き飛んでいるが体はなんともない様子だ。

『勇者ソウヤ立ち上がった！鎧は破壊されましたが、まだまだ元気な様子！一方勇者シンクは……』

「い、いてて……」

シンクも立ち上がる。ソウヤ同様鎧は破壊されているがダメージとしてはこちらの方が大きそうだった。

『こちらもち立ちました！しかしダメージは勇者シンクのほうが大きいようです……』

『両者とも防具が破壊されています。勝利条件は防具破壊ですから、試合はここまででしょう』

『バナード將軍の言う通りと思います。……しかしここまで、とすると……』

実況席から聞こえてきた声にシンクが頭をかき、困ったような表情を浮かべながらその席の方を向く。



「僕の方がダメージ大きいから……僕の負け、ってことになっちゃいますね……」

「いや」

不意に聞こえた声にシンクが驚いて今度はその声の主を見る。

「俺もお前も『防具破壊』という事例に変わりはない。そしてそれが起こったのは同時。だからこの勝負は引き分けだ。……そうでしょう、騎士団長殿お二方？」

ソウヤからの申し出にバナードとロランの2人は顔を見合わせた。

『確かに両者とも防具破壊されていますし……』

『ソウヤ殿からの申し出ならいいかとは思いますが……』

結論を出し切れずにいる騎士団長を見かねたか、ソウヤが観客席の方へと視線を移し、口を開いた。

「俺とシンクの再戦は互角の引き分け。勝負の結果は次に俺たちが召喚されるときまで持ち越しのお楽しみって……。俺たちの戦いをご覧になった皆さんは、これじゃ不満ですかね？」

ソウヤにしては珍しく音量を上げ、観客席へと問いかける。それを聞いた観客は最初こそざわついてしたが。

パチ……パチ……。

当初まばらに聞こえたその手を叩く音は、水面を伝う波のように

一気に広がり、会場を包んだ。中には立ち上がり、歓声を送る人ま  
でいる。

「騎士団長殿、観客の皆さんは納得済みです。引き分け、というこ  
とでいかがでしょうか？」

ソウヤからの問いかけに実況席で再び顔を見合わせたバナードと  
ロランだったが、笑顔をこぼすと互いに頷いた。

『引き分けー！勇者同士による再戦は互いに防具破壊と言うことで  
引き分けとなりました！今一度！素晴らしい戦いを披露した勇者両  
名に惜しめない拍手を！』

フランボワーズの声に観客席から再び雨のような拍手が降り注ぐ。

それに対して右手を上げて応えつつ、ソウヤはシンクの元へと歩  
み寄った。

「シンク、大丈夫か？」

ソウヤ同様、手を上げて拍手に応えていたシンクだったが、どこ  
か少し困っているようにも見えた。

「大丈夫。防具壊れたときの衝撃がちょっとあったけど、基本的に  
なんともないよ。……でもソウヤ、よかったの？あのままならソウ  
ヤの勝ちだったと思うんだけど……」

「1回目の俺はお前に完敗した。……だから俺が勝つときは、お前  
をぐうの音が出ないほどに打ち負かしてやりたいんだよ。……その  
点、今日の戦いはお世辞にもそんな風にはならなかった。防具破壊

が同時だったってのは事実だからな」

「意外と負けず嫌いなんだね」

フツとソウヤが笑う。

「まあな。……だが……パイルバンカーへのつなぎは我ながら悪くないと思っただんだが……」

「あ！あれどうやったの？」

「背を通してエクスマキナを落とすし、右手から左手へと持ち替えた。その時に右手にダミーの光を輝力によって発生させてお前に気取られないようにしたつもりだったんだが……」

「うわ！あの一瞬でそんなことしてたんだ……」

「まさかお前が死なばもろとも、という行動に出るとは予想外だった」

「あの状態からじゃ防御も間に合わないし、こっちの攻撃を当てて威力を殺ぐ方がいいと思っただからね」

「……俺がお前の怪我など気にせず紋章剣を放っていたらどうするつもりだったんだ？」

そのソウヤの言葉にシンクがニコツと笑った。

「それはないよ。だってソウヤはガレットの勇者だからね！」

「……なんだそりゃ」

つられるように苦笑をこぼすソウヤ。

「そういう点で言うとそこまで読みきったお前の勝ちだったのかもな。……いや、正直な話、勝ちだの負けだの、それよりも俺はこうしてまたお前と戦えたことが嬉しかったんだがな」

「ソウヤ……」

再び笑顔をこぼし、シンクが右手を差し出す。

「また戦おう！この明るく楽しい、フロニヤルドの世界で！」

ソウヤも笑顔を見せる。そして差し出された右手を固く握り返した。

「……ああ！」

客席の拍手が一層大きくなる。見事な戦いを演じた両国の勇者に、惜しむことなく拍手が捧げられた。

ソウヤとシンクの再戦です。

一応タイトルDUAL-BRAVERですから、前回より成長したソウヤとシンクは戦わなければならない、と言う考えからです。…

…もっとも、最近タイトルつけ間違っただよなあという感も感じておりますが。この辺の懺悔は本編終了後の後書きで。

戦闘前のレオとミルヒの会話ですが、個人的にミルヒはもうちょっとシンクに熱烈アタックしちゃっていいんじゃないかなーとか思ってたんであいうことに。

エクレにリコ、見ようによっちゃユツキー、転び方によってはレオと、さらに地球に戻ればベツキーと七海もいるわけですから、ライバルは非常に多いわけです、うかうかしてられないよ！と。

今回自分がベツキーを完全ノータッチにしてるのはそこが大きかったりするわけで、ベツキーがフロニヤルドに来たらミルヒ、エクレ、リコ辺りとシンク争奪戦をするということはもう目に見えていて、でも主人公がガレット側である以上ビスコッティに触れすぎることには出来ないし、しかも自分にそれを書ききるだけの技量もないだろうし、ついでにいうとベツキーの存在を忘れていたって辺りで触れていかなかったりします。あ、七海はドラマCD聞くまで素で存在を忘れてました、すみません……。

……まあ2期は七海がガレット側に呼び出されてシンクと戦うんじゃないかなーと割と本気で予想してたりします。

Episode 27 歌姫の饗宴

ソウヤとシンクの再戦から数時間、段々と陽は傾き始め、夕方の様相を見せ始めてきていた。

今はソウヤとガウル、ジェノワーズの5人でフィリアンノの城下町を散策しているところである。

「姫様のコンサートまでまだ時間があるからって城下町をブラブラするってのは別にいいんだが……。お前、なんでシンクに声かけなかったんだ？ てつきりお前の方からかけてるもんだと思ってたから……。んぐ……。俺の方からは何も言っただろ？」

ガウルが先ほど露天で買ったフロニヤルドの焼き物、ココナプツ力を口にしながらソウヤにそう言った。地球の、日本の食べ物で言えばクレープか薄く焼いたお好み焼き、といったところだろうか、とソウヤは考えた。

「あいつは俺より1日早く召喚されてますよね？ だったら明日にはもう元の世界に帰るはずですよ。夜はあいつの部屋に泊まるってガウ様の話でしたし、だったらその前の時間ぐらいは自国の人とゆっくりした方がいいんじゃないかと思っただんですが……。独断でしたね、すみません」

「いや、別にいいさ。あいつとは風月庵で模擬戦をしてるし、戦勝祭の時も喋ってる。それに姫様のコンサートの後もあるからな。お

前があいつのことを考えてそうしたってんなら、俺は何も口を出さねえよ」

「……そう言ってもらえると助かります」

普段どおりの調子のソウヤにへっとガウルが笑った。

「ソウヤも何か食べないんか？」

後ろからガウルとソウヤの会話にジヨーヌが口を挟む。

「ビスコッティのココナプッカはおいしいよ。……あ、ガウ様が食べてるやつね」

「栄養価も高いし、オススメですよ」

「……そこまで言うなら買ってくる。ちょっと待っていてくれ」

「あ、せやったらウチの分も買ってきてな」

左手で返事をしつつ、ソウヤが回れ右をし、先ほどガウルがココナプッカを買った店に向かおうとする。

「ソウヤ、金はあるんだろっな？」

「今日の特別興業分がたっぷりありますよ。気にせずとも……」

首をやや傾けながらそう言いつつしばらく歩いたソウヤだったが、何かに気づいた様子で、気まずそうに苦笑を浮かべつつ振り返って戻ってくる。

「なんだ？どうした？」

「……ジョーヌ、リコッタの便利眼鏡はあるか？」

「便利眼鏡？……ああ、ウチがお前の持ってた本を読んだときの  
ウチの部屋にあるで。でもなんで？」

「……フロニヤ文字を正確に読む自信がない」

思わず4人が顔を見合わせる。そして声を上げて笑った。

「……笑わないでくださいよ」

「わ、わりい！完璧超人のお前にもそんなところがあったとは思っ  
てもいなくてよ……」

「完璧超人って……。俺はそんなじゃないですよ」

「しかもソウヤ……あの眼鏡だとお前の世界の文字がフロニヤ文字  
に変換されるわけだから……お前がかけても意味ないで？」

ガウルに続いてジョーヌも笑いながら答える。

「……逆の機能ないのかよ。じゃあいい。ジョーヌ、ちょっと来い」

「はいはい、了解や。まったく人使いの荒い勇者様やで」

文句を言いつつも嫌がる素振りは見せずにジョーヌがソウヤにつ  
いていった。



「なんだ、最初あいつのお守をした時は『あんなの二度とゴメンや』とか言つてたくせに、ジョーの奴もすっかり気許してるな」

「ガウ様、それは私たちも一緒だと思うよ」

「私なんて最初怖い人だと思つたけど……いい人ですね」

「いい奴か？お世辞にも口がいい奴とは言えねえぞ？……まあ悪い奴ではねえけどよ」

ガウルが声を上げて笑う。

「……ほらやつぱり今の声……あ、いたよ……。おい、ガウルー！」

そのガウルの笑い声を聞いてか、最初遠くで何かを確認したような声が聞こえたあと、ガウルの名を呼ぶ声が聞こえてきた。

「あ！？シンク！？」

「いたいた、探したよ。レオ様に聞いたらソウヤとジェノワーズと一緒に姫様のコンサートが始まるまで城下町にいるって言われて……」

「ひどいでありますよ。どうせなら自分達にも声をかけてほしかったですであります」

合流したのはシンク、エクレール、リコッタ、ユキカゼのいつもの仲良し4人である。

「ああ、わりいわりい。でもソウヤがよ……」

「あれ？そのソウヤは？」

シンクが辺りを見渡す。と、ココナプツカを両手に持ったソウヤが近づいてくるのが見えた。

「シンク……？」

「ソウヤ、なんで誘ってくれなかったの？誘ってくれたら喜んで一緒に行ったのに」

「お前は明日には日本に帰るわけだろ？だったら最後の夜はビスコッティの連中と一緒にいたほうがいいんじゃないかと思ったんだが……」

「そんな……水臭いこと言わないでよ。ビスコッティもガレットも関係なく、僕にとっては大切な人たちなんだから」

「……お前はよくそういう恥ずかしいセリフを平気で言えるな」

「へ？」

シンクの間抜けな声には何も返さず、ソウヤはノワールにココナプツカを手渡す。ベールにはジョーヌが1つ手渡していた。

「……私頼んでないよ？」

「俺のおごりだ。拒否は認めない」

「ウチのも、ベルのもソウヤ持ちや。遠慮せんほづがいいで」

「本当？じゃあお言葉に甘えて……」

「おいソウヤ、これじゃ俺だけ自腹じゃねえかよ。俺にはねえのかよ？」

「王子様にわざわざ庶民が物をおごる義理はないでしょう。それにどつせおごるなら可愛い女の子のほづがいいでしょうし」

それを聞いたガウルがフン、と鼻を鳴らし、眉をしかめた。

「……さっきの悪い奴じゃねえって発言撤回していいか？」

「何の話です？」

「気にせんでええって。可愛い女の子、とか、ソウヤわかつとるやないか」

「はいはい」

調子に乗ったジョーヌをソウヤが軽くいなした。

「じゃあ可愛い女の子の拙者達にも、ごちそうしてくれるでいじめるか？」

そのユキカゼの一言にソウヤが固まった。

「……くそっ、失言だった。……でも巨乳ちゃんは土地神で最低で

も100年は生きてるって聞いたぞ。『女の子』か？」

ソウヤの返しに今度はユキカゼが固まったが、すぐ両手で目を押しさえて「ウツ、ウツ……」と声を上げ始める。

「あんまりでござる……。拙者はまだまだ女の子だと言つのに……そうやって拙者のことを恥ずかしい呼び方で呼ぶだけでは飽き足らずいじめるでござるか……？」

「……おい、普段の態度と違いすぎるだろ。嘘泣きだってバレバレだぞ」

「ユッキー、泣かないでほしいであります。……ソウヤさん、女の子を泣かせちゃダメでありますよ」

リコッタにそう言われてソウヤは呆れたように大きくため息をついた。

「……はいはい、俺が悪かったですよ。……で、そつちの女性分3個でよかったか？シンクは男だから自分で買えよ」

「え、ええ！？なんかひどくない!？」

「私はいらん。ユキとリコの2つだけでいい」

「ちょっとエクレ、僕はやっぱり入ってないの?」

「わかった。3つだな」

そう言つとソウヤは店の方へと歩き出した。

「おい！私の話を聞いてるのか！？」

「エクレ！僕の話も聞いてよ！」

「だあー！もうやかましい！」

シンの頭をエクレールがグーで殴る。痛そうに頭を押さえるシンクを見てその場の全員が笑った。

「この頭をどつかれてるのはパシリで買い物に行かされてるのがピスコッティとガレットの勇者で、今日の特別興業の主演2人だったとは到底思えねえな、こりゃ」

笑いながらガウルがそう言う。

「まったたくやで。あの戦いが嘘みたいやわ」

「ですがさすが勇者様、という戦いぶりでありました。最初の打ち合いもすごかったであります、最後の紋章剣の激突は尻尾の付け根がずつとぞわぞわ言いつぱなしでありましたよ」

「まったくだ。……それ以上にずっと勝ちにこだわってたようなあいつがあそこで自ら引き分けを選んだことに俺は驚いたがな」

ガウルの発言に全員が頷いた。

「勝つならもつと圧倒的に勝ちたい、って言ってたよ。……あと勝ち負けより僕と戦えて嬉しかった、っても言ってくれたし」

「……結局ソウヤも恥ずかしいセリフ言ってるよね」

ノワールがポツリと呟き、全員が再び頷いた。

「まあ引き分けだったが、あいつの戦いぶりは姉上も称賛してたし、興業としても大成功って言っていいだろうよ。あいつなりに考えた結果の興業であれだったんだ、本人も満足してるんじゃないか？……あ、そっぴやその姉上だが、俺たちのこと姉上から聞いたって言ったか？じゃあ姉上は姫様のところに？」

「はい。なんだか神妙な面持ちをしていらっしやいましたが……」

「その前には姫様の控え室からレオ様が姫様と言い争ってるような声も聞こえたであります」

ガレット側の4人が顔を見合わせる。

「なんだ……？あの2人がケンカか……？」

「それは考えにくいと思うのですが……。特別興業をご覧になっていた際は両者とも仲良さそうに話していらっしやいましたし……」

ガウルが考え込む様子を見せる。

「だとすると……。明日シンクが帰るから……シンク絡みで何かか？お前、何かやったのか？」

「ええ！？……心当たり何も無いんだけど」

「心配しすぎだと思いますが」

その時ココナプツカを両手に2つずつ持ったソウヤが帰ってきて口を挟んだ。

「仲がいいって言ったって考えの衝突とか些細な問題は起こるものでしょう?……ほらよ、巨乳ちゃん」

そのうちの右手の1つをユキカゼに、もう1つをリコッタに渡す。

「親衛隊長」

「いらんと言ったはずだ」

「拒否は認めん。……どうしても嫌ならそこで食いたそうにしてるシンクと半分ずつにでもしろ」

エクレールが横を見る。そこにソウヤの言葉通り食べたそうなシンクの顔があった。

「……半分、食べるか?」

「いいの!? ありがとうエクレー!」

「……半分食べたらよこせよ」

顔をやや赤らめつつ、エクレールがシンクにココナプツカを手渡す。

「……で、さっきの話ですが。皆さんいい人だっことはよくわかってるし、他人を心配するのもわかりますけどね。人には放ってお

いてほしい時つてのもあると思いますよ。あれこれ俺たちが心配したところで、結局は当人達がなんとかするでしょうし」

そう言うとき一口食べたきりだったココナプツカにソウヤが  
かぶりつく。予想通りソースを塗ったクレープが薄いお好み焼きと  
いったところか。素直に美味しいとソウヤは思った。

「いやまあそうだけだよ……。お前が言うなよ」

「まったくでござる。シンクとお主の最初の一騎討ちのときとか、  
周り皆がヒヤヒヤでござったし。結局は当人達がなんとかしたで  
ござるが」

「……悪かったですね。……だったらなおさら、前例があるんだか  
ら気にしすぎだ、ってことでしょう」

ソウヤの言葉に反論はない。

「まあソウヤの言うとおりだと思うよ。どうしても気になるなら、  
姫様のところ行ってみる？」

「この後コンサートやで？本番前に行くのはあまりよくない気がする  
わ」

「……お前が言うなよ。シンクとの一騎討ち直前に俺の控え室に来  
たくせに」

ボソツとソウヤが呟くがジョー又は知らん振りだ。

「だったら姉上だな。どうせフィリアンノコンサートホールじゃ俺



たちと一緒にの特別席だろうし。そこにいなくてもピオレかルージユに話通せば……」

ガウルがそこまで言った時、「あーっ！」と言うエクレールの声が響いた。

「この馬鹿勇者！半分だと言ったはずだ！何でお前は全部食べてるんだ！」

「あ、ああ！ご、ゴメン！おいしくてつい……。でもエクレー、いらないうって言ってたんじゃない……」

「さつきはいらなかったが今はいる！何で貴様はそうなのだ！？まったく貴様と言う奴は……！」

「ご、ゴメンエクレー！買って返すから……」

シンクとエクレールの様子を見てソウヤが大きくため息をこぼす。

「……とにかく、皆さん気になるんなら今ガウ様が言ったとおり、レオ様に会うか、ピオレさんかルージユさんに話聞くとかでいいんじゃないですか？」

「そうだな。……よし、食ったらあの馬鹿2人おいて行こうぜ」

いつまでも夫婦漫才よろしく言い争う2人を一度見た後で、その場の全員が頷いた。

「え……？来ない……？」

ミルヒのコンサートの開演時間が近づき、城下町を散策していた一行はコンサートが開かれるフィリアンノコンサートホールに来ていた。

そこでルージユから告げられた言葉に思わずガウルが驚いた表情を浮かべる。

「ルージユ、それは本当なのか？姉上が姫様のコンサートに来ないって……」

「えっと……。このホールの特別席にはお来しになりません」

ガウルの表情が険しくなる。

「どういうことだ……。姉上は姫様のコンサートは以前の一件があった時以外は基本的に会場で聴く、つてのが常のはずなんだが……」

「も、もしかしてさっき言ってたことが本当にあつたりとか……？」

「いや、それこそないと思うんだが……」

そう言つとガウルがルージユの方を見る。思わずルージユはびくつと体をすくませた。

「ルージユ」

「は、はい！」

今度は声が裏返る。

「姉上と姫様……まさかケンカした、なんてことはないよな？」

「そんなこと！あの一件以来お2人の仲は非常によろしいです。むしろ……」

「むしろ？」

ハツとしたようにルージュが両手で口を抑えた。

「……いえ、なんでもありません」

怪しむようにガウルがルージュを見つめる。

「……なあルージュ、本当に何もないのか？リコッタが2人が言い争うような声を聞いたつても言ってたし、ここにいる連中も心配してんだ」

「少なくともレオ様と姫様がケンカをなされた、とか、そういうこととはございません。ですから、その点は安心していただいて大丈夫です」

まだ納得していない様子のガウルではあったが、

「ルージュさんもそこまで言ってますし、心配ないってことでしよう。ガウル様がいい弟だってことはわかりますが、俺がさっき言った

とおり放っておいてほしい時だつてあるかと思ひますよ」

そのソウヤの言葉に説得されたらしく、大きくため息をついた。

「……わかつた。まあ大した問題でもなさそうだしな。……んじやあ姫様の歌声を堪能するとすつか」

ガウルが関係者用の特別席に腰を下ろす。それにつられるように一緒に来た全員が椅子に座つた。

「で、俺は姫様の歌を聴くのは初めてなんですが、どんな感じなんですか？」

「どんな感じとはなんだ！姫様の歌はそれはそれは素晴らしくていらつしやる！貴様も姫様の歌を聴けば愚かな質問だつたとすぐにわかるだろう」

「ま、まあまあエクレ……」

興奮気味のエクレールをシンクがなだめた。それを見ていたソウヤは一つため息をこぼす。

「……盛り上がるつてのは前にジョー又から聞いた気もするな。だが俺はこういうコンサートとかライブとか、そういうのは初めてなんだが……」

「そうなの？僕が以前野外ステージで姫様の歌を聴いたときは、昔ベッキーに連れて行かれたライブみたいな雰囲気だつたよ。曲に合わせてリズム取つたり、ヒカリウムだっけ？光る棒を振つたり」

「……まあ楽しみたいように楽しんで聴け、ってことか」

「そういうことや。あ、ヒカリウムいるか？ウチ多目に持ってきたから、余ってるで」

ジョー又の手元にピンクに輝く光の棒が握られている。これはフロニヤルドにおけるコンサートグッズで、フロニヤ力によって発光するものだった。

「いや、遠慮する。座って大人しく聴いてることにする」

「盛り上がってきたら立ってもいいのでありますよ？」

「ああ、そうするよ」

と、そこで会場の電気が暗くなり、人々の歓声が上がった。

「お、始まるな」

『皆様、お待たせいたしました！それではこれよりミルヒオーレ姫殿下によりますスペシャルコンサートを開催したいと思います！』

ますます歓声が大きくなる。それはせりあがるステージによって、その舞台の主役が現れるとさらに大きくなった。白のワンピースタイプのフリフリなドレスに身を包み、普段シニョンキャップに纏めてある髪は解かれて背中付近までウェーブがかかって伸びていた。

『皆さん、こんばんはー！』

こんばんはー！と観客の声が返事をする。

『お昼に行われた勇者様2人による特別興業、とても素晴らしいものでしたね！私もそんな2人に負けないように、また、これまで目覚しい活躍を見せてくださったビスコッティ、ガレット、両国の勇者様にありがとうの気持ちを含めて、そして、今日ここに私の歌を聞きに来てくださった皆さん、放送を通じてご覧になってくださっている皆さんのために、心を込めて歌っていきたいと思います！では1曲目、聞いてください。【Brand-new SKY】！』

アップテンポな曲が流れ始め、ステージの上でミルヒが踊りだす。前奏が終わると、振り付けをしながら歌い始めた。

今ソウヤ達がいる2階の関係者用の特別席からは1階の客席のヒカリウムがよく見える。その光が幻想的な波となって広がっていた。

「すごい……」

思わずソウヤがそう呟いた。

「でしょ！姫様の歌はとても素敵だから！」

歌と周りの熱気、両方にかき消されないようにシンクがそう音量を上げる。アップテンポな曲のせいかな、既に体でリズムを取っていた。同時に、ソウヤはよく今の自分の呟きを聞き取ったなと感心した。

「そうだな！確かに歌がうまいってのはある！だがそれ以上にこれだけの人を惹き付ける魅力ってのがすごいんだろうな！」

ソウヤも音量を上げて答える。

ミルヒが踊りつつステージ前方へと歩き、くるりと1度ターンをしたところで、曲はサビの部分へと入った。照明演出と観客の熱気がそれをさらに盛り上げる。

「……さすがお姫様、か……。生まれ持った、人を惹き付ける魅力と言ったところか」

「んなもん、お前だって持ってるだろうがよ」

隣のガウルからかけられた声にソウヤが驚いて振り向いた。

「俺が？そんなもの持ってませんよ」

「そう思ってるのはお前自身だけじゃねえか？今日のシンクとの戦い、見ていた客は皆お前とシンクの戦いに魅了された。謙遜してるのかもしれないが、お前は自分で思ってるほど小さな人間じゃねえよ」

「だとしても俺は人の上に立てるような器じゃない。姫様やガウ様、レオ様のようには到底なれません」

ガウルが一旦言葉を止める。ミルヒの歌は1番を終え、2番へと差し掛かった。

「……今姉上の名前を出したけどよ」

てつきり話は終わったと思っていたソウヤはステージに移していた目を再びガウルの方へと戻した。

「俺は、お前になら姉上を任せられると思ってる。姉上はああ見えて不器用だからよ。なんでも1人で背負い込んじゃうんだ。俺がそれを分けてもらおうとしたときもあつたんだが……。いっつも姉上は俺をガキ扱いして、結局俺は姉上と肩を並べることが出来なかった。……でもよ、あの禍太刀の一件のとき、姉上はただお前を失いたくないって言って涙を流した。それを見たときに気づいちまったのさ。……姉上が背負い込むものを分ける相手は、俺じゃなくてこいつなんだ、って」

ソウヤは答えない。無言でガウルを見つめ続けていた。

「だからよ、お前は姉上と肩を並べて歩くことが出来る、姉上を任せられるって思ってたんだ。前にお前がその気なら俺が領主になって姉上を蹴落としてやる、って言ったが、まああん時は半分ぐらい冗談だったけどよ。……今なら本気でそう思えるようになった。……だからよ、そんな姉上を任せられるお前は、お前が自分で思ってるほど器が小さい人間じゃねえんだよ」

「ですが俺は……」

そこまでを口にしてソウヤは言葉を止めた。次に言う言葉をためらっている、そんな雰囲気だった。

その様子を感じ取ってか、ガウルが一度鼻を鳴らした。

「……ま、お前に今すぐどうこうしろ、って言ってるわけじゃねえんだ。ただ俺は、お前だって十分すげえ奴だってことを、姉上と対等に渡り合える奴だってことを言いたかっただけさ」

「……そう、ですかね……」



なんとなしにステージに目を移し、ソウヤが呟いた。

1曲目が終わり、2曲目が始まる。「HONEY HONEY BABY」と言う名のつけられたその曲が始まると、1曲目同様アップテンポなイントロが流れ始める。

「……まあいいや。今言ったことはあんま気にしないでくれ。くれぐれも姉上には言うなよ、あとで怒られるからな。せっかくの姫様のコンサートだ、今日はそいつを楽しもうぜ」

そう言うと、それきりガウルはソウヤにこの件を話そうとはしなかった。ソウヤはガウルに言われた通り、ミルヒのコンサートを楽しむために意識をステージに集中する。

コンサートは素晴らしいものだった。

最初はテンポ感のいい曲で始まったが、ミルヒは時にしっとりとした歌い上げ、時にのびのびと歌っていた。曲間に挟まれるミルヒのトーク、2度変わった衣装など、どこを取っても最高のコンサートであった。

だが、コンサートがまさに終わりに近づき、この後予想だにしない事態が起ころうとしていることを、この時特別席に、いや、客席に座っている誰もが知る由もなかった。

『皆さん、楽しんでくれますかー！？』

ステージ上のミルヒからかけられる声に客が歓声で答える。

『ありがとうー！私もすごく楽しいです！……でも名残惜しいですが、次が最後の曲となってしまうました』

それに対し、今度は「えー！」と観客席から残念がる声が上がった。

『ですが、最後の曲と一緒に歌ってくれる、とても素晴らしいゲストが来てくださっています！』

それを聞いた観客が誰だろうとざわつき始める。

「へえ、姫様と一緒に歌うゲストか。一体誰だろうな」

ガウルも他の観客同様、誰が来るのか楽しみにしている様子である。だが、一方のソウヤは渋い顔で、眉をしかめていた。

「……ガウ様、なんかすごく嫌な予感がするんですが」

「あん？どづいつことだ？」

そのガウルの質問にソウヤが答えるより早く、

『ではご登場していただきましょう！スペシャルゲスト、レオンミシエリ閣下です！』

「な、何いいいいい！？」

ミルヒによって明かされた正解にガウルは思わず叫びながら立ち上がり、ソウヤは呆れたように左手で頭を抑え、会場の他の観客はどよめいた。

『…………あれ？』

が、ミルヒがレオの名前を読んでもレオが出てくる気配がない。

『レオ様？出番ですよ？』

慌てたようにミルヒがステージ袖へと走っていく。

「おい、まさか本当に姉上が……。ってソウヤ！お前もしかしてこのこと知ってたのか！？」

「…………知ってるわけないでしょう。ただ、本来ここで聞いてるはずなのにいないレオ様、そのレオ様の行方を聞くと明らかに動揺した様子で応答をしたルージユさん、そして今の姫様のスペシャルゲストトって言葉……。その辺からもしかしたら、って思っただけです。…………まさか本当にそうなるとは思ってもいませんでした」

「ちょ、ちょい待てソウヤ！その話が本当だとするとレオ様と姫様の言い争いって…………」

「ステージにゲストとして出る出ない、あるいは衣装でなにか、とかそういう感じの話じゃないのか？少なくともステージに呼ぼうとしてるんだ、ケンカとかって線はないだろう。…………まったく人騒がせな」

やれやれとソウヤはため息をつく。

「…………ガウ様、レオ様って歌うの得意だっけ？」

「得意じゃねえけど……。別にまったくダメってわけじゃないはずだ。……。それでも姉上はそんなのは絶対断るような性格のはずなんだが……。姫様はどうやって説得したんだ？」

関係者用特別席であれこれ考えながら混乱している様子だったが、それはステージでも同じで、一旦舞台袖に引つ込んだミルヒがなかなか戻ってこない。

ただ、マイクを切り忘れていたせいか、「レオ様、皆待ってますよ！」「無理じゃ！やはりこんな恥ずかしい格好……」「いいと言ってくださったではありませんか！さあ！」と言つような声を拾っている。

結局、しばらくしてステージ袖からミルヒが帰ってきた。その手に引かれて白いフリルの覗く青いドレスに身を包み、今のミルヒの髪型同様に2つ分けて、恥ずかしそうに顔を真っ赤にしつつ嫌々ながらステージに上がるレオの姿が、そこにあった。

その姿が現れた時、会場が今日1番に沸きあがる。普段決して見ることのない、闘姫がかわいらしい衣装に身を包んでステージに現れると言う光景は観客にとつてとても衝撃的だったようだ。

『では改めて紹介します。今日のスペシャルゲスト、レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ閣下です！今日は両国の勇者様が頑張ったので、自分も特別興業に関わって皆を喜ばせたいと仰り……。まあ半分ぐらい私が無理矢理誘ってしまったのですが……。とにかく、私と一緒にステージで歌う提案を了承してくださいました！レオ様、何か一言ありますか？』

ミルヒの紹介に会場が再び揺れる。マイクを手に何かを話そうと

するレオだったが、その姿は戦場で見るレオの姿からは程遠く、観客席から波のように寄せる歓声にマイクを口元に持っていていったまま固まってしまった。

そのレオの様子に気づいたか、レオの話を聞くために次第に歓声は収まっていく。

『あ……えー……これは、その……』

普段の堂々とした態度と真逆、顔を赤らめて視線を下へと逸らし、言いたいことも口ごもってしまっている。

それを見かねたか、2階の席の方で立ち上がった影があった。

「かわいいですよ！レオ様！」

静かになっていたその状況で聞こえた声にレオがハッと顔を上げた。言った本人の顔は見えないがその声は聞き間違えるはずもないソウヤだ。

「似合ってるぜ！姉上！」

次いで聞こえたその声の主は会場の皆がわかったらしい。会場が笑いに包まれ、その笑い声と共に「お綺麗ですよ閣下！」「眼福です！」と言った声も飛ぶ。それを聞いていたレオが先ほどまでとは違う風に顔を赤らめた。

『き、貴様ら！ガレットに帰ったらどうなるか、覚えておけ！』

マイクに向かって叫んだレオに再び会場から笑いが起きた。

『れ、レオ様……そろそろ歌のほうを……』

『……もうお前に任す！勝手にせい！』

ステージ中央、レオがミルヒに背を向けて立ち、不機嫌そうに目を瞑る。

それを見ていたミルヒが苦笑を浮かべつつ、その中央に寄り、レオと背を合わせた。

『……それでは最後の曲です！聞いてください、【きっと恋をしている・ミルヒ&レオスペシャルバージョン】！』

## Episode 27 歌姫の饗宴（後書き）

やってしまったライブの話。ちなみにタイトルは饗宴と共演をかけたたりもします。

公式アンソクを読んだ時にミルヒの衣装お披露目会にレオもゲスト参加する、という話があつて、可愛らしい服をレオが無理矢理着せられる、という内容でした。

それを読んだ時にこれ絶対やろう、とか思ってしまったって、完全蛇足になるとわかつていながらこの話を入れることを決めました。結果実質蛇足です。

前半はその蛇足のこの話にさらに付け足す形として何も考えずに書き始めたのに意外とあっさり書けたのに対し、後半は「やりたいことは決まってるのに文字に出来ない」という状態に陥ってしまい、予想以上に時間がかかりました。

あと衣装。これが全然イメージできずに、とりあえず文字でごまかして書いてます。デザイナーの方ってほんとすごいなと尊敬します。一方で楽曲はそこそこイメージできました。この曲名はオリジナルと思われるかもしれませんが、フロニヤ文字解読班の方々が解読してくださり、まとめてあったサイトを覗いて、劇中に出てきたセツトリストから引っ張ってきています。

ちなみにそのリストの1曲目が「maybe falls in love」のようで、直訳で「きっと恋をしている」となるわけです。

他にもドラマCDでシンクと一緒に歌っていた「Stand up Ears」の名前もあるようです。解読班の方々の努力には本当に頭が下がる思いです。

その夜。ソウヤ、ガウル、ジェノワーズの5人は明日故郷へと帰る予定のシンクの部屋へと来ていた。フィリアンノ城の一室と言うこともありなかなか豪華ではあるが、来客用にしては少々小さい気もする、とソウヤは感じた。

「ここがシンクが使ってる部屋か……。思ってたより質素だな、俺が借りてる部屋よりは大きいが」

「何言ってるやがる。お前だって最初はもっとでかい部屋を姉上用意してくれたってのに、お前が落ち着かないとかってビオレに言って、結局使用人用の空き部屋使ってるじゃねえか。もっといい部屋はいくらでもあるってのに全然聞こうとしないしよ」

「あ、やっぱりソウヤもそうなんだ。僕も最初はもっと大きな部屋だったけど、落ち着かないからってここに変えてもらったんだ」

「……とまあ庶民の感覚というのはこういうものなんですよ、ガウ様」

ソウヤの言葉に対して「はいはい」とガウルが適当に返事をする。

「で、明日にはシンクは帰っちゃうわけだし、今日は朝まで遊びまくるぞ！ってことでいいか？」



「うん、構わないよ」

「……本当にいいのか？さっき姫様と明日の朝散歩に行くとか約束してたる？ガウ様のことだ、本当に朝までつき合わされるぞ」

そう言ったソウヤに対してシンクは苦笑を浮かべ、ガウルは不満そうな顔をする。

「まあ……そうだけどね。でもそれは僕が頑張ればすむことだし、最後まで楽しい思い出を多く作りたいから」

「それからソウヤ、お前は俺をなんだと思ってんだ？最近俺の扱いがぞんざいだろ？」

「そうですね？……まあ王子様だってんで最初は遠慮してましたが、要は腕白小僧だったことがわかったってのは事実ですが」

「な！ソウヤ、てめえ！」

ガウルがソウヤに掴みかかるように迫る。が、ソウヤはひらりと身を交わした。

「ソウヤ、それ正解だね」

「ガウ様の扱い方がわかってきたやないか」

「図星だからってガウ様も怒らないでくださいよ」

「おい！三馬鹿！お前らも言いたい放題言ってるんじゃない！」

再びガウルが不満の声を上げた時、シンクの部屋の入り口が開かれた。

「失礼します。先日皆様が持って帰ってきてくださったハチ蜜を使って、ハチ蜜尽くしのメニューをご用意させていただきました。どうぞお召し上がりください」

メイド長のリゼルとフィリアンノ城のメイド隊がティーセットやお菓子の乗ったカートを押して部屋へ入ってきたのだ。

「お！待ってました！」

その甘くいい香りにさつきまで不機嫌だったガウルの機嫌が一気に直る。

お茶とお菓子を来客用の机に置くと、一礼してメイド隊は部屋を後にした。

「よし！それじゃいただきますー！」

まだノワールがお茶を注ぎ終わっていないうちからガウルはケーキを一つ自分の取り皿に分けた。

「あー！ガウ様ずるいで！」

「へっ！早い者勝ちだ！」

「じゃあ僕も……」

「文句を言ってる暇はなさそうだな。早いうちに確保しておくか。」

……ノワール、お茶入れてくれてるなら代わりに取っておいてやる。  
何がいい？」

「ありがとう。なんでもいいよ、フィリアンノ城のハチ蜜メニユー  
はなんでもおいしいから」

「了解、っと……」

言われた通りソウヤは手近なところにあつたケーキをいくつか見  
繕つてノワールの取り皿に取り、次いで自分の取り皿にはパイのよ  
うなお菓子を切つて取り分けた。ノワールの取り皿を本人の前に置  
いたあとで、自分の取り皿にある甘い香りのその食べ物をお口へと運  
ぶ。

「……うまい」

驚いた表情でソウヤはそう呟いた。

「そりゃそうだ。このハチ蜜は特産品だぜ？お茶も飲んでみるよ」  
ガウルに薦められるままに今度はティーカップに口を着ける。

「……なるほど、やっぱり俺は甘い方が好きらしい」

「あ……もしかしてハチ蜜足りなかった？」

「いや。このぐらいで丁度だ」

そう言い、もう一口カップに口をつけた。

「それにしても八子蜜尽くしで豪華ね。まさに『HONEY HONEY BABY』と言ったところかしら」

ベールの口から先ほどのコンサートでミルヒが歌った曲名が出る  
と、次のケーキに手を伸ばしながらジョーヌがその歌を口ずさみ始  
める。

「……ああ、どこかで聞いたことある曲だと思ったら、さっき姫様  
が歌った曲か」

「なんだよ、聞いたばっかだったのにもう忘れたのか？」

「俺が聴いたのは今日が初めてですよ？」

「ああ、そうだったか。……そういやよ、コンサートといえば、ま  
さか姉上が歌うとは思ってもいなかったぜ」

反射的に全員が深く頷く。

「姫様と一緒に素敵な歌声を披露してくださったから、一言声をか  
けようと思ったんですが……まさか突っ返されるとは思ってません  
でしたけどね」

コンサート終了後、ソウヤ達は2人の控え室の方へ顔を出した。  
だが、ミルヒは対応してくれたものの、レオは誰とも顔を合わせた  
くないとかで最後まで控え室の中に籠ったままだった。

「恥ずかしかったんだろ。姉上があんなことするのは珍しいし」

「というか、レオ様が何かを言おうとしてる時にかわいいだの似合

ってるだの茶々入れた方が悪いとウチは思っんやけど……」

ジョー又の一言に思わずガウルとソウヤがお茶とお菓子の手を止め、互いに顔を見合わせた。

「私もジョーの言うとおりだと思う」

「お、おいちよつと待てジョー、ノワ！あそこで俺たちが助け舟を出さなかったら姉上はずつと固まったままだったかもしれないんだぞ？……まあ俺はソウヤが先に言ったのを見て勢いで言っちまったんだが」

「だとしても、あそこでガウ様が言っちやっただせいで、会場のお客様さんが笑っちやっつて、それでレオ様が怒っちやっただわけじゃないですか？」

「く、くそ……ベルまで……」

「まあそういうことらしいですよ、ガウ様」

「待てソウヤ！お前はこっち側だろ！そもそもお前があそこで言わなきゃ、俺だって言わなかったんだよ！」

やれやれとソウヤがため息をこぼす。

「……俺としてはさっき控え室に言った時に謝ろうとも思っていたんですがね。門前払い食ってしまったんで、またそのうち、俺が帰る前にでも謝っておこうとは思ってます。……でもまあ、寝て起きれば機嫌も直るでしょう。睡眠は万物の特効薬って言いますしね」

「……言うか？シンク、お前の世界では言うのか？」

「えーと……僕も初めて聞いたんだけど……」

「そこは嘘でも言う、とっておいてほしかったな」

ソウヤが苦笑を浮かべつつ空いたカップにお茶を注ぎなおした。

「でもソウヤの言うとおりだとも思う。多分レオ様は今頃、姫様に接待されてなでなでされてる最中のはずだから」

「……なでなで？」

ノワールの口から出た単語をソウヤがオウム返しに口にする。

「そや。姫様のなでなでは至極の喜びらしいで。で、姫様とレオ様は姉妹のような関係、と言われてるけど、そのなでなでのせいか、姉は姫様でレオ様が妹、とかつて噂も流れるほどや」

「まあ……エクレも姫様になでもらってる時はヘブン状態だしね」

「つまり姫様のなでなでもあるんで、レオ様は明日には機嫌を直してる、ってことですね」

ベールのまとめにガウルが頷く。

「まあそついうことだ。……だから俺たちは気にせず、目の前の物を食っておけばいいって話だな」

言うなりガウルが最初にソウヤが切ったパイを大きく切り分けて

自分の皿に分けた。

「ちよつとガウ様！取りすぎ！」

「うるせえジヨー、文句があるならお前も取ればいいだろ！」

そしていつも通りのガウルとジェノワーズのやり取りが始まる。

その様子を見て、再びやれやれとため息をこぼし、ソウヤは競争率の低そうなケーキを自分の皿に取り分けた。

「ん……？」

ハチ蜜尽くしのパーティタイムを終え、腕相撲、ガレット式レスリング、フロニヤルドのカードゲームと一頻り遊んだところで、朝まで遊ぶと豪語していたガウルが真つ先に寝てしまったのだった。

その後はなし崩し的に全員が眠り始めたために、例に漏れずソウヤも寝る姿勢には入っていた。だがいまひとつ眠れずにいたところで、部屋を出て行く物音を耳にしたのだった。上体だけを動かし、入り口の方へと目を移す。

トイレかと思ったが、その部屋を出た影はトイレのある方向とは逆へと進んだところまで見えて、扉が閉められた。つまり目的はトイレではないということだ。

ソウヤも体を起こす。そして物音を立てないようにそつと部屋を出ると、先ほどの「影」が進んだ方と同じ方向へと歩き出す。行く場所の見当はなんとなくついていた。

中庭を覗く。そこにソウヤの予想通り、1人佇んで夜空を見上げているその姿があった。

「シンク」

その名をソウヤが呼ぶ。驚いたようにビスコッティの勇者、シンクは振り返った。

「ソウヤ……？もしかして起こしちゃった？」

「いや、寝れなくてな」

「そっか、ソウヤもか……」

「寝れなかったのか？」

シンクは頷く。

「今日も色々あったし、体は疲れてるだろうから眠いはずなんだけどね……。明日でまたしばらくここに帰って来れない、って思うと……ちよつと眠れなくてさ」

そう言い、中庭の芝生に腰を下ろしてシンクは夜空を見上げる。ソウヤもそれに倣って腰を下ろした。月が2つ、今日は両方が満月でとても美しい。



「……ここに来て、2週間とちよつとか」

「2回目だけど、短いようで、長いようで……でもやっぱり短かったな、って思う」

「……だな」

ソウヤも空を見上げる。

「なあシンク」

「何？」

「……お前、姫様のことどう思ってるんだ？」

「ど、どうって……」

思わず言葉を詰まらせたシンクの方をソウヤが見つめた。

「……そりゃあ大好きだよ。でも、姫様だけじゃなくて、エクレもリコモユッキーもダルキアン卿も……ビスコツティの人たちだけじゃなくて、レオ様やガウルやジェノワーズの皆も……。あ、勿論ソウヤもね」

それを聞いたソウヤが一つため息をこぼす。期待していた答えではなかったらしい。

「……それを逃げじゃなく普通に答えるってのが、いかにもお前らしいな」

「え……？僕何かまずいこと言った……？」

「いいや、なんでもない。気にするな。……じゃあ、お前は姫君に当たる相手と……友達のように接することに抵抗を感じたことはないか？」

「抵抗……？うーん……」

シンクが再び考え込む。最初その様子を見つめていたソウヤだったが、視線を夜空に浮かぶ月のほうへと移した。

「……最初は、確かにお姫様って聞いて、ちょっと気後れをしてた感じはあったけど……。でも話してみたなら普通の女の子だし、本人もそう接してもらいたいみたいだったから。そんなわけで今はまったくそういうのは感じてないよ。それに僕のことも勇者として認めてもらってる……。だから、ただのシンクとしても、勇者シンクとしても、もう抵抗とかは感じないかな」

「……そんな風に割り切れるお前が羨ましいな」

「割り切れればいいじゃない、ソウヤも」

「言うのは簡単だがな。俺はお前ほど素直じゃない」

シンクが口を噤む。何かを考えてる様子だった。

「……ソウヤ、もしかしてレオ様と自分が釣り合わないんじゃないか、って不安に思ってるの？」

ソウヤの顔に驚きの色が浮かぶ。

「鈍い奴かと思っていたが……そういうことは気づくんだな」

「鈍い？僕鈍いかな……」

「大抵そういうのは自覚がないもんだ」

「はは……」

困ったようにシंकが苦笑した。

「まあ……お前が今言ったとおりだ。果たして俺にあの方と肩を並べる資格はあるのか。……そう思ったから、お前に色々聞いたわけだ」

「そんなの、不安に思う必要もないじゃない。ソウヤはレオ様を選んで召喚されたわけだし、ガレットの神剣エクスマキナにも主と認められたんだから」

「……そうか」

「少なくとも僕はソウヤを勇者としても、自分の友達であると同時にライバルとしても認めてるし、レオ様とも釣り合う存在だと思ってるよ。それにガウルにはもう友達みたいに接してるじゃない。なら気にしなくてもいいと思うよ」

「そうか……。わかった、ありがとう。すまなかったな、明日帰るつてのに変な話をして」

「いいよいいよ。同じ勇者だもん、悩み事は互いに相談して解決するのが1番でしょ?」

「そうだな」

ソウヤがシンクを見つめて笑う。つられるようにシンクも笑顔を見せ、次いであくびがこぼれる。

「長話して悪かった。そろそろ眠くなってきたなら寝た方がいいんじゃないか?明日の姫様との散歩に遅れるぞ」

「うん、そうだね。……ソウヤは寝ないの?」

「もう少しここにいる。今日は月が綺麗だし、お前が散歩から帰ってきた後ぐらいにゆっくり起きればいいからな」

「そっか。……じゃあお先に、おやすみ」

「ああ。おやすみ」

芝生から立ち上がり、ソウヤに手を軽く振ってシンクが遠ざかる。その背中を見送り、城の中に入ったところまで見届けるとソウヤは夜空を見上げた。

「……あいつぐらい、前向きになんでも考えられる性格ならよかったのかもな」

無い物ねだりだ、とソウヤは自嘲的に小さく笑った。そして立ち上がり、首だけを後ろへと向ける。

「……もう俺1人ですし、そろそろ出てきてもいいんじゃないですか？」

誰もいないはずの空間へとソウヤが言葉を投げかける。その言葉は闇へと吸い込まれ　しばらくして柱の陰から1人の女性が姿を現した。

「いつから、お気づきに？」

「俺がシンの脇に座った後すぐ……要は最初からですよ、ビオレさん」

ソウヤにそう言われたからか、月明かりで見えたビオレの顔には苦笑が浮かんでいた。

「そうでしたか……。一応隠密行動もする近衛隊の隊長としてはそれはちよつとシヨックですね」

「そこまで隠そうと言う気もなかったでしょう。それに……これだけ月が綺麗な夜ならたまたま外の空気を吸いに来て俺たちを見かけた、って可能性もありますし」

「では後者にしておきます。その方が私としては面目を保てますから」

ビオレがソウヤの近くへと歩を進める。が、ソウヤはビオレに背を向けたまま口を開く。

「それで、たまたま外の空気を吸いに来た近衛隊長殿は、俺に何かお話が？」

一瞬の沈黙。その後でビオレが切り出す。

「……先ほど、ソウヤ様はシンク様に『姫様のことをどう思ってるか』と質問されました。では私も同じ質問をさせていただきます。……ソウヤ様はレオ様のことをどう思っているのですか？」

ソウヤは答えない。いや、沈黙を答えとした、と言った方が正しいか。

しばらく待ったビオレだったが、ソウヤが答えないと判断すると再び口を開く。

「……ソウヤ様はお気づきになられていないかもしれませんが、ですが、レオ様は、ソウヤ様のことを……」

「わかっています。……だから皆まで言わないでください」

「え……？わかっている、って……」

「そもそも、『星詠み』で俺のことを知った、俺と共に戦いたいと思った……。その動機だけでも十分です。……言うなればそれは『慕情』だ。それが行き着く感情は……。……いや、そうじゃなくても、最初から『閣下』ではなく、自分を名で呼ばせた。だったら、あの方は最初から俺に多少なりとも、好意を持って接してくれていたってことでしょう」

「そ、それでは……ソウヤ様はレオ様のお気持ちにお気づきに……？」

ビオレの方を見つめ、ソウヤが自嘲的に笑った。

「……あいにくシंकほどは鈍くないんですよ。ですが……元々の俺は人と接することを拒絶する人間だった。……浅い付き合いで、ただ好き勝手暴れて、そして淡々と帰る。そう思っていたんです。そんな俺にとって好意なんてのは天敵といつてもいい。……別れを辛くする原因ですからね。だから気づかない振りをしていたし、その気持ちに伝える必要はないと思っていたのですが……。どっかの正直すぎる馬鹿のおかげで俺は変わった。変わった時に……レオ様の気持ちに伝えるにはいけない。一度はそう思いました」

そこまで言ったところで、再びビオレから視線を逸らし、ソウヤは満月を見上げる。

その時、先ほどビオレがいた柱の陰に身を隠す人影があった。が、2人はそれには気づかない。

「……ですが俺は彼女を形はどうあれ一度は傷つけた。約束を破り、気持ちを裏切った。なら俺にあの方の気持ちに伝える資格なんてない。よしんばあったとして、俺にはその覚悟がない……。あの方の気持ちに伝えると言うことは、あの方と同じものを背負うと言うことですから」

「……そう言って、お逃げになるんですか？」

「そうです。そう思っていただけで結構です。その覚悟を決められない俺など、あの方の相手としてふさわしくない……。それに、一国の領主であるなら、俺なんかより優れた、もっとその身分にふさわしい人間と交際をするべきだ。……恋なんてのは熱病みたいなものだ、それがウブな女性の抱いたものなら、なおさらでしょう。だ

から、一時の感情でその一生を棒に振らせてしまつぐらいなら……」

一瞬の沈黙があつた後、

「……俺は自らこの身を引く。そう決めたんです」

はつきりとそう言い切つた。

それと同時に、先ほど柱の陰に隠れていた人陰が離れていく。が、やはり2人はそれに気づかなかつた。

「そんな……！それではレオ様のお気持ちはどうなるんです!？」

「言つたでしょう、恋は熱病みたいなもんだと。……そのうち冷めれば、俺への気持ちなんて忘れる」

「ソウヤ様は……それでいいんですか？レオ様があなたを忘れて、違つ方と一緒になつた姿を見て、それでもあなたは納得できるんですか？」

「……全てはレオ様のためです。その方が高貴な領主であるあの方のためになる、そうであるなら……。……俺の気持ちなど介入する余地はありません」

ビオレが奥歯を噛み締める。俯き、足元の芝生を見つめた。

「……結局のところ俺は、レオ様を幸せにするなどということができるかわからない約束も、同じものを背負つて共に歩いていくという覚悟もできない、ただの小さな人間なんです。この手で一度傷つけた彼女を、再び傷つけることを怖れている、その程度の人間なんです。」



……そんな俺に、レオ様を愛する資格など、あるはずがありません」

「……あなたは……！」

呻くように呟かれるビオレの声。それを聞き、ソウヤが振り返る。

「これが俺が出した答えです。変えるつもりはありません。ですが、納得がいかないというなら……ビオレさん、俺を殴ってください」

ビオレが驚いて顔を上げる。

「それでああなたの気が済むなら安いものだ。……もともと、その程度じゃ本当に気が済むとは思ってませんけど」

再びビオレが俯き、奥歯を噛み締め　しばし間があった後、ビオレは両目を瞑った。

そして決意したように顔を上げ、閉じていた目を開く。

「……失礼します……！」

パン……！！

乾いた音と共にソウヤの左頬に平手が張られた。

そのままビオレはソウヤに背を向けて数歩足を進める。

「……ソウヤ様、一つ、これだけは言わせてください」

顔を振り返らせず、ビオレが口を開く。

「ソウヤ様は覚悟がない、とおっしゃりました。……ですが、レオ様はもうあなたを受け入れる覚悟を決めておられたのです」

ソウヤは何も言わず、次の言葉を待つ。

「以前、レオ様は、あなたに輝力をお分けになりました。……フロニヤルドにおいて、輝力を分けるということは、親族、あるいはごく親しい間柄で行われない行為……。あるいは……将来を約束した男女で執り行われる儀式という要素もあるのです」

驚愕の表情を浮かべるソウヤ。

「レオ様は、エクスマキナをあなたに預ける時に、勇者として認めるだけでなく……。あなたを将来の相手としてもお認めになっていた……。あなたと、これからの人生を共に歩む覚悟は出来ていた……。それだけは覚えておいてください」

そう言い終えると、ソウヤの方を振り返ることなくピオレは城の中へと歩いて行った。

1人残されたソウヤはしばらく呆然と立ち尽くした後、2つの満月を見上げる。

「……ずるいですよ、そりゃ……」

ピオレに叩かれた左の頬がズキリと痛む。

それはもしかしたら、本心をこれまで殺してきた、ソウヤの心の痛みだったのかもしれない。

Episode 28 2つの月が昇る夜（後書き）

頭を悩ませた話。

恋愛物はあまり読まないんで、こういうのを書くのは難しいと思いつつも、チャレンジ精神でやってみました。結果、撃沈してないといいんですが……。

冒頭、ソウヤが切り分けたパイ状のお菓子ですが、これは他ならぬガレット・デ・ロワをモチーフにしています。

フランスではお正月にガレット・デ・ロワを食べる習慣があるらしいです。

食べたことないんでいつかは食べてみたいですね。

翌日。シンクにとって滞在期限の最終日。

フィリアンノ城ではシンク帰還のための式典が行われていた。

ガレット勇者ということでソウヤもそれに参加しており、他にもガレット側からはレオとガウル、側近のビオレ、将軍であるバナードにゴドウィン、それにジェノワーズと錚々たる面々が揃っていた。とはいえ、式典と言いつつも堅苦しい式でもなく、シンクから一言と、あとはシンクに最後の挨拶をするための会と言い換えてもよかった。

「では勇者様、一言ご挨拶をお願いします」

「勇者のコメントを求められてアメリカからマイクを受け取ったシンクは、その顔ぶれにやや緊張気味に壇上へと足を進めた。

「え、えーっと……。今日はこのような会を開いていただき……。あれ？違うかな……。えーっと……」

「何緊張してんだよ！」とガウルから野次が飛ぶ。それを聞き、そこに参加していた人たちから笑いが起きた。

「あはは……。ゴメンガウル。……。えっと、今日はこれだけの人が集まってくれて、あとガレット側からもたくさんの人たちが来てくだ

さつて、本当にありがとうございます。今回も16日間っていう長いようで短い期間の滞在だったけど、いろんなことがありました。中でも1番印象深いのは……」

シンクがソウヤのほうへ視線を移す。

「自分と同じ世界から、もう1人の勇者がガレットに召喚されたことです。ソウヤ……えっと、ガレットの勇者ソウヤとは戦場でと、あと昨日の特別興業での2度、剣を交えさせてもらいました。1度目はかるうじて僕が勝てたけど、2度目は引き分け……でもそういう結果以上に、互いの剣を通して仲良くなれて、一緒にフロニヤルドの戦を楽しめた、っていうのが、僕としてはすごく嬉しかったです」

ソウヤが俯く。照れ隠しだろう。

「他にも今回も姫様のコンサートを見ることが出来たし……あつ、レオ様の歌も……」

「それは言うな……」

遮るように横から呟かれたレオの声に思わず笑いが起きる。

「……とにかく、今回も楽しい16日間でした。次の長い休みはちよっと先になっちゃうけど、それでもまた必ず戻って来たいと思います。そして、ビスコッティ勇者として、また皆と一緒にこの熱い日々を過ごしたいと思います！」

出席していた人々から拍手が送られる。少し照れくさそうに一礼し、アメリカタにマイクを返してシンクは壇を下りた。

「勇者様、ありがとうございます。それでは勇者様の送還の儀式まで今しばらくの時間がありますので、それまで皆様ご歓談くださいませ」

そうアメリカタが言うと会場内が話し声に包まれる。

と、レオとビオレが席を立ち、会場を後にする。それを横目に見て一つ息を吐いたソウヤも立ち上がり、バルコニーの方へと歩いて行った。

会場内の喧騒から離れ、ソウヤはバルコニーの手すりに肘をつく。そのまま昨日の夜は2つの月が出てきた空を見上げた。

「いいのか？勇者に会いに行かずに」

聞こえた声に首を傾げる。そこにエクレールがいつもどおりの不機嫌そうな顔で立っていた。それを確認し、ソウヤは振り返って手すりに背をもたれかける。

「そういう親衛隊長殿こそいいのか？さっきシンクが言っていた通り今度来るまでの期間は長いんだ、やせ我慢などせずにあいつに会ってくればいい」

ピクツとエクレールの眉が一瞬動く。

「……今あいつは最後の挨拶をして回っているところだ。この後私は送還の儀が行われる召喚台まであいつを連れて行く役割がある。最後の話は、そこですればいい」

「勇者をエスコートする女性騎士様か。立場が逆だと思うが」

フンと鼻を鳴らすエクレール。

「……明日は姫様の付き添いでお前の見送り式典には顔を出す。だが姫様は多忙だ、その後すぐビスコッティに戻らなければならない。だから、私もそれに付き添ってこっちに戻らなければならない。だから今日がゆっくり話せるのは最後だと思ったから来てやったというのに……」

「別に頼んだ覚えはない。……だが、お前にも色々世話になった。俺が『禍太刀』に乗っ取られたあの時、お前が割り込んでくれなかったら俺は巨乳ちゃんを斬ってたかもしれないからな」

「友人を助けたただけだ。貴様のためではない」

ソウヤが小さく笑う。

「それでもいいさ。明日話す時間がないなら今のうちに礼だけは言っておく。……ありがとう」

「それは……こっちのセリフだ。貴様のおかげであいつは……シンクはとても楽しそうだった。戦場で肩を並べて戦ったこともあったが、それ以上に、あいつは貴様と戦っている時は輝いていた。お前のおかげであいつは楽しくこの期間を過ごせたんだと思う。だから……」

「……なんでお前がそれで礼を言う必要がある？」

エクレールが驚いた表情を浮かべた。

「それはシンの話であってお前じゃないだろ」

「そ、それは……」

「あいつの喜ぶ顔を見てお前も嬉しい、そう捕えていいのか？」

「な……ち、ちが……」

「前に城下町を歩いた時も言ったと思うが……お前は心の中ではあいつのことを大切に思っているんだろう？」

「いや……私は……」

エクレールがソウヤから視線を逸らす。だがソウヤはそのまま続けた。

「なら、違うなら聞き流せ。……あいつはこういうことに関してはどうしようもなく鈍い馬鹿だ。言葉で伝えなければ……いや、言葉で伝えたってちゃんと伝わるかわからないほどの馬鹿だ。だから、お前があいつのことを大切に思ってるなら……ちゃんとそのことを伝えてやれ」

エクレールは顔を赤くし、俯いたままだった。

「……別にどうするもお前次第だ。その気持ちを心にとどめておく、というならそれでいい。でもな、せつかくあいつのことを名前で呼んでやるぐらいにはなったんだ。だったら……もう少し勇気を出して、後悔する選択だけはしないようにしろ」



そう言つとソウヤはエクレールに背を向け、再びバルコニーの手すりに肘を着いた。

「よ、余計なお世話だ！せっかく来てやったというのに貴様という奴は……！」

ソウヤはその愚痴を背中では聞き流す。その時部屋の中から「エクレール」と彼女を呼ぶ声が聞こえた。兄のロランのものだろう。

一言二言、言葉を交わした後、エクレールは背を向ける隣国の勇者に声をかけた。

「……私はあいつの付き添いで出かける準備をしなくてはならないから、そろそろ行く。お前もあいつに最後の挨拶をしておきたいなら、早いうちに声をかけておけよ」

了解、という意味を伝えるためにソウヤは左手を軽く上げた。

「……礼は、言っておく」

そう言い残し、エクレールの足音が離れていった。

「全く本当に素直じゃない奴だな」

だがそこがまた可愛いところでもあるか、とソウヤは思った。

と、外にレオとビオレ、それに数十名の騎士がセルクルに乗ってフィリアンノ城を離れていくのが見える。

「後悔する選択だけはするな、か……。人のことを言えないほど、

俺も大概卑怯だな……」

離れていくレオの背を見ながら呟く。

エクレールは以前、「いつそ別れがつかなくなるくらい楽しい思い出ができるなら、それはきつといいことだ」と言った。そういう前向きな思考をできる人間に「後悔する選択だけはするな」と言えはどうか。

ソウヤはその答えをこう予想する。「おそらくエクレールはシンクに自分の気持ちを伝える」と。

それは「伝えなければ後悔する」とわかっているからだ。だから、エクレールはそれを回避しようとする、ソウヤはそう考えた。

ではソウヤは同じことを言われたらどうするか。答えは、昨日ピオレに伝えた通りなのだ。

なぜなら、伝えなければ後悔することは目に見えているが、伝えたところで後悔がついてまわるだろうということにもまた、ソウヤは気づいてしまっているからだ。

例えばエクレールの例で言うなら、同じくシンクに好意を抱いているであろうミルヒとシンクを取り合うことになるだろう。敬愛する姫君と文字通り愛する勇者。その板ばさみで親衛隊長は悩むことになるかもしれない。

つまりどちらの選択をしようと、後悔はすることになる。早い話がやって後悔するか、やらないで後悔するか、なのだ。だからソウヤは自分を卑怯と言ったのだ。

しかし、そうわかっていてもなお、エクレールには、いや、自分以外の人には自分と同じ道を進んでほしくない、そうも考えていた。そのためにエクレールにさっきの言葉を投げかけたのだ。そんな状況になってもエクレールは前向きな答えを出せる、そう思ったからだった。

ソウヤは見えずぎていた。大切な人のことを思いすぎるあまりに、結局はその人の気持ちを裏切ろうとしている。

だがそれをわかっていてもなお、自分の気持ちを押し殺す。それがその人のためになるのならそうする。やって後悔よりもやらずに後悔を躊躇なく選択する。それがソウヤ・ハヤマという人間なのだ。

そうであったはずなのに、別れを避けるために出会いも避けてきたような考えの持ち主のはずなのに、今ソウヤの心は迷い、揺れている。このフロニヤルドに来たことで変わりつつある心は、冷静というよりむしろ冷酷ともいえたかつての判断が下せなくなっていた。だから、エクレールにそんな話をしたということもあった。

「……ヤキが回ったな。他人をおせっかいする前にてめえのことを何とかしろって話だな」

ポツリと呟き、ソウヤが手すりから肘を浮かせる。

迷う心を隠しつつ、ソウヤはシンクに最後の挨拶をするために城の中へと戻っていった。

結局物思いに耽った時間が長かったせいか、シンクは城の外に出  
てしまっており召喚台へと向かおうとしているところだった。

「あ、いたいた！よかった、レオ様は公務があつて先に帰るつて言  
つてたから、ソウヤも一緒に帰っちゃったのかと思つたよ」

「いくら俺でも最後の挨拶ぐらいはちゃんとするさ」

「そっか。まあそつだよな。……じゃあソウヤ、一足先に日本に戻  
つてるよ」

「ああ、わかつた。……最後まで見送りに行きたいところだが、送  
還の儀は召喚主と勇者でしか行われないうつてことだもんな」

「そつだね……」

「約束、忘れるなよ？」

「約束……？」

シンクが一瞬考える様子を見せる。

「……おい」

「あ、元の世界に戻つたらメール送るつてことだよな。勿論忘れて  
ないよ」

「……本当か？明日の昼ごろには戻ってると思うが、その後部活があるからもしかしたら返信が遅れるかもしれない」

「わかった。でも帰ってきてるかってこととアドレス正しいかの確認はしたいから、明日中に返信は頂戴ね」

「わかったよ」

シンクが笑顔を浮かべ、セルクルに跨った。

「じゃあね、ソウヤ。続きは日本で！」

「……ああ、そうだな」

見送りに来てくれた他の人たちにもシンクは手を振った。

「それじゃあ皆、ありがとう！また来るよ！」

「またシンクが来てくれるのを楽しみにしてるでありますよー！」

「お土産話を用意して待つてるでござるー！」

「また来いよー！こっちも戦の準備して、楽しみに待ってっからよー！」

別れを惜しみつつも、離れていく背中に声をかけ、シンクは手を上げてそれに応えた。

エクレールに連れられたその姿が見えなくなるまで、皆手を振っていた。

「……さてと、じゃあ俺たちもガレットに帰るとすつか」

シンクの姿が見えなくなるまで見送った後、ガウルはそう切り出した。

「もう帰ってしまうのでござるか？」

「すまねえな、こっちの勇者も明日帰るからよ。で、その手続き一つか済ましておかなきゃならねえ事務ごとに全然手つけてねえんだ。一応これでもこいつ数日前まではずっと寝続けてたような人間だしな」

「そつえば……そつでありましたね」

「ルージュがよ、シンクを見送ったら出来るだけ早く戻って来い、とか結構真顔で言いやがったから、多分それなりに急ぎだと思う。……ってか、よく考えたら召喚もだが、勇者を送還するのは今回が初めてだから、焦ってるつてもあると思うんだが」

「でもその点は大丈夫。今日からリコがガレット入りして、不測の事態に備えてくれるから」

「頼りにしてるで、発明王！」

「いやいや、自分はそんなじゃないでありますし、送還の知識もノウハウやガレットの研究員の方々には伝達済みでありますので、自分が行っても役に立つかどうか……」

「そんなのどうでもいいんですって。リコちゃんが来てくれた方が

私達は楽しいんだから」

「ともかくそんなわけで俺たちは帰らないといけねえ。リコッタ借りていくぜ」

ガレットの騎士が連れてきた自分用のセルクルにガウルは跨った。

「ユキカゼ、ダルキアン連れて明日来るんだろ？」

「今頃お館様は騎士団長かゴドウィン將軍辺りと晩酌してそうでござるが、明日は何うと言っていたはずでござる」

「んじゃあソウヤとの最後の挨拶はそんな時でいいか。とりあえずルージュに怒られるのは嫌だから、俺たちは行くぜ」

「了解でござる。では殿下、お気をつけて」

「おう」とガウルがセルクルを走らせる。ジェノワーズ、ソウヤ、リコッタがそれに続いた。

「まあ今回は戻ってこれる、ってわかってるから、あいつの別れもあっさりだったな。……つつつてもその事実を知ったのはあいつが帰った後だったけどよ」

ビスコッティとガレットをつなぐ街道を進みつつガウルが口を開く。

「前は……本当に悲しかったでありますよ。戻る時に記憶を失ってしまっ、ということでありましたから……」

「リコ、ずっと徹夜して一生懸命皆が悲しまずに済む方法を探してくれてたんだよね」

「じゃありコツタがその方法を見つけたと？」

以前の状況を知らないソウヤが問いかけた。

「うーん……あれは自分とは言えないような……」

「でも封筒を見つけたのはリコだし……」

「それも、自分とは言えないような……」

「……わかるように説明してくれないか？」

置いてけぼりを食ったソウヤが苦笑を浮かべる。

「シンクが戻った後も諦め切れなかった自分は調べ物をして……つい眠ってしまった時にノワが持ってきてくれた本の中か……あるいは自分がまだ調べていなかった本の間か……詳しいことはまだわからないですが、ある封筒が挟まっていたであります」

「ビスコッティの蠟緞ろうかんが捺してあって、その中に勇者召喚の注意点と、送還を一時帰還に変える方法が書いてあって……」

「ああ、その封筒の謎、まだ解けてないんや？」

「うん……。とにかく、そこに書いてあった方法でシンクは記憶を戻すことが出来たし、またフロニヤルドに来ることも出来るようになった、ってわけ」



「じゃあなんだ、あいつは帰るその時まで、もう2度とここには来れないし記憶も失う、そういう状態で帰っていったってことか？」

ソウヤの問いかけにリコッタが当時を思い出すように重々しく頷いた。

「……やっぱあいつは勇者だな」

ポツリと呟いたソウヤの言葉の真意を知りたいと全員の視線が集まる。

「どういう意味だよ？」

「だってそうでしょう。あいつのことだ、きっとそのことは誰にも話していなかった」

「……そうであります」

「で、そんな心を隠して普段どおりに振舞って、今日みたいな会もこなして、そして帰っていった」

「……であります」

「俺が同じことをやれと言われたら、おそらくできませんね。2度と来れないとわかっていているなら、そのことを知った瞬間から当初の俺の通り、別れの痛みを減らすためにより深い付き合いを避けますよ。『いつかまた来る』という淡い希望を抱かせ続けるよりは『もう来ない』とはっきり諦めさせたほうがいい。なら、別れもあっさりしたほうが、後に引かずに済む。残酷かもしれませんが、諦める

ことで人はまた前に進めることだってある」

「……お前はどこまで現実主義者だよ」

思わずガウルが顔をしかめる。

「基本俺は現実主義です。シンクのように嘘の約束を交わすことも到底ありえない可能性を信じるなんてことも、俺にはできません」

「よく言っぜ。『禍太刀』のときは奇跡を信じるとか言ったくせによ」

「……出まかせですよ。本心を言えば、俺はあそこで死ぬつもりでした。言っただでしょう、運がよかった、たまたま奇跡が安く売られてただけだよ」

「じゃあ何か？お前が姉上を守るとかいったのは嘘か？あれも出まかせか？」

「……それは……」

「ま、まあまあ2人とも！ソウヤは明日帰るんやし、最後にそんなケンカみたいにならんでも……」

ソウヤとガウルの間には険悪な空気が流れたと判断したジョーヌが止めに入った。

「そうですね。シンク君もまた戻って来れたんだし、ソウヤさんも今こうして元気なんだし、それでいいじゃないですか」

「……そうだな。悪かったソウヤ、別に責める気はなかったんだけどよ……」

「いえ、気にしないでください。俺の口が悪いのが原因ですし、直そうにもこればかりは直しようがありませんから」

「……まずはそういう余計な一言を無くした方がいいんじゃないか？」

思わずそう口走りながらガウルが苦笑を浮かべた。

「……まあそれはさておき、再召喚の条件ってなんだっけ？」

「えっと……91日以上再召喚までの期日を空ける、召喚主以外の3名に身につけていたものを預ける、召喚主に再び戻ってくるという約束の書と身につけていたものを預ける、であります」

「……身につけていたものって何でもいいのか？」

「ソウヤさんが元の世界から持ち込んだものなら何でもいいでありますよ」

「参考に聞きたいんだが、シンクは何を置いていった？」

「えっと……姫様には何かの記念でもらった時計、エクレにはリストバンド、自分には『ボールペン』というものと『スピーカー』というもの、ユツキーには紐飾り、ダルキアン卿や騎士団長には記念のコインだったであります」

リコッタの話聞いていたソウヤが大きいため息をこぼした。

「どうしたでありますか？」

「……なんであいつはそんなに物を持ち歩いてるんだよ。俺は基本的に何も持ち歩かないから、預けられるような物は何もないぞ？」

「なんだっていいだろ。なんなら、その三馬鹿で丁度3人だ、そいつらとあと姉上に物預けるなら、俺には何もなくても構わないぜ」

「……そうもいかないでしょう。仕方ない、帰ったら荷物ひっくり返すか……、それにしても面倒な条件があるんだな。まあ戻って来れない、よりは遙かにマシだが」

「そうでありますね……。その謎については、おいおい解明したいと思っただけであります……」

「リコが頑張れば、きっとそのうち『ケータイデンワ』っていうのを使って好きに連絡を取ったりとか、ソウヤたちの世界とフロニヤルドを好きに行ったり来たりとか出来るようになると思うよ」

「いやいや！さすがに好きに行ったり来たりは……」

「そりゃいいな。頼りにしてるぞ、リコえもん」

「リ、リコエ……？」

ソウヤが突然つけたリコッタの渾名の意味がわからないと、当のリコッタ本人が固まってしまった。

「なんや、その『リコエモン』っちゅーのは？」

「俺の世界ではそんな感じの名前の、困った時はなんでも解決してくれる架空のキャラクターがいるんだよ。それとリコッタの名前を組み合わせるとリコえもんだ」

「お、それいいんじゃないか？」

「でもなんかそれはリコに合わない気がする」

「自分もそれはちょっと遠慮してほしいであります……。でも、ソウヤさんたちの世界と自由に連絡を取り合えたりというのは、フロニヤ周波を増幅して、もっと研究すれば可能になるかもしれないありますよ」

「本当かよ！？こりやますますもってそのリコエ……。なんとかだな！」

「だからガウル殿下、それはやめてほしいであります……」

思わずガウルが笑い、それにつられるように全員が笑った。

だが笑いながらも、ソウヤは心の中では別なことを考えていた。

ビオレに言ったことをレオにも伝えなければならないのか。あるいは、レオの気持ちに気づいていないふりをして帰ってしまうべきなのか。そもそも、ビオレに言ったことをレオ本人を前にして口に出来るのか、そのまま言うべきなのかオブラートに包むべきか。

様々な思惑が心の中で渦巻き、5人の会話もあまり耳に入らないまま、遅れないようにセルクルを進める。

ソウヤが帰るまで、あと1日。

Episode 29 紅の帰郷（後書き）

シンク送還の回。

ソウヤより1日早い召喚なので、1日早く帰還です。

当初はシンクを見送ったらこの話の中でソウヤも帰る、という考えだったのですが、欲が出てもうちょっと書いてみようこの回を独立させました。

結果、これまでいまひとつスポットを当て切れなかったエクレとリコに絡んでもらうことになりました。が、ちょっとエクレをデレさせすぎたかも……。いや、ソウヤに対してデレたのではなくてシンクに対してデレてるんですから問題ないですよ！そしてまさかのリコえもん。

チラツと触れた封筒の件ですが、ここまでドラマBOX3はノータッチで来ましたが、ここに来てようやく少し触れられそうだったので封筒の話をつ込みました。

その他特典CDとかは未入手のため、封筒の謎については書いてる人は承知しております。また、リコがやりたい放題やって、ここに書いたことはもうほぼ出来てるとかって話も聞いているのですが、噂のレベルでしか聞いてなかったりします。

まだ特典CD等で明かされてないのであれば、封筒の謎は2期でわかるんじゃないでしょうかね。

あとリコがシンクを呼び捨てにしていますが、自分の中で9話の会食後にビスコッティ側の呼び方が基本そういう呼び方に変わった、と言うことにしています。

シンクに「シンクでいいって」って言われて戸惑いながら名前を呼ぶリコとか皆さんの頭の中で想像してニヤニヤしてください。

で、ニヤニヤしたら人気があるはずなのに二次創作が少ない気がする

るこの作品の二次物を是非書いてください。



ソウヤが元の世界へと帰る日がやってきた。

昨日はヴァンネット城に戻った後、ルージユが付きっ切りでフロニヤ文字について指導してくれて約束の書を書いたのだが、そもそもフロニヤ文字を正確に読みきれないソウヤにとって、その文字をさらに書こうというのは難易度がかなり高いものとなってしまった。結果、予想以上に時間がかかってしまったのだった。

さらに、国营放送が翌日の式典に合わせて特番を組むため、帰還直前の勇者のインタビューがほしいとかで余計に時間を割かれてしまい、準備がまだ終わってはいない状態であった。

「まいったな……」

式典と送還の儀は数刻後に迫っていると言うのに、ソウヤは荷物をまとめるどころか、逆にベッドの上に荷物をひっくり返していた。

「預ける物、って言ったってな……」

ソウヤが頭を悩ませているのは召喚主、及びそれ以外の3名に預けなくてはならない物を何にするか、と言うことであった。シンクほど物を持ち歩かないソウヤは預けられそうなものは少なく、どうしたものかと困り果てていた。

「仕方ない。安物だがレオ様にはこの腕時計でも置いていくか……」  
家電量販店で安く買ったものだが、気に入ってずっと使っていた腕時計を見つめつつ、ソウヤはそう呟いた。

と、その時入り口の扉がノックされる。

「どうぞ」

ルージュか、もしかしたらビオレだろうと思ったソウヤの予想とは裏腹に、そこに現れたのはジェノワーズの3人とリコッタだった。

「お邪魔しまーす……ってなんや、これから帰るってのに荷物ひっくり返して」

「置いていく物が無いんだよ。俺はあいつみたいに色々物を持ち歩く人間じゃないからな。音楽を聴かないからプレイヤーもないし、ゲームもやらないからゲーム機もない。……あつたところでそういう高額品を置いていくのもちよつと気が引けるが」

「プレイヤー……?」

「ゲーム機……?」

ノワールとリコッタが首をかしげる。

「俺の世界にある機械のことだよ。音楽を聴くことのできる持ち運べる機械がプレイヤー、遊ぶ物がゲーム機。リコッタがシンクから預かったって言ってたスピーカーを使えばそこから音も出せる」

「す、す、すごいであります！それは是非ぶんか……いやいや、見てみたいであります！どこにあるでありますか？」

尻尾を左右に振りつつ、リコッタが期待の籠った目でソウヤの荷物を覗き込む。

「だから持っていないだって。俺のいる世界じゃ持ち歩く人は多くいるが、あいにく時間を潰す用なら俺には本が……」

そう言ったところでソウヤが言葉を止めた。

「ソウヤさん……？」

「……そうか、本か。なんで気づかなかったんだ」

ソウヤが荷物の中からポケットに入るサイズの本を3冊手に取る。

「ジエノワーズ」

呼ばれた3人がソウヤに近寄る。その3人の手にそれぞれ1冊ずつ本を手渡していった。

「……これは？」

「暇つぶし用に俺がいつも持ち歩いてたお気に入り小説だ。禍太刀騒動のあと、俺が寝てる時にジョーヌが読んでたやつさ。大分年季入ってるが……丁度全3巻だ。リコッタが作ったって言う便利眼鏡使えば読めるだろうし、お前たちに1冊ずつ預けておく」

「でも……お気に入りが悪いらなかったら悪いんじゃない……」

「気にするなベール、どうせ何度も読んで頭に話は入ってる。それでもなんとなく持ち歩いてた、ってだけの物だし、買おうと思えば戻ってから買うことも出来る。それにジョー又は1巻を読み終えたところだから、続きが気になってるだろうしな」

「ええ！？いや、なんか重い話って聞いて読む気がなくなっただんやけど……」

「そう言うな。読めば案外面白く感じるかもしれないぞ」

「これで召喚主以外の3名、という条件はクリアでありますね」

「それでも預ける物がある限りは預けたいが……さすがにないな……」

ソウヤがベッドの上の荷物を眺める。

他にあるのは財布やタオルや着替えのシャツに折りたたみの傘、その他は制汗スプレーに栄養バーと緊急用の絆創膏やテーピング、筆記用具といった消耗品ばかりだ。

「俺の使い古しのタオルやシャツ預けるのもあれだし……消耗品渡すのもな……。あとはガウ様辺りに俺の世界の硬貨、ってことで渡せるぐらいかな……。悪いなりコッタ、来てくれるのに渡せそうなものがない」

「気にしなくていいであります。あ、その栄養バーっていうのに興味があります……」

「食つたらなくなるんだ、預けるものとしての効果あるのか？……まあ帰ればいくらでも買えるから、ほしいならくれてやる。夜食にでもするといい。味は保証しないがな」

ソウヤはまだ封の空いていない黄色い箱をリコッタへと手渡した。

「ありがとうございます。大切にしますのであります」

「……いや、大切にされては困る。かなり保存が利くとはいえ一応食い物だからな。次に俺たちが来る時ぐらいまでには食べておいた方がいいぞ」

「では来た時にシンクとソウヤさんと一緒に食べるであります」

「……だからそういうものじゃねえっての」

ソウヤがため息をこぼした。

「あとは、書類は昨日書いたんだよね？」

「ああ、苦勞した。できればフロニヤ文字の一覧表のようなものくれ。次来る時まで覚えてくる」

「あれ？ここから何か持って帰るのって大丈夫なんか？」

「……そう言えば何も持って帰れない、と言う話が当初だったと思っただけ……」

「でもシンク君は記憶が戻ったわけだし、確かパラディオンも持参して来たんですね？」

「あいつ、パラディオン持って帰ったって言ってたぞ」

5人の視線が入り口から聞こえた声に向けられる。

「本当ですか、ガウ様」

「ああ。……っと、悪い、ノックしようと思ったんだが、声聞こえ  
たんでつい開けちまった」

「いえ、別に。……それよりそのシンクの話……」

「姉上が姫様から聞いたって言ってたし間違いない。ただ、ここに  
来る時はタツマキだっけ？あいつがお前らの世界に行かないといけ  
ないらしいが」

「じゃあ俺の場合はビオレさんが必要になる、と？」

「それはですね、要はソウヤさん達の世界とフロニヤルドをつなぐ  
ものとして、そちら側にこちら側から使いの者がいかななくてはなら  
ない、ということだと思っております。この辺りはまだ解明中であ  
りますので……。ですが、その気になればソウヤさんもエクスマキ  
ナを持って帰ることができるでありますよ」

「本当かよ……。いや、さすがに置いていけと言われるだろうが…  
…」

「あれ？お前知らないのか？」

ソウヤがそう言ったガウルの方を見る。

「何がです?」

「今日の式典、エクスマキナ返還は入ってないぞ。持って帰ってもいいってことだろ」

「な……!……何考えてんですか?」

「簡単なことだろ。姉上はそのぐらいお前を信頼してるってことだよ」

「……まあいいや。レオ様に用事があるので、ついでにエクスマキナも返してきます」

「受け取ってもらえるといいな、エクスマキナ」

「受け取らせますよ。……ああ、そうだガウ様」

一度立ち上がったソウヤが荷物の中から財布を探し出して硬貨入れを開け、そこから真ん中に穴の開いた黄色の硬貨を取り出し、ガウルの方へと指で弾いて飛ばした。それをキャッチしたガウルが不思議そうにその硬貨を見つめる。

「これは?」

「俺の世界……というか国の硬貨です」

「へえ!でもいいのか?帰ったらこれ普通に使えるんじゃない?……」

「使えますよ。でもお金の価値としてはかなり低いものです」

「……なんで俺に渡すのはそんなもんなんだよ」

「お金の価値以上に意味があるからです。それは五円と言って、俺の国では『ご縁』にかけて使われることがあるんです。ご縁があるように、縁が切れないように……そんな意味も込められるんですよ」

しかめっ面だったガウルの表情が一瞬で元に戻った。

「そ、そうか。悪いな、価値しか考えてなくて……」

「いえ。価値としても安いものだし、意味合いもあるから丁度いいと思ったので」

「……前の方が本音、ってことはないだろうな？」

「さあ？どうですかね」

言いつつソウヤが腕時計をポケットに入れながら、部屋の入り口へ向かう。

「ソウヤ？レオ様のところに行くんか？」

「ああ。条件の最後をクリアしてくる。レオ様にずっと愛用してるこの安物の腕時計を預けてくる。あとエクスマキナもな。……すぐ戻る」

扉が開けられ、部屋の主が出て行った。

「……賭けねえか？エクスマキナを姉上が受け取るかどうか」



「ガウ様、多分それ賭けにならんで」

ジョー又にそう言われ、ガウルは小さく笑った。

「ソウヤ様、ありがとうございます。ではこれにて会の方は終了とさせていただきます」

ルージユが一礼する。それを横目に流し見て、壇上から降りてきたソウヤは椅子に腰を下ろした。

昨日のシンクの時の式典同様、今度はヴァンネット城でソウヤの番であった。そしてソウヤが慣れない挨拶を丁度終えたところだった。

実のところ、ソウヤの右手人差し指には蒼い宝石の指輪がまだ輝いている。

その後、ソウヤは自分の時計とエクスマキナをレオに渡すべくレオの部屋に向かおうとしていた。だがその途中でルージユと会い、レオの居場所を聞いたところ、時計は自分が渡しておくと言って預かってくれたが、エクスマキナだけは受け取ってくれなかったのだ。

「今レオ様は送還の儀の最終確認等、お忙しいご様子で手が離せな

いようですので、ソウヤ様の時計は私が預かってレオ様に渡しておきます。ですが、エクスマキナはこの後の式典まではそれを身にお付けになったままのほうがいいかと思えます。レオ様にお返しになるのであれば、送還の直前に直接レオ様にお渡しになってくださいませ」

そう言い、ルージュは頑なにエクスマキナを受け取ることを拒んだ。そのため、エクスマキナは今も主と認めた者の手に収まっている。

と、そんなソウヤの前に近づくと影があった。

「ソウヤ様」

名を呼ばれたソウヤが顔を上げる。が、声の主を確認すると改まった様子でソウヤは立ち上がった。

「失礼しました、姫様」

ソウヤが声の主、ミルヒに頭を下げる。

「いえ、こちらこそ急に声をかけてしまってますみません。この後ビスコッティに戻らなくてはならなくて……」

「そう言えばエクレールが昨日そう言ってましたね」

チラリとソウヤは視線を後ろに立つ親衛隊長へと移す。普段どおりの仏頂面をしているように見えるが、昨日までのそれとは少し違うようにも見える。

「すみません、隣国の勇者様を最後まで見送ることが出来ずに……」  
「気になさらないでください。どの道召喚台では召喚主と勇者2人  
じゃないといけないわけですし」

「まあ……そうですね……」

ミルヒの視線が泳ぎ、頬が赤くなったように見えた。

それを見てソウヤは小さく鼻を鳴らす。

「……あっ、えっと、元の世界に戻っても、シンクと仲良くしてあげてください」

「戻ったら今日中に連絡は取ってみるつもりです。ですが何分お互い住んでる場所が結構遠いですから……顔を合わせるのはしばらく経ってからになってしまいかと」

「そうなんですか……」

「まあ、またこっちに来る時までには向こうの世界で少なくとも1回は会っておくつもりですよ。その時に遊ぶかどうかは……年の差もありますしわかりませんが」

「そんな、全然問題ないじゃないですか。私とレオ様も2つ違いですし」

「そういえば……そうか」

ソウヤが視線を上へと逸らして考え込んだところで、背後に立つ

ていたエクレールが「姫様、そろそろ……」と声をかけた。

「すみませんソウヤ様、もう行かねばならないようですので……」

「お忙しいところわざわざ来ていただきありがとうございます」

「……ソウヤ様」

一瞬間を空けた後、決意したようにミルヒは口を開く。

「レオ様を……お願いします」

「俺はこれから帰る人間ですよ？お願いされても困ります」

「ですが……それでも、お願いします」

ミルヒはそう言って軽く頭を下げる。ソウヤは困ったような表情を浮かべただけで、それに対して特に返事はしなかった。

「……最後なのに変なことを言ってしまったてすみません。……エクレ、何かソウヤ様とお話したいことは……」

「大丈夫です。昨日のうちに話しておきましたから」

そう言うエクレールの方にソウヤは視線を移し、声を出さずに「よかったな」と口を動かした。

「なっ……!」

その口の動きでソウヤが伝えたかったことが伝わったらしい。

「エクレ……？どうしました？」

それはエクレールの方を振り返っていたミルヒには気づかれない。

「な、なんでもありません！参りましょう、姫様！」

頬を赤く染めつつエクレールがソウヤに背を向ける。

「あ、待つてくださいエクレ！……ではソウヤ様、これで失礼します。またお会いできる日を楽しみにしておりますね」

「ええ。こちらこそ」

今度は深く頭を下げ、ミルヒがソウヤから遠ざかる。

それを見送ったソウヤは思わずため息を一つこぼした。

「ソウヤ殿は、姫様やエクレールともすっかり仲良しになったでござるな」

次いで聞こえた声に苦笑を浮かべつつソウヤが振り返る。

「そう見えますか？姫様はまだしも、エクレールはどうですかね……」

「いやいや、あれが彼女なりの感情表現でござるよ。ユキカゼもそじり思つていじめるさ……」

「さあ……。ただ、拙者はお主と仲良しになったとは思ってないで

「ござるが」

「……というように、これもユキカゼなりの感情表現でござるよ」

「お、お館様！」

愉快そうにブリオツシュが笑った。

「さてユキカゼ、ソウヤ殿に言いたいことがあったでござるっ？」

そう言ってブリオツシュが数歩下がり、代わりにユキカゼが主の前へ出る。

「次に来た時は負けない故……覚悟するでござる」

「お、次もまた戦ってくれるのか？」

「負けっぱなしは嫌でござるからな。拙者があの戦いで受けた恥は、お主に返すでござるよ」

「意外と負けず嫌いだな。……でも俺も負けてやる気はないからよろしくな、巨乳ちゃん」

最後まで変わることもなかった自分に対する呼び方を聞くとユキカゼは背を向け、ブリオツシュの後ろへと下がる。

「ユキカゼ、もういいでござるか？」

「はい。言いたいことは伝えました故……」

「そうか。……ソウヤ殿、よければ人の少ないところへ……」

「ええ。構いませんよ」

ブリオツシユがソウヤをバルコニーへと案内する。そういえば昨日は同じようにバルコニーでエクレーと話したことを思い出した。

「それで、なんでしょうか？」

「……ソウヤ殿は、拙者と戦った際に拙者のことを『相手の身を案じるために降参を選択する優しい者』と言ったでござるな？」

「……言いましたっけ？物覚えはよくない方ですので」

「ようやく気づいたのでござる。あれは……ソウヤ殿自身のこともまた、指していたのでござるな」

ソウヤは答えない。

「盗み聞きをするつもりはなかったでござるが……昨日のエクレーとの会話を聞かせてもらったでござる」

「耳がいいのは聖ハルヴァー人だと思ってましたが。あなたもよかったですか」

ソウヤの皮肉を聞き流し、ブリオツシユは続ける。

「……ソウヤ殿は見えすぎていたのでござるな。だから、エクレールにかけた『後悔する選択だけはするな』と言う言葉を、自身で卑怯と言った……」

「まいったな。独り言まで筒抜けですか」

「……後悔しない選択などない、そうわかっているのだから？」  
視線を逸らし、またしてもソウヤは答えない。

「だから……レオ様に気持ちを伝えないつもりでござるか？」

「あなたには関係のない話……」

言いかけたところでブリオツシユの表情を見たソウヤの口が止まる。それは言うことを強制させる、と言うものとは真逆、言いたくないなら言わなくていい、だが自分が力になれることなら協力する、そう言いたげに見えた。

「……そうですよ」

だから、ソウヤは話そうと思った。ひねくれものの性<sup>サガ</sup>が、それも、本当は誰かに胸のうちを話したかったのか。何百年も生きているとも噂される年長の大陸一の剣士になら、悩みを解決してもらえるかもしれない、そんな淡い期待もあったのかもしれない。

「どの道後悔がついてまわるなら、やって後悔するよりやらずに後悔する……。それが俺なんです。俺は守ると言った約束を違えて、あまつさえてめえのその手でその約束した人を傷つけたような人間です。それに、あの人の背負っているものを一緒に背負うほどの覚悟もない。……なら、俺などと言う人間に縛られず、自由に生き、ふさわしい人を見つけるべきだ。だったら、やらずに後悔で俺はいい」



「……ソウヤ殿、それは悲しすぎる考え方でござるよ」

言葉の通り、ブリオツシユは表情を曇らせる。

「ソウヤ殿はまだ若い……。なら、後のことは後で考え、自分がその時思ったようにした方がいい……」

「……いかにも年寄りの言いそうなことですね」

「年寄りはその若い頃にできなかったと言う未練がある、だから若者にそう苦言を呈すでござる」

皮肉で言ったはずのソウヤの言葉はあっさりとブリオツシユに返されてしまった。

「どの道後悔するとわかっているのであれば……『良い後悔』ができる方を選ぶばいいでござるよ」

「『良い後悔』……?」

「拙者は……かつて『良い後悔』を選択することが出来なかった……。そして今もそれは胸に残っている……。相手の身を案じるために自分の身を引く……。それほどの決意ができる相手を諦めるといふのは……一生『悪い後悔』として付き纏うでござるよ」

「俺はそつなろうが別に……」

「ソウヤ殿だけの話ではない。レオ様も、でござる」

ハツとしたような表情を浮かべ、ソウヤはブリオツシユの顔を見た。

「良かれと思った自身の選択が、場合によっては相手も不幸にしてしまうこともある……」

「だったら……だったら俺は……どうすれば……」

「酷なようでござるが……それを決めるのはソウヤ殿自身でござる  
俯いていた視線を戻した先にあっしたのは、優しいブリオツシユの  
顔だった。

「ソウヤ殿が納得できるような……『良い後悔』が選択できるよう、  
拙者はこれ以上何も出来ないでござるが……。それでも、祈っている  
でござるよ」

「ダルキアン卿……」

一度視線を外した後、それまで迷っていたはずの目が、まっすぐ  
ブリオツシユを捕えた。そしてソウヤは右手を差し出す。

「……ありがとうございます」

ブリオツシユも右手を差し出し、その手を握り返した。

「なんの。帰る直前だというのに説教じみたことをすまなかった」

「いえ。……今度こちらに来た時には是非稽古をつけてください」

「稽古……でござるか？」

「はい。あなたのその強さの本質はどこにあるのか……。剣を通してそれを覗いてみたい」

ブリオツシユが苦笑を浮かべる。

「それは期待に応えられないかもしれないでござるが……。剣を合わせるということは歓迎するでござるよ」

ソウヤが微笑む。初めて見たようなその表情に、ブリオツシユは思わず虚をつかれた。

「お話中すみません。ソウヤ様、そろそろ外の方へお願いします」

「わかりました。すぐ行きます」

ルージユに声をかけられ、ソウヤは握手していたその手を離れた。

「ではダルキアン卿、また会いましょう」

「ああ。達者でな」

ソウヤがルージユの後に続いて部屋の中に戻り、次いでその入り口の方へと歩いていく。

その様子を見送っているとユキカゼがバルコニーへと出て来た。

「お館様、随分長話でありましたね？」

「ソウヤ殿を見ていると……どうもかつての自分と重なってしまうところがあった故な……」

「アイツとお館様が？全然似てないでありますよ」

齒に衣着せぬ物言いに思わずブリオツシユが苦笑する。

「大体お館様はアイツをご自分と似てる、だの、拙者と似てる、だの、そうやってなんやかんやで鼻厘しすぎでござる」

「何だユキカゼ、嫉妬でござるか？」

「そ、そんなではないでござるー！」

ブリオツシユが声を上げて笑う。

そして勇者が出て行ったその入り口の方へ視線を送り、一瞬真面目な表情を見せたが、

「……さあ、飲もう！勇者殿の無事の送還を願って、そして若者達の素晴らしい明日を願って！」

次の瞬間には、いつものブリオツシユの顔へと戻っていた。

「いや……飲むのはいいでござるが……拙者はお館様と飲むのは少々……」

「どづしたユキカゼ、ノリが悪いでござるな？ほら、付き合っでいぢるよー」

まだ酒を飲んでもいないのに既に酔ったかのようなオンスミス部隊の頭領は、筆頭と肩を組んだまま部屋を後にしようとしていた。

## Episode 30 訪れる最後の日（後書き）

ソウヤ送還の儀直前。

本来はここでソウヤが帰るまで書くころと思ったのですが、ビスコッティ勢と、つてかダルキアン卿との会話で予想以上に長くなったために分割。29〜31話までは1話予定だったのが3話に伸びてます。

ダルキアン卿は非常に動かしやすいキャラです。年長、過去に陰がありそう、というためにまさにここでのソウヤの会話相手としてうつつけでした。そうじゃなくても全編通して「ビスコッティ側のヒロインはダルキアン」と言っても過言ではないほど登場していたきました、書き始める前はビスコッティ側のヒロインはユキカゼの予定だったのになあ……。

勝手に過去話を少々捏造してしまいましたが、それについては2期で明らかにされるのを個人的に楽しみにしているので期待を込めてそうさせていただきました。長く生きてるのに独り身というのは、悲恋があったりとかするんじゃないかなーと……。

それから本来フロニヤルドから物は持ち出せない、と言う話だったはずなんですが、ここも捏造してしまいました。

ですが、記憶を持ち出せてるんだから、物だつて持ち出せるだろうし、実際タツマキはパラデイオンを持ってシンクのところに行ってるんで、拡大解釈ということでしょうか。

でも国の宝剣を異世界に持ち出しているのかよ、とは正直ちょっと思ったりしてますが……。

ソウヤが発破をかけたエクレの話がどうなったのか、は読んでくださっている方々の判断にお任せします。でも「よかったな」って口の動きを見てエクレは照れたわけなんで、まあそういうことです。

さらに、「召喚台では勇者と召喚主が2人きり」と言われてミルヒも照れてるってことは、まあそういうことです。

ちなみに自分も自分で妄想して考えてニヤニヤしたりしてはいるんですが、一応これの主人公はソウヤ君ということになっていきますから、ここはあえて書かない、ということに。

これ書き始めると「ベッキー出せばよかった」とか思ったりしてしまいそうなんで……。

次回が本編は最終話となります。そしてエピローグ、後書きと言う名の書いてる人の懺悔&自己満タイムとなりますので、もう少々お付き合いください。

ソウヤがヴァンネット城を外から見上げる。水辺へと迫り出した岩の上に建築されたこの城は、2週間あまりのこの日々においてソウヤの第2の家としての役割も果たしていた。

今、ソウヤが荷物をまとめ、来た時同様のTシャツにジーンズという姿でその第2の家から出て来たところだった。

「お、来たか勇者」

ガウルが現れたソウヤに声をかける。

「姉上は召喚台の方にもう行ってる。そこまではビオレが案内するから、皆に挨拶が終わったらついていくといい」

「わかりました」

そう言い、ソウヤは2人の将軍の方を向く。

「バナード将軍、ゴドウィン将軍、お世話になりました」

「いやいや、こちらこそ勇者殿の活躍のおかげで2連勝に大盛り上がるの特別興業と、大いに助けられましたぞ」

ゴドウィンがそう返した。



「今度来た時は是非將軍と奥様の話を伺いたいものですね」

「そんな、以前言ったと思いますが、自分はそれほど愛妻家というわけでは……。そういう話は愛妻家のバナード將軍から伺ったほうが面白いかと」

「そこで私に話を振るのか、君は」

バナードが苦笑を浮かべた。

「へえ、バナード將軍は愛妻家なんですか」

「さあ、どうだかね。周りはそう言っけれど」

「初耳でした。……まああまり話したことがないから、ですかね」

「一昨日言ったことを根に持っているのかい？ 私は事実を言っただけだよ。私のようなおじさんより、年の近いレオ閣下やガウル殿下と一緒にいた方が、勇者殿としては楽しいだろうからね」

「まあ確かにそうはそうですが、あなたのような方と互いに腹を探り合うような会話をするのも、俺は嫌いじゃありませんよ」

「……ソウヤ殿は本当に16歳か？」

再びバナードが苦笑を浮かべた。

「とりあえず次来た時は是非奥様を紹介してくださいよ」

「ナタリーはソウヤ殿に一度会いたいと言っていたから、今度来た時に紹介するよ。ゴドウィン、君もエリーナを紹介するんだろう？」

「むう……。そのことはエリーナと相談して、次にソウヤ殿がいらつしやる時までを考えておく、ということではダメですか？」

「何をそんな恥ずかしがる必要があるんです？」

「エリーナは美人だからね。ゴドウィンは、君にエリーナを取られるんじゃないかと不安なんだよ」

「バナード將軍！」

「それはないでしょう。こんなガキに色目を使うほどだったら、ドリユール家は崩壊秒読みでしょうから」

バナードが声を上げて笑った。

「……これはまいった。腹を探り合う会話が好きと言つのは本当のようだ。……次に来た時はゆっくりお茶でも飲みながら話をしよう」

そう言つとバナードは右手を差し出す。

「こちらからもお願いしたいですね」

ソウヤもその右手を握り返す。次いでゴドウィンのほづにその手を向けた。

「先ほどのジョークですよ。気を悪くされたら謝ります」

「いや……そういつわけでは……。ともかく、またお会いできる日を楽しみにしておりますぞ」

ゴドウィンもその手を握り返した。

「「じちら」ぞ。……では」

2人に頭を下げ、ソウヤは次の3人へと視線を移す。

「……おい、なんで泣いてるんだ？」

ジェノワーズの黄、ジョーヌが目を拭っており、ノワールとベールがそれをなだめていた。

「お前らいじめたのか？」

「そんなやない……。せっかく仲良くなれたと思ったソウヤともうお別れなんて思ったら……涙が溢れてきて……」

ため息をこぼし、ソウヤがジョーヌの頭に手を乗せる。

「……やっぱり馬鹿だな、お前は」

「な……馬鹿って言うな……」

「別に2度と会えないわけじゃないんだ。お前がそんなだところまで調子狂う。……大体、俺のお守は2度とゴメンなんじゃないかっただのか？」

「あの時はそう思ったんや……そう思ったんやけど……」

再びソウヤがため息をこぼす。

「……こいつ、どうやったら元に戻る？」

「わからない……。ジョーがここまで泣くなんて珍しいから……」

「私達の中でソウヤさんと1番接していたのはジョーですし、思いも一人ひとなんだと思います……」

困った様子でソウヤは乗せていた手でジョー又の頭をぐしゃぐしゃと乱暴に撫でた。

「い、痛い！何するんや！」

「ジェノワーズが三馬鹿なんて言われてる要因のほとんどはムードメーカーのお前にあるんだからよ、そのお前がこんなじゃ他の2人も困るだろ。……だから俺のことは笑って見送ってくれ」

「ソウヤ……」

また溢れ出そうになった涙を手の甲で拭い、ぎこちないながらもジョー又は笑顔を浮かべる。

「……わかった！お前の言うとおりやな！」

それを見たソウヤも小さく笑った。

「……そう、それでいい。……ついでに景気づけにあれやってくれ」

「あれ……？あれって……」

「あれ、やるな……」

「ですよね……？」

無言でソウヤが頷く。3人は一様にため息をこぼしつつも、ノワールを真ん中に、左手側にジョーヌ、右手側にベールが立った。

「……我ら、ガレット獅子団領！」

「ガウ様直属親衛隊！」

「「ジエノワーズ！」」

ビシッと3人がお得意の登場ポーズを決め、それを見ていたソウヤが拍手を送った。

「なんかやれって言われてやると恥ずかしいな、これ……」

「いつもは勢いでやってるから……」

「いや、いいものを見せてもらった。やっぱりお前たちジエノワーズはこうじゃないとな」

3人が顔を見合わせて思わず笑う。

「あ。預かった本、大切にしますね」

「大切にするのもいいが、とりあえず読め。……次に俺が来た時に

感想を聞くから、それまでに読んでおけよ」

「え、ええ！？本気か！？」

「勿論」

「ノワ、何か言ってやってな！」

「……私、意外とあれ読みたかったりしてた」

「ここでまさかのカミングアウト！」

「じゃあ約束だぞ。読んでおけよ」

そう言い残し、ソウヤはこの十数日間、身分を越えて友のように接してくれた王子の前に立った。

「……お前がいなくなると、寂しくなるな」

「そんなことないでしょう、ガウ様。腕白坊主がいればいつだって賑やかでしょうに」

「……へっ！そう言ってくれる相手がいなくなるから、寂しいってんだよ」

言葉通り、どこか寂しそうな表情でガウルがそう言った。

「……本音を言つと俺としてはここに永住してくれてもいいとは思ってるんだがな」

「面白そうな話ではありますが……その件についてはもう少し時間をください。一応俺の一生に関わる話ですから」

「まあ昨日の今日でいきなりずっとここにいらとも言わねえからよ……とりあえず、また来いよ」

「ええ。そうさせてもらいます。……ではガウ様、お元気で」

「ああ。お前もな！」

シンクとの再戦直前と同じように、ガウルが右拳を顔の位置まで上げる。ソウヤが笑みをこぼし、そこに自分の拳を合わせた。

挨拶を終えたところでルージュがセルクルを1羽引いてきた。

「ルージュさんにもお世話になりました」

「いえ。またいらしてくださいるのをお待ちしております」

完璧ともいえるメイドスマイルを見た後で、ソウヤは全員の方を振り返り、一度頭を下げる。

「……では皆さん、本当にありがとうございました。また会いましょう」

そしてセルクルに跨る。

「ああ！またな！」

「じゃあね、ソウヤ」

「また会えるのを楽しみにしてるでー！」

「さよーならー！」

皆の声を背に受け、ソウヤは前方で待機している女性の元へセルクルを進ませる。

(さてと……。正直な話、本番はここからか……)

ソウヤの姿を確認して一礼すると、ビオレはセルクルを歩かせ始める。

心中を隠すようにソウヤもそれに続いた。

「まず……。謝らせてください」

召喚台へと続く森をしばらく進んだところでビオレがそう切り出す。

「何がですか？」

「先日は感情が高ぶってしまっていたとはいえ、客人であり、勇者でもあるあなた様に手を上げてしまった……。申し訳ありません」



「気にしないでください。殴れと言ったのは俺です。それに……あの夜は月が綺麗だったせいで、他の些細なことは忘れてしまいましたよ」

「なるほど、いい殺し文句ですね。でも……殴っていいとおっしゃったのは覚えているのに、ですか？」

思わずソウヤが苦笑を浮かべる。

「……で、それで顔を合わせにくかったから、この2日間の俺の世話役はルージユさんに任せていたわけですか？」

「そういうわけではありませんが……。そう捉えられても仕方ないですね……」

今度はビオレが苦笑を浮かべた。

「……ソウヤ様のお気持ちは、お決まりになりましたか？」

一瞬間を空け、ビオレが聞いたかったであろう本題を切り出す。

「以前あなたに伝えた通りです。あれから大分考えましたが……俺は自分の出した答えを変えるつもりはありません。少なくとも俺の方から切り出すと言うことは、ありえません」

「……そうですか」

落胆したようにビオレが息を吐いた。

「……既成事実があれば考えが変わると思ったんですけどね」

ソウヤがかるうじて聞き取れる程度にポツリとビオレが呟いた。

「それでも、またガレットにいらしてくださいさるんですよね？」

「レオ様が俺を嫌いになって召喚をやめてしまわない限りは、そうしたいと思っています」

「でしたらそれで十分です。レオ様だけでなく、ガウ様も、他の方々も、またあなたに会うことを楽しみにしておられますので」

「会うことを楽しみにしている、か……。俺は幸せ者ですよ。ここで色々な人に出会えてよかった……」

「それをご自分でお認めになられたと言うことが、ソウヤ様の一番の成長と言えるのではないでしょうか」

驚いたようにソウヤがビオレを見つめた。

「……失礼しました、出過ぎた発言でしたね」

「いえ。……ビオレさんの言うとおり、ここで俺はひとつ大人になったってことでしょうかね」

森の出口が見えてくる。その先は召喚台へとつながっている。

「私が一緒にできるのはここまでです。あとは召喚主と勇者の2人で送還の儀を行う、と言うのが決まりですから」

「ありがとうございます。色々迷惑かけました。……あ、そうだ」

ソウヤが荷物を探り出す。何かとその様子をビオレが見つめていた。

「ビオレさん、これを」

そう言ってソウヤが渡したのは日本の文房具店ならどこでも売っているような黒のボールペンだった。

「シンクが4色ボールペンを置いていったって聞いたんで……。大した物でもない安物ですが、買ってからあまり使ってませんから。非公式な書き物をする時にでも使ってください」

「そんな……私になど……」

「あなたが俺を半ば強引に連れて来てくれなかったら、俺はここには来れなかったわけです。それにレオ様とのことで心配も迷惑もかけましたし……。何より、個人的にあなたのことは好きですし」

「ありがとうございます。では、遠慮なく受け取らせていただきますね」

ビオレがペンを受け取り懐にしまっている間にソウヤはセルクルから飛び降りた。

「……ではこれで。ビオレさん、お元気で」

「ソウヤ様も体に気をつけて、またいらしてください」

召喚台、そしてそこに立つ少女の元へ、勇者と呼ばれた少年が歩

いていく。

「……もっとも、私にかけた最後の言葉は、私などではなく、レオ様にかけてほしかったですけどね……」

ソウヤの背を見送り、ポツリとビオレが呟いた。

召喚台の前、銀髪の少女が召喚台を見つめたまま立ち尽くしている。

「レオ様」

名前を呼ばれた少女が名を呼んだ少年の方を向く。

「来たか、ソウヤ」

「ええ。……なんだかちゃんと話すのは久しぶりな気がしますね」

まるで俺を避けるように、と付け加えようとしてソウヤはそれをやめた。避けていたのはレオではなく自分だ、と気づいたからだ。

元々レオが忙しいという事実はあったものの、レオの姿を見れば自分の心が揺らぐかもしれない、そう思っていたから、ソウヤはこの2日間はレオと必要以上に接しようとしなかった。いや、ほぼ接していなかったと言ってもいいだろう。

「ここ数日忙しかったからな。お前の特別興業の事後処理にシンの送還、そしてお前の送還と立て続けじゃったし」

「レオ様も歌われた姫様のコンサート、が抜けてますよ」

「それは……言うな」

恥ずかしそうにレオが失笑した。

「ああ、その件で謝ってませんでした」

「何がじゃ？」

「あそこで俺が茶々入れたせいでレオ様が恥をかくことになった、とジョー又に言われましたよ」

「別にお前のせいではない。ミルヒの押しに負けてステージに上がるといったワシが全ての原因じゃからな」

「押した姫様の方が問題な気がしますけどね」

言いつつ、ソウヤは召喚台の石段を数段昇り、台の上の様子を見る。見たところ変わった様子はない。

「見ただけではわからんかもしれんが、準備は終わっておる。あとは時間が来ればお前が来た時と逆、お前は空へと舞い上がり、元の世界に帰れるだろう」

「へえ……。……あ、ルージュさんから俺の時計は受け取りました

「？」

荷物を召喚台の上に置いた後で石段を降り、ソウヤはレオと向かい合う。

「ああ。シンクの奴も時計だったと聞いておるし、お前の世界ではそういう場合は時計を渡す決まりでもあるのか？」

「渡しやすい、ってことだと思いますよ。もっとも、俺の場合他に選択肢がなかった、と言つてもいいですが。安物ですみません、一応ずつと愛用してたものなんで……」

「わかつてる。値段じゃない、と言つことぐらいはな」

ソウヤが一呼吸置く。

「……あと、エクスマキナですが……」

「それはお前に預けておく。勇者の証としてシンクもパラディオンを持って帰ったそうじゃ、お前も持っていけ。……勇者の証であると同時に、またここに来る、という証として」

反論しようかとも思ったが、レオは断固受け取りを拒否するように見えた。

何より、レオは「ここに来るといつ証」と言った。ならこれを返せばもうここには来ない、という意味を表すことになる。

「……わかりました」

結局ソウヤが折れた。

そしていつ時間になってもいいように　いや、時間が来たらこのままあっさりとした別れで済ませることができるよう　ソウヤは召喚台の上で待機しようと、石段に足をかけた。

「……………ワシは……………お前を……………自分の相手としてふさわしくない、などと考えたことはない」

その時、それまでの声色と一転して聞こえたその声に思わずソウヤが振り返る。

「確かにワシはお前に馬鹿にされるようにウブじゃ。それはわかる。わかるが……………それでも、ワシのこの気持ちは一時限りの物ではない、そう思っておる……………」

「レオ様……………まさか……………。あの時の俺とビオレさんの会話を……………？」

「……………すまない。盗み聞きをするつもりも、あんな形でお前の心を聞き、そしてここでこうして言うつもりもなかった。じゃが……………このままワシもお前も互いの心を隠したまま別れるというのは……………我慢ができなかった。気づかぬ振りをすればいいとわかっていながら……………それはできなかった……………」

レオの瞳に涙が溜まっていく。

「お前が……………どう思っていようが……………その心のうちが決まっていようが……………言わせてくれ。……………ワシは、お前が好きじゃ」

一瞬狼狽した表情を見せ、ソウヤはレオに背を向ける。

「……あの時の俺の話聞いていたんでしょう？ならもう言っているはずです。……俺にはあなたを愛する資格などない」

「それでも……！ワシにはお前が必要なんじゃない……！」

答えず、ソウヤは石段を一段上がる。

「ソウヤ！」

「……あなたが必要とすべき人間は俺じゃない。俺のような器の小さな人間じゃ……」

「器など関係ない……！ワシが必要としているのは……ソウヤ・ハヤマ、他でもないお前じゃ……！」

「ーッ！」

ソウヤが声にならない叫びを漏らす。

「ワシはいつまでもお前を待つておる……！今お前が自分に納得できんのであれば、ワシはいつまでも待つ……。じゃから……今のお前の気持ちに答えにしないでくれ……勇者としてまたフロニヤルドを訪れてくれ……。じゃが……。それでも心が変わらないというのであれば……その時に今の心を答えにしてくれ……」

答えず、ソウヤはただ俯き、拳を握り締めていた。

「ワシは……もう心を決めておる……！この先どんなことがあってもお前となら乗り越えていける……そう信じておる……！じゃから、



もう1度言わせてくれ。ソウヤ、ワシはお前が好きじゃ……!」

自分の気持ちを押し殺すようになおも硬く握られるソウヤの拳。

「俺は……!」

そう呟いた彼の頭の中をよぎるのはレオと過ごしたこれまでの思い出、そして自分のことを心配し、自分のためにかけてくれた言葉の数々。

『俺は、お前になら姉上を任せられると思ってる……』

『レオ様を……お願いします……』

『そんなの、不安に思う必要もないじゃない。ソウヤはレオ様を選んで召喚されたわけだし、ガレットの神剣エクスマキナにも主と認められたんだから……』

『ソウヤ殿が納得できるような……』『良い後悔』が選択できるような拙者はこれ以上何も出来ないでござるが……。それでも、祈っているでござるよ……』

『レオ様は、エクスマキナをあなたに預ける時に、勇者として認めるだけでなく……あなたを将来の相手としてもお認めになっていた……』

「……俺は……馬鹿だ……」

何を迷う必要があっただろうか。

天を仰ぎ、ソウヤはそう小さく呟いた。

そして何かを決意した表情でレオの方を振り返り、石段を降り、その前へと立った。

「レオ様」

瞼に涙を溜めたまま、レオはソウヤを見つめる。

「レオ様、あなたは俺が禍太刀騒動で意識が戻った後、『自分を守るための盾になってほしい』、そうおっしゃいましたね？」

「……ああ」

「それに対する答えがまだでした」

一旦間を空けたソウヤの顔を、期待と不安の入り混じった顔で見つめるレオだったが

「……すみません、俺はあなたの盾になることはできません」

その言葉に明らかにレオの表情に失意の色が浮かび、次いで目を伏せた。

「……そうか」

「……ですが」

レオが顔を上げる。

「俺は矢になることはできる。しかしその矢を打ち出すには弓が必要だ……。だからレオ様、あなたが弓となって矢を放ち、守るのではなくあなたに迫る敵を撃ち抜いてください」

「ソウヤ……」

「……好きです、レオ様。気高く美しい百獣王の騎士、レオンミンシエリ・ガレット・デ・ロワを……俺は、あなたを愛しています」

「あ……あ……！」

レオの肩が震え、瞳から涙が溢れ出る。

「……俺のような人間があなたを幸せに出来るかどうかはわからない。ですが……あなたは俺を必要だと言ってくれた。待っていてくれるとも言ってくれた。なら、今はまだ肩を並べる資格が俺になかったとしても、いつかきつと並べる存在になってみせる。そしてあなたをもう2度と傷つけないと約束し、共に生きていく。……あなたから預かったこのエクスマキナにかけて、俺は……ソウヤ・ハヤマはそれを誓います」

膝について泣き崩れ、涙でぐしゃぐしゃになった顔をレオは両手で抑える。

「き……貴様と言うやつは……！自分に資格がないだの覚悟がないだの散々言っておったくせに……！このタイミングでそんなことを言うなど……卑怯じゃぞ……！」

「……本当はこのまま帰るつもりでしたよ。ですが、周りの皆は俺を認めてくれた……。そしてなにより、愛するあなたの涙を見て気

づいたんです。……あなたを泣かせたまま帰れば……俺はきつと『悪い後悔』をすることになると。だから……俺も覚悟を決めます。あなたが背負うものを、俺も背負います」

レオは泣きじゃくっていた。ソウヤを失いたくないと泣いたあの時と全く逆の涙を流していた。それは「綺麗な涙」と言い換えてもいいだろう。

「……それに卑怯なのはお互い様でしょう。女性の涙というのは最強の武器ですし、それ以前にあなただって、俺が気づいていない状態で将来を約束する契りを交わしたわけでしょう？だから俺は最後の一步を踏み出せたわけですし」

「……ワシが？」

涙は流しながらも、レオはきよんとした表情を浮かべる。

「将来を約束する契り……？いつ、じゃ？」

「え……。いつ、って……戦の時に俺に輝力をわけたでしょう？」

「ああ、わけたが……」

「わけたが、って……。ピオレさんが言ってましたよ。それはフロニヤルドにおいては家族以外で行われる場合、男女が将来を約束した時に行う行為だって……」

「ピオレが？……そんな話聞いたこともないぞ。確かに輝力をおいそれとわかることはあまり行われませんが……」

「な……」

ソウヤが固まる。確かにビオレはその夜、最後にそう言ったはずだ。

「本当にビオレがそう言ったのか？」

その時ソウヤは、先ほどビオレが意味ありげに呟いたその言葉を思い出した。

『……既成事実があれば考えが変わると思ったんですけどね』

「……そうか……そういう意味か……！」

ソウヤが声を上げて笑う。何が起こったかわからないレオは完全に置いてけぼりだった。

「やられた……！騙し合いは俺の専門分野だと思っていたのに……完全に騙された！あの紫猫め、次会った時はとっちめてやる！」

「なんじゃソウヤ、一人で納得してないで……ワシにもわかるように説明してくれ！」

「ですから……」

ソウヤがレオに顔を近づける。頬を赤くしながらも、まるで魔法にかけられたかのようにレオはその瞳を逸らすことができない。

そこからはまるで最初から予定されていたかのようなソウヤの動きだった。

ソウヤの右手がレオの顎に添えられる。2本の指で優しく触れられて少し上を向いたレオの顔の、その唇にソウヤの唇が重ねられた。

そして流れる一瞬の空白。

「な………！」

レオが何をされたか気づいたのは、ソウヤが顔を離れた後だった。

「………こういうことですよ。俺はあなたを愛してる、行き着くところはそこだったってわけです」

「き………貴様！ワシの肌に触れるどころか、あまつさえ、く………唇などー！」

レオが文句を言おうとしたその時だった。

突然背後の紋章台が光を放ち始める。

「おっと、そろそろ時間か」

レオに、愛するものに背を向け、ソウヤは石段を昇っていく。

「お説教は、また今度来た時に聞きますよ」

「………貴様はいつもそうじゃ。そうやって気取ったセリフを吐く。………だがそこが………」

「俺のいいところでもある、とか言いたいんでしょう？」

レオが微笑む。

「……ああ！」

光が強くなる。ソウヤの持ってきた荷物が宙に浮かび始め、ソウヤの体も浮き上がり始めた。

「ソウヤ！またお前が来る日を……ワシは……レオンミシエリは待っておるぞ！」

「ええ！必ずまた来ます！愛するあなたに会いに来ます！だから、さよならは言いません！また会いましょう、レオ様！」

空に吸い込まれながら、いつか聞いたセリフを残し、ソウヤ・ハヤマはフロニヤルドの空へ消えていった。

「待っておるぞ……。お前が、また来る日を……」

ソウヤが見えなくなった後もレオはその空を見上げ続ける。

そんなレオを祝福するかのように、優しい風が彼女の頬を撫でた。

Episode 31 蒼の誓い（後書き）

終わったッ！

好き勝手やりたい放題やった！閣下ファンの皆様本当にごめんなさい。でもうひゃうひゃニヤニヤしながら書きました、書き終えた後のテンションで書いてるんでこれでごめんなさい！



## エピソード 帰ってきた少年

8月10日。日本で言うお盆を直前に控え、しかしそれでも部活動というものは行われていた。

「おはようございます」

そしてそれはソウヤが所属する弓道部でも同じであり、フロニヤルドから戻ってきたばかりのソウヤの姿が、更衣室にあった。

「おう、ソウヤじゃねえか！真面目なお前が練習ここまで休むのなんて珍しいんじゃないか？」

「すみません主将。親戚の旅行に急に連れて行かれたもので……」

普段なら理由を聞いても返してくれることが稀というはずなのに、聞いてもいないのに理由が返ってきたことに弓道部主将は驚いた顔をした。

「……いや、まあかまわねえさ！お前はうちのエースだからな。ちよっとぐらい休んでも問題ねえよ！」

主将は豪快に笑う。だが当のソウヤはそれを聞き流し、部活の準備をしようとしていた。

「……そうだ、ソウヤ。お前の優勝祝い、この間はお前が習い事あ

るってことで流れたんだが……今日練習終わった後どうだ？駅の近くのファミレス、お前が主役なんだから付き合えよ」

ソウヤが考える顔を見せる。他の部員はどうせ来ないだろうと諦め気味の表情であつたが

「…………お邪魔でなければ、是非」

予想にもしていなかつた答えに部員達が顔を見合わせて固まつた。

「お…………おう！邪魔なわけねえだろ！お前が主役だつて言つてんだからよ！お前らも来るんだろ！？」

主将の問いかけに「ソウヤが来るつてんなら…………」「この機会逃したらソウヤと飯食うとかないかもしれないからな！」と他の部員も乗り気である。

「よっしゃきまりだ！そうと決まりやあ練習気合入れてやるぞお前ら！」

主将の発破に対しては「おー！」「という声と「えー」という声が半々だつた。

そんな周りを気にせず、ソウヤは着替えを始める。

「…………ソウヤ、お前、変わったか？」

「さあ、どうですかね。周りから見てもさうであれば、さうなんですよ」

ジーンズを脱ぐためにポケットに入っていた携帯を椅子におきながら、ソウヤはそう答える。

その物言いは相変わらずだったが、それでもやはり以前とは変わったと主将は感じていた。

と、椅子の上の携帯が震え出す。

ソウヤがその携帯を開き、届いたメールを見て思わず笑みをこぼした。

『やあソウヤ、1日ぶり！フロニヤルドからは帰ってきた？こっちは今日も暑いけど、僕は元気だよ！とりあえず、届いてたら返事頂戴ね』

あいつらしい文面だ、とソウヤは思い、返信を打ち始める。

「……なんだソウヤ、彼女か？」

その様子に気づいた主将が声をかけてくる。

「いえ。……あの人は携帯を持ってませんから」

ヒューッと主将が口笛を鳴らした。

「じゃあなんだ、お前、彼女はいるのかよ！」

「ええ、まあ」

「まあ、って……お前も隅に置けねえなあ！」

主将の冷やかしを聞き流し、ソウヤは本文を打ち終えた。

『無事に帰ってこれた。これから部活でその後ファミレスで食事会らしい。また家に戻ったらメールを送る』

「じゃあそのメールは知り合いからか？」

送信ボタンを押し、ソウヤが携帯を閉じる。

そして表情を緩めながらソウヤは振り返った。

「ええ。俺の……大切な友達からですよ」

日本の夏は、暑い。

だがこれは、それよりも熱い情熱の日々を駆け抜けた、2人の勇者と、耳と尻尾と、愛と勇気と希望の物語。

## エピローグ 帰ってきた少年（後書き）

終わった……。燃え尽きた……。

あとは懺悔タイムを残すのみです。

総後書きかなり長いですが、よければお付き合ってください。

## 総後書き

まず、最後まで読んでくださった皆様、こんな20万字にも及ぶ駄文を読んでいただき、感謝の限りです。本当にありがとございます。

ですがこの総後書きも相当長いです。

ここは書いてる人の完全なる自己満足なので、読み飛ばしていただいても問題ありません。

どこかの後書きか活動報告には書いたのですが、これを書き始めようと思ったきっかけは、DOG DAYSの1期13話の放送が終了し、「すごく面白かったけど、2期やるのかどうか……いや、やらないなら自分で書いてしまえばいい」と思ったのがきっかけでした。

とにかく明るい世界観、斬新な戦システムという真新しい点が存在しながら、勇者を異世界から召喚する、というお約束も守る、という辺り、自分はこの作品にとっても惹かれ、そして熱中しました。

しかし自分は筆が遅く、モンハンの方と並行して書いているうちに2期が発表、だったらその前に完結させよう、とまず思ったのですが、次いで公式ガイドブックが発売と聞き、その前に完結すれば、設定がぶつかるうがその前に終わらせたいって事にできる！とモンハンの方を一旦休止してこちらに専念、ガイドブック発売前を目標として丁度モンハンを投稿し始めてしばらく経ったここで投稿しようと思いました。

2期発表前に2期を意識して書き始めたのでストーリーは完全オリジナルとし、さらに書き始める前に、

- ・シンクと別の勇者が今度はガレット側に召喚される
- ・その勇者がフロニヤルドでの生活と戦を通じて成長していく

・シンクを友人として認める、2人の勇者の物語  
・設定、世界観、用語はできるだけ原作準拠とし、オリ主とストーリー以外のオリジナル要素は出しすぎない

という部分を主軸として、物語を書き始めました。

7話後書きに書いたクーシユだのモーヴの話のスッパリカットしたのは4つ目の要素もあります。

それにオリキャラ同士でイチャつかせるぐらいなら、完全オリジナル作品でやれって話もありますし。

また、原作重視のため、ソウヤ以外のキャラの紋章術は原作、及びドラマCDで使ったものしか描いておりません。まあそのせいでユキカゼが1回の戦闘中に2回狐流蓮華昇を出さざるを得ない、といった困った部分もありましたけど……。

それから、書き始めた時点ではヒロインすら確定していない、さらにぶつちやけちやうと、ヒロインを設けずに最後まで行くか、ぐらの考えでスタートしました。

タイトルのDUAL-BRAVERはその名残な部分もあります、まあDDDにしたかったですし。

ですが、最後まで読んでいただいた方はわかるとおり、レオとベツたりくつついてしまったわけです。

それを決定付けたのは他ならぬ22話と23話、自分がもつとも頭を悩ませた禍太刀の話です。

ここは物語中1番のシリアスな話と決めてかかっており、構想段階から外せない話としていたのですが(というか、明確な「悪」を置けないこの作品において、唯一禍太刀だけが原作でも「悪」として置かれた存在だったから外せなかった、ともいえますが)、DOG

DAY5というのは人が死なない戦ということもあり、全編通して基本は明るくのんびりな空気が流れていなくてはならない作品だと思っています。……まあ原作も魔物の辺りとシンクの帰還の条件の辺りは結構重めではありましたが……。

そんなわけで、人の死だのなんだの、あまつさえ原作登場キャラの手を汚させていいのか、等々色々悩みました。

で、いざソウヤを斬る、となったときに、では誰が斬るのか、で今度は悩みました。

候補として上がったのは本編どおりのレオ、魔物退治専門家であろう場合の汚れ役を引き受けるであろうダルキアン、同じ勇者としてシンク、原作で一度魔物を退治しているシンクとミルヒ、の4通りでした。

まずミルヒを真つ先に除外。本編でも本人の口から言ってもらったとおり、彼女は絶対にそこで斬る、という選択はしません。また、あの場においても斬るのを最後まで反対するでしょう。そのため、話がややこしくするのを避けるためにあの場に同席させなかった、という裏話もあります。

次にシンクを除外。いくら勇者とはいえ、彼もミルヒに近い考えを持つはずです。ましてや、それが友人であるなら、最後まで助かる方法を探すキャラでしょうし、自分が斬ることはためらうはずです。最後のレオとダルキアンですが、エクスマキナの力で生き残る、と決めた時、なら対の宝剣の持ち主であり、さらに召喚主でもあるレオをヒロインに据えようと決め、そこから中盤以降のストーリーを再構築、最後はレオとの恋愛物と相成りました。

しかしそのせいで「DUAL-BRAVER」、つまり2人の勇者とっておきながら、結局勇者と召喚主の話になってしまったわけです。いつそのこと「Des-Rois's story」(デ・ロワズストーリー)とか「Dreaming-Days」とか、なんかDで始まる他のにするべきだったかなあとも思っております。でも略称DDDは変えたくありません。

とはいっても、まあソウヤが心を開ききっかけとなったのはシンクです。そういう意味ではDUAL-BRAVERでいいのかな、とも思っています。



ですので、エピソードは蛇足ではなく、あくまで「DUAL-BR  
AVER」のエピソードたらしめている、というわけです。……最  
初からその終わり方にしようとして、っつーかもうぶっちゃける  
と最後の2文書きたいがためにエピソード持ってきたんですけどね！

また、今改めて読み直すと完全原作ありきでDOG DAYSの世  
界観や、戦のシステムなど説明不足な点も否めません。二次創作だ  
から、と割り切るのも手ではありますが……。  
自分としてはそこそこ説明したつもりではいたのですが、まだ足り  
ないですね……。

それからソウヤの成長を描くのはいいとして、最初と最後でキャラ  
変わりすぎかな、というのも懸念しております。

他にもDOG DAYS本来の世界観ぶち壊しだ、と思われること  
もあるかもしれませんが、キャラについては研究したつもりではい  
ますが口調が違う、とかキャラが違う、というのもあるかもしれま  
せん。ユキカゼのキャラ崩壊については自認しております……。

あとはガレットとビスコッティの政治の制度の違いと言うか、そも  
そも共和国と領国の違いをわかっていなかったり、姫と領主と閣下  
と殿下と王子の違いとかもわからず書いてる部分があります。

さらに本編中で命の力、フロニヤ力、輝力あたりをごちゃ混ぜにし  
て書いてる部分もあるかと思えます。そもそも輝力は自分の命の力  
と大地のフロニヤ力によって作り出す力はずなので、「輝力を分  
ける」「輝力の使いすぎ」というのは表現的に正しくない可能性が  
高いです。

その辺りは全て自分の実力不足によるものです、申し訳ありません  
としか言いようがありません……。

オリ主について。

名前の由来とか戦闘スタイルについてなどは各話の後書きで書いた  
部分の通りです。

年齢ですが、召喚主であるレオが16、まあこの話は原作の数ヶ月後なので誕生日を加算して17歳設定で書いてますが、その年齢と離れすぎない、ということとで高校1年生16歳に。

シンクは原作で中学1年生13歳と言うことでしたが、そこから進級するので中学2年生14歳、まあ年の差2歳なら友達ってことで接することが出来るだろう（というかシンクの性格ならそこまで年の差気にしなさそうです……）と考えました。

後々レオとカップリングするということで、結果的にこれが生きた形となりました。が、16にしてはいくらかかなり悲劇的な人生を歩んでたとはいえ達観させすぎてしまったかな……と思うところもあります。

あまりチートにしすぎないようにしよう、と思っていたのですが……蓋を開けてみたら初戦で手段はおいでしておくにしてもダルキアン撃破、連戦なのにユキカゼ撃破、模擬戦でガウル撃破とかなりチートになってしまいました。

一応実力的には全力のシンク、ガウル同等をイメージしていたのですが……あ、その時点でチートなのか。

個人的にこういうひねくれキャラというか、皮肉キャラは大好きです。ガンダムで言うとカイさんとかビルギットさんとかディアツカみたいな。なのでチャレンジして書いてみましたが、セリフの捻り方が意外と難しかったりしました。

ただ、上にも書いたとおり後半に行くにつれて物言いだけはそのままに段々性格は素直にしようと思ったのですが、結果キャラが崩れたのを引き起こしたような気はしてしまっています。

そして何より弓師のはずなのにほとんど剣と蹴りで戦っちゃったよ……。

一騎打ちがほとんどなので仕方ないと言えませんが、悔やんでいる部分でもあります。

オリ主に関連してですが。

感想の方に「長く続けてほしい」という嬉しい言葉を頂いたのですが、「DDDとしては長くするつもりはないが、続編と言う形で書くかもしれない」と答えさせていただきました。しかし書いたときは完結させることで頭が一杯だったために「今のところ予定はない」と言ったのですが……。

余裕が出ると、人間というのは欲が出るものですね。

この話の数年後、所謂なのはでいうところのS t Sのようにして描いてみるのも面白いかなとか思い始めるようになりました。

まあ早くても原作2期終了後になるとは思いますが。というか2期次第では頓挫する可能性も十分ありますが……。

2期を見て原作とある程度の折り合いをつけつつ、しかし今度は世界観とかあまり気にしすぎず、オリ要素もぶち込みたいだけぶち込んで最初からやりたい放題でやろうかなとかも考えています。

とはいえ、全然未定です。俺得でしかないですし、結局やらなそうではあります……。

しかしやる、ということになりましたら、その時は「ソウヤ・ガレット・デ・ロワ」の活躍にご期待ください。

懺悔はこのぐらいにして……

以下、各原作キャラに対する本作中の扱いに対する愛を込めた自己満足な感想です。

#### 【ガレット側】

レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ……本作においてのヒロイン。上に書いたとおり、当初はヒロイン確定というわけではありませんでした。ぶつちやけちゃうと、レオ様よりユッキーとかビオレさんの方が好きだったりしましたし……。でも書くときに考察しているうちにその考えは変わってきました。普段の自分を押し殺してちょ

つと無理して頑張っちゃう女の子って、かわいいというか守ってあげたくなったりするもんですね。何言っただ自分……。とにかく閣下はかわいいです。結果論ではありますが、「自分を押し殺す」という部分はソウヤも似たように描かせてもらったため、性格的には似たもの同士だったのかなと思ったりしてます。

ガウル・ガレット・デ・ロワ……。実は当初の予定から出番が大幅に増えた人。当初はソウヤの部隊はオリキャラ構成の予定だったため、本編中でよく描いたガウル+ジェノワーズという構成は全部そつちの予定で、ガウルは11話のソウヤとの模擬戦、ぐらいいしか出番が予定されていませんでした。が、クーシユのカットによって出番大幅増、さらにレオをヒロインとするにあたり弟の役割も増え、気づけばソウヤのよき喧嘩相手、というポジションに。ただ、戦闘シーンが少なかつたことが少々心残りです。

ノワール・ヴィノカカオ……。ジェノワーズの黒でセンター。最初無口キャラということで長門的な印象を持って書いていたんですが、原作見直して全然違々と反省。実はインテリとかリコと仲良いとかのために、ジェノワーズの中での良識人として描きました。放つておいてもジェノワーズ中人気はナンバー1で、原作2期や他の方の作品で優遇されるでしょうから、本作での待遇はそれほどよくありません。ガウル同様、戦闘シーン少なかつたのが心残りでした。

ジョーヌ・クラフティ……。ジェノワーズの黄でライト。作者による鼻頂の影響をいい意味でもろに受けたキャラ。けいおんでいうところのりっちゃんポジションですよ。自分の中での感想は31話でソウヤが言った通りの感想で、ムードメーカー、ジェノワーズが馬鹿といわれる最大要因、お調子者という感じです。でもそこがいいんです。ですが実はドラマBOX3でやればできる、今1番将軍に近い存在、と言われるなどしっかりしてしまっています。そ、そん

な……。戦闘シーンもうちょい描いてあげたかった、ということを除いてやりたいことはやったぜ！ぐらいの感じです。2期の活躍期待してます！

ベール・ファールブルトン……ジェノワーズの緑でレフト。ソウヤと同じ弓使いでありながら、ジョー又鼻肩の影に隠れ気味になってしまいました。本人にも第一印象で「怖い」と言わせてしまったためにうまく絡ませることが出来ず……。個人的に聖ハルヴァーの話を彼女から語ってもらいたいと言う希望があります。公式ガイドブックで明かされるか、2期で話が出ることを期待して……。

ビオレ・アマレット……この人の名前並びはもつと上でも、レオの下でもよかつたぐらいです。ソウヤの最後の一步を踏み出させた張本人、しかもその内容が嘘と言うおいしいポジションを与えたキャラです。けいおんでいうとさわちゃんですね、あ、自分が昔書いたものの中だけか……。とにかく、ソウヤの迎えから近衛隊として戦闘、さらにはソウヤを殴ると本編に不可欠、かつ、鼻肩したキャラでした。ちなみにあの夜のソウヤと話すシーンはビオレかミルヒか、で迷ったほどです。殴らせたかったのでビオレ採用となりました。丹下さんの声は破壊力抜群ですので、2期は出番大幅増を切に願っています。

バナード・サブライジュ……登場自体はプロローグからと非常に早かったものの、ソウヤと全然絡めなかった人。それを補うために31話で会話を織り込みました。愛妻家（ドラマBOX3を聞く限り）で、本作中でも書いたとおりナタリー（CV吉田聖子さん）と言う奥さんがいます。2期ではその辺も触れられると嬉しいです。

ゴドウィン・ドリユール……ガウル、シンク以外の男キャラの中では比較的優遇が良かった方だと思います。風呂シーンは楽しく書け

ました。CV若本さんですが、いわゆる「ぶるうあああああ！」を文字にするのは結構自重気味にしました。奥さんのエリーナの2期登場を期待してます。彼の活躍が聴きたい人はいますぐドラマBO X2購入を！

ルージユ・ピースモンテ……終盤でビオレさんがソウヤと顔を合わせにくい、という時に多く登場していただきました。原作に戦闘シーンあったので、今回はメイド仕事に専念。ただ、声を担当している寺本さんが学業に専念すると言う話を聞き、ルージユ役交替になりそうです。ちょっと残念です。

フランボワーズ・シャルレー……放送の実況全部この人に任せちゃった……。テンション高いし原作最初の戦も担当してたから扱いやすかったんですね……。見るからにお調子者が口が止まらない感じなのでロランとの絡みも出来ましたし。

ジャン・カゾーニ……国营放送の人。最初の戦でソウヤが戦場に初登場した時に出ただけ……。になってしまいました。あとは戦勝祭のときにダルキアンが会った、っただけですね。フランの役割ちよっとな回すべきでした、反省……。

#### 【ビスコッティ側】

シンク・イズミ……原作主人公、本作においてもソウヤと同じ地球人で勇者ということでも重要な役割を担ってます。が、書いてて苦労するキャラでもありました。まず困ったのが棒です。棒術の戦い方ってどうやんのさ！？と悩みました。次にベツキーがついてこなかった理由。ここもむりくりです。そしてハーレム状態の恋の行方。描ききれん！と投げてしまいました……。一方、戦闘シーンは非常に多く書けました。特にソウヤとの一騎打ちが2度あったために原作主人公としての面目躍如といったところです。また、シンクを「

紅」、ソウヤを「蒼」として対比させている部分が多々あります。他にも基本的にソウヤはシンクの真逆、というイメージで書いていますから、原作同様彼ももう1人の主人公と言えたかもしれません。タイトルもDUAL - BRAVERですし。

ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティ……原作ヒロイン、なのですが……。戦場に出ない、遊びにも出れない、シンクとべったり、ということでもソウヤとの絡みは少なくなってしまうかもしれません。でもコンサートを書けたので、個人的には一応満足しています。戦闘シーン皆無ですが……。まあ元々戦うのが得意ではなさそうなので、いいでしょう、ということ……。。

エクレール・マルティノッジ……原作のサブヒロイン。本作でもソウヤとの会話シーンで多く出ていただきました。後半の後書きにも書いたとおり、「エクレールはソウヤに対してデレない、デレすぎない」を目標に書かせていただきました。だってデレすぎない方がかわいいもん。彼女もガウル同様、当初より出番はかなり増えています。当初は8話の会話しか予定になかったのですが、その後もソウヤと多く絡むことになりました。シンクとの恋の行方は本編中で明記していませんが、30話の後書きで書いたとおり、読者様が想像してください。

リコッタ・エルマール……ミルヒ同様戦場に出さなかったために出番は少なめでした。でもこれでも当初の予定よりかなり増えています。ですがどうもポジションが定まらず、リコはシンクがいじってなんぼのキャラだなあと痛感しました。なので、原作2期では大活躍するでしょう。というか特典CDで既に大活躍と言つか大暴れしてるらしいですが……。助けて、リコえもん！

ブリオツシュ・ダルキアン……本作におけるビスコッティ側のヒロ

イン、と言つてもいいほど活躍していただきました。最初のソウヤとの一騎打ちからレオとの一騎打ち、禍太刀狩り、そして最後のソウヤの説得と、重役を担い続けたキャラでした。30話後書きでも書いたように彼女の陰のありそうな過去は興味がありますし、そのためにちよつと捏造して本作中でも描かせてもらいました。正直言つてもつとも動かしやすいキャラでした。原作中最強キャラですの  
で、勝つためには「心の隙をつく」しかないと思つたため、ソウヤは所謂死んだふりで、禍太刀は器のソウヤを斬らせる、あるいは神狼滅牙を止める、という形で隙を生み出し、そこをついた形にしています。本作中でやられ印象が強いですが、彼女の名誉にかけて、彼女は決して弱くない、ただ優しいんだということを強調しておきます。

ユキカゼ・パネトーネ……もつともキャラを崩壊させたと自認しております。申し訳ありません……。ファーストコンタクトで巨乳ちゃんと呼ばれ、次いで尊敬する人間を卑怯な手で負かされたら怒るだろう、と思つて本作の具合で進んだのですが、そのせいで原作の性格が微塵も見られなくなつてしまいました。しかもジエノワーズは圧倒したのに手負いのソウヤに負ける、という構成上のミスと言われれば反論できないことまで……。言い訳すると、あれはふっきれたソウヤとエクスマキナと言う組み合わせに加えて、ソウヤの動きが予想不可なものが多い、ユキカゼ自身も相手は疲れてるとい  
う油断もあつたから、ということになつてます……。その一方で、似た戦闘スタイルのソウヤと戦わせたい、という目標は一応達成できました。本当はもつとソウヤと絡ませる予定だったので、悪い意味でエクレ化してしまつたために失敗したツンデレキャラみたい  
に……。ごめんよユッキー……。

ロラン・マルティノッジ……作中ではアメリカと結婚する人。登場も遅く、ソウヤとの絡みもなし……。悪い意味でガレット中心にし



た煽りをもろに食った人でもありません。一方でアメリカ関連の話では度々登場してはいるんですけどね……。

アメリカ・トランペ……作中ではロランと結婚する人。ガレット中心を謳っているこの作中で、ビスコッティのサブキャラとしては優遇した方だと思っています。唯一の眼鏡キャラ、もつと原作でも大切に扱うべきです。「ある秘書官の結婚までの追憶」とかって物を書こうかと考えたり考えなかつたりしてますが、まあ書くとしても2期終了後ですかね……。

リゼル・コンキリエ……出番ほぼ一瞬だけになってしまいました。ちなみにドラマBOX3で明かされたことですが、突剣二刀流は親衛隊にも通用するほどの腕前らしいです。原作ではビオレさんをおっさり捕まえてしまっていました。リゼル対ビオレとかリゼル対ルージユなんて展開も熱いと思います。

エミリオ・アラシード……後から出てないことに気づき、17話投稿直前にねじ込みました。出番はそこだけとなってしまいました。……。親衛隊の中ではエクレールに次ぐ実力者、という扱いなために2期の出番は多そうです。実際原作でもベール撃破してますし。なお、同じポジションの女性騎士としてアンジェ（CV吉田聖子さん）と言うキャラもいるようです。

パーシー・ガウディ……国营放送の人。ソウヤにとって2度目の戦いでシトロン砦の状況を中継してます。でも出番そこだけ……。ちなみに彼女、結構かわいいです。声はなんとリゼル隊長と同じ平田さんです。

エビータ・サレス……国营放送の人。最初の戦でフランと一緒に実況しただけになってしまいました。ドラマBOX3によると美人ア

ナのために引つ張りだこらしいです。原作の出演時間も短いのに松来さん使うとかどんだけだよと思ったりしました。

【ごめんなさいなお二方】

レベルカ・アンダーソン……正直ごめんなさい。出す力が自分にはありませんでした……。2期での登場は期待できるかと思ひますので、そちらで活躍してもらいたいです。

ナナミ・タカツキ……こちらもごめんなさい。ドラマBOX聞くまで完全に忘れてました……。2期ではもしかしたらガレット側とかパステイヤージュ側とかで呼び出されるんじゃないかと期待しています。

以上になります。

ただでさえ無駄に本編が長いというのに、こんなどうしようもない長すぎる後書きを最後まで読んでくださった方々、ありがとうございます。

2期が素晴らしい作品になることを祈って、DOG DAYS DUAL-BRAVERを完結したいと思います。

読んでくださった皆様、お気に入り登録をしてくださった皆様、感想を書いてくださった皆様、評価してくださった皆様、本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9292y/>

---

DOG DAYS DUAL-BRAVER

2012年1月14日00時53分発行